

---

# 死にたくても死ねない！？

夷 神酒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



## プロローグ

俺は目を閉じ、覚悟を決める。

《…ココハ、ドコ？》

ここは、俺が通う学校の屋上。

《…アナタハ、ダレ？》

今、俺はフェンスの外側に立ってる。

《…ナニ、シテルノ？》

俺は…十六年間の人生に終止符を打とうとしてる。

《…ナンデ？》

……もう、疲れたんだ…自分の人生に。

「ウツシャー！！ お客様一名GET！！」

そりゃよかったな……？

俺は前方から聞こえる声に疑問を持ち、目を開ける。

「…って!？」

俺は目の前で起こった出来事に驚き、フェンスの内側に飛び退く。

「…いや、そんなに驚かなくてもいいじゃねえ？」

俺の目の前には、目元まで隠す真っ黒なヘルメット、そこからのみ出る肩までのびた白髪、薄汚れた黒い作業服に真っ白な鶴嘴つるはしを持った男が……浮いていた。

青狸ロボットがいた時代じゃあるまいし、この時代に人が浮いてたら誰もが驚くだろ!？」

てか、その気味悪い格好で十分驚ける！

「お、お前誰だよ!？」

「ん？ 俺か？ 俺はこう言うもんだ」

俺が聞くと、その男は作業服の胸ポケットから、所々折れ曲がった白い紙を取り出し、俺に渡してきた。  
そこには…

／／／／／／／／／／／／／／／／

(株) 自殺屋

日本支部・社長代理の代理

安全 第二

(あんぜん ダイジ)

／／／／／／／／／／／／／／／／

「自殺屋？ …怪しい工事現場作業員じゃなくて？」

目の前に浮いてる男は、満足そうな笑みを浮かべた。

「死にたい！ 逝きたい！ 殺されたい！ 自殺屋は自殺願望のあ

る方に、満足のいく自殺を提供しますッ！」

手に持った鶴嘴を俺に向け、自慢気に話す男に俺は呆れていた。

「…ついでに君は、その紙に触れた時点で契約完了してるから」

その男が俺から名刺らしき紙を取り上げると…

「なっ！？　なんで印が!?!」

その紙には、俺の親指あった所に赤い親指の印がしっかり残っていて、裏側には『契約書』と書いてあった。

「んじゃ、これから一週間よろしくな！　…いい夢見るよ!?!」

柳沢○吾風のセリフを言うと、その男は一瞬で目の前から消えてしまった。

「…な、なんだっただ？」

目の前で起こったことが信じられない俺は、飛び降りる気が失せ、

おとなしく家に帰ることにした。

一人暮らしをしている俺が、自分の家の扉を開けると…

「ウツス！ 俺、これからここに世話になることにしたかブアツ！？」

とりあえず、いきなり現われた黒ヘル男（黒いヘルメットをかぶった男の略）を一発殴ることで、今日のストレスを解消することにした。

玄関から二、三メートル先のリビングまで吹っ飛んだ黒ヘル男は、倒れて……ない！？

「…フッフ、復活！！ ……そついやお前、『漢の聖書』をどこに隠してる？ ベッドの下にも無かつゾギヤブ！？」

後ろから聞こえた声に、俺は反射的に後ろ回し蹴りを食らわせる。予定通りクソヘル男の顔面は、玄関横のコンクリにしっかり埋まっ

ていた。

「……まさか、あの本棚にカモフラージュされデブア!？」

……訂正する。

この、黒き帝王ゴキブリ並みの生命力を持ったクソヘル野郎を、徹底的に伸のすことで、今日のストレスを解消することにした。





「で、仕事の話したいんだけど…このピアノ線解いてくれると嬉しいんだけどなあ？ てかこれ、SMプレイ？」

「…必殺仕事人の三味線使ってこんな感じだったのかな？」

「HHHAAッ 俺がすべて悪かったよ。…ゴメンナサイ、マジで許してください」

ただいま俺が、黒革の手袋をした右手で持つてるピアノ線の先には、黒ヘルが亀甲縛りされていた。

なぜ俺がこんな縛り方が出来るかは…聞かないでほしい。

「だから、俺は黒ヘルじゃなくて、『安全第二』って言う名前があるんだから『ダイちゃん』とでも呼んでくれ」

「ウツセー黒ヘル！！ そんな呼び方するかボケ！ てか、お前の名前変だ！ 普通安全は第一だろ！？ あと、自殺屋ってなんだよ！？」

俺は、キモい提案 + 名刺を渡された時から気になったことをぶつける。

「まあまあ、落ち着きなされ……須千家 真慈君」

「!? なんて俺の名前知ってたんだ!？」

こいつに名乗った記憶はねえぞ!？」

「色々調べさせてもらったからな

須千家 真慈16才、身長は俺と同じ173・8cm、体重は??  
kg、通り名はまだ不明。

父親譲りの白髪に母親譲りの天武の才能を持つ、美男美女二人の血を受け継ぐ羨ましいイイ少年。

戸野<sup>との</sup>高校の二年生で一人暮らしをしている。両親は6年前に事故で他界。

いい容姿のクセに彼女いない歴〃年齢。なのに、告白受付回数81回〃断る確率100%というモテない男の敵!! 真っ先に抹殺すべきクソ野郎!! 羨ましいぞコンニャロオオオオオ!!

……いやスイマセンもう言いませんからゴメンナサアアアアアアア痛テエエエエエエエエエ!!」

うるさい人は土に還そうかな?

…けど今、この黒ヘルを殺つ…口が聞けないようにすると、俺の疑問が聞けなくなる。

仕方なく、俺は線を引くのをやめた。

「おい黒ヘル、お前自殺屋って言うてるけど、何で俺んトコ来た? てか、自殺屋ってなんだ?」

正直、『自殺屋』なんて商売あるか分からない。

…例えあっても、タウンオージには載ってないはずだ。  
載ってたら俺は発狂して、近所の公衆電話に置いてあるすべてのタウンオージを真っ二つに破り捨てるだろう。

「…せめて、ダイジと呼んでくれ。まあ、とりあえず質問に答えよう」

素直に従ったので、俺の中で黒ヘルはダイジに昇格する。

「俺はシンジに『未練ない自殺』をしてもらうために、未練解消&自分に合った自殺方法を提供するのさ」

「…普通、自殺をやめさせるんじゃないの？」

自殺を推奨するなんて、この世じゃ聞いたことが無い。

「まあ、未練さえなきや死んでもらってかまわないのさ。

自殺屋って言うのは最近出来たあの世の組織なんだ。

ここ数年、自殺ブームとかで未練タラタラで死んじゃうもんだから、成仏しない魂が増えちゃって、悪霊が人を傷つけたりする事件が急増してんのよ。

それを改善するために、死霊をあの世に送る『成仏屋』と、未練なく自殺してすぐに成仏してもらう『自殺屋』が作られたんだ」

……へ？

「ん？…ああ、メンゴメンゴ。簡単に言えば、俺はシンジに悔いなく死んでもらうためにここにいてるってわけさ」

…いやいや、そこじゃなくて。

「あの世の組織っていうことは、ダイジは幽霊ってことか！？」

「その通り　だから、会った時みたいに浮いたり、壁を通り抜けたり消えたり呪い殺したり出来るぜ！！」

最後だけ危ねえだろ！？

「てか、幽霊のクセに拳で殴られたりピアノ線で束縛されてんのかよ！？」

「俺だってビックリだよ。シンジは霊力が異様に強くて、幽霊に干渉出来る体質なんだよ。たぶん父親譲りだな、こりゃ」

「イヤッ俺、幽霊とか見たことないから」

「シンジが言ってるのは霊を感じる『靈感』、シンジの靈感はゼロに等しい。てか、ゼロだ。」

今だって、俺がワザワザ見えるようにしてるから見えてるだけだ」

亀甲縛りの状態で威張るダイジ。

……靈感無くて悪かったな。

「それに対して『靈力』は呪いとかに使われる力のこと、普通は生きた人が持つてるはずないんだけど、君も君の父親もモンスター級に靈力が強いんだよ。流石だな!!」

それって誉められてんのか分かんねえ!?

てか、親子揃って靈力がモンスター級って、親父も俺もどんだけ危ない人間だったんだ!?

「そんだけの靈力があれば、ワラ人形に針刺せば数千人、五寸釘なら数十万人は呪えるし、呪術を覚えれば星一つ滅ぼせるな」

……俺の中で、核兵器やデスオートを抜き去り、ワラ人形がお袋の鉄拳制裁に次いで最上級危険物になったのは言うまでもない。

「まあ、殺る気にならなきゃ呪えないし、靈力は呪い以外にも幽霊に触れたり、生きた肉体にも色々出来るから……って、シンジは死にたいんだっけな」

「……ああ、だから靈力とかはそれほど知らなくていい」

「分かった。んじゃ、仕事したいから……解いてくれないか? そろそろマジで痛い」



SUICIDE2(首吊り) (前書き)

9 / 7、作者の手違いを修正 『黙殺』の部分で『台所進入禁止に』に変更

SUICIDE 27 首吊り

生に縊<sup>すが</sup>る誰かが言う

「死に何の意味がある？」

生を手放す誰かが言う

「死に意味が無いからこそ、我は死を求める」

首吊り自殺…

## 男女問わず最も多い自殺方法

首を紐状のもので吊り、けいぶ頸部を圧迫することで脳が急性貧血を起し縊死する。

また、首吊り時の衝撃でけいつい頸椎骨折やせきつい脊椎損傷などで即死する場合もある。

故に首吊り＝窒息死ではない。

「……成る程、じゃあシンジは『生きてる意味が分からなくなった』から、死んで……フグッ……みようと……モヒモヒ……思ったわけか……ムグムグ」

「ああ、面倒になったってこともあるんだけど……食いながら喋るな、キタねえだろが。生前に習わなかったか？」

「ふあかあつふあ（分かった）」

ただいま、俺の目の前では黒ヘルがハムスターのように頬を膨らませて食事中だ。

もちろん、作ったのは俺だ。

『変な所から来た者に、料理をさせちゃダメよ』と、他人に注意されたことがあるし、実際黒ヘルが白い鶴嘴で料理しようとした時点で台所進入禁止にしておいた。

「ふう〜ゴチになります。……それにしてもシンジは料理上手いなあ。死ぬのにはもつたいないぐらいだ。……ここら辺は母親譲りか」

確かに、お袋の料理は格別美味かった。

仕方なく料理をしてた俺にとっては、超えられない存在だ。

「こんなのただのオムライスだろ？」

「……チキンライスじゃなくて魚介類のピラフ、デミグラスソースじゃなくて塩味のアんかけ、上に乗せる半熟卵には魚のすり身が……これをただのオムライスと言えるお前はなんだ？」

幽霊のくせしてグルメだな。

てか、幽霊のくせして朝の第一声が『腹減ったー』だもんな。

つたく、食べたものはどこに行ってるんだか……

「中華丼の予定が、卵の賞味期限がギリギリだったからそうなったんだ。……そっぴいやお前、やけに親父とお袋のこと知ってるな？」

「ん？ 色々関係してるからな。二人ともあの世でいろいろやって

るぜ…最近は、『閻魔大王とその部下の鬼数千体』V S 『須千屋夫妻』で核戦争ゴッコやってポツダム宣言させたっけな」

「ちよい待て!?! あのと二人まだそんなことやってんのか!?! ……  
…閻魔っていう人、ちゃんと生きてんのか?」

核戦争とかポツダムとかは全力で無視。

だけど、あの二人に『遊び』なんかやらせたら、とにかくヤバい!  
(とくにお袋)

あの二人にかかれば、『トランプ』さえも殺戮に近いものになる。  
内容は…頼むから聞かないでくれ…

「あの世で死ぬことはないけど、鬼達は三年、閻魔は全治十年以上の絶対的重傷だったな」

「……なんていうか……ごめんなさい」

あの世に行ったら、会った人全員に謝る生活を始めよう。

「謝らなくてもイインダヨー! 俺は楽しかったし」

訂正、黒ヘル以外には丁寧に謝ることにしよう。

「んじゃあ、そろそろ始めますかっ」

朝食の食器を片付けて、リビングに戻ると目の前には、白い鶴嘴を振り上げた黒ヘルがいた。

「なにやってんだ？」

「なーに、ちよつと見てなって……」

振り上げられた白い鶴嘴が、握られた持ち手の部分から真っ黒に染め上げられていく。

「……焔獄羅刹よ……其の力を我に与え、この場に古より伝わる生を断ち斬る処刑台を築かん！！」

なっ、なんか魔術っぽい！！

「自殺屋儀式……皇狩！！」

そして、黒ヘルは家のフロアリングに黒い鶴嘴を振り下ろした。

……へ？

いや、フローリングに穴が開かなかったのはビックリしましたがど  
……  
俺の目の前に現われたのは

- ・天井からぶらさがったロープ（一部が輪になった）
- ・パイプ椅子（折り畳み式）

「黒ヘル？ まさかこれって……」  
「自殺屋が一番使う儀式・皇狩……首吊り専用フィールドだ」

やっぱり……

予想通りの答えに、俺は頭を抱えた。

「……俺パスするわ」

「えっ！？ なんで？ 『生きるのが疲れた』 人たちの一般的かつ人気NO.1の自殺方法なのに」

いや、儀式の割にパイプ椅子（一部、黄色いスポンジ出てるし）ってシヨボいし、それに……

「俺……首吊り出来ないんだ」

「……なんだ、その小学生が『ぼく…逆上がり出来ないんだ』って、体育の鉄棒の授業で言った暴露話みたいな言い方は」

異様にムカつく表現してくれるな、このクソ黒ヘル……

「あー！ もーいい！ 自殺屋になんか頼らねえ！ 自分で自殺する！！ だからとっとと出て行け！！」

俺は黒ヘルに怒声をぶつける。

「あー、無理アルヨ。一回自殺屋に仕事頼む、ソレから自殺屋の仕事以外の自殺で死ぬト……」

「死ぬと……？」

「……来世が犬の糞 豚の糞 牛の糞 金魚の糞 犬の糞の輪廻繰り返す……」

「安全ダイジ！！ これから頼んだぞ！ 俺はお前に物凄く期待してるからな！！」

死んだら糞のオンパレードの無限ループなんて…絶対無理！！ 死んでもなりたくねえ！！ てか、死ぬけどなりたくねえ！！

「んじゃ、Let's 首吊り行ってみよう」

しゃあない、あんま見られたくないんだけどな…

「……ああ……でも、見ても驚くなよ」

俺は勧められるまま、パイプ椅子（一部サビ有り）の上に立ち、ロップの輪の中に首を通す。

「んじゃ黒ヘル、この椅子を蹴ってくれ」

「オウツ、任された！！ ライ アアアアアキイイイイイック  
！……」

俺の行った通り、パイプ椅子を思いっきり蹴った（初代仮面ラ○ダ

「風」。

椅子が吹っ飛び、足場を失った俺の体は、地球の重力に引かれ下に落下した。

しかし、俺の足は地面に着かず、首に掛かったロープが首を締め付ける。

バッタ仮面の必殺技を食らった椅子は、我が家のガラスを割って隣の家まで吹き飛んでいった。

目の前では、黒ヘルが背中を向けて見事に技を決めた余韻に浸っていた。

あ、こっち振り向いた。

「おい、生きてますかあ？ って生きてるわけないか……」

さあ、今は誰が地の文やってるでしょう？

それが安全ダイジじゃないとしたら……

「俺は生きてるってことだ」

「オワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

黒ヘルは血相を変えて叫び、一瞬で部屋の隅にぶつかった。

「なななな、なんで生きてんだ!? 首だってちゃんとロープが巻かれてるし、しっかり手足だってブラブラしてるし……ナゼ!？」

だから驚くなって言ったのに……

「……俺の体は異様に頑丈過ぎるんだ。たぶん、お袋の血筋と様々な鉄拳制裁で鍛えられたせいだ。それで首吊りとかで頸椎損傷しねえし、気道も閉まらない……前に試した時もこの状態になって、動けなくなった所をお隣さんに見られて色々大変だった」

あの時は、いろんな意味で死ぬかと思っただぜ。

この体が俺の自殺願望の原因の一つなのは言うまでもない。

「……なんていうか……ごめんなさい」

「同じように謝るな。俺の不運と、お前のボキャブラリーの少なさに泣けてくるから」

こんな異様体質と、他人と同じ謝り方しか出来ない可哀相な人（自分の事はON THE 棚）を見ると悲しいじゃないか。

「じゃっ、椅子戻してくれ。耐えられるといっても、せいぜい十分

程度だし、この状態でいても気分悪いしな」

ユラユラ揺れている体と視界は、正直気分も気持ちも悪くなる。  
てか、酔いそう……

「分かった。俺、お隣さんに行ってくる」

「……………」

ちよつとまで。

なぜ、黒ヘルがお隣さんに行く必要がある？

「……………」

今までの出来事を思い出す必要があるな……

『黒ヘルが背中を向けて見事に技を決め……』

もうちょい前だ。

『生に縋<sup>すが</sup>る誰かが……』



「……………なんで？」

気づけポケヘルウウウウウウー！！

「シュー〜ジ〜！ なに騒いでんの？ いきなりそっちから椅子飛んでくるからビックリしたじゃない」

玄関の方から無情にも聞こえる、女性の声…

あ、俺死んだかもしれね

## S U I C I D E 3 人間サンドバッグ!??

〜前回のあらすじ〜

真慈と第二様は、ヒムホーム(彼の家)でインタレスティング(面白い)なプレイ(遊び)をしていた。

そんなタイム(時)、ドア(扉)をノック(叩く)するヒューマン(人)が…

ガゴンッ

ゴルア黒ヘル!! 変なあらすじすんなゴリアー!!  
ルー〇柴か!?

ヘルメット殴ったからイテーじゃねえか!! 逆ギレ  
…… あっ、スイマセン。

あらすじなんて面倒なんで、本編の方どうぞ!

「シ〜ン〜ジ〜！ 薄汚いパイプ椅子持ってきたからピッキングして上がるよ！」

ヤベエ！ パネエ！ どんだけえ！！

「早く降ろせツ！！ ヤツが来る！！」  
「なんでそんなに急いでんの？ お隣さんには見られたことあるんだから、別に大丈夫じゃね？」

俺がこんなに焦ってるのに、呑気に言う黒ヘル。

「いやいやイヤイヤ嫌々否否イヤイヤ！！ ピッキング止めさせたいし、ヤツに一度見られたからもつとヤバいんだって！！」

マジで死ぬ！ 死んでも未練タラタラだぜおい！！

「未練あるまま死なれたら、減給されかねない……オシツ、今助けるぞ」

どんな理由でも助けてくれんのは感謝するけど、人のプライバシーを侵害した罪は、あとでしっかり償ってもらおう  
でも、ちよつとまで……

首吊ってるって事は、俺の体を持ち上げると、ロープを緩める二つを同時にしなきゃならない……

それって一人じゃムリじゃね？

「黒ヘル！！　ものを浮かべる魔法みたいの使えるか!？」

ホグーツ魔法学校の初歩的魔法みたいな感じのが使えれば、この作業も一人で出来る！

「うん、ムリ」

……つわ、正直に言うのはいいけど、なんかスゲエムカつくわあ。

「じゃあ、とつとと手頃な足場持って来い!!」  
「イエッサー!!」

黒ヘルはドイツ式敬礼をしてから、リビングから出ていった。  
早くしてくれ、足場さえあれば俺一人で脱出でき……

「いい椅子持ってきたぞ！」

早ッ!!

こついう場合、探すのに時間が掛かって手遅れになると思ったんだ  
が。

「まあいい、早くその椅子を足元に置け!!」

「おう、合点承知!!」

カシャン（独特の金属が擦れる音）

……あれ？ 家にパイプ椅子なんてあったっけ？  
さっきまであったけど、吹っ飛んだからあるわけないよな。

「……お前、この椅子どこから持ってきた？」

「ん？ ちょうど玄関に入ってきてた、ちっちゃい少女が持ってた

から返してもらったんだ」

うん

たぶんそのちっちゃい少女って……

「今現在進行形でお邪魔してるよ……って真慈!？」

リビングの入り口から現われた例の『少女』は、完全に俺に気づいた。

赤みがかった髪の毛、短いツインテールにほっそりとした手足の童顔

『少女』。

その姿は『小さな』美『少女』……

アハハ……やっぱりヤツでした。

今の俺を見たなり、すぐに俯くヤツ。

「……真慈……なにしてるの？」

「いやっ、これは、その……」

「真慈は、自殺しようとして首吊ってたんだ!」

なに言ってくれてんじゃボケエエエエエエエエ!!!

まるで『三角関係で片方の女が「私、出来ちゃったの」って言った』みたいな状態を作るなアアアアアア!!!

「……………真慈い……」

やばいやばいやバイ燬瑪いやばいイイイイイイ！……！！

俯いた顔から落ちる、一筋の光……

「あーあ、泣かしてやんの」

「泣かしたのはお前だろバカ黒ヘル！！」

手遅れになっちまったじゃねえか！！

逃げようとしても、この宙吊り状態でじゃ逃げらんねえ！！

ああ、俺も黒ヘルのように幽霊だったら、見られずに済んだのに……

「……………真慈のバカアアアアアアア！！」

顔を上げて叫びだし、こつちに走りだしてきたヤツ……

見えた泣き顔は小学生のようで、強烈に罪悪感を与える。

普通なら、なんとかかして泣き止ませたい衝動に駆られる。



『ヒッグッ……』

『ヤツ、もう泣くな。泣いていいって言ったけど、一時間と三十七分間も泣かれるのは結構ツライ』

『グス……だあってえ……』

『ったく、一緒にいてやるからもう大丈夫だ』

『……うん……ありがと……グッ……』

『……ハイハイ、俺の胸の貸しは昼飯一回奢りで許してやるよ。今はとっとと泣け』

『うん……ウアアアアア!!』

『……ウッセエな』

懐かしい夢から覚めた時、目の前にあったのは天井と、今でもよく見るヤツの顔だった。

「よかった！ やつと起きたよお」

その顔には『さっきまで泣いてました』って書いてあるみたいだった。

ってか、この位置と後頭部に当たる感覚は！？  
早く起き上がらなければ！！

ヒタッ

起き上がろうとする俺の額に当たる、ヤツの冷たい手のひら。

「ダメだよ。さっきまで死にかけてたんだから」

つたく、死んでもよかったし……てか、俺が死にかけたのはお前の連撃のせいだろ！！

……って声に出したらなにがあるか分からないので止めておく。

「羨ましいアルヨ！ 女の子に膝枕なんブギヤシツ!？」

ヤツと逆の位置から聞こえた声に無性にムカついたんで、一発殴つといた。

さつきから『ヤツ』と呼んで少女は『奴』という意味じゃなく『谷津』って呼んでいるのだ。

哺乳類、霊長類、ホモサピエンス

正式名称：谷津 麻依子

(やつ マイコ)

年齢：16歳

性別：ちゃんと女

身長：詳しくは知らないが…140cm後半ぐらいの小ささ

体重：聞いたら殴られたため不明

スリーサイズ：よく知らないけど、ダチ曰く『あの身長であの豊満なスタイル…殺人的だ!』だ、そうだ

棲息地：お隣

生態特徴：『痴漢対策』って言うことで俺のお袋から色々教わったため、こいつの鉄拳は恐ろしい……

『変な所から来た人に、料理をさせちゃダメよ』の発言者だったりする。

こいつの泣き虫+暴力癖で、俺の服をいくつ濡らしてきたことか(ヤツの涙と俺の血で)

「おい谷津……」

「だ〜か〜ら〜ッ！！ 幼馴染みなんだから、苗字で呼ぶのはやめてって言うてるじゃん！」

「いやっ!?! 『幼馴染みなんだから』って言う意味が分か……」  
「それに……!」

額に当てられたのと逆の手の人差し指が、俺の口に当たり言葉を止める。

「真慈、約束したよね? 『次に自殺するトコ見つかったら、願いごとを三つ聞く』って」

「イヤイヤ、んなの記憶にない。てか、『願いごとを三回』って俺は○イズニーの体が青くて陽気なランプの精霊か?」

「…………… 忘れたの……?」

「分かった! 分かったから泣くんじゃねえ!」  
「やったあ」

くううううううッ! 女の涙は核兵器か!?

「んじゃ、お昼ご飯作って!」

確かに、時計を確かめると十二時を回って、昼飯時になっていた。だけど……

「イヤイヤ、普通『名前で呼んで』とかじゃないのか？」

「おいおい、なに期待してんだよお。人生そうは甘かブアッ！グビッ！ツベジィ！？」

俺は無意識にヤツの手をすり抜け立ち上がり、右ミドルキックで相手の態勢を崩し、体を右に回転させ腹部に右ソバット、その勢いを殺さず右足で顔面にローリングソバット……  
プロレスで、ローリングソバットラッシュと言われる技を、ムカつく声の方に食らわせた。

座ったままの谷津……分かりやすくチビでいいか。

チビは、身長が低いからミドルキックさえ当たらずにすんだ。

「ヒドイ！！ アタシだって気にしてるのに！！」

「酷いのはお前だ、人のプライバシーに入ってくるな……メシにグリーンピース入れるぞ？」

「ダメッ！！ 二つ目のお願いは、お昼ご飯にグリーンピースとホワイトアスパラガスとハイポーションとマジックフルーツは入れないで！！」

チツ、せつかくグリーンピースとハイポーション以外で料理作ろうと思っただのに……

ハイポーションの後に言ったので、ファンタジーのアイテムמידだけど、マジックフルーツは実際にあるので注意！

「んじゃなにがいい？」

「うーん……アームストロングー！」

注意しとくけど、このチビはハガ○ンのマツチヨな雷撃オッサンを食う気じゃないぞ。

「……分かった、ビーフストロガノフだな。ちょうど作り置きがあるから、二人分食器出して」

「わかったよ」

二人で昼飯をとった後、俺はチビを麻依子と呼ぶことになった。したかも分からない約束を守るとは、我ながらお人好しだと思う。まあ、死ぬ前にいいことをするのも悪くないだろう。

……それにしても、黒ヘルが幽霊でよかった。  
あんなのが一緒にいるのを見られたら、俺の短い人生をドブで漬け  
られるようなものだ。

「そついや真慈。さっきのヘルメット被った人って誰？」

……えっ、いきなりIN THE ドブ？

S U I C I D E 4 バケツの中身にご用心

生命に付き纏う危険は五万とある。

「……………眠い」

はっきり言って、俺は寝ていない。

昨日は谷……麻依子に黒ヘルのことを紹介していた。

正確に言うと、『成仏できない幽霊が憑いた』ってことにしておいた（もちろん、口止めした）。

『俺の自殺をプロデュースするために来た』なんてこと言ったら、きつと麻依子の鉄拳制裁で死ねるだろうけど、ダチを殺人者にはしたくない。

そんなありえない話を、単純思考の麻依子は『面白いね』の一言で簡単に信じてくれた。

ついでに、麻依子は霊感が強いらしい。

けど、やっぱり霊力はなくて、黒ヘルは見えても触れなかった。

その時は『やっぱ、俺って異常なんだなあ』って、悲しくなったよ

……

まあ、ここまでではある程度許そう。

なぜか夕飯までゴチになった麻依子と黒ヘルが意気投合。俺の家で十時まで騒ぎ続け、疲れ切って寝てしまった麻依子を隣の家に送り届けた。

麻依子の母親：麻由<sup>マユ</sup>さんに『朝帰りじゃなかったのかしらあ。お持ち帰りしてもいいのよ』って、意味分かんないこと言われた。

これまでは、後で麻依子にグリーンピースを食わせることでチャラにしよう。

その後、黒ヘルに椅子を吹っ飛ばしたことで壊れた窓ガラスを霊力とかで、強制的に直させた。

そして、騒ぎ立てる黒ヘルをシカトして寝たところを枕元に立たれて、その寝苦しさに『一時間、逆さ吊りで人間？「てか幽霊」サン ドバッグの刑』を執行し、ちゃんと寝れたのは深夜四時。休日なら昼間まで寝てたいけど、俺は高校一年の学生だ。

土曜は黒ヘルを拷問、日曜は麻依子の強襲で貴重な休日を使ってしまった俺は、ただ今学校に登校中だ（黒ヘルは作業服と一緒に、洗濯竿に磔状態はりつけにしておいた）。

俺は自殺願望者といっても、ヒッキーでもニートでもない。学校にも普通に行くし、イジメられるほどナメられちゃいない。俺は健全なる自殺願望者なのだ！！

「酒もタバコもよろしく、髪も真っ白に染める。それに自殺願望がある時点で健全じゃねえぜ」

「友よ、人の心を読むな。今日は朝から拳で語り合う気にはなれん……あと、煙草は吸わんしこれは地毛だ。てか、知ってんだろ」

「俺は楽しいから語り合ってもいいぜ」

登校中にいきなり話し掛けてきた、俺と同じぐらいの身長身長の黒髪オールバックの男。

さくらい リョウスケ  
櫻井 亮佑

亮佑は俺のダチであり、俺が自殺願望者ということを知っている、数少ない人の一人だ。コイツは麻依子とは違い、俺の自殺を止めようとはしない。

本人曰く

「お前は老衰じゃなきゃ死なねえから大丈夫だ」からだそうだ。

俺に自殺願望が芽生えてすでに長い時が経っている。  
なのに、未だ生きている俺は、亮佑が予言するような結末を迎える  
のかもしれない。

ついでに、授業中の居眠り常習犯だ

「紹介アリガトよ」

「礼にはおよばん。だけど、やっぱりお前とは、朝から語り合つて  
とが必要らしいな」

「俺もそうしたいんだけど……遅刻したくないんで、お先失礼する  
ぜ！」

亮佑に言われて腕時計……じゃなくて使い古した携帯を見ると、現在  
時刻：八時二十二分の文字が表示されていた。

校門が閉まる時間は八時三十分、現在地から学校までは、普通に走  
って十五分ほどかかる。

うん、このままじゃ遅刻だな。

「って、ヤツベエ！！ 待て、亮佑……ってもういねえ！？」

亮佑はいつの間にか、マンガのように砂埃を巻き上げながら、数キ  
ロ先まで走り去っていた。

「……まっいいか。遅刻すんならとことん遅刻しよ」

俺は自殺願望者といっても、ヒッキーでもニートでもない。

学校にも普通に行くし、イジメられるほどナメられちゃいない。

……けど、遅刻やサボりはよくするタイプの人間だ。

適度にやって適度にサボる…それぐらいが健全な高校生だと俺は思う。

……自殺願望者が言うセリフじゃないな。

「たく、遅刻するんじゃないって何度言えば分かるの!」

「ハイハイ、すんませんでした」

結局一時限目の科学の途中で教室に入った健全な俺は、科学担当教師兼、クラス担任の浅尾あさお 咲耶サクヤ大先生に説教を食らうハメになった。……まあ、それなりに常連だから慣れてるけどな。

「コラ！ ちゃんと人の話を聞きなさい！」  
「まあまあ。若いうちからそんなに怒ると、ファンと小皺こぢわが増えて、授業時間と脳内細胞が減りますよ」  
「っ！！」

浅尾の顔が、怒りと恥ずかしさで真っ赤に染まった。

ファンというのは、浅尾には非公式ファンクラブが出来ているのだ。

…浅尾自身はその存在を嫌ってるらしい。  
ダチ曰く、『あのメガネに白衣に長い黒髪！ そしてあのツンツン属性は最高だあ！！』らしい。  
確かに、腰までのびた黒髪とキリッとした顔立ちは綺麗だ。  
けど、時々恐ろしいことをしてくるので油断出来ない。

そこが浅尾の怒った理由。

そして浅尾は異様にプライドが高い。  
その赤フレームメガネや羽織ってる白衣さえ、プライドがあるらしい。  
やめればファンクラブもマシになるモノを……  
そんなプライドは授業にもあって、遅刻生徒にソレを指摘された。

ソレが恥ずかしい理由。

まあ俺にしてみれば、からかいがいのあるインテリ教師って所だ

「もういいわ！ これ持って一日中立ってなさい！！」

俺の目の前には、三つのバケツが出された。

「イエッサー！ 先生の古典的な考えを、俺は嫌いじゃないですよ」

俺はふざけて、バケツの一つを頭に乘せて、両手にバケツを持った。俺が前のドアから出ようとした時、ふと視線を感じた俺は、視線の先…自分の席の周りを見る。

俺の席は廊下側から二列目の一番後ろにある。

そして俺の廊下側の隣では、麻依子がこっちを見て笑ってる。さらに俺の前の席は亮佑だったりする。

……ある意味見事な布陣だ。

「ZZZZZZ…」

そして亮佑は腕組しながら寝ていた。

…その寝顔は、俺の中の悪戯心を覚醒させた。

“ “ “

…特殊OS起動

搭載武装… B 02X型バケツ

攻撃対象…登録No.01 櫻井 亮佑〔過去通算攻撃数92回〕

発射点座標確認

着弾予定点座標との距離3.64m

発射角度修正完了

予想弾道…ALL CLEAR

よって、これからバケツ発射シークエンスに移行

発射カウント開始

10、9、8、2、1、FIRE!!

“ “ “

「ウオツッ!! 手が滑ったアアアアアア!!」

俺は思いっきり右手のバケツを振り上げ、亮佑の頭に落下するように投げる。

バケツは予想通りの軌道を描いて、亮佑の頭に落ちていく。フッフッフ、朝の恨み晴らしてくれるわ!!  
水をかける位なら、神様も許してくれるだろ。  
その時、ふと思い出したように浅尾がつぶやく。

「それ、水じゃなくて濃硫酸だから気をつけなさい」

なんで危険化学薬品ッ!?!?  
水浸しじゃすまされねえ!!

「うおらコノクソオオオオオオ!!」

その言葉を聞いた瞬間、頭と左手のバケツを窓の方に投げつけ、全力で亮佑の方に走り、亮佑の頭に落ちる寸前のバケツに上段蹴りを放つ。

幸い、バケツが横向きに落ちてたため亮佑には濃硫酸がかかることはなかった。

『亮佑』には、な。

「ギャー……!! 目があ! 目がああああああ!」

窓側の一番後ろの席、そこに座る金髪ツンツン頭が、ムス○的な叫び声を上げる。

さつき投げた二つのバケツも、蹴ったバケツも金髪野郎に命中したのだ。

この金髪ツンツン頭の名は、おおにし大西 ヒロシ洋。

親のナイスなネーミングセンスのおかげで、別名・たいせいよう大西洋いちよう、俺の自殺願望を知る馴染みのダチだ。

色欲の固まりで、コキリ黒速悪魔の生命力を持つ。こいつになら、濃硫酸をかけても神様は手放して許してくれるだろう。

あと、こいつは『ナンパの帝王』と呼ばれることもある。

それは顔もいいし身長も180以上あるため十分モテるからだ。まあ、下心がバレた瞬間終わりだけだな。

ついでに、『ダチ曰く』は、すべて洋の発言だ。

「須千家君、やるわね…今回のことは許すわ」

「先生も相変わらず危険なことしてくれますね。俺も科学室の備品を無駄に使ったことは黙っときます」

浅尾は俺と言葉を交わすと、授業終了のチャイムが鳴る前に、白衣を翻しながら教室から出ていった。

静かだった教室の空気が、一気に騒ぎだす。

俺や洋に対する様々な目線、話題が飛び交う。

その空気が嫌いな俺は、洋の方からバケツを取り、いつもの屋上に向かった。

「痛い痛い痛い!! 体が溶けるうううううう!! スライムに  
なるうううううう!!!!」

∴勝手に溶けて、バブルスライムにでもなってる。

S U I C I D E 5 〽 ぶざけた意味を蹴り飛ばせ

大抵の自殺しようとする者は、他人の話に聞く耳を持たずとしない。

(……今日についてねえな)

俺は自分の不幸に、心の中でグチっていた。

浅尾をからかった後、教室を出て静かな屋上に来た俺だけど、今日は異様に客人が多い。

屋上に来た瞬間、優しそうなお兄さん達に『通行料払えやゴルア』と言われたし。

まあ、ちよつと拳と拳の語り合い（一方的）をしたら、すぐにいなくなってくれたけど。

そして、静かになった屋上のドアの上、貯水タンクの横で寝ようと思ったら、先客に校長が寝てた。

まあ、校長のサボりはよく見ることだから、（サボり仲間での信頼関係が出来始めてる）いつも通り『奥さんからの電話が……』って耳元で言ったら、全速力で階段を下りてったけど。

そして、昼までゆっくり寝てたら、やっぱり濃硫酸ごときじゃ死なない洋が来て『なんで全部僕にかける！ 普通だったら顔が溶けてナンパ出来なくなるじゃないか！』って文句を言ってきた。

まあ、眠りを邪魔する人は嫌いなので、普通じゃない洋の鳩尾に拳をたたき込んで黙らせ、昼メシのパンを買ってきてくれた亮佑に撤去してもらった。

その時「三大王がそろってる！」とか言って、俺達を写メってた人がいた。

まあ、亮佑と二人で睨んだら即逃げてたけど。

……ついでに、亮佑・俺・洋の三人は戸野高一年の間で『三大王』と呼ばれている。

一般的な理由は、三人とも『王』のつく別名があるからだ。

亮佑は『睡眠王』

俺は『鈍感大魔王』

洋は『ナンパの帝王』

他の二人はよく分かるが、なんで俺が鈍感と言われなきゃならないのかが分かん。

しかも魔王とは……まったく、失礼な。

……まあいい、話を戻そう

そして今、俺は緊張状態にある。

そして今、俺は屋上の貯水タンクの横にバケツ×3を持ってうつ伏せてる。

そして今、俺の目線の先には数分前に来た一人の女性が、屋上に設置されたベンチに座ってタバコを吸っていた。

風になびく長い黒髪

揺らめく純白の白衣

整った横顔にかけられたメガネ

その女性は我が担任の浅尾大先生だった。

ストーカーみたいな状況だけど、俺は洋みみたいな変態な目的は絶対がない。

なぜこんなことしてるかという点、俺は今まで浅尾が校則違反した所を見たことがなかったからだ。

教師の仕事をそつなくこなし、分かりやすい授業内容を徹底する。

時々恐ろしいことをするけど、その目標は遅刻&サボりの常習犯で

ある俺と居眠りの亮佑、そして変態の洋ぐらいだ。そして、その恐ろしいことの全ては安全を考えられている。朝のことも、俺の特殊OSが起動しなかったら俺が一日中立ってるだけですむ罰だから、浅尾には何も言えないのだ。そんな教師が『校内での喫煙、飲酒は生徒は勿論、教職員・事務員も禁ずる』という校則を目の前で違反している。チクる気なんてサラサラない。だけど、いつものキリツとした雰囲気がない浅尾は、どこか痛々しくて目が離せなくなった。

「……………疲れた……………生きてくのも大変ね」

とても自殺願望チックな発言だけど、言ったのは俺じゃなくて浅尾だ。

……………まさか、屋上に来たのも自殺するためとか？  
それなら、珍しくタバコを吸ってるのを『ヤケになって』って解釈すれば、辻褄つじつまが合うな……………

でも……………なんか、ム力つくな。

俺は黒ヘルがいるせいで、勝手に自殺なんてしたら、来世がエンドレス・ウ○コになっちまう。

なのに、他の人は自由な場所、自由な時間で自殺が実行出来るんだもんなあ……………よし、ここは止めるしかないっ！！

し、嫉妬なんかじゃないぞ！

浅尾のような真面目な教師は、今の日本じゃ絶滅危惧種だからな。

死んじやいけない、うん。

俺は無理矢理繕った理由で立ち上がり、浅尾に近づぐために一步を踏み出し…

「……もう、死んでやるツツツ!!」

突然、屋上に響きわたる叫び声。

この声は俺でも浅尾でもない。

俺と浅尾は同時に声のした方…隣のB棟の屋上を振り向いた。

余談だけど、戸野高校の校舎は南から、教室や食堂がある教室棟（別名A棟）、職員室や理事長室等がある事務棟（別名B棟）、そして部室や科学室等がある特殊棟（別名C棟）がある。

四階建てのA棟とB棟は、日当たりも考えて二つの棟は中庭である程度離されてる。

だけど、今俺と浅尾がいる唯一六階建てのC棟は、敷地を考えるとB棟との距離は10メートルもない。

この高さの差と距離のため、C棟の屋上は他の棟から死角になる。このことは一部の人間しか知らず、俺もよく愛用してるからあまり人が来ない、昼寝に適した場所なのだ。

そして、B棟を振り向くというより見下ろした俺が見たのは、二人

の男女の生徒だった。

誰かは分からないけど、光の加減で青く見えるポニーテールの女が屋上の出入口の方において、光の加減の必要なしに金ピカに輝くロン毛の男の方は、俺が黒ヘルにあった時のようにフェンスの外側にいた。

「やめろ！　すぐにこっちに来い！」

女の方が男に向かって男言葉で叫ぶ。

……けど、んなことじゃ自殺しようとする人は止めらんねえよ。

「うるさい！！　俺はここで死ぬんだ！」

きつとなにか辛いこいことがあつたんだな。  
俺は名前も知らない君を応援してるぞ。

「死んでもなんの意味もない！　だから戻って来い！」

……なんか、あの女はムカつくな。  
名前も知らない男よ、とつと飛び降りろ！  
きつと、イジメとか家庭事情とかを思い詰め……

「だったらなんで俺をフツたんだ！！！」

.....  
ハア？

「お前が俺をふるから悪いんだ。だから俺は死ぬ！」

.....

「なにを言ってる！ そんなことで死ぬんじゃない！」

.....

「だったら俺と付き合え！ そしたら俺は飛び降りない」

.....  
ブチッ

「.....フフ.....フフフフ.....  
.....フフ不負斧斑腑腐」

口の端から勝手に笑い声が漏れてくる。  
二人に気づいた学校全体が騒がしくなってるみたいだけど……そんなの関係ねえ。

「早く止めなきゃ……つて須千家君!？」

浅尾は屋上のドアに向いた時に、段差を降りた俺に気付いたみたいだけど……そんなの関係ねえ。  
俺はバケツを片手に浅尾の横を通り過ぎ、ある程度の所で立ち止まる。

「なにしてるの!? あの二人を止め……」  
「浅尾、数秒その口から出るものすべて止めて黙ってる」

教師にはなるべく敬語を使うようにしてたが……そんなの関係ねえ。  
今は俺がすべきことは 死に対してヘドが出そうな甘ったれた考えを持ったカス野郎を叩き潰す……それだけだ。

昼休み、いきなりクラスメイトの多田にB棟の屋上に呼び出された私は、彼に告白を受けた。

だけど私は、彼と付き合うことを望まなかった。故に断った。

……しかし、そのせいで今の状況が出来てしまった。フェンスの外にいる多田は、いつでも飛び降りられるから、簡単には近づけない。

「どうなんだ！？ 俺と付き合わなきゃ、お前は俺を殺したのと一緒だ！！」

そんなこと言われても、好きでもない人と付き合いたくない。

「早くしないと俺は死ぬぞ！」

……だけど、人命には変えられない。

私はスカートの手を握り締め、目を瞑る。

……イヤでも言うしかない。



だいたい、C棟からこっちに来ることなんて出来るはずない。  
隣のC棟の方を見ても、ガラスなんて割れてな……！？

「ウソ……あんな所のフェンスが……」

私の目線の先には、C棟のフェンスの一部がこっちのフェンスと同じように、グチャグチャになって穴が開いていた。  
このことに気づいた野次馬達が次々と騒ぎだす。

「……つたく、面倒になる前に逃げるか」

白髪の彼は、多田から離れて私の方に近づいてきた。

「あなた、あの熟睡してる野郎を適当に処理しといてくれ」

私は、無意識のうちに彼の瞳を見つめていた。

彼の瞳はやけに無機質で、まるで……本当になにもないようだった。

「じゃあな、後は頼んだぞ」

彼は私の返事も聞かずに、私の横を通って屋上の出口に歩いて行った。

………礼を言わなければ

「あ、ありがとう」

「……なんであんたがそんなことを言う？」

彼は止まったけど、背中を向けたままだった。

「それは、多田が飛び降りるのを止めてくれ……」

「アホくせえ」

えっ？

私は彼の言葉が理解できなかった。

「俺はあのクソ野郎の死ぬ意味の考え方が、カスみてえに甘ったるいのが気に入らなかつただけだ。…それに、あのクソ野郎は本気で死ぬ気じゃなかつたのも気に入らねえな」

「死ぬ…意味？」

なにを言ってる？

死んでもなんの意味もな…

「…ついでにあんた『死んでもなんの意味がない』って言ったる？  
あんたも甘ったれだ。…野郎もあんたも『死』を甘く見て、簡単

に語んじゃねえ」

彼は、その言葉を吐き捨てるように言った後、出口の中に消えていった。

いつもの私なら、『そんなことなどない』と、強気に言い返せただろう。

……だけど、無理だった。

彼の言葉の威圧感は……一瞬、私にある幻想を見せたからだ。

それは……多田が死ぬ姿。

飛び降りる多田。

コンクリートに叩きつけられて不気味な音をたてるその身体。

地面に広がる真っ赤な血の花。

恐怖の叫びに染まる学校……

その全てが一瞬で私の目に焼きついた。

彼の言ったたった一文字……『死』。

……今までに何度も聞いたことのある、たった一文字の言葉。

なのに、足が震えて一步も動けない……。

……死が、怖い

私は未だ起きない多田と二人だけの空間で、腰を抜かして座り込む

ことしか出来なかった。

SUICIDE6 ～一緒にいる人はちゃんと選ぼう～（前書き）

書き忘れましたが、この小説の時間軸は高一の二学期：いわゆる今頃に合わせています。できれば、それを頭に入れて読んでいただけると有難いです。

SUICIDE6、一緒にいる人はちゃんと選ぼう

時は、一定の速度で進む一方通行の一本道である。

「はあ……」

「真慈、またやっちゃったねえ」

「まあ、殺人犯にならなかつただけでもマシだぜ。てか、あの威力

で人を殺さなかつた真慈はスゲーよ」

「お前等っ……はあ……」

…今、俺と谷：麻依子と亮佑は帰り道が同じ（亮佑は途中まで）だから一緒に帰ってるわけで…俺は帰りながら二人に慰められてた。

俺が屋上を去った後、あの騒ぎは生徒達によってますます悪化。即刻俺は呼び出しを受けた。

俺は両親がいないため、代わりに担任の浅尾が監視不行き届きで怒られてた。

で、結局俺は『器物破損』と『傷害』ってことで一週間の自宅謹慎になった。

本当は一カ月以上の監視者付き謹慎になってもおかしくないらしい。だけど、『自殺しようとしたのを止めた』という多数の目撃証言と、友好関係にある校長のおかげで一週間になった。

校長よ、俺はお前がズラだという秘密を、誰にも言わずに墓まで持っつてやるよ。

あと、俺が二つのフェンスごと吹き飛ばした男（後で二年だと判明）は、肋骨三本にひびが入っただけですんだらしい。

慰謝料でも求められるかと思ったら、逆に両親が自殺を止めてくれたってことで感謝していた。

「でさ、屋上にいた女の人って誰だったの？」

「さあ？ キレてたからよく分かんねえ」

別に他人に興味のない俺は、特にキレた時は余程印象的な人じゃな

いとその時いた人を記憶しない。  
実際、その場に女が一人いたのは確かだけど、なんかムカつく奴だったとしか覚えてないのだ。

「それよりも、フェンスをあれだけにするってことは相当な破壊力だぜ？ どうやって殺さなかったんだ？」

亮佑は、俺を慰めるよりそっちの方に興味があるらしい。

まあ実際、『車が衝突したような跡』と言われたフェンスを見れば、その威力を食らった人間が生きているほうが不思議に思うだろう。そのタネを知ってるのは俺。あと、近くにいた浅尾ぐらいだ。

「……バケツを使ったんだ」

「バケツ？」

おいおい、麻依子も興味があるのかよ。

……まあ、いいか。

「俺はあの時、朝の濃硫酸事件の時のバケツを持ってた。

たまたま、そのバケツは濃硫酸でも溶けないような素材出来てて、その素材が柔軟性が高いものだったんだ。

そして、そのバケツをタイミングよく俺の右蹴りと男の腹の間に入れて、クッション代わりにして衝撃を減らしてみたんだ。

でも、フェンスを壊すような衝撃には代わりなかったから、あの男もかなり吹っ飛んだけどな」

今回のことで、物事は計算通りにいかないってわかったよ。  
まあ、死ななかつただけでも許してほしい。

「……」

「ん？ どうした二人共黙って？」

そんなに凝視されると怖いぞオイ。

「いや、元々人間っぽくないけど、昔より計算高くなったと思ったからよ」

「そうだよ、昔から人間らしくないけど、前の真慈ならキレたら容赦なく暴れちゃうからね」

「まったくコイツ等、俺をなんだと思ってやがる……」

「……俺だつて成長してんだ。死ぬ前に殺人犯つていう汚点は残したくない」

「コラー！死ぬ前とか言わないの！」

二人が言う昔つていうのは、俺があるチームにいた時のことだ。  
……約三年前、不良や族が戸野周辺にはびこり始めたと同時期に、  
あるチームが出来上がった。

名は『R ラグナロク』

そして、そのチームの主力部隊が未成年、それも中学生の亮佑、俺、洋だった。

俺達のチームは、戸野周辺の族もヤクザも他のチームも、全てを薙ぎ倒した。

チームは今でも周辺の治安維持のために役に立っている。けど、俺達はいろんな理由で去年のうちに脱退した。

亮佑は『真慈たちがいないとつまないから』

俺は『面倒になったから』

洋は『ナンパの道を極めるために』

色々派手にやってたけど、あのチームで俺達は少しまともな人間になった気がする。

「亮佑は脱退してからも変わってないけどな」

「当たり前！ 今日先輩三人と遊んできたぜ！」

親指を立てて自慢気に言う亮佑。

亮佑の遊ぶは、世間一般で言う喧嘩のことだ。

元々、三人の中で一番好戦的な性格だった亮佑は、今でも戸野高と周辺高校の不良と『遊んでる』らしい。

……たしか、こいつが戸野高に来た理由は『周辺で一番不良が多いから』だそうだ。

あと、洋は『カワイ子ちゃんがいっぱいいるから』

ついでに俺は、中卒の予定だったのがチームのリーダーにバレて、

強制的にここに進学させられた。  
ん？ そういえば……

「谷……麻依子はなんで戸野高にしたんだ？」

間違っただけで、スンゲー涙目＋上目遣いで見ないでほしい。

「ん〜。アタシは真慈を見張るためかな？」

「ライライ、疑問形で言われても困る。てか、そこまで俺の自殺を止めたいか？」

実際に、今まで麻依子には何度も自殺を止められた（もちろん鉄拳で）。

「それもあるけど……真慈に悪い虫がつかないように、かな？」

「イヤイヤ、お前は言葉に『？』をつけないと喋れなくなる病気が？ てか、悪い虫がつくって……俺は腐った野菜か？」

酷い扱いだなオイ。

それも二人でコソコソ話だし。

……

「……麻依子、真慈なら心配ない。コイツは昔から鈍感だから、普通の女ならコイツの言葉に一瞬にして氷殺されるぜ」

「そうじゃなきゃこの数ヶ月で11人も撃墜してないよね…自覚ナシで」

「なんせ真慈は鈍感大魔王だから」

「そうだね、キング・オブ・鈍感だもんね」

……

「……」

話の内容は聞こえないけど……なんかバカにされてる気がする。

「んじゃ、真慈の機嫌も悪くなったみたいだし、俺はココで失礼するぜ…」

そういつて亮佑は、朝のように砂埃をあげて走っていった。

「……」

「……」

「……帰ろつか？」

「……ああ」

なんとなく去っていく亮佑を見ていた俺達は、気を取り直して帰ることにした。

あれからごく普通に自宅に帰った俺は、リビングにあるソファに座った。

この家は個性的な両親が建てたため、奇妙な形をしている。今頃だけど、一応説明しよう。見た目は二階建の家だけど、実は地下一階があり、合計三階建ての家である。

地下には三つの部屋があり、一つは開かずの部屋、一つは仮の寝室になっている。

そして、もう一つの部屋はワインやら焼酎が二千本ぐらいある酒蔵になっている。

一階は、普通に風呂やトイレがある。

そして、一番の特徴は二十畳以上ある巨大な吹き抜けリビングの中心には、入り口に対して垂直なバーカウンター風（もちろんバー機能あり）の大きなカウンターキッチンがある。

ついでに、今俺がいるバーの前方がテレビやソファがある接客用リビング（日曜日の首吊り現場）、後方がテーブルなどがある食事用リビングだったりする。

二階は、リビングの吹き抜け以外に大きめなベランダ（椅子が吹っ飛んだ場所）と四室があり、それぞれ自室、書斎、空室、…元両親の部屋がある。

ついでに、二年前に暇つぶしで全室バリアフリーした。もし売りに出したら、不動産屋でも扱いづらい物件である。

「この頃説明ばかりで疲れてるだろ？」

「いや、お前に振り回されるほうが疲れる」

いつの間にか、俺の後ろに黒ヘルが立っていた。

「いや、後ろから声かけられたんだから驚こうぜ？」

「家に入った瞬間から、なんとなく分かってたから」



俺は座ったまま後ろの黒ヘル掴み、そのまま掴んだ腕を振り下ろし、黒ヘルを『午後は　』ぐらいおもいつきり目の前の床に叩きつけた。

「なにが『あつゴメン、ムリだ』だこの野郎！　自殺屋が自殺させられなくてどうすんだよ！　戦争屋が戦争やめるのとはわけが違うぞオラア！！」

仰向けになった黒ヘルに四の字固めをかける。  
タップなんて関係ねえ！！

「ギブギブギブ偽不ギブ！！　ちゃんと話すから！　カツ井なくても全部ゲロするから！　折れる骨が折れる心が折れる！　骨がムンク並に悲鳴を上げてる！　今ミシツていつてるよ！？」

確かに『メキツ』って不気味な音が聞こえるような聞こえないような……

まあ、これぐらいで許してやるう。

「じゃあ、尋問を開始する。なんで、ムリなんだ？」

力は緩めたけど、四の字固めのまま黒ヘルに聞く。

「次ふざけたら絶対に骨が逝くな……真面目に答えよう」

もしも何もしてなかったら、ふざけるつもりだったのか？

……まあ、話せばいい。

「実は、あの自殺儀式は特殊な対価がないと出来ないんだ。その対価…通称『聖翠』<sup>せいすい</sup>は、俺達自殺屋がお客から代金代わりに貰うもので、その客が死んだ時に流される清らかな涙の量によって決まる。

昨日の『皇狩』シリーズは自殺儀式の中でも手軽で、最低ランクの『パイプ椅子タイプ』は1人分、最高ランクの『王家の椅子タイプ』でも20人分ぐらいの聖翠で出来る。

だけど、真慈は『皇狩』シリーズじゃ死ねない。だから、他の儀式を発動する必要があるんだけど、そのためには何十人、何百人分もの聖翠が必要になるんだよ。

今のシンジは『風俗に来たのに手持ちの金が足りなくて、○番まで出来ない人』と一緒に……だからマジで折れるってエエエエエエッ！」

十八禁的な例えには制裁が必要だけど、なんとなく分かった。

「簡単に言えば、俺には儀式に必要な聖翠が足りないってことだな？」

「そ、そういうことだ……アハハ　　なんだか足の感覚がなくなってるような……」

あまりの痛みでリリツてきた黒ヘルはフルパワーで無視。

……でも、なんとなく聖翠が足りない理由が分かる気がする。俺が死んで一番悲しむはずの両親は先にあの世に行ってる。

親戚だって、親の残した財産目当てで近づいて来たような奴らばかりだったから、清い涙なんて流すわけない。

……亮佑と洋、R ラグナロクの奴らは泣くわけない。

逆にマジで怒って、死体の俺をミンチにするだろ。

泣いてくれるのは……隣だからってよく世話してくれる麻由さんと、まともなダチの麻依子とで2人分ぐらいになってくれれば、今の俺には十分だろ。

人の死、それも自殺者を本気で泣いてくれる人間なんて、肉親か恋人、親友のどれかではないのだから。

「……ついでに真慈、お前の聖翠は23人分だ」

「まあ、せいぜいそんな……はあ!？」

23人も俺の死を嘆く人がいるって言うのか？

「……実際は137人。男は122人。我慢強い奴が多いな。ほんの少ししか流さないから合わせても四、五人分にしかない。残りの女も数人分にしかない……だけど、名前は分からないけど一人が二、三人分。昨日来た麻依子ちゃんは何人分も泣いてくれるぜ」

「そ、そんな……」

我慢強い男……チームの野郎共も泣くのか？  
それに麻依子も……

……でも、二、三人分って誰だよ。

「真慈……周りはお前が思ってるより、お前をちゃんと見てるんだ。  
……どうだ？　もしかして死ぬ気がなくなったか？」

「……くだらないことを言うな、少し驚いただけだ」

悲しむ人間がいたとしても、たったそれだけ。

そんな一時的な感情に……俺の願望が曲げられることはない。  
人は自分自身の欲望に忠実なのだから。

だから俺は自分の欲望……『死ぬこと』に忠実になるだけだ。  
そのためには……

「……で、その聖翠を集めるにはどうすればいい？」

出来るなら、なるべく早くしたいからな。

「……まあいい。簡単なことだ、お前が死んだ時本気で泣くイ  
コールお前を必要としてくれる人を増やせばいい」  
「無理難題だな」

俺を必要とする人……そんなの元々いねえのに、そう簡単に出来る  
かっつうの。

「なんとかなるさ。人は誰かとかかわって生きてんだからよ。小学生の時にならわなかったか？」

「……とつくの昔に忘れた」

てか、自殺願望者に言うセリフじゃねえだろ。

「んじゃ、これから頑張って貰うために、俺からプレゼントをあげよう」

「ハア？」

いきなり声のトーンを上げて喋りだした黒ヘル。  
プレゼントってなんだ？

「カモーン」

げんらくつかく  
「幻羅空鶴」

なにかを呼んだ瞬間、黒ヘルの手が光りだして、光は見慣れた形を作り出す…

「って、いつもの鶴嘴じゃねえか!!」

その鶴嘴に名前ついてたのかよ!?

「細かいことは気にしなあくい。んじゃ行くよ」

そのままその鶴嘴を振り上げる黒ヘル。

「我が名の下、この者に自ら呼び込む死から逃れる方法すべを与えよ……」

みるみる白かった鶴嘴が、黒く滑らかな色に変わる。

「って、ちょっと待った!! 俺を殺す気が!？」

この野郎、確実に俺を鶴嘴の餌食にしようとしてるよ!!  
逃げようとしても、四の字固めを利用して動けな……

「問答無用 因果封印いんがふういん!!」

容赦なく振り下ろされる鶴嘴。

その、鋭く黒光するものが俺の胸に深々と突き刺さる。  
その瞬…間、目の前…がひか…りに包まれ…お…れは……



SUICIDEフゝ壊れたマリオネットのふじりフゝ

『不死』というものは、『死なない』のではなく『死ねない』こと  
なのだ。  
なのに、なぜその不自由を求める人がいるのだろうか。

モノトーン調の質素な部屋

カーテンの隙間から、そこに差し込む清らかな朝日  
部屋を出て階段を下りれば、目の前には吹き抜けから差し込む光に  
よって、幻想的な雰囲気醸し出すリビング

その中心にあるカウンターキッチンの中に入り、軽いアルコールの  
洋酒をグラスについで口にする。

その味に酔いしれながら、左手に刃先の鋭い刺身包丁を手にする。  
そして右手をまな板の上に置き、左手を振り上げる。

「卍解！ 天〇残月！！」

包丁が漆黒の刃やに変わる。

開けたら閉める。

振り上げたら振り下ろす。

「……………月牙〇衝おおおお！！」

まな板に置かれた右手に向かって、容赦なく死神の必殺技（偽物）  
を繰り出す。

俺の手首は黒き斬撃によってザックリ切り落とされ、木のまな板を  
血液が赤黒く染め……………

ガキンッ

……ることなんてなくて、元に戻ったの刺身包丁の斬撃は、右手の皮一枚斬ることもなく、その皮膚の表面に止められた。

「……………ハア」

鉄の刃物が生身の肉体を斬れない、まさに摩訶不思議な出来事……  
ついつい出たため息と共に上を向いてみる。

「……………」

まるでしかばねのよう（元々死んでる）な黒ヘルが、糸が絡まった操り人形のように天井から吊されていた。

てか、俺が吊した。

なぜ、こんな風になったかというと、昨日の夜…俺が黒ヘルに刺さ  
れて二日後に遡る。<sup>さかのぼ</sup>

黒ヘルに鶴嘴で胸をザツクリ刺されて死んだ俺……  
自殺じゃなくて幽霊に殺された俺が次に目を開けた時、目の前に表れたのは花畑や川ではなかった。

「いや、なぜに普通にリビング？」

俺が見たのは見慣れた我が家の天井。  
俺はソファーに横たわってるだけだった。

……前回の展開の場合『死ぬ』『地獄に落ちる』『地獄である  
一定の条件をクリア』『天国に昇る』『ノーマルエンディング』  
が成り立つと思っただが…

「おっ？ やつと起きたか」

いつのまにか目の前に、黒ヘルがコーヒークップ片手に立っていた。寝ている俺にたいして平行に立ってる（＝浮いてる）時点でおかしい、カップの中身がこぼれないのもおかしい。だけど、一つ一つツッコむ必要はない。

なぜなら、コイツの存在自体がおかしいからだ。そう考えれば、コイツの行動すべてが簡単に飲み込めるのだよ。

「んで、黒ヘル。お前は俺になにをした？」

別に体に異常はないみたいだ。

しかし、コイツはおかしいから一応確認する必要がある。

もしかして、刀（鶴嘴）を胸に刺す＝自殺屋代行になってるかもしれない。

オレンジのツンツン頭は自分で死神になったけど、俺は自殺屋なんてなりたくねえぞ！

「だから、プレゼントって言っただろ？ 真慈には特殊なスキルをつけてやったぞ」  
「特殊なスキル？」

嫌な予感がするのは……気のせいじゃねえな。

「自殺屋奥義の一つで、真慈には『不死』になってもらった」

……………へ？

「不死ってあの『全く死なない』っていうやつ？」

「因果封印は自殺屋の技の一つで、相手を不死に出来るんだ」

……不死〓死なない

……俺〓死にたい

……………不死×俺〓至上最悪の嫌がらせ

俺はそつと、右手を黒ヘルの頭に添える。

「おいおい、俺は男に撫でられ喜ぶキャラ設定じゃないぞ？」

その右手で頭を鷲掴みにして下に下げる。



俺は、見つけたロック用のアイスピックを右手で掴み、人間の急所の一つ…首に向かって突きを放つ。

ガツッ

「なっ!?!」

俺の喉を貫き、息の根を止めるはずのアイスピックは、なにかに弾かれたように宙を舞って床に突き刺さった。  
現実的にありえない状況に、思考回路が固まる。

「因果封印…生体に靈力を送り込んで、その生体が自分の意志で自身を傷つけようとした時、意志に反応してその靈力で表皮に不可視の防御壁を張り、自殺を阻止する自殺屋専用保護術だ。

自殺の意志さえなきや発動しない…だから、飛び出しじやなきや普通に事故死するし、自分で引き金を引かなきゃ銃殺もされる…その代わり自殺で死ぬには自殺儀式以外じゃ死なないようになる。

「簡単に言えば『死なない』じゃなくて『死ねない』ようにする術だ。…通常は定期的に靈力の補給が必要だが、真慈は元々靈力があるからたぶん永久的に発動し続ける」

アイスピックのそばに立つ黒ヘルは、いつもと違った雰囲気の様子を覗きこんだ。

「…しゃべり方は少し格好いいけど、潰れた顔面はモザイクかかるぞ。」

「……こんな衝撃的事実を突きつけられたのに、よく冷静でいられるな。もう少しいいリアクションを期待してたのに」

いや、だってねえ……

「お前がいる時点でありえねえし、実際にやってみて見事に弾き返されてんだ。認めるしかねえだろ？ ……あと、驚きすぎて逆にリアクションなんてとれねえよ」

ホント、頭がパンクしそうだよ……

「……まあいい、一度乗った船はマンビヨンボン号だろうがタイタニック号だろうが乗ってやる」

けどな……

俺はゆっくりと黒ヘルに歩み寄る。

「ん？ 俺は男に抱きつかれて喜ぶ設定もされてないぞ？」

俺は黒ヘルの目の前に立つ。

そして、右腕を振り上げて……



黒ヘルを吊し上げた後、俺は二日間寝たことを知った俺は、運良く(?) 謹慎期間だったことに感謝した。その数時間後に起きた黒ヘルは、逃げ出そうと暴れ回ったから、糸が絡まって今の状態にある。ついでに黒ヘルには、謹慎期間中ずっと奇怪なアートでいてもらうつもりだ。

「…今日は怠惰に睡眠を貪るか」

バイトもなく、特に何もすることのない俺は、謹慎期間中はずっと寝ることになりそうだ。

……ついでに、俺の生活費等は二階の書斎にある数台のパソコンを使い、株とかで稼いでいる。

教育費とかも払って、十分貯金が出るぐらい儲けられるのは、親父譲りの勝負運と金運のおかげだろう。

あの、『ドコデモドア』シヨックの時も、ちょっと前に売りに出したためダメージはほとんどなかった。

まあ、売ったのは『なんとなく、どら江社長が調子に乗ってウザいから』って理由だったけど……

まあ、そんなこんなでバイトもなにもやることのない俺は、洋酒をもう一口飲んでから、夢の世界に旅立つためにリビングから出……

「TELLLLLLLL……」

つと、リビングから出る前にキッチンのカウンターの端に置いてある、アメリカン風な家電のベルが鳴った。

「……こんな朝早くからなんだってんだよ」

新聞勧誘と家庭教師だったら即座に叩き切る！  
でも、その前に……  
俺はある作戦を思いつき、受話器を手にする。

「Hello? Who are you?」

……日本人だと思ってかけたなら流暢な英語で電話に出られてみる！  
勧誘じゃなくても即座に相手が切るぞ！  
さあどうする？ 受話器の先の誰かさん！

「……ヒドいわねえ、私が英語苦手なの知ってるでしょ？」

「……なっ!?!?」

受話器から聞こえた、聞き覚えのある甘ったるい女の声…

「驚いたあ？ ヘル」

やっぱり……間違いない。

「ロキか……もうその呼び方はふさわしくないんじゃないのか？」  
「相変わらず冷たいわねえ。だけど、ヘルのそんな所が私は好・き・よ」

ず、頭痛と悪寒と吐き気と腹痛と目眩が一気に襲ってくる。  
……持ち堪えてくれ、オレの精神力！

「……悪いが俺は睡眠で忙しいんだ。用件があるなら早くしろ、待ってる一秒さえ不快だ。用が無いならその耳障りな声をコンマ一秒も耳に入れたくない。即刻切つて、二十秒以内にこの番号を着信拒否にする」

「もう、素っ気ないわねえ。ちゃんと用件ぐらいあるわよ。…今日の午前十時、戸野高に来てくれない？ もちろん、拒否権はないわよあ」

……なあ黒へル。お前の術、意味なくなるかもしねえわ。  
俺は心の中で小さく呟いた。

SUICIDEと悪戯神との対話・片翼天使との再会

悪魔は幻想ではなく、人の心に必ずいるものである

「……はぁ……死にたいなぁ」

『だったら死ねば』って思った人もいるだろう。

そんなヤツは前回を見直しやがれコンヤロー！！（ヤケクソ）

……俺は一人、あるものの前で盛大なため息と今の願望を愚痴った。  
さあ、俺の前にあるものとは？

次の三択から選んで答えよう。

“ “ “

- 1、重厚な戸野高の理事長室のドア
- 2、開けたらただでは帰れない扉
- 3、魑魅魍魎が巣食う地獄へ続く半回転して開ける戸

“ “ “

賞金もライフラインもなし、IQなんて関係ないこの問題。  
さあ、その答えは……

目の前にあるのは、重厚な造りで開けたらただでは帰れない、魑魅魍魎と同等なものが巢食う『理事長室』とかかれた金色のパネルがついた半回転して開く戸、いわゆる扉「英語名ドア」でした。

『三択の意味ないじゃん！』って思った人もいるだろう。だけど、1は一般生徒から見、2はR ラグナロクの奴等から見、3が亮佑・俺・洋から見た印象なのだからしょうがない。

「あれ真慈、なんで学校にいるの？ 月曜日からずっとヒッキーになつてたのに」

「人を勝手に引き籠もりにするな。チビって呼びぞ」

「ヒドーい！ ちゃんと約束は守ってよ！」

いきなり声をかけてきた麻依子は、廊下で大声を上げる。

「わかつたから騒ぐな。ってか、何でこんな所いんだ？」

ここはA棟二階のため、基本的に用事のない生徒が来ることはない。

「ん〜と、アタシは放送で生徒会室に呼ばれたの。それも会長かららしいよ」

「生徒会室か…なんかやったのか？」

生徒会員以外が生徒会室「A棟三階」に呼ばれるのは、生徒会に悪い意味で目をつけられることをしたか、なにか特殊なことを頼むぐらいしかない。

『特殊なこと』というのは、目をつけた生徒の校則違反の証拠を掴んで校長などに報告するために、その周囲の生徒に情報を聞き出したり、スパイ紛いなことまがもさせる。

…ついでに俺は、『サボり多過ぎ』で何度か呼ばれているけど、その呼び出しをうすうす尽くサボっている。

まあ、俺は堂々サボってるからスパイなんて関係ないけどな。

「それがアタシも分からないの。真慈が呼び出されるのは分かるけど、アタシには心当たりがないのよ」

くっ、正論にはなにも言い返せねえ。

「で、なんで真慈はここにいるの？ てか、謹慎中じゃなかったっけ？」

「このバカ理事長に呼び出された」

「……拒否権がなかったのね。」ご愁傷さま

理事長室を指さしながら言うと、麻依子は俺の答えに納得した顔をしてからその両手を合わせた。

「じゃあ、アタシはそろそろ行くけど、無事帰還することを祈って

るよ」

そう言っただけで敬礼してから、生徒会室の方向へ去っていく麻依子。なんか、戦場に行く人の気持ち分かる気がした。でも……おかげで覚悟が決まった。

「……ここまで来たら行くしかねえな」

俺は覚悟を決めて理事長（魑魅魍魎）がいる、理事長室（地獄）のドアノブに手をかけた。

ノブを回しながら、頭の中で口調を理事長専用に変える。

「須千家真慈。理事長の全面的脅迫命令により、謹慎期間中にも関わらず来校した。失礼する」

言うことだけ言って、入室許可の声がかかる前にドアを開いた。

その部屋の中は『理事長の部屋』と言うより『ヤクザの首領の部屋』<sup>ドン</sup>って感じだった。

だって、理事長室に巨大な木彫りの龍虎とか日本刀とか鎧兜って普通置いてないでしょ。

それに、中央にある接客用らしき机には、口径のデカイ弾丸が四五発分置いてあるし、まあまあ広いこの部屋の天井を見ると、とてつもなく獰猛そうな龍も描かれてた。

「ヘルウ〜」

もちろん龍の絵が喋ったわけじゃなく、その部屋の奥に唯一理事長室らしい大きな事務机の方で、金髪美女が椅子から立ち上がってこちらに手を振っていた。

俺は龍虎の間を早足で通りすぎ、真直ぐそいつの方へ歩みを進める。そして俺は、机を挟んでそいつ向き合う。

キリッとした顔立ちに独眼竜のような逆五芒星の描かれた眼帯。ショートカットのくせ、耳前の髪だけが胸の辺りまである金髪。ピッチリとした深紅のスーツ&パンツが、スタイルのいい体を妖艶に包む。

106

「ちゃんと来てくれたんだあ。さすが私のヘル」

「理事長、俺はあんたのものじゃない」

この女が俺を呼び出した張本人、戸野高校理事長。  
そして……

「チームを辞めた俺に今更なんのようだ？ 理事長……いや、ロキさんよ」

そしてこの女が『悪戯最高神』の名を持ち、俺を戸野高に半強制入  
学させたR ラグナロクのリーダー：戸野この彩華サイカだ。

やった！ 初めての地の文だあ

あつ：アタシ、谷津麻依子です。

好きなものは、甘いものと真慈の作った料理全般。

嫌いなものはいっぱいあるけど、特に嫌いなのはグリーンピースとハ  
イポーションです。

これからもよろしくね

「谷津麻依子です。さっき放送で呼ばれて来ました」

そしてアタシは今、生徒会室の前にいるのです。

「入ってきてくれ」

「はい、失礼します…って!？」

アタシがドアを開くと、そこはまさに裁判所の法廷のような場所だった。

だって、弁護側と検察側みたいな席の先に、裁判長席っぽいものもあるし……

「驚いたか？ ここに初めて入った者は、だいたい君みたいな反応をする」

その裁判長席的な所に生徒（一人だけだけど）が座ってなかったら完全に裁判所だよ、ココ。

「まあ、そっちの椅子に座っててくれ」

「あっ……はい」

アタシは言われたとおりの場所に座る。

法廷で言うなら『被告人席』って場所。

そして、アタシは裁判長席に座った人をよく見る。

クツキリとした輪郭に、強気な印象を与える顔のパーツ。結構長いポニーテールは、黒だけど青っぽい髪色してる。座ってるから分かんないけど、たぶん真慈より少し小さいぐらいの身長に、ほっそりとした体型。今、ココにいるのはアタシと目の前にいる女の人だけ。もしかして……

「あのお、もしかして生徒会長ですか？」

この男口調のカッコいい感じの人なら、会長でもあり得そう。その人はちよつと考えた様子を見せてすぐに立ち上がって、こっちに近づいてきた。

「……一学期は表に出ることが少なかつたからな、私を見るのは今日が初めてか」

はいビンゴボンゴー！

予想的中したよ、さすがアタシ！

「じゃあ自己紹介をしよう。この高校の生徒会長をやっている、二年の戸野麗花レイカだ。よろしく、谷津さん」

会長は、女らしい中にも男にも勝てるカッコよさのある笑顔のアタシに向けてきた。

これは男も女もホレそうだよ。  
ま、アタシは例外だけだね。

「よろしくお願いします。で、会長はアタシになんのようですか？」

アタシは早めに本題を切り出す。

「君は気が早いな……」

そう言いながら元いた席に戻る会長。

だって、早めに終わらせて理事長室の決闘を見たいからね。  
アタシを見下ろす状態になった会長は、さっきの笑顔と違い冷たい  
仕事の目になる。

でも、そんなんじゃないアタシはビビッたりしない。

「フツ、普通の生徒ならこの状況でそんなに冷静じゃいられない……  
さすがあの時の男と一緒にいるだけあるな」

あの時の男って……まさか!?

「……これから君には、今週の月曜日起こった事件に関係している、  
須千家真慈について話してもらおう」

………なんだ、アタシはてつきり洋が会長をナンパしたのかと  
思ったよ。

俺は今、接客用のソファーに座り悪魔ロキと対面していた。

「で、俺になんのような？ 謹慎中の身なんだ。学校に長時間いるのはマズイんじゃないか？ 理事長様」  
「もぉー！ 昔から『愛する彩華』って呼んでって言ってるじゃないよお」

いやこの悪魔、昔は『我が永遠の恋人、彩華』って言わせようとしてたぞ。  
もちろん断固拒否したけどな。

「せめて彩華で許せ。あと、右袖に短ドス、腕時計に小型麻醉銃と左のポンプスにスタンガン仕込んで言う願いは脅迫って言うんだぞ」  
「ダイジョーブ 暗器の位置が分かるのはヘルぐらいだから」

……いや、誉められてるのか分かんねえ。

「イコール、誰が一緒でも俺だけを脅す気だったんだな」  
「当たり前い〜」

つたく、前々からだがコイツの扱いは疲れる……

戸野彩華は見た目は妖しい美女だけど、三年前にロキの名前でR ラグナロク（Rロキの略）を立ち上げた人物であり、昔からこの辺りを治める豪族『戸野家』の正当な跡取りである。  
戸野家は、世界的に有名なT・C（戸野カンパニー）という技術産業系の大手企業をやっていて、彩華はその時期社長でもある。  
ついでに、俺もこの株の数パーセント（彩華曰く、俺は個人投資家では一番持つてるらしい）を買っていて、売ればかなりの大金になる。

そしてこの女は去年大学を卒業し、その卒業祝いに父親からこの高

校の経営権を貰ったらしい。

俺以外の二人は知らず知らずこの高校を選んだけど、俺は今のよう  
に脅されて入った。

ただ凶器を突き立てられるだけなら死んでもかまわない俺は脅せな  
い。

けど、彩華は『ロキの悪戯』と言われる“生き地獄の拷問”をして  
くるため、俺も何度か強迫されてる。

ここに潔く来たのもそのせいだ。

……あの拷問されたら、地獄なんてきつと生ぬるい。

地獄が炎（2000）なら、ロキの悪戯が太陽のコロナ（1  
00万）と言っても、閻魔王も嘘にカウントしないだろう。

そんな眼帯女は、俺の自殺願望の原因の一つである。

「で、最初から脅す気でいるってことは、厄介ごとでも頼むつもり  
だろ？ それも一つじゃなくて複数」

「やっぱりヘルは二人より物分かりが早いわねえ。ホレなおしたわ  
ん」

いや、惚れられる筋合いないし。

あと、ヘルって呼び名は黒ヘルと被るからやめてほしい……って言っ  
たら説明が面倒だから我慢しておこう。

てか、やっぱり亮佑達も何か頼まれたわけか。

「今回のお願いは二つあるの。一つは二人にも頼んだんだけど、も  
う一つはヘルにしか頼めないのよん。どっち先に聞かう？」

〃  
〃  
〃

俺達全員に頼む〃何かを破壊〃喧嘩大好き亮佑に任せられる〃俺はサボっても平気…

俺だけに頼む〃面倒〃サボりたい〃一人だからサボったらすぐバレる〃バレたらロキの悪戯決定…

〃  
〃  
〃

「……後者にしてくれ」

「分かったわ。ちょっと待っててねん」

そう言つて彩華は立ち上がつて歩きだし、飾つてあつた日本刀を手に取り、その刀身を鞘から抜き出す。

眼帯に日本刀、まさに女伊達政宗だな。

そして刀を持ったまま、木彫りの虎に近づいていく。

「何する気だ？」

「もう、せつかちねん。ちょっと見てれば分かるわよお」

彩華は手に持った刀を、その虎の口から喉に突き刺した。木彫りと分かつてても、見た目は虎が気の毒…

「実は、これが秘密の部屋への鍵なのよ」

そう言つて、喉に刀を刺された虎と対の竜に近づいた彩華がその竜に少し触れると、その重量感ある見た目の割に滑らかにスライドして、その先にもう一つ部屋らしきものが表れた。

「勘違いしないでよお。私が力持ちなわけじゃないからね」

彩華は今日一番のマジな顔でそういつて、その部屋の中に入っていた。

別に彩華は怪力でじゃない。そんなことはすでに知っている。

あんなデカイ木彫りを一人で動かせるのは、俺の身近じゃ亮佑ぐらいだろ。

見た感じでは分からないが、多分T・Cの技術力による仕掛けがあるとした言えない。

……そして、その先の部屋のなかは気にしない。

気にしたら、いろんな意味で負ける気がするからな。

そう思った俺は、彩華が来るまで部屋に背を向けて、机の上の弾丸の一つを手の平で転がしていた。

そして……ふと、後ろから人が歩く音と共に、車輪が床を擦る音がする。

この音は……

「ハアァィ 久しぶりのご対面」

俺が後ろを振り返ると、そこには彩華が立っていた。  
そして、その前には車椅子が一つ……  
座っけていても麻依子ぐらいある長身に黒いワンピースを纏まとい、そこ  
から見える肌はまるで陶磁のような白。  
長すぎる漆黒の黒髪は、車椅子に座ってる状態で地面スレスレまで  
ある。  
そして、無感情な顔の無機質な黒い瞳に見つめられると、すべてを  
見透かされてるような錯覚に陥る。

「……久しぶり……シン……」  
「……ん……ああ、久しぶりだな……小夜サヨ」

その人は俺と似た不幸を背負った女性……  
片翼を失い、一度は飛ぶことを諦めた天使がいた。

SUICIDE 9 歩む少女と降臨する神の娘

人は、自分と違ったものを拒絶する愚かな生きものである。

二年ぶりぐらいだったか？  
この車椅子も、この瞳も…

俺は揺らぎもしない小夜の瞳に目線を捕われていた。

この女性：笠井<sup>かさい</sup> 小夜<sup>さよ</sup>は、彩華が保護していた事故難民の一人だ。

彩華はチームだけじゃなく、事故や事件で家族を失った子供数十人を孤児院を作って保護している。

その中でも、小夜は家族でドライブ中に飲酒運転の暴走車に追突されて両親を失い、さらに彼女自身も後遺症で下半身マヒで歩けなくなった。

そして彼女は精神的にも傷ついて、俺が会った（彩華に強制的に孤児院へ連れてかれた）時には完全に他人を拒絶していた。

時々会ってる「毎週一回誰かが孤児院に行くシステム。俺は毎週強制」うちに、彩華と麻依子「なぜかついてきた」、俺の三人には自分から話し掛けてくるようになった。

彩華と麻依子は鬱陶<sup>うつとう</sup>しいほど話し掛けてたから分かるけど、俺はなにか特別なことをした記憶はない。

そして二年前、下半身マヒを直せる医者を見つけ、その医者にいるアメリカに旅立った

「どお？ ビックリしたでしょお。それとも嬉しすぎて動けないのかしら？」

彩華の言う通り久しぶりに会ってビックリしたし、確かに嬉しい。

だけど…

「小夜、なんでそんな姿でこんな所にいんだ？」  
「……………」

俺の質問に、小夜は少し視線をそらす。

「小夜は手術受けて成功したんだけどお、リハビリが上手く行かない…」

「彩華、黙ってる。これは小夜と俺の問題だ」  
「へル…」

彩華の言うことより、今は目の前の小夜が問題だ。

「小夜、約束はどうなった」

「…約束…守れなかった…」

「だったらここから消える」

小夜は、ついに完全にうつむいてしまった。

厳しいと思うが約束は約束だ。

…小夜と会ったことで思い出した、俺と小夜が交わした約束。

小夜の約束は

『次に会う時はちゃんと歩けるようになる。歩けるまで目の前には現  
われないこと』

俺の約束は

『帰ってきたら、いうことを三つ聞く』

…あとで麻依子には約束対象偽称の罪で、ハイポーション+ヌー  
ダハハイポーションソーダ（強炭酸）のイッキ飲みの後、ゲップを  
せずに東京二十三区を言い切ってもらうとして、今は小夜の約束が  
守られてないのが問題だ。

未だうつむいたまま動かない小夜。  
その小夜を心配そうに見る彩華。

しょうがない…

「おまえが消えないなら俺が消える」

俺は二人に背を向けて、首領の部屋風理事長室の出口に歩く。

小夜：すまな

「小夜！？ 危ない！」

彩華の切迫した声に反応して、後ろを振り返る。

少し離れた所で、俺よりちょっと身長の高く、すらりと細い小夜がいた。

…俺が座ってる人間の身長なんて分かるわけない。

そう、小夜が立っていた。

「……………待つて…シン」

そして小夜はこっちに両手を伸ばして、体を震わせながら不安定な足で一步踏み出そうとする。

「……………あっ」

震える片足で重心が支えきれず、小夜の体は横に倒れ…

「…るわけねえよな、この状況でよ。てか、俺が倒さねえよ」  
「あら、格好いいこと言うわねえ。小夜が羨ましいわん」

倒れこみそうになった小夜を正面を俺が、後ろから彩華が支えていた。

「……………シン…捕まえた」  
そのままの状況で、小夜は覆い被さるように、俺の背中に手を伸ばしてきた。

「まったく呑気だな。俺はハイジでお前はクララか？」

「そうよ小夜。いきなり立ち上がるなんてビックリするじゃないの  
お」

俺は、彩華と二人でため息を吐きながら、友人が戻ってきたことに  
内心本気で喜んでいた。

「でも……私……ちゃんと歩けてない……約束守れてない……」

小夜が今頃なことを言う。

顔は真横にあつて見えないけど、声が悲しげだ。

……つたく、無駄に完璧主義者が。

「俺は小夜が歩いてるようにしか見えなかったけど？」

俺と彩華が支えた時に、不安定に踏み出した一歩はしっかりと地面  
についた。

それで十分だ。

「そうよお。小夜が歩いたから、ヘルが捕まったのよ」

彩華はいつものまにか支えることをやめて、車椅子を小夜の座りやす  
いように持ってきていた。

「……シン……サイ……ありがとう」

「気にしないわよ。ねっヘル？」

「ああ、礼を言われる筋合いはないな。それより早く座れ」

小夜は俺の言った通りに、そのまま車椅子に座る。

ん？ そのまま…

「…小夜？ この体勢はちよいとつらいんだけど？」  
「あらあら 小夜も大胆ねえ」

小夜が俺の背中に手を回したまま座ったせいで、倒れこみそうだった俺はギリギリで耐えて、厳しい角度の前屈み状態になっていた。そして今現在も、小夜が引き寄せる力と全力で戦ってる状況だ。

「ちよつと放してく…」  
「ヤだ」  
「早ッ!？」

昔から拒否の時だけ速答するのは変わらねえな。

「何で嫌なんだ？」  
「…二年間…ずっと待ってた………もう我慢出来ない……」

…そういえば毎週会ってた時、小夜がよく抱き締めることを求めましたっけね。

小夜曰く、俺は暖かいらしい。  
俺は小夜の方が確実に体温が高い気がする。  
拒否すればいいものを、その悲しそうな表情+俺も妙に落ち着くので、俺は毎回負けて抱き締められていた。  
これが、所かまわず両手を伸ばして求めてくるため、R ラグナロ

クのメンバー全員に知れ渡り、通称『ヘルの休息』『命名彩華』と呼ばれるようになった。

「ほらヘル。諦めて小夜にハグされちゃいなさい」  
た、確かに…この姿勢はちょっとキツイ。

「……私と…ダメ？」

ああ、すんごい切なそうに言うなよ…

「…分かったからそんなこと言うな。その代わりに、ちょっと姿勢を変えてくれるか？」

俺がそう言うと、小夜は簡単に手を離してくれた。

そして、小夜の膝に車椅子にセットされたクッションを乗せ、その上に俺が座る形をとる。

座高が低めの俺と、身長の高めな小夜だと、この体勢でちょうど顔の位置が同じぐらいになる。

「…ふみゆ……」

そして、小夜が俺の右肩に顎を寄せながら、俺の体を後ろから抱き締める…

これが『ヘルの休息』と言われる状態だ。

ついでに、高校生二人が乗っても壊れないこの車椅子はT・Cの特  
別製で、見た目はただの車椅子でも衝撃に強く実は自動式だったり、  
様々な仕掛けがあったりなかったり。

…やっぱり、なんか安心するんだよな、これ。

「私もやるう〜」

「お前ツ!?!」

久しぶりに二人で和んでた所に、正面から俺に抱きつく形で突然介  
入してくる彩華。

「……サイ……邪魔しないで……」

「いいじゃん。小夜はこれからヘルの家でいくらでも出来るんだか  
らあ」

「はあ?」

いくら帰って来たからって、それはムリだろ。  
俺の家に住むわけでもあるま……

「頼みごとの一つは、これから小夜をへルの家に居候させてあげてねん」

「ちよつと待てえええええい!!! 何で小夜が我が家に居候する必要があるだよ!!!」

普通におかしいだろが!!

「だってえ、孤児院で保護するのは義務教育期間までだし。だからといって、小夜に一人暮らしは難しいのよ。だから、小夜はこの高校に編入させて、私か麻依子ちゃんかへルの家に世話してもらうことにしたの」

そっぴゃ、小夜は俺や麻依子とタメだった…って、今の問題はそれ

じゃねえ！！

「何でその三人の中で俺の家なんだ！？ どうせ、小夜の意見も聞かずに勝手に決めただろ！」

そうじゃなきゃ、普通俺の家なんて選...

「...私決めた...私...シン...一緒がいい...」

...んでたんですね、ハイ。

ある意味嬉しいですけど、なに言ってるんですか？

「麻依子ちゃんの家は段差が多くて車椅子には適してないし、私の方は会社も本家も人の出入りが激しくて、人見知りな小夜には辛いと思うのお。それに対してヘルの家はバリアフリーだし、住んでるのもヘルだけだから一番小夜にあってるのよお」

た、確かに俺は二年前に金が余って家をリフォーム&全面バリアフリーにしたし、一人暮らしだ。

...だが、これとそれとは話が違う！

「いや、待て。戸野高に通うなら俺の家は少し遠いから、車椅子の通学にはむいていない。それに...」

「約束……一つ使う……シン、私……居候させる……」

それは死刑宣告ですか？

「ヘルは約束破る人間じゃないよねえ？」

彩華もプレッシャーを与えないでくれ。

くっ、こんな状況で健全な自殺願望者の俺に選択肢は……

「……わかった」

あるわけねえじゃねえかよ!!

俺の答えを聞いた彩華は、満足した顔で俺から離れてくれた。

「ありがとねヘル　生活費とか必要なものはこっちでカバーするから。…でも、今回小夜をあなたにお願いした一番の理由は小夜の心が一番分かるのがヘルなのよお」

「お前だつて分かるだろ？」

「私は喜怒哀楽のくらい。ヘルみたいに細かい感情までは分からないわよ」

確かに小夜は基本的に無表情だ。喜怒哀楽だつて、彩華とか心を開いた人にしか見せない。

だけど、小夜は普通の人間より純粹な感情を持っている。俺はそんな小夜の感情がなんとなく雰囲気に分かるのだ。

初めて会った時も、俺を恐がってたから

「恐がってんじゃねえ」

つて言ったら、小夜も含むそこにいた全員に驚かれた。

…まあ、それを聞いた彩華に毎週孤児院に連れてかれ、小夜の心のリハビリをしていたわけだ。

「リハビリが成功しなかったのは精神面メンタルが原因らしいのよ。だから、一番小夜の気持ちの変化が分かるヘルにリハビリとかをサポートしてほしいのよお」

…とか、ですか。

「学校でも理事長の権限で小夜を俺と同じのクラスにして、俺に世話しろってことだろ？」

「やっぱりヘルは物分かりがいいわあ　頼んだわよあ」

…この会話には裏がある。

俺の『世話』の言葉には『小夜がイジメられないように守る』って意味が含まれている。

小夜が閉鎖的になったのは、両親を失ったショックともう一つ、車椅子になったことで起こったイジメにあるのだ。

彩華は小夜が二度とそんなふうにならないように、俺に小夜を守らせる気だ。

「…任せろ。麻依子もいるし大丈夫だ」

俺も、歩けないだけでイジメを起こしたり、同調したりする野郎共は地球の糞カスで、消え失せたほうが世のためになると思う。

…守ってやろうじゃんか。

まあ、死ねるまで…いわゆる聖翠が集まるまでだけだな。

ふと、小夜の腕に少し力がこもる。

「……………シン……………ありがとう……………」

「そう思うんなら、ちゃんと歩けるように努力しろよ」

「やだ。……………けど……………シンが言うなら……………がんばる……………」

頑張ってくれよ。

俺が死ぬ前には、ちゃんと歩けるようにしてもらわないとな……………」

「これで二つ目のお願いは終了お。そのまま座ってていいから二つ目のお願い聞いてねえ」

さあて、次は三人揃っての仕事だっけな。

…補足になるけど、俺達三人がR ラグナロクに所属していたのは、戸野家の力で隠蔽いんぺいさせてもらっている。

彩華曰く『最初は目立たずに後でバラして、三人に学校を治める王になってもらうため』らしい。

そんな計算も虚しく、いつの間にか目立って『三大王』と呼ばれるようになっちまったけどな。

そんなこんなであんまり大きな行動はとれないんだけどな。

そんな俺達はなにを頼まれるのか…

「偽ラグナロクのグループを作ってる不屈き者がこの学校のあなた達の先輩にいるから、完膚無きまでに押しちゃってねえ」

「はあ？ 何でそんなこと俺達なんか頼むんだ？」

俺達がチームにいた時も、抵抗勢力や偽物が何度も出来ていた。でも、そんなの簡単に叩き潰してきたはずだ。

なのになぜだ？

「その勢力の中心人物三人がそれなりの力があって、さらにヘル達

の名前を勝手に語ってるのよお。生意気でしょお？」  
「…なるほど」

彩華は笑顔で言ってるけど、殺気が目視できそうなほど出てる。  
…相当怒ってんなコリヤ。

「でも、彩華はなんでそいつらを伸さないんだ？」

「これでも理事長として、自分の学校の生徒に厳しい教育は出来ないのよお」

厳しい教育＝暴力は振るえないわけか…  
経営者も大変だな。

「だからあ、一時的にヘル達三人に特殊戸野治安保護権利：『黙示録』を返すことにするわあ。これでヘル達の存在が学校中に広まるし、敵も徹底的にやれるわよお」  
「…マジかよ」

高校生活半年にして、もうバラすのかよ。  
マジで消す気じゃねえの？

黙示録…それはこの地域を治める戸野家の権限を借りて、不良や犯罪者を武力などで取り締まることが出来る絶対的権限のことだ。そして、黙示録を持っている者の指示があれば、黙示録を持ってな

くても同じ権限が与えられる。

黙示録を持っていたのは、R ラグナロクのリーダーの彩華と、亮佑、俺、洋の四人だけだった。

あまりに大人数おおにんずうが持つと、権力を悪用する人間が出て来るからだ。

そして、チーム脱退と共に俺達の黙示録は破棄された。

その権力が増えすぎることを防ぐため、黙示録はその四つ以降は作られてないらしい。

ついでに黙示録の形は四つそれぞれだが、必ず逆五芒星が描かれている。

今も権限を持つ彩華の黙示録は、いつも着けている眼帯である。

そして俺達は彩華の指示で動いてて、俺達の黙示録はあまり使われることがなかったため、ごく少数しかそれを見た人はいない

…しかし、彩華の『ヤれる』が『殺れる』に聞こえるのは俺の気のせいだろうか？

「どうせ、亮佑は『持っていれば場所を気にせず不良と喧嘩できる』。洋には『持っていれば女の子にモテる』…そんなふうに釣ったんだろ？」

「当たり前…で、ヘルはどうする？」

どうするって？

…愚問だな。

「わざわざ黙示録を返すつてことは、『パチモン偽物に本家を見せつけて叩き潰してやれ』つてことだろ？」

ただ叩き潰すだけなら、彩華の指示だけで十分なのだ。

「数と強さは？」

「数はざつと八十、強さはチンピラ以上ヤクザ未満つてところよお」  
「つて、ことは刀ドスと銃チャカは使わないつてことか。

…なら、返事は一つ。

「なら、二人で十分だろ。俺は面倒だからパス」

「…やっぱりねえ。ヘルならそう言っつて思ったわ」

さすが、俺の上に立ってた女だ。

予想は出来てたってわけね。

「頼みの一つは了承したんだ。もう一つぐらいは俺にも拒否権はあるはずだ」

「そうねえ、確かに無理矢理言っつこと聞かせるのは気が引けるわあ」  
当たり前だ。

言っつことを全部聞けっつて言われても、ハイハイと聞くやつはいない。

「でもねえ。その集団が私の妹…この学校の生徒会長が狙われてるのよあ」

生徒会長……どんなやつだっけ。

てか、生徒会長と理事長が姉妹か…この学校の権力独占現場が見え

た気がする。

「麗花は真面目すぎるからあ、その集団の反感を買っちゃったのよ。だから、倒すついでにボディガードも頼もつと…」

「助けてください!!!」

なんだ？ この世界の中心で愛を叫びたくなる音声は。

「…ちよつと遅かったみたいね」

彩華の目が真剣なものに変わる。

その目は俺達三人以外が直視すると、恐怖のあまり気を失うと言う恐怖の魔眼だ。

「ん？ 恐がらなくて大丈夫だ。…彩華、小夜もいるんだから冷静になれ」

彩華の殺気と同時に、小夜の腕に力が入ってた。  
その体が震えてる時点で、完全に恐がってるのが分かる。

「あらあ、ごめんねえ小夜」

「……大丈夫……」

彩華の殺気は消えたけど、まだ震えてんぞ。

「小夜、もう大丈夫だ」

右手を後ろにまわして、右肩に乗った小夜の頭をクシャッと撫でる。

「……フニヤツ……」

小夜は猫のような返事をして、その震えと腕の力は抜けた。

「で、なにが遅かったんだ」

小夜が落ち着いた時点で、俺は話を戻す（撫でるのは継続）ことにした。

「さっきのは、麗花に渡しておいたGPSつき警報装置で、襲われたりしたら押すように言っておいたのよお」

「まだ授業中だし、襲われることはないだろ？」

「相手はヤクザ以下でもチンピラ以上なのよ。あなたほどじゃない

けど授業くらいサボるわよお?」

そりゃそうだな。

「ヘルプミィ〜! 助けテクダサイ!」

…なんだ、この異様にむかつく音声は。

「…どうやら、麻依子ちゃんも襲われたみたいね」

「なっ!?! あいつにもその警報装置を持たせてたのか!」

「何個かあったのを欲しいって言ったから、一つあげたのよお」

そういえば、ドアの前で麻依子に会った時、生徒会長に呼ばれたって言ってたな。

まさか…

「二人共一緒に学校の外に移動中よ。…きっと同時に誘拐されたわね」

いつの間にか、彩華の手には携帯のようなものがあって、その画面では赤い点二つが地図上を移動していた。

…まったく世話がかかるやつだ。

「その携帯みたいなものは、亮佑達も持ってるのか？」  
「もちろん、これはヘル用だよお」

差し出された無言で機械を受け取る。

「……………シン……………行くの?……………」  
「ああ、麻依子の所に行かなきゃならねえからな」  
「……………マイ……………助けてあげて……………」  
「了解した」

小夜も潔く手を離してくれた。

俺は立ち上がって、彩華の目の前に立つ。

「俺の黙示録はどうするんだ」  
「あそこにサイズ合わせした新品を作つといたわよお。ここですけてくう?」

彩華が指差した方向には、桐の箱が三つ重なっていた。  
準備がいいなまったく……………

「そうしておく。あと、小夜を俺の家に送つといてくれ」  
「わかったわあ。黙示録の方のデザインは現役の頃と一緒だから、

きつと気に入るわよお。そ・れ・と…」

彩華はゆっくりと俺の耳に顔を近づける。

「…小夜の体を思って自分が部屋から出ようとした時、スゴく格好よかったわよ」

…まったく、なんでもお見通しだな。

ため息を一つ吐いた後、俺は彩華の前にはひざまずく。

これが俺が…ヘルとして復活するための儀式。

「我等が父、悪戯<sup>ロキ</sup>最高神よ。貴方の娘に正悪を構うことなく滅し、人の心を喰らう狂気の象徴…地獄の黙示録を与えよ」

「ハアーイ 思う存分討ち滅ぼしてきなさい、ヘル」

ここに、R ラグナロクの『三大神』と呼ばれた三人の中で最も狂いし神、死を司る神が復活の刻<sup>とき</sup>を迎えた。

SUICIDE10〜生ける右、墮ちし左、狂いし心〜（前書き）

この小説の中に出てくる『ロキ』『フェンリル』『ヘル』『ヨルムンガンド』は北欧神話に出てくる名前です。詳しく知りたい方は自分で調べてください。

SUICIDE10〜生ける右、墮ちし左、狂いし心〜

……三ツノ魔神八此処ニ降臨ス

「あちゃー。いきなりビックリしたなあ」  
「……ああ」

アタシと生徒会長は、いきなり部屋に入ってきたヤンキー数人に捕まって…いわゆる誘拐ってことを体験してします。

アタシは（たぶん会長も）目隠し＋手足を縛られてるため、今どこにいるかも分からない。

だけど、二人だけで閉じ込められてるのは分かる。

「それにしても、アタシに目隠しプレイとか放置プレイはむいてないみたいですよ」

「なっ、なぜそんなにふざけたことを言ってる！」

「会長、アタシはふざけてないですよ？ アタシは受け身より、攻めの方があつてるような気がするんですよ」

どンドン攻めてかないと、あの人には追いつけないからね。

「…誘拐されたのにずいぶんと冷静だな」

「会長も十分落ち着いてるじゃないですか」

「私はこれでも恐がっている。話し方のせいだ」

確かに、会長のしゃべり方は男っぽいけど堅苦しい所があるからね。

「アタシは理事長の助けが来るのを待ってますから」

「警報装置のことが…理事長の選んだ助っ人など信じられないな」

会長は理事長…彩華さんが嫌いみたい。

アタシは結構好きだけどな。

「会長が理事長を信じられなくても、助けに来てくれる人たちはきつとアタシの知り合いですから、大丈夫ですよ」

「しかしだな……」

「侵入者だ！ 早く来てグベツ！？」

アタシの前の方から、壁を挟んで騒ぎが聞こえる。

「俺がここを押さえるから、お前は早く二人を助ける」

「…君はただ暴れたいだけだろ？ ま、僕はそっちの方が顔が傷つかないからいいけどね」

そんな会話の後、ドアが開かれる音がした。

「麻依子ちゃんに…こっちは生徒会長さんだね？ …綺麗だ。今度僕と秋の夜長を一緒にしませんか？」

…助けるより先にナンパなんて、呑気なやつね。

「洋。早くその口閉じてさっさと助けなさいよ」

「まったく、麻依子ちゃんは相変わらず手厳しいなあ」

そう言いながらアタシの目隠しを外した洋は、苦笑いしながら小さなナイフで手足の縄も切ってくれた。

よく見ると、ここはどこかの学校の体育館らしく、アタシ達がいたのは体育館の準備倉庫だったみたい。

「ここは土湖トコ高校の旧体育館の中で、フェル兄と一緒に来た。ここにいるのは四十人ぐらいだからあと五分ぐらいで鎮圧できるよ」

フェルか…

「じゃあ、洋のこともヨルって呼んだほうがいいかな？」

「いや、フェル兄は分からないけど、僕は女の子には普通に呼んでほしいかな」

「…この女たらし」

アタシは洋に呆れながら立ち上がって、おもいきり伸びをする。うっ、肩凝ったあ。

「君は…大西君か？」

洋に目隠しとかを外してもらった会長さんは、洋のことを知ってたみたい。

「そんなに僕は有名だったかな。ファンクラブでも入ってるんですか？」

「フアンクラブには入ってないが、生徒会に一年生の中で『三大王』  
と言われる三人の一人、先生までナンパする問題生徒として何度か  
報告が来ているよ」

「…マジっすか」

洋、結構落ち込んだじゃってよ。

まあ、自業自得だからしょうがないよね。

「ほら洋、助けに来たんなら早くココを出ましょ」

「……ああ、そうしよう」

テンションが急落した洋と、ちよとキョドってる会長を連れ、アタ  
シは埃っぽい部屋を出ることにした。

谷津さんに連れられて、狭い準備倉庫を出た私達の目の前で、ありえないことが起こっていた。

「くっ、くゾブッ!？」

「このやるヴっ!！」

「ナメンじゃブエッ!？」

日が暮れ始めたらしく、赤くなった空間に響く断末魔と共に、吹き飛んでいく物体。

「まるで人間大砲の砲台ね」

「フェル兄も、久しぶりだからって人を吹き飛ばさなくてもいいのに」

そう、タネも仕掛けもなさそうな人の体が、一発殴られるだけで空中を飛んでいくのだ。

その拳を振るっているのは、制服のズボンに黒いタンクトップ、そして手に何かはめている…

「オラオラオラオラ！！ もっと骨のあるヤツはいねえのかあ！！」

『三大王』の中で暴力ぎたをよく起こすが、理事長：姉の一言で取り締められない問題生徒の一人…櫻井亮佑だった。

「なぜ！ なぜこんな所に三大王が二人もいるんだ！？」

「二人が助っ人だからに決まってるじゃないですか」

目の前にいる大西。

戸野高と土湖高の問題生徒数十人を相手に暴れる櫻井。

この二人が理事長の助っ人…

「だから言つて、ここまでの暴力行為は警察も黙っていない！ わかってるのか！？」

私が叫ぶと二人は少し顔を見合わせてから、私にほんの少しの笑みを向けてきた。

そして、大西の方が服の中にしまわれていた銀色のネックレスを取り出した。

そのネックレスはシンプルで、飾りはちょっと大きい逆になった星がついているだけ…

「ぶつちやけますけど、僕はそのR ラグナロクの中で『偽善神』、  
今暴れてるあの人は『破壊神』<sup>フェンリル</sup>って呼ばれてたんですよ。まっ、過  
去の話だけだね」

…この周辺に住んでいれば大体の人が知っている。

R ラグナロクの中でも中心となった正体不明の三名…

前に姉が言っていた。

『あの三人がいなかったから、今頃チームは潰れてた』

「ここら辺の人なら黙示録の意味は知ってるでしょ？ このネック

レスは僕専用の黙示録… 『虚実の黙示録』 なんだ」

…だからか。

黙示録は暴力さえ合法にしてしまう権力。

「おいヨルー！ こいつが俺の偽物だぜー！」

いきなり暴れてた櫻井が大声を上げ、私達はその方を振り向く。

「なんだその毛深いムキムキマツチヨ君は」

「まるでゴリラだね」

「なっ…」

私は言葉を失った。

彼が偽物と言った男は谷津さんの言う通り、ゴリラが制服を着たような巨体が気絶している… だけどそんなことは驚くほどじゃない。

問題は、その超重量級のゴリラ男を櫻井が片手で持ち上げていたことだ。

「ビックリしたでしょ？ フェル兄はチーム最強の名を持ってた力

持ちだからね」

「確か、片手で百八十Kgは持ち上げてたよ」

…ありえない。

あんな男がいること自体ありえない。

「ヨル。お前の偽物もあそこにいるぜ」

櫻井は、ゴリラ男を持ってない片手で指を差す。  
ついついつられて私はその指を差された人を見る。

「さっきから言ってる偽物というのはなんだ？」

私は一番話し掛けやすい谷津さんに、ちよつとした質問することに  
した。

「ん〜。勝手に亮佑とかの名前を使ってる人がいるの」

「なんとなく分かつ…!？」

瞬間的に、近くにいた大西から殺気が発される。

…しかし、幻覚を見る程ではない。

「……麻依子、あいつの顔潰していい？」

「自由ごっこぞ」

その瞬間、大西の右腕がブレる。  
ヒュンッ、と風を斬る音が聞こえたと思ったら、十メートル以上先の男の顔面に何かがぶつかって、後ろに吹き飛ばされていた。

「僕の偽物を語るなら、もう少しイケ面になってからにしろ」  
「さすが洋、チーム最高といわれたプライドの高さ（自分の格好よさだけ）ね」

大西の右腕のブレがなくなった時、その手には異常に長い鞭が握られていた。

「あっ、ビックリしたと思うけどさっきのは銃機じゃなくて、僕の鞭が伸びたからですよ」

それは分かったが、あんな遠くの人の顔を一発で…人間業じゃない。

そんな二人と平然と話す谷津さん…

「谷津さん、なんであなたはこんな人を見て驚かないんだ？」

まさか…彼女も二人と一緒になのか？

「生徒会長が『こんな人』とか言っただけで偏見はダメでしょ？ ……アタシはR ラグナロクの医療班の一人なの。だから、三人のこともよく知ってるの」

まさか、姉はこんな化け物のような人がいる集団に、こんな小さな女子高校生を入れているのか！？

「なんで、あなたみたいな人が治安のために暴力を振るう危険な集団などに入っているんだ！？」

「危険な集団か…酷い言われようだけど、僕達のやり方は確かにそうだね」

大西はそう言いながら、物悲しそうな顔をしていた。

「確かに、私達のチームは暴力を振るうって意味では、ここで伸びてるヤンキー達と同じかもしれない」

しかし、谷津さんの目は私を完全に見据えていた。

「…でもね会長、どんなに傷ついても逃げない。どんなに苦しんでも前に進む。自分を押し殺して、犠牲にして誰かを救う。そしてそのためなら平気なふりして全身を悪に染める…そんな無茶する人がいるから、アタシはその人を少しでも助けたいからチームに入った

の。…会長がその人の生き方を否定するなら、アタシは会長を許さない」

この瞳の強さ…子供のように純粹なのに、芯が通った折れることを知らない決意。

この瞳は彼…須千家のプレッシャーに近いものを感じる。

「…俺達がウダウダやってるうちに、増援が来たらしいぜ」

あまりに強い瞳に見据えられたため、いつの間にかゴリラ男を持つてる櫻井が後ろにいたことに気づけなかった。

「…本当だね。つたく、運が悪いね」

周りを見ると、体育館の全ての出入口を屈強な男たちが塞いでいた。

「お前等、俺の邪魔してんじゃねえよ」

その一ヶ所から現れたのは…

「多田！？ なにをしてるんだ！！」

そこにいたのは間違えなくあの時の多田だ。

右胸にギブス、なぜか左足と左肩に金属のパットをしている。

「何してるって？ ……黙示録を使って俺に恥をかかせたお前を強姦するためだよ」

「なっ…！！」

そう言った多田は、左足のパットをこちらに見せる。

そこには確かに逆さまになった五芒星が膝の部分に彫られていた。

「ずいぶんふざけた権力の横暴ね」

「権力は使うためにあるんだ。女は黙<sup>アマ</sup>ってる」

多田は谷津さんを睨むが、谷津さんはまったく動じてない。

「…ヘルスの偽物が随分と語るぜ」

「ヘル姉はお前みたいにカスじゃないな」

櫻井と大西の二人が呆れた口調で話す。

「俺が偽物の証拠はない。本当はお前達が偽物かもしれないじゃないか」

多田の言ってることは確かに正論だ。

こんな逆さまの五芒星ぐらい簡単に作れる…

「偽物は…死ぬべきだ」

多田の言葉と同時に、出口を塞ぐ全員がバットやナイフを取り出す。

例え二人が超人的でも、この数で襲われたら…

「なら、確かめてみようよ」

谷津さんの言葉と同時に、私の背中に悪寒が走る。

「『こつち』の増援が来たからな。…黙示録の所持者をナメると痛い目見るぜ」

「『君達も』運が悪いね。麻依子を誘拐しなきゃ、僕とフェル兄だけで済んだのにね」

悪寒が全身に回り、体の芯まで冷えきって固まって…まるで死体になつた気分になる。

この感じ…まさか…!

「姉は血を吐く、妹は火吐く、可愛いトミノは宝玉たまを吐く」…」

多田と逆方向の出入口を塞いでいたの人達が、一気に吹き飛ばされる。

「鞭で叩くはトミノの姉か、鞭の朱総しゅそうが気に掛かる」…」

そこから現れたの白髪の少年は、不気味な歌を歌いながらゆっくりとこちらに歩き出す。

左足を踏み出すたびに、金属音が館内に響き渡る。

「…なっ!?!」

多田が驚きの声を上げる。

私は声を上げることさえ出来ない。

いきなり現れた少年…須千家は左腕と左足が白い包帯によって巻かれていて、左半身が大怪我をしたかのようになっていた。

「春が来て候林に谿に暗い地獄谷七曲り〜  
…」

須千家が一步近づくだけで、私の感覚全てが危険信号を発する。  
彼は…危険すぎる。

「啼けば反響が地獄にひびき、狐牡丹の花が咲く〜  
…」

…怖い。

彼の声は耳じゃなく恐怖心に直接歌い掛けてくるようで、足の震えが止めたくても止まらない。

「赤い留針だてにはささぬ、可愛いトミノを目印に…」

歌が終わった時、須千家は私達の目の前にいた。  
押し潰されそうな威圧感を放っている彼は、私の隣にいた谷津さんに拳を振りかざす。

「やめっ………?」

彼の手は谷津さんの額を、コツンツと軽く小突いただけだった。

「ったく、面倒事に巻き込まれてんじゃねえよ」

「えへへ…てか、その歌『トミノの地獄』でしょ？ 不気味だからやめときなよ」

「ウツセエ、呪い殺されれば自殺じゃなくても死ねるだろ。それよりも小夜が帰ってきた。とっとと帰って会いに行くぞ」

「マジで！？ 明日にでもお帰りパーティーしなきゃね」

……？

二人の会話と同時に、須千家から来ていた殺気が消えた。  
なぜ…

「おいヘル、お前のために半分以上残してやったぜ。…何人やる？」

「おいフェル、そのゴリラは動物園に返しとけよ…悪いがおこぼれはないな」

「ヘル姉、やっぱり怒ってるね。あ、あのパツ金男がヘル姉の偽物ね」

「ヨル、ロキに言われたからって『姉』をつけるなって言ってんだろ。俺は女じゃねえ」

櫻井、大西の二人と他愛無い会話をする須千家の雰囲気は、普通の高校生といたって変わらない。  
屋上の件とさっきの彼とは、同一人物には見えない。

「テンメエ！！ よくも俺に恥かかせやがったなああああー！」  
叫びが聞こえたと思ったら、いつの間にか須千家の後ろに多田がいて、ナイフを手に襲い掛かろうとしていた。

「あ、危なッ！！！！」

「なっ！」

私の目の前でありえないことが起きた。  
普通人間の腕が、刃物を弾くわけがない。

でも、私の目の前で多田の振り下ろしたナイフは、振り返った須千家の左腕に止められているのだ。

「なんでナイフで俺が斬れないのか知りたいだろ？」

「クブツ！？」

驚きの表情で動きの止まった多田は、須千家の蹴りに吹き飛ばされる。

「麻依子を散歩させてくれたお礼に見せてやるよ。『地獄の黙示録』を…」

そう言って彼は上着を脱ぎ、左手足に巻かれた包帯を解い…

「なっ…！？」

…彼の露出した左腕は、白い髪と相対する漆黒の金属光沢を放ち、その肩には存在自体が禍々（まがまが）しい髑體トクロ、肘ひじには鮮血のよ  
うな深紅の十字架クロスが施されている。

はだけた胴体は、まるで左側に黒い生命維持装置が埋め込まれてる  
ようで、機械と人体が一体化していた。

左足の膝の髑體には、多田のように逆五芒星が刻まれていた。そし  
て、その星が刻まれた髑體は不気味に笑っている。

その姿はまるで…

「半分生きて半分死んでるみたいでしょ？」

須千家の異様な姿に視線を奪われていた私に、谷津さんが話し掛け  
てきた。

「『三大神』の中で、一番異様で一番狂気に満ちた…『死神ヘル』。真  
慈はそう呼ばれてたわ」

「その金髪野郎は、世間で流れてる『ヘルは金属を左手足に纏っ  
てる』って言う噂を知ってみたいけど、実際のヘルは『右手足が  
金属の義手と義足』なんだぜ」

「あの手足はハガ○ンみたいに繋がってるから、自由自在に動かせるけど…フェル兄、僕も金髪だから。あんな不細工を僕と一緒に表現にするはやめてほしいな」

私以外の三人が、須千家を見ながら独り言のように言葉を漏らす。

「R ラグナロクで最強の怪力と言われた『破壊神』<sup>フェンリル</sup>。  
最高のプライドを持つと言われた『偽善神』<sup>ヨルムンガンダ</sup>。  
…そして未だ類似する者が現れず、最狂と呼ばれ続ける『死神』<sup>ヘル</sup>。  
…もう、決着がつくわね」

谷津さんはそう言うが、三対四十は分が悪すぎ…

「うわあああああああああああ！…！」

いきなり、多田の悲鳴が館内に響き渡る。

その悲鳴が聞こえたほうを見ると、須千家と多田が向き合って…機械じゃない右腹部にナイフで刺されていた。

「ナイフを持つんなら、一回ぐらい人刺したいだろ？」

正確にはナイフを持った多田の手を、須千家は自分の腹部に引き寄せていた。

多田は、赤く染まり始めたナイフから手を放して須千家から必死の形相で逃げ出した。

「お、お前ゼツテー狂ってる！」

…確かに、普通の神経じゃありえない。

「一回刺したぐらいじゃダメだろ？ … 何度も突き刺して」

発狂した多田は須千家に馬乗りになってその腹部からナイフを強引に抜き取り、狂ったように何度も彼の体に突き立てる。

「ミンチになるほど斬りつけて」

まるで何かに取りつかれたように血塗れになりながら須千家を斬りつけ、その腹部に鮮血と生挽肉のスープを作り出す。

「俺の臓物ぶちまける」

そのスープの中に素手を突っ込み、内臓器を引き千切って取出し、それを口に…

「か……よう……しつか……会長！」  
「……っ！！！」

いきなり呼ばれた私は、いつの間にか谷津さんに手を握られていた。全身が急激に熱くなる。呼吸が乱れ、頭の先から足の爪先までのあらゆる汗腺から脂汗が流れだす。

そっだ……ッ!?

「須千家君が……生きている?」

さっきまで多田に殺されて、弄もてめそばれていた須千家は、ナイフを片手に倒れている多田の目の前に平然と立っていた。

「会長が見ていたのは、真慈の狂気が見せた幻覚です。アタシは見たことないから、どんなものを見るかわからないけど、長時間見ると心が壊れますよ」

……た、確かに、さっき見たものを見続けたら、廃人になりかねない。

よく見ると、私達四人と須千家以外の全員が倒れこみ、悶え苦しんでいる。

「あと、麻依子に触れてるとなぜかヘル姉の幻覚は見ないから、そのままのままでいたほうがいい。ついでに僕達は馴れてるから大丈夫なんですよ」

大西が丁寧に説明してくれるが、『無事でいたいなら離れるな』ということだろう。

…ここは、従わないと私の精神がもたない。

私は両手で谷津さんの手を握りながら、須千家の方を見る。

………笑ってる？

いや、須千家の横顔は完全に笑ってる。

その笑いはまさに狂気の塊。

幻覚を見ないのが、谷津さんに触っているからなのが感覚で分かる。

私の感覚すべてが、この空間に拒否反応を起こしている。  
今感じる感覚は恐怖なんかじゃない。

… 『死』 そのものだ。

「…さあ、お前等に俺を殺させてやるよ。殺戮の悦たのしみびを存分に味わってもらおうじゃないか」

その声と同時に日が落ちた時、この空間に闇と死の恐怖が満ち、その場に意識がある人間はたった五人になっていた。

S U I C I D E 1 1 傷ついた少女の過去・両手を掲げる死神

過去は人の心を輝かせる太陽

しかし、過去は人の心を喰らう魔物

「ただいまー」

「イヤ、ここは俺の家。お前はお邪魔するほうだ」

「そんな細かいこと気にしない気にしない」

∴俺と麻依子は、無事土湖高から俺の家に帰ってきた。

まあ、トラブルはあったけど、絡んできた酔っぱらいのオッサンを

手刀で気絶させたくらいだ。

その後、麻依子を誘拐した奴らは後から来たR ラグナロクの部隊によって警察に突き出され、その中の戸野高生は退学処分処さららしい。

そして、亮佑は手に持っていたゴリラを動物園に、洋は出会いを求めて夜の街に繰り出していった。

……そういや、生徒会長はいつの間にかいなくなっていた。  
……どんな顔がよく覚えてないけど、どっかで見た気がするんだよ  
な

「そういや小夜は……」

「真慈、こんな所に置き手紙があるよ？」

そう言って、麻依子がリビングのカウンターキッチンから持ってきた一枚の紙。  
そこには……

〃  
〃  
〃

ご苦労さま

ヘルがあまりに遅いから、小夜をあなたの部屋のベッドに寝かせておいたわ。

無防備だからって襲っちゃダメよ？

小夜の荷物は明日届いて、学校への編入はヘルの謹慎明けの日にしてあるからよろしくねん。

あと、小夜の歓迎パーティーには私も呼んでね

愛・し・の・彩・華より

〃  
〃  
〃

俺は最後の一行以外を記憶し、キッチンに置いてあるコーヒードリップ専用バーナーで、その紙を焼却処分した。

「小夜、真慈の部屋で寝てるんだ……いいなあ」

「よくねえ。……今日はソファーに寝るしかねえな」

なぜ小夜が二階の俺の部屋に行けたかというと、全面バリアフリーな我が家は階段にもリフトがついているため、車椅子でどの階にも移動可能だからだ。

その他ほとんどのことが車椅子でも可能だ。

小夜が自由に動ける…だから、彩華が俺に小夜を頼んだとも言える。

「まあいつか。それより真慈、その傷見せて」

「バレたか。失血死出来ると思っただが」

「そんなことさせないよ。ホラ、早くソファに寝て」

こういう時の麻依子を止めるのは不可能に近い（止めようとする  
鉄拳で意識を刈り取られる）ので、俺は潔くソファに仰向けにな  
る。

麻依子はそのすぐ横に座り、どこから出したかわからない手術道具  
各種を広げる。

「……まったく、失血死は言いすぎだけど、アタシがいなかったら  
病院行きだよ」

「それだけは勘弁、医者は苦手だ」

麻依子は、へたな医者よりまともな医療技術を持っている。

その技術は外科から内科まで様々な方面あり、風邪を引いた時も麻  
依子に薬を調合してもらったっけな。

「ウス。真慈帰ってたんだな」

目の前に浮いて現れた黒ヘル。

いつの間にあの壊れたマリオネット状態から脱出しやがったんだ？

「上で寝てる無口少女と、それと一緒に来た隻眼美女が、DSな少年に拘束されたカワイソーな俺を助けてくれたんだ」

「黒ヘル、プライバシーの侵害で除霊すんぞ」

それにしても、彩華と小夜も幽霊が見えるのか……

いや、無口少女〃小夜は何となく幽霊とか見えそつな気がする。

……とりあえず、後で説明が大変だな。

「てか、そのケガどうしたんだ？」

「聞いてよ幽霊さん！ 真慈ったら自分で自分のお腹を刺したのよ

！」

「……」

麻依子の言葉に突然考え込む黒ヘル。  
なにかあったか？

「真慈、その時死ぬ気があったか？」

「……キレてたからあんま記憶ない」

「真慈はキレてると狂気の塊だからね」

酷い言い方だな。

まるで俺がラリッた人間みたいじゃないか。

「ラリッてるな…狂気が強すぎて自分を傷つける意志を術が感知できなかつたか」

何度も読心しやがって…どっかに除霊の札って売ってないのか？  
てか、術って多分『因果封滅』のことだよな。  
それに関わることした記憶は…

あつ俺、前回自分のこと刺してんじゃん。  
それも、弾かれずにしっかり刺さったし。

「……真慈、これからあんまりキレないように気をつける」

いわゆる、キレてると術がきかないから、死なれちゃ困るってこと  
だろ？

……今の若者はキレやすいからわかんねえな。

「まあ、努力はしとく」

この一週間に二度もキレたが、これでもいちようキレにくいほうだ。  
それに、今までも死ななかつたんだから、キレたからって死ねる可  
能性は少ないだろ。

「はいッ、治療完了！」

黒ヘルと話してる間に、麻依子の治療が終わったらしい。

麻依子の縫合の技術はまさに神レベルだ。

麻酔ナシで痛みを感じさせない針捌き<sup>はりきば</sup>。

縫合だけならブック・ジャックを超えらると思つ。

「ありがとうございます」

「うん、ホントに感謝してよね」

笑顔で子供っぽく胸を張る麻依子。

……なんかいつも違うな。

「麻依子、お前大丈夫か？」

「オーケーオーケー。問題ナッシング！」

「マジで平気か？」

「今の私は平常心の塊よ？」

……うん、いつもと違うし、おかしい。

それに、自分から子供っぽい仕草をしてやがる……

「……ったく、無理しやがって」

俺は麻依子の頭に右手をポンツと乗せる。

その瞬間、麻依子の体がビクツと過敏に反応して、すぐに俯く。

「只今、俺の胸は『命令を三回聞く』ことを条件に貸し出しを実施しております」

「三回って多くないッ!? それに命令って拒否権ナシじゃん!？」

人のこと言えねえじゃねえか。

小夜との約束を自分のことのように利用したくせに。

…って文句を今は飲み込んでおく。

「お前、無理してんのバレバレ。いつもは俺が『死ぬ』とか言っと真っ先に突っ掛かってくるのに、さっきから二回スルーしてる時点で余裕ないのが分かる」

俺はこれでもこいつの幼馴染みだ。

こいつの思考回路の半分以上は熟知している。

そして、過去の出来事も…

「……………やっぱり、真慈は誤魔化せないなあ」

頭の上にある俺の手を無視して、いきなり立ち上がる麻依子。その瞳は、流れるに満たない涙によって輝いていた。

「その胸、ちょっとだけ貸してくれる？」

「んじゃ、交渉成立ってことで」

そう許可した瞬間、麻依子は俺の胸に飛び込んでき…

「ブベシッ!？」

ふ、腹部にキ、傷があるのを、す、すっかり忘れ、てました…

痛てえ耐える痛てえ耐える痛てえ耐える痛てえ耐える痛てえ耐える

おおおおおお!!!

極上クツシヨン×2が胸部に当たってる気がするが、気にしてられねええええええええ!!!

「…シンジイ、ヒッグ…怖かった…よお」

「だ、大丈夫だ。もうこ、怖くねえからッ」

今は、痛みより契約内容を確認して返済プランを…じゃなくて、今は麻依子との約束（契約）に集中しなければ!

あっ、黒ヘルがこっち見て笑ってやがる。

……後で顔面千本ノック（金属バット）決定。

私は、彼等に助けられてすぐ、夜の学校へ向かった。

ずぼらな姉だ。きっと今日も家に帰らず理事長室に泊まるだろう。

…生徒会長としても、個人的にも聞かなきゃならないものがある。

「理事長！ 私だ！ 聞きたいことがある」

そう言つて、答えも聞かずに理事長室の扉を開ける。  
その中は姉独特の雰囲気を感じ、私以外の生徒や教員は姉が直接呼ばなければ入ることを許されない部屋……

「助かつたつて聞いてたけど、やっぱりきたわね。麗花」

その部屋の奥の机には、眼帯をつけたこの空間の主……この学校の理事長である、私の姉が笑顔で座っていた。

私が助かつて、ここに来ることは予想通りだったらしい。

「理事長……いや、姉さん。聞きたいことがある」

「いいわよん 今日機嫌がいいから分かることは全部答えるわあ」

なにがあつたか知らないが、答えてくれるなら都合がいい。

…すべてを聞き出す。

「なんでこの高校に普通生徒と混ぜつて、あんな危険な奴らがいるのだ？ 普通なら書類審査の時点で落ちてるは……」

「なあに？ ヘル達が普通試験で受からない成績だと思ってるの？」

…えっ!?

「相変わらず麗花は偏見癖があるんだからあ。確かに亮佑はバカだからスポーツ推薦だったけど合格してえ、洋は平均以上の成績で合格したわあ。そしてヘルは首席や次席に引けを取らない成績を持ってたけど、どの高校にも行かない気だったから、私が書類通さず入れちゃった」

「…あと、なぜ須前家だけ呼び方が違うのだ？ それに、あの姿は一体…」

「ヘルは私の一番のお気に入りだからよん」

「そうか…」

姉そとに気に入られたことだけは、私も須千家に同情しよう。

「……そしてヘルのあの姿はあ、ある事件で左半身に瀕死の傷を負った時、あの時はまだ実験段階だったT・Cの新技术…『生体機械シンクロ・キアーム』を使うことによってヘルは一命を取り留めたのお。いつもは人工人皮を使って隠してるからバレてないはずよん」

シンクロ・ギアアーム。

確か、実用化があまりに困難なためにT・Cの研究題材から外された技術…それが実際に使われた人がいるなんて…いや、私が聞きたいことはそんなことではない。

私は脱線し始めた話を打ち切り、

「なぜ姉さんは須千家をこの高校に入れた？ 姉さんの作った集団にいたからか？」

あの三人持っていた『黙示録』というものは、姉が集めた集団にあ  
たえた権力。  
それを持つていたということで、姉が三人を信頼していたことは分  
かる。

しかし、そんな私的な理由でこの学校に入れたのなら、それは生徒  
会長としても姉妹としても許してはおけない。

「ん〜。強いて言うなら、三人をバラバラにすると危険だから…か  
なあ？」

「いや、危険人物を三人も集めてる方が危険は増えるはずだ」

だつてそうだろう。

刃物は一本より三本持った方が危険だ。

爆弾は一個より三個あったほうが威力は高い。

姉の言っていることは矛盾しているとしたら考えられない。

「麗花は相変わらず甘いわねえ。人はものじゃないのよお」  
「…！」

私の考えが読まれてる！？

「あの子達は、お互いの行動を制御セーブしあつてるのよ。特に喧嘩馬鹿  
の亮佑は、頭の回る洋がいなきや今頃重傷者が何人も出てるわよ」

確かにあの怪力…下手をすれば死人が出るかもしれない。

「なら、あの二人だけで十分はず。なんであの危険な須千家を入れた!? あれは…危険すぎる」

あの時見た、彼の狂気に満ちた笑み…そして、自分自身を刺すというあり得ない狂行。

…いつか人を殺しかねない。

あの時の恐怖を思い出し、ついつい声を荒げてしまった私に、姉は呆れたような顔をする。

「麗花あ？ ヘルの狂気を見たなら分かるでしょお？」

「分かっている。彼が凶悪で危険すぎ……」

「ヘルは泣いてるのよ」

…は？

「な、なにを言ってるんだ姉さん!? あんな狂気に満ちた人間が泣いているわけないだろ!!!」

「…麗花の見た幻覚はヘルに『殺される』んじゃないくて、ヘルを『殺す』姿だったでしょお？」

確かに、私が見たのは多田が須千家を殺す姿…思い出すだけで吐き

気が襲い掛かってくる。

「ヘルはね、なにも出来ない自分に泣いてるの。無力な自分を恨んでるの。……ヘルはそんな自分を殺したい、その強い想いが狂気と混ざって、相手に『自分を殺す』幻覚を見せるのよ」

あれが無力？

身体能力なら屋上の件で証明されている。  
姉の話が本当なら成績だって申し分ない。  
充分すぎるほど大きな力を持って……

「ヘルは強いけど弱い。誰かが近くにいなきゃどこか遠くに行ってしまうわ……私はそれがイヤなのよ」

時々見せる真剣な姉の顔と声に、私はそれ以上の文句が思いつけなかった。

「……私と言えるのはここまでよお。あとは自分で考えなさい」

真剣だった姉の顔は一瞬で笑顔に戻っていた。

「それより麗花、麻依子ちゃん大丈夫だったあ？ きっと大泣きしてたでしょお？」

姉は話の方向性を変えてきた。

…これ以上は聞き出せないな。

私も質問したのだから仕方ない、姉の質問に答えよう。

「いや、泣いてなどいない。わりとしっかりしていたぞ？」

谷津さんは、私を引つ張つてくような勢いだったな。

私の答えを聞いた姉は、心底楽しそうな顔をしていた。

「あらあら、今頃ヘルは大変ねえ」

ん？

「なぜ須千家が関係するのだ？」

途切れた話の人物が再登場したことに、私は違和感を覚えた。

「ん」。これは麻依子ちゃんの過去について話した方が早いわねえ」

谷津さんの過去。

…私は須千家について、さらに一歩踏み込める気がした。

『黒ヘルに、俺の手足のことを話したら  
へえ〜』

の一言だったことにストレスを感じた須千家真慈です。そして今、麻依子は俺の目の前で泣き疲れて寝ている。そりゃそうだ。俺が首吊ってた時の比じゃないほど泣きじゃくってたからな。

「し、真慈がメイド服着てカバディを……ぐう……」

「ったく、夢の中で俺に変なことやらせんじゃねえよ」

そして俺は、泣き疲れて寝てた麻依子に乗られたままだった。だって、ちょっと動いただけで右腕を極めてくるんですよ？ まだ生きてる右腕を犠牲にしてまで立ち上がる必要もないので、しばらくこの状態でいるのだ。

「ったく、真慈は女泣かしだな」

「ウツセエ黒ヘル。麻依子が起きる前にその顔洗って待ってるや」

その顔をバットでミートパイにしてやる。

「……でも、一体何があったんだ？ 誘拐されたっていうのは眼帯ネエちゃんから聞いたけど、怖かったからって普通はそこまで泣かないだろ？」

…俺は黒ヘルの洞察力をナメていたようだ。

まあ、暇だし。冥土の土産に少し話してやるか。

「会話文だと大変だから、普通に回想していいぞ」  
「読心されるのはムカつくが、お前のために口動かすの面倒だから  
そうしよう」

『R ラグナロク』が発足してまもなく、あるヤクザによる誘拐事件が起こった。

要求は金じゃなくて、『戸野彩華の命』

発足当初からこんな事件が起こるほど、戸野家の力は悪党には邪魔だったらしい。

一般人を人質にしたならあり得ない要求。

しかし、その人質はチームのメンバーの馴染みの存在だった。

そう、その人質は俺の幼馴染み…谷津麻依子だった。

荒れていた俺を彼女は見捨てなかった。

世界を拒絶した俺から、彼女は一度たりとも逃げなかった。

そんな彼女を人質にして、確実に俺を狙った脅迫。

『友人を殺されたくなければ彩華を殺せ』ということだったのだろ  
う。

しかし、俺には通じなかった。

別に俺が彩華の忠実な部下だったからじゃない。

なんせ、麻依子が誘拐されたことを聞いた時、俺はすでにキレてたから。

その後を俺は覚えてないけど、そのヤクザの本拠地に単独で乗り込んで、百何十名全員を半殺し以上瀕死未満にしたらしい。

気がついた時には体中傷だらけ、短刀が四、五本体に刺さってたりして、左手足も途中でモゲてスクラップのようになってた。

…その後、支援に駆けつけた彩華にその姿を見られて、こっぴどく怒られたのは言うまでもない。

そして助けだした麻依子は、生まれたばかりの赤ん坊より泣いた。

麻依子は誘拐時に閉じ込められたショックで、狭い所を極端に怖がるようになった。

この時のことを時々夢に見るが、その度に巻き込んでしまった罪の意識を感じてしまう……

これが、R ラグナロクと死神<sup>ヘル</sup>の名を周囲に知らしめることになった出来事でもある

「今回も閉じ込められたみたいだからな。でも、他にも人がいたから無理して我慢してたんだろ」

俺の目の前で寝息をたてる小さな少女の頭を撫でる。

「……麻依子が事件の後、いきなりチームに医療班として来た時はビックリしたなあ」

来た瞬間に帰れと言ったけど、決めたことを簡単には諦めない人間だからな。

結局俺は、ケガするたびに麻依子に治療してもらっていた。

俺みたいなやつに、ここまでしてくれる麻依子を、俺は泣かせたくな……

「……あの野郎、人が話してる途中でいなくなりやがって」

麻依子の寝顔を見みながら話してるうちに、いつの間にか黒ヘルがいなくなっていた。

…ノック回数三倍にしてやる。

「さて、そろそろこいつを返してくるか…って、この姿じゃ外出れねえな」

俺は左手を天井に掲げる。

…この黒鋼の腕は基本的に外では見せないようにしている。

正直、哀れみや異様な目線はもう懲り懲りだ。

人皮を被ればいいんだけど、麻依子がちがみついているため、無理に等しい。

…考えんのも面倒だから、このまま寝るか。

眠りに就く前に、俺は両手を天井に掲げた。

黒い金属光沢を放つ左腕と、小夜には及ばないが十分白い右腕。

その腕の色は違つが握り締めた意志は一緒…

…今回も取り零しちゃったな。

「やっぱり、俺は死ななきゃならない…」

…けど、今は気にしないでおう。

「…麻依子、お疲れさま」

その一言だけをいって、俺は麻依子を包み込むように眠りに就いた。

## SUICIDE 12 〈好き嫌いの有効利用〉

平凡こそが一番の幸せと言うのは、変化を恐れる者の言い訳  
変化がない人生を生きられないと言うのは、平凡を耐えきれない者  
の戯言

謹慎の開けた俺は、教室のドアの前に立っていた。  
いや、俺がいきなり転校したわけじゃない。

「……………」  
「小夜、緊張すんな。ちゃんとうまくいくぞ」

今日は俺の謹慎明け&小夜の転校の日でもあるのだ。  
そして、俺は小夜のサポートとして一緒にドアの前にいる。

結局、小夜は俺の家の居候となり、戸野高校に転校してきた。

小夜の登校には彩華の選んだ人間の運転する車を使い、最初の数週間は俺も一緒に乗ることになった。

…その運転手が担任の浅尾だったのは正直ビックリした。

まあ、小夜の担任にもなるんだから、小夜に慣れさせるのも必要だろう。

…でも、今日は浅尾が話し掛けても小夜は無反応だったけどな。

あと、浅尾と相談した結果、学校内では基本的に俺か麻依子のどちらかが小夜と一緒に行動することになった。

俺がサボる時は、麻依子に任せることにしよう

「…今日は転校生がいるから。正直言って大和撫子のような美人よ」  
「オオオオオオオオ！！」×多数

「いやいや浅尾、お前はそうゆうこと言うキャラだったか？  
おかげでクラスの男共が野生に戻ってんじゃないか。」

「彼女は車椅子だけど、それを助けてあげれば須千家君と仲良くなれるかもよ？」

「キヤーーーーー！！！！」×多数

浅尾のキャラ変が悪化してるし！？  
てか、女達が叫ぶ理由が分からんわ！

「じゃあ、笠井さん入ってきて」

その言葉を聞いて俺がドアを開けると、さっきまで騒いでいた教室  
内がイツキに静まる。

その空間に車椅子のタイヤを擦る音と、俺の歩く音だけが流れる。

「彼女が笠井小夜さん。笠井さん、何かみんなに一言お願い」

車椅子が教卓の真前に止まった時に、浅尾がテンポよく紹介するが…

「……………」

ヤ、ヤバい。

小夜も完全に人見知り状態に入った。  
この沈黙をどうにかしな…

「小夜ちゃん！ 放課後僕とお茶しな

「消える大西洋！！」イギヤヒツ！？」

いきなり近づいてきた洋に、俺は反射的に黒板消しを投げた。  
横を見ると、浅尾までチョークを投げてたようだ。

その二つを顔面クリティカルヒットで受けた洋は、その場で完全に  
TKOされていた。

洋が倒れたことで、沈黙は一瞬で破られ、クラスに温かい空気が流  
れた。

麻依子もグツジョブサイン出してる。

…これで、小夜はクラスでもなんとかなるだろ。

「あと、笠井さんにちょっかい出すと、須千家君に殺されるかもし

れないから気をつけなさい」

…浅尾よ、お前は俺をそんな風に見ていたのか。  
俺はそんな人間じゃないぞ。

「クラスの皆さん。もしこいつの嫌がることしたら……存在抹消す  
んぞ」

俺はそんな（・・・）甘い人間じゃない。  
やるんだったら徹底的にするぞ。

…この後、この教室から麻依子の笑いと言佑のいびき以外の音が消えたのは、言うまでもない。

「…シン……………」

「ん？ 撫でてほしいのか？ ほれ」

「…フニヤ」

「んで、学校の放送で呼び出すな。理事長室なんて生徒が呼び出されるべき場所ちゃうだろ」

「いいじゃない 私とヘルの仲なんだからあ」

「…わけわからん」

会話で分かると思うが、俺は目の前にいる彩華に呼び出しを受けていた。

それも、屋上にサボリに行こうとしてる時に、学校放送で呼ばれたのだ。

教師さえ入ることを許されない理事長室だ。

そんな所に呼び出されたのが分かれば、俺の名前が全校生徒に知れ渡る可能性がある。

「まあ、俺からも渡すものがあるからな」

「なあに、愛する私にプレゼントしてくれるのあ？」

「……黙示録を返すだけだ」

彩華の言うことは黙殺して、俺はポケットに入っていた黙示録を取り出す。

一つは手の甲の部分に逆五芒星の模様が描かれた、黒いオープンハンドグローブ。

もう一つは、同じ模様がモチーフのシルバーネックレス。

前者が亮佑の『破滅の黙示録』、後者が洋の『虚実の黙示録』だ。

彩華はその二つを受け取ってから、首を傾げた。

「ヘル…パシリに使われてるのお？」

……………なんでそうなる？

「んなわけねえ、お前が俺を呼び出す可能性があったから預かっただけだ」

「さすがヘル、愛しい私のことは何でも分かるのねえ」

「……………」

全身全霊をかけて彩華を無視して、持つてきといたバッグから俺の義手足…『地獄の黙示録』を彩華に差し出す。

ついでに今は、黙示録がついてない普通の機械義手足（家にストックが10ペアある）を付けている。

「あら、もう返す必要ないのよ？」

「…は？」

いや、今回黙示録を出したのは偽者の処理のためだけのはず。

それが終わったんだから、借りたものはきっちり返すのが当然だろ。

「ヘルには持つ資格があると判断されたのぉ」

「誰に？」

「私に」

それもそうだな。

今、黙示録の持ち主は目の前にいるこいつだし。

「だったら、亮佑や洋の分も……」

「それはダメ」

「なぜ？」

いや、普通俺が持つんなら二人も持つてる方が、流れ的にあってるんじゃないのか？

「今回、三人に黙示録を返したのにはもう一つ理由があつたのぉ。それが『個人で黙示録を持つ資格があるか』を調べるため。ヘルは渡してから一度、小さな規模の暴走族を取り締まった時に使つたでしょ？」

…確かに、夜中近所でうっさい奴らが出てきたから、安眠のためにボコツて一回だけ使つた。

そんなことまで知っている彩華の恐ろしさを再認識しながら、俺は頷いた。

「そういう、黙示録の正しい使い方をしたのがヘルだけだったのお。亮佑は一度も使わず喧嘩してたし、洋は私の言った通りナンパの道具に使うてたわぁ。洋の場合は偽物と思われて相手にされなかったけどねぇ」

…洋、彩華の言ったこと鵜呑みにするなよ。  
ヨルムンガンド  
偽善神の名が泣くぞ。

「『権力を使う時を見極めて判断力』と『権力の使用を迷わない決断力』を持ったのはヘルだけだったの。だから、その黙示録はあなたの物よぉ」

そう言いながら対面していた彩華は、いきなり机を軽々飛び越えて俺の隣に座る。

別に判断力とか決断力とか気にしてなかったし。  
それに…

「昔から言ってるけど、俺そう言うの興味ないから。今回黙示録を借りたのは、早く敵を沈黙させるには死神の狂気<sup>ヘル</sup>を引き出す必要があったからだ」

…長時間、麻依子を閉じ込めるわけにはいかなかった。  
救出が長引けば、脱水症状になるまで泣きそうだからな…

「これはお前に返す。俺には権力など必要ない」

俺は黙示録の入ったバッグを、隣に座った彩華に突き出して言う。

「権力はいろんなものを守れるのよ？」

「…権力があっても、俺が守れるのは守りたいものの一握りにも満たない」

どんなに強い武器を手に入れても、主人公のレベルの限界がラスボスは倒せないなら意味がない。

そんな意味のない物語は、主人公が死んでもいいから早めに幕を下ろすべきだ。

犬死には寂しいから、せめてザコ敵を倒すだけ倒して、最後は自分で腹を斬って…

「んもおく、ヘルは分かかってないなあ」

「なに言っ…っておう!？」

いきなり彩華に引き寄せられて、気づいた時には俺の視界は奪われていた。

俺を包み込む彩華独特の甘く妖しい香り。

俺の後頭部にあるのはなんとなく腕だと分かる。

顔は二つの柔らかいものに挟まれて…

まさか、この状況は…

「彩華、今俺はどんな状況だ？」

「私の胸に顔を埋めてる状態」

やっぱりかあああああああああああああ！！

「さ、彩華、早く放してくれないか？ それに、なんで俺はこういう状況になってるんだ？」

「イヤよぉ、わからず屋のヘルにすっかり話を聞かせるためだもの。この状況の理由は、私がこうしたいからよ」

…この状況、たぶん動いたら首を絞められる。

それで死ねたらいいが彩華のことだ。死ぬ寸前でやめるから脊髄損傷で全身マヒになるな。

…抵抗しないでおこご。

「…分かった、話を聞こご。だから、早く解放してくれ」

「まだ早いわ、ちゃんと聞き終わるまでダメえ」

正直、この状況は精神的にキツイものがある。  
話を聞いて、とっとと離れないと人間の欲望に負けかねない。

「…ヘル、私があるに黙示録を渡すのは、『あなたが誰かを守る  
ためじゃなくて、『あなたを守る』ために渡すのよ?」

「…俺を…守る?」

「…つたく、なにバカげたことを…」

「ヘルがなにをしたいのか、私にはなんとなくしか分からないけど、  
そのために限界を超えて自分を犠牲にしようとするんだものお」

「そんなこと…ブフォ!？」

「ヘル、今は黙って聞いて?」

「…てか、俺の顔に胸押しつけて黙らせてるしっ!」

「俺の理性の耐久レベルをどんだけ下げてる気ですかあああああ!？」

「…ヘルの傷つく姿を見たくないのよ。だけど、ヘルは私が守ろう  
とすればするほど、私の代わりに犠牲になろうとするでしょ?」

…当たり前だ。

彩華がいなかったら、この手足や腹部の人工筋肉は無い。俺は死んで、R ラグナロクに入る前の必死に生きていた頃の俺はいない。

今は死にたくても、あの頃が無駄だったとは思わない。  
大切な時間とも言えるだろ。

そんな時間をくれたのは、研究途中の技術を一存で俺につけてくれた彩華だ。

恩義だつてある。

「だから、私はヘルに権力を与えることで、ヘルが傷つくのを少しでも減らしたいの」

「つたく、面倒くせえな…」

ちよつとだけ彩華の力が弱まり、俺に発言権が戻った。

「…分かった。使うかどうかは別として、いちよう貰っとく」

黙示録は武器じゃないが、防御力を上げるアイテムにはなるか。  
てか、貰わないと首をへし折られかねん。

「ありがとヘル　　こういうものは自己満足でいのよ」

やっと腕を放してくれた彩華は、満面の笑みをしていた。

「他に困ったことがあったら何でも言っつてねえ」

お前が俺の困る原因の一人だ…とは言えない俺は、小さくため息をついた。

彩華から解放された俺は、その後の授業を屋上で校長と一緒にサボったのち、小夜と一緒に帰路に着いていた。

「笠井さん、この学校の第一印象はどう？」

「……」

そして俺の目の前で、帰路に着く+小夜=浅尾の運転の車…って方程式が成り立っていた。

ついでに小夜が助手席、俺が車椅子と一緒に後部座席に乗っている。

215

「黙ってちゃ分からな…」

「不安もあるけど楽しかったみたいですよ？」

「…え？」

やっぱり驚いたか。

「笠井さんとテレパシーでも使った？」

「…理科の先生が非科学的なことを言うべきじゃないでしょ。小夜の表情を讀んでみただけですよ」

ミラーに浅尾の驚きの表情が写る。

「…先生、小夜が無表情だと思ってるでしょ？」

「そ、そんなこと無い…」

「その通りですよ」

「!？」

わざわざ表情を読もうとしなきゃ、小夜の顔は人形のようにも見えない。

まさに無表情と言えるだろ。

「しばらくは喋らないだろうから、小夜の心を知りたい時は麻依子に聞けばわかる」

「…須千家君は？ さっき分かったじゃない」

「俺は面倒なんでパス」

分かるのは分かるけど、何度も聞かれちゃウザくてたまらない。

「…謹慎開けの生徒が言うセリフじゃないわね」

…そついや俺、謹慎開けたばっかだったな。

「先生もスゴいな。今日謹慎の話題に触れたのはあんたが初めてだ。相当アホか、図太い根性があるかだな」

下手すりゃ逆鱗に触れる話題だぜ？

「これでも半年あなた達の担任してるのよ？ これぐらいのことで私のクラスの生意気な白髪少年がキレないことぐらい分かるわ」

…喧嘩売ってんなこいつ。

やっぱ、こいつはインテリのくせに図太い。逆にビクビクされた方がイラつくけどな。

さてと、売られた喧嘩は…

「そうですね。もう半年間も白衣眼鏡がトレードマークの美人先生に世話になったのか。ファンクラブにとっては夢のようだろうなあ」

…倍額、一括払いで買わせていただきますか。

「……………」 浅尾

「……………」 俺

「……………」 小夜

結局、浅尾と俺の無言の駆け引きは小夜を巻き込み(?)、車が俺の家に着くまで終わることはなかった。

「シン……早く……」  
「……分かった」

時間は九時半ジャスト。

場所は自宅のある一室。  
人は俺と小夜の二人きり。

「…どうだ？」

「…んっ…熱い…でも……気持ちいい…」

俺は危機的状況に、自ら足を踏み入れていた。

「ごめんな、ちょっとシャワー熱かったか。人の髪を洗うのにまだ慣れないんだ」

「…シンにしてもらっつ…それで十分……」

そう、俺は小夜と一緒に風呂場にいるのだ。  
…と言っても、小夜は体にタオル巻いてるし、俺は服着たまんまだ。  
やましいことなど一切ない!!

いくら俺の家がバリアフリーと言っても、不自由な所はある。  
その一つに風呂場がある。

老人や足が不自由な人にとって、風呂に入ることは重労働だ。  
そのため、大体的場合は介護者がついて、その作業をサポートを  
する。

…ああ、居候させる時に気づけばよかつたさ。『誰かが一緒に風呂  
入らなきゃならない』ってことを…

小夜が来て次の日にそのことに気づいて、麻依子に頼もうとした時  
に『お願い』を二つ使われたんですよ。

『俺が小夜の風呂に入るのを手伝う』&『そのことは他言無用』だ  
ってさ… 救援部隊を断ち切られましたよ。

お願いを破れば… きっと小夜が彩華に話して、ロキの悪戯決定だろ  
う。

しょうがなく手伝おうとしたら、小夜が裸で入ろうとしたからさあ  
大変！

…反射的に土下座して、せめてタオルを巻いてもらうことにした。

あん時はマジで寿命が縮まったな

そういうわけで、俺は湯槽に浸かっている小夜の髪をバスタブの外で洗ってる。

ついでに、俺の義手足は防水加工バッチリ。だから、俺は風呂にも普通には入れるのだ。

「…私の髪…洗うの大変…?」

「ん？ このぐらいどおってことないさ」

確かに小夜の髪は物凄く長い。

だけど、この髪は毛先までなめらかで、まるで黒い絹糸のようだ。

ついでに、俺は短くても長くてもどんな色だったとしても、綺麗な髪は好きだ。

「ほれ、髪は洗い終えたぞ」

「……じゃあ…次…体…」

「お前は俺に、韓国と北朝鮮の国境線よりも危ない一線越えさせる

「気か？」

この状況だって相当危険だ。

この狭い空間で、布切れ一枚しか纏ってない女が手の届く所に…女風呂を覗くのは格が違う。

「泡風呂にしていいいから体だけは自分で洗ってくれ。俺は外で待つてるから、出る時はちゃんとタオルを巻いてから呼んでくれよ」

「ヤだ」

「明日からのご飯にピーマン入れるぞ」

「…むう……………分かった」

『同居人のムチャな要求には、食事を押さえれば六割はなんとかなる』っていう、麻依子からの忠告が意外に使えることを発見した。

…小夜を置いて風呂場を出た俺は、一つ思った。

「黒ヘル…いつ帰ってくるんだ？」

あの黒ヘルは、俺の三千本ノックの餌食となつたため顔面が陥没したのだ。  
その跡が全然治らないため、あの世に帰って『顔面修正のプロ』に治してもらうんだとさ。

てか、顔面修正のプロってなんだよ。

顔面を修正する機会なんてそうそうないだろ…

まあ、そんなこんなで家に黒ヘルはいないのだ。

「……………シン…」

シャワーの音が止まってすぐ、小夜からのお呼びが掛かる。

…小夜、分かりやすいぞ。

「まだタオル巻いてないだろ？ ちゃんと巻いてから呼んでくれ」

「ヤだ」

「明日からアスパラ……」

「分かった……」

この手は有効だけど、小夜の好き嫌いの激しさをどっぴにかしなきゃならないと思う今日この頃だった。

S U I C I D E 1 3 〳 和解と対立の組曲〵

人の心というものは、時に単純明解な一本道であり、時に脱出困難な迷宮である

私立戸野高等学校…  
この周辺地域を昔から治めてきた豪族…戸野が創立した学校。

偏差値は平均的、男女の比率も五分五分。ちよつと成績悪くても入れるため不良もちよつと多く（亮佑・談）、その割に美女が多い（洋・談）。

そんな戸野高の一番の特徴は、『学校行事の熱狂ぶり』だ。

戸野高はイベントの度にクラスや個人で順位をつけら、ポイントが与えられる。

ここからが恐ろしい程に生徒が熱狂する理由

生徒はそのポイントが入ったカードを渡される。

そのカードを使えば、文房具や菓子パンから家庭用ゲーム機や高級ブランド品まで、ありとあらゆるものが揃う購買部で買い物が出る。

クラスで二、三回優勝すれば、高額商品が手に入る…この学校は生徒を物で釣っている。

そして、優勝したクラスの担任にはボーナスがある…と彩華が言っていた。

そんなこんなで、生徒&教師は優勝目指して奮闘するのだ。

これが戸野高の学校行事が熱狂する理由だ…

「真慈」。咲耶ちゃんが呼んでるよー」

晴れ渡る晴天の中、日課の如く屋上で昼寝をしてた俺を、麻依子  
が呼びに来た。

ついでに忘れてるかもしれないが、『咲耶』とは我がクラスの担任  
浅尾の名前だ。

浅尾は俺のサボリについて基本的に何も言わない。

しかし、クラスで何か決めたり重要なことの際は呼び出してくる。

実際面倒だけど、これをサボろうとすると麻依子の怒涛連撃を食ら  
う羽目になるので、素直に従って貯水タンクの上から降りる。

「今日はなにがあるんだ？」

「えっと、LHRに体育祭の出場者決めだつて」

……面倒クサ。

「まったく、面倒くさがらないの」

「…バレたか」

「バレバレ、顔に出てるよ」

そんなやり取りをしながら。俺達二人は教室に向かって階段を降りてつた。

「さあ、今年の体育祭の競技はこれよ」

浅尾が黒板に文字を書きながら言う。

俺は自分の机に頬杖をつきながら軽く周りを見る。

「みんな出る競技決める時点でやる気満々だね」  
右側には自分もウキウキしてる麻依子。

「ZZZZZZ…」

前には死んだかのように寝続ける亮佑。

そして…

「小夜、こっち向いてないで前見る、前」

「ヤだ」

左側には、なぜか黒板じゃなくこつちを凝視してくる小夜がいた。

本当は新しい机（車椅子だから椅子はいらない）を持ってくるはずだったけど、このクラスメイトに例の誘拐事件に参加して退学した野郎が一人いたため、都合よく俺の隣の席が空いたのだ。

「…シンを見ること…減るものじゃない…」

「そりゃそうだけど…まあいいや」

〃  
〃  
〃

小夜の言うことにも一理あるため、俺は黒板に視線を戻す。  
えっと、一番楽そうな競技は…

騎馬戦（全員参加）

クラス対抗リレー（全員参加）

//  
//  
//

静まり返った空間に、俺は一人拳手をする。

「Teacher? なぜに二種目だけ&全員参加なんだ?」  
「しょうがないのよ。理事長が決めたことなんだから」

…彩華の陰謀か?  
だったら、この数少ない競技もふざけた決めごとがあるな…

「先生、俺体育祭の日に暇をエンジョイしなきゃならないから休みます」  
そんな彩華の陰謀に引つ掛かってたまるか!

「残念ながら無理ね。理事長から『須千家真慈は瀕死状態でも絶対参加。参加しなかった場合、悪戯に処する』って文章が来てるわ。悪戯の意味は分からないけど……」

クラスの中で

「悪戯ってなんだろう？」とか

「理事長ってどんな人か知ってる？」とか

「ZZZZZZ……」とか聞こえてくる。

……口、ロキの悪戯だ。

サボったら地獄の拷問……

てか、俺がサボろうとすること予想してやがったか。

「真慈、参加したほうが身のためだよ」

「……諦めが肝心……」

『悪戯』の意味を知る両隣の二人にかけられた言葉には、哀れみが六割ほど含まれていた。

「……分かった」

てか、そうするしかないでしょ。

俺の選択肢はハズレも当たりもない、『参加する』のただ一つしか残されてないんだから。

まあ、特に実行委員につかなきゃいい。ただの駒として参加させて…

「あと、『須千家真慈は強制的に体育祭実行委員に任命すること。本人が拒否した場合、不参加時と同じ刑に処す』だそうよ。随分と理事長に気に入られてるのね？」

…ハイ、弄<sup>いじ</sup>る相手として大層気に入られてるみたいですね。

「おいゴルアアアアア！　なんで俺が実行委員なんぞやらんとあ  
かんのじゃボケエエエエエエエ！！」

俺は放課後、小夜を先に帰させてある部屋に乗り込んだ。  
その部屋の名は…勿論『理事長室』。

「とつとと実行委員から俺の名前外せやオラアアアア！」

左の前蹴りでドアをブチ破り、理事長室に侵入する。  
が…

「…ったく、こういう時に限って留守かよ」

俺が乗り込んだ首領ドクの間には、目標の金髪眼帯女はいなかった。

その代わりっちゃんだけど…

「確か……生徒会長でしたっけ？ まあ、誰でもいいけど、彩…  
理事長がドクにいるか知りません？」

目の前にある理事長室の接客席には、一人の生徒（たぶん生徒会長）  
が座っていた。

「覚えていたようだな……姉はT・Cのアメリカ支部に最高顧問代  
理として行っている。明日の昼間には帰ってくるだろう」

会長（確定）は、椅子に座ったまま俺を見据えるような視線を送  
ってきた。

「教えてくれてありがとう。んじゃ、用ないんで」

はっきり言って、生徒会長とか先生とか、お偉方系えらがたは苦手だ。

まあ、この学校でまともに（？）接せるのは彩華と校長…あと浅尾  
ぐらいだな。

なので、とつとおサラバ…

「まあ、ちょっと待て。私は君を待っていたんだ」

させてくれないんですねえ、まったく…

「ちょっと待て、なんで俺がここに来ることがわかった？」

「姉が言っていた。『面白い文書を送ったから、絶対理事長室に乗り込んでくる』とな」

…つたく、そんなに俺は単純なのか？

最近行動を読まれすぎてる気がするそオイ。

「つたく、この一般生徒の俺ツ…そういやあんたはあん時見てたんだから、普通じゃないって知ってんのか。…で、なんか用か？」

どうせ、家には夕飯前に帰ればいい。

会長も俺なんかを待ってたんだから、話ぐらい聞いやるう。

立ったまんま話してるのは疲れるので、俺は会長の向かい側の席に座る。

「この前は助けに来てくれてありがとう。感謝する」

「感謝なんていらねえ。俺は麻依子が心配だっただけだ」

実際、誘拐されたのが会長だけだったら、俺は助けに行かなかった。

「俺は麻依子しか助ける気はなかったさ。」

「結果的には助けてもらった。その結果に変わりはない」

「は、はあ……」

どうも、こんなにしつこく感謝されるのは苦手だ。

「いや、感謝自体が苦手だ。」

「…本題に入るが、今回何人かの生徒が退学処分になったのは知ってるな」

「ああ、俺の隣の席の奴が消えた。変わりがすぐ入ったけどな」

これからあの見透かされるような瞳で見られ続けるとなると…ため息が出そうだ。

「その中に、多田という人間がいた。君が謹慎の原因になった時に蹴った男子生徒だ。その時のこと、覚えてるいか？」

…さすが会長様。謹慎開けの生徒も怖くないってか？  
その話題は禁句に近いぞ。

「いちよう覚えてる。金髪ロン毛野郎とムカつく女が居たな」

確か女の方は…会長みたいに青っぽい黒髪をポニーテールにして、  
会長ぐらいの身長で、会長みたいな喋り方で、会長みたいな綺麗な  
顔つき…

俺はさつきまでの姿勢を崩し、足を組んで背もたれに思いっきりよりかかり、軽く会長を睨みつける。

「いきなり態度が変わったな」

「俺の頭は左手足と違って機械じゃないんでね。嫌いな人間に対しては冷たい態度になってもしょうがねえだろ」

当たり前だ。

俺が求めるものを否定した奴に、普通に接しろというのは無理。

「姉から君のことを少しだけ聞いた…その件に関してはすまなかった。私も軽率だった」

会長は座ったまんま、俺に対して深々と頭を下げる。

…だけどな。

「謝るとか関係ねえ。俺がテメエをムカつく理由はテメエの考えの甘さだ。『死ぬことに意味がない』なんてテメエが思ったって、死に救いを求める奴だって、逆に死を恐れる奴だっている。…『死ぬこと』は『生きる』ことと同等の意味と重みを持つてんだよ」

「……………」

俺がまくし立てる中、会長は頭を下げたままだった。

……………  
…つたく…

「それに、相手に合わせて自分の考えを簡単に曲げるような奴も嫌いだ。そうやって頭下げて…」

「それは違うー!!」

俺がもつと言葉を吐き出そうとした時、会長が大声を出して頭を上げた。

「私は自分自身の軽率な言葉に謝っただけだ。決して自ら死ぬことに賛成したわけじゃない」

そして、睨みつけるような勢いで俺と目を合わせた。

「私は…君のような人には生きていてほしいんだ」

俺を見据える真っ直ぐな瞳は、あの時の彩華を彷彿とさせる…

俺がある事故で両親と自分の左半身のほとんどを失い、瀕死状態になった時、何者かが俺の半身を機械化することで俺の命を救った。

俺に埋め込まれたのは特殊な機械だったらしく、研究室で決まった食事を取り、決まった運動をして、決まった時間に寝る…そしてそのデータを計測したり、薬を投与されたこともあった。

…俺はまるでモルモットの様な生活をしていた。

その一年後。怪我の調子が戻った俺はその研究所らしき場所から逃げ出し、世界を拒絶する日々を送った。

…その時の俺に喧嘩と哀れみ以外で近づいて来たのは麻依子ぐらいだ。

暫らくして、俺の周りに同年代の二人の仲間が増えた。

一人は幼い頃に両親に捨てられた、キレやすい超怪力少年。

もう一人は両親が無理心中した時生き残った、麻薬常習犯の大嘔吐き。

様々な理由で傷ついてた少年三人は、気に入らないものすべてを破壊し続けた。

…そしてその二年後、俺達は一人の女に出会った。  
その頃、中学生にして周辺地域で負け知らずの俺達はその女に挑み  
…彼女の左腕一本で全員ねじ伏せられた。  
そして彼女は、地に伏せた俺達に強い意志が宿った真っ直ぐ瞳で言  
った。

『君たち…私が生きることを見せて上げるわ』

…それがきっかけで、俺達はその女…彩華の結成したR ラグナロ  
クに入り、今の俺達がある。

…今の会長の瞳は、あの時の彩華のように『他人の一生を変えるこ  
とが出来るほどの強い意志』が宿されている。  
そう、会長は真っ直ぐに謝り、真っ直ぐ俺にぶつかってきた。

さすが彩華の妹…いや、妹だからってわけじゃないな。

会長は会長自身の強い意志を持つてる。  
……けど。

俺は立ち上がり、出口の方に歩きだす。

「…会長さん、俺はあんたを見直した。だけど、俺が死ぬのは決定事項だ」

そんなことで俺の意志は曲がらねえし、頼りねえけどいちよう専門職の方に頼んでるしな。

「っ！？ だつて君は…」

「真慈だ」

「…？」

しかし、会長の印象はこの短時間で何度も変わるなあ。  
俺は少し立ち止まって、顔だけを半分ぐらい振り返る。

「気に入った奴には、俺の葬式の際に苗字で呼ばれるよりも、名前  
で呼ばれたいからな」

まあ、気に入ったといっても教師とかは例外。

逆に、彩華はいくら言っても俺をヘルとしか呼ばない。

小夜の場合は…いちよう理解できる呼び名だからいいだろ。

「真慈か…分かった。…しかし、そう簡単に葬式は行われな  
いと思  
うぞ」

「随分言ってくれるな…近々学校にカメラが入るかもよ？ …彩華  
にも迷惑かけるな」

俺はふざけた言葉を会長と交わし、理事長室を後にした。

…あ、卵切れてたから帰りに買いに行かなきゃ。

彼：真慈が部屋から出ていった瞬間、緊張の糸が完全に切れ、私は背もたれに倒れこんだ。

…真慈にまくし立てられていた時、私は彼を殺す幻覚を見ていた。その幻覚は、私が部屋に飾ってあった日本刀を手に取って、彼の首を斬り腕を斬り足を斬り胴を斬り……  
正直、その時現実の彼の姿を見たら…私は幻覚と同じ行動を取ったかもしれない。

そして、『相手に会わせ…』と真慈が言った時、私の見てた幻覚は

いきなり変わり、なにもない暗い空間に彼が立っていた。

そして、真慈の両頬には涙が一筋づつ伝っていた。

一筋の涙はあまりに純粹な悲しみで、それを流す瞳を見ると、こ  
つちが悲しみに打ち拉がれてしまいそうになる。  
もう一筋のその涙は血のように真っ赤で、それを流す瞳はこの世界  
すべて…進む時間やそこに生きる自分自身さえ怨んでいた。

その後、一瞬で現実に引き戻された私はその瞬間思った。

『彼に生きてほしい。死んでほしくない』と…

気を抜いていた所に、携帯のバイブがスカートのポケット内で鳴る。

着信は…姉か。

一息ついてから、私は通話ボタンを押す。

「もしもし」 麗花あ？」

「ああ、なんだいきなり」

「いやあ、そろそろヘルとの話が終わると思ってねえ」

…なぜ分かる？

アメリカにいるはずだろう。

「黙ってるってことは終わったのねえ。どうだったあ？」

…実は今回、私が彼を待っていたのは、姉の計らいによってである。

『分からないなら直接会ってみなよ』と言われ、興味があった私は姉の話に乗った。

そして、わざわざ彼が怒るような話題を振り、姉の言ったことを確認することにした。

『ヘルは泣いているのよ』

一瞬見えたあの姿が、姉の言ったことなら…

「…なんとなくだが、真慈のことが分かった気がする」

「それはよかつたわあ。…それよりも、男の人を呼び捨てにするなんて初めてなんじゃない？ れ・い・か」

「…っ／／／」

い、今思えばそそそそうだ…

「仕事以外で、数えるぐらいしか男関係のない、お堅い麗花がついに恋愛かしらあ」

「っ！？ そ、そんなわけ…」

「あるから焦ってるのよねえ」

姉の言葉一つ一つに、体中が羞恥心で熱くなる。

きつと、今の私の顔はゆでダコのように真っ赤になってるだろう。

「でもねえ、ヘルは鈍感だし。ライバルもかなり多いわよあ」。

麻依子ちゃんと小夜もかなり強敵だし…そ・れ・に」

突然、受話器の聞き取り口から姉の殺気が流れた。

「私も敵に回すことになるわよ」

いつもの間延びした声なのに、体中が凍りつくような感覚になる。

…私は恋愛なんてしたことない。

何度か告白はされたが、感情は全くといって動かなかった。

…だけでもし、この『彼を知りたい。彼に生きてほしい』という気持ち  
持ちが本当だったとしたら…

「……姉」

「ん？ なぁに？」

この、今まで感じたことのない胸の高鳴りが偽りじゃないとしたら…

「…スタートは遅れたが、最後に勝つのは私だ」

まだこれが恋愛感情か分からないけど、『負けられない』と心が叫んでるのは確かだ。

「フフツ…望む所よお」

「宣戦布告完了だな」

…ここに、戸野姉妹の間にライバル関係が生まれた。

「クシュツ…あゝ何だか寒気が」

あるスーパーの卵コーナーに、学校の最高権力者と生徒の最高権力者の戦いに巻き込まれる運命さがが決定した、悲惨な白髪少年がいた。

SUICIDE 14 ～繰り返す輪廻と黄泉での焦り～

人とは時に、同じことを繰り返す滑稽なものである

しかし困った。  
ああ、困った。

前回、体育祭実行委員の役職を半強制…いや、強制的に受けた俺は、ただ今生徒会室にいる。

麻依子から『裁判所みたいな所だよ』と言われたが、みたいじゃないかと、そのまんまだと思う。

そこで俺が何してるかというところ…

「…真慈、もっといい作戦はないのか？」

会長と一緒に作戦会議してます、はい。

それも俺が弁護士側、会長が検察官で対峙している。

てか、目の前の会長がやり手の検察に見える。

なぜ、会長と作戦会議してるのかというと、体育祭二大種目（てか、二つしかない）中の一つ、騎馬戦のルールにある。

何人かで騎馬を作り、相手の騎馬を崩し、崩されたら自分の陣地に戻る。

制限時間内に相手軍の騎馬を多く潰した方の勝ち。

基本的ルールはこれだけ。

しかしこの騎馬戦は、クラスによって分けられる。その『クラス』というのは、学年の枠を越える。

例えば、A組なら『1 A』『2 A』『3 A』が同じチームとして戦う。

会長曰く、これは学年によっての体格差やら経験差をなくすためらしい。

そして、各学年8クラスある中で俺は『1 D』の実行委員であり、奇遇にも会長は『2 D』の実行委員だったのだ。

会長職でありながら、実行委員までやるとは……将来はキャリアアウーマンになるな。

そして今、俺達は会長の権限で生徒会室を使っている。てか、作戦会議のためとかで放課後呼び出された。

ついでに、『3 D』の代表は、無理矢理押しつけられたモヤシのような人だったから、可哀相ってことで会長が会議から外した。てか、俺も無理矢理なんだけど会長に捕まったんですよ、ハイ

それにしても作戦ねえ……

「…突貫は？」

「そんな単純な手では二回戦進出が限界だ。優勝の為には最低でも三パターンは欲しい」

俺の案は会長に速答で跳ね除けられた。

「そういう会長はどうなんだ？　なんかいい案はないのか？」

「…突撃」

「それはほぼ一緒だ」

『突貫』と『突撃』の差が分かる奴は教えてくれ。

てか、そんなことを真剣な顔で言われても困るぞ会長。

「それより真慈、『会長』という呼び方はやめてくれないか？」

「…会長は会長でしょ？」

なにを今頃…

確か、俺の周り（麻依子とか）も会長って呼んでたと思う。

「…君とは会長という役職に関係なく交流したいのだ」

「マジ？」

「ああ、MAGIと書いても読んでも想像してもマジだ」

そついいながら真つすくな目線で俺を貫きそつな会長。  
…確かにマジだな。

「んじゃあ、戸野先輩」

「先輩なんて必要ない」

「戸野さん」

「他人行儀だ」

「戸野様」

「その前にバカをつけたらドリフになつてしまつ」

「戸野妹」

「それでは私が姉のオマケのようで好かん」

彩華のオマケか…それはさすがに可哀相だな。

「でも、それ以外なら名前で呼ぶしかないだろ」

「…な、なら、名前で呼べばいい」

会長はそついいながら、顔をほんの少し朱に染めてる。  
風邪でも引いたか？

「そ、そついえば名前を教えてなかつたな。麗花、戸野麗花だ」

「分かつた。…麗花先輩」

「先輩などつける必要はない」

「いや、先輩は先輩だ。先輩を校内で呼び捨ては気が引ける」

いちよう、俺は学校内では上下関係をつけてるつもりだ。  
担任の浅尾を先生と呼ぶのがいい例になる。

「…では、せめて二人だけの時や校外の時は呼び捨てにしてくれ」  
「…そこまでして名前で呼ばれたいですか？」  
「……呼ばれたい」

そこまで言っただけで会長はうつむいた。

てか、何で名前で呼ばれたい人多いかなあ。  
名前で呼ばないと麻依子は泣きそうになるし、彩華は悪戯（拷問）するし、小夜はシカトしてくるし…

…でもまあ、そこまで言うなら仕方ねえか。

「分かった、麗花って呼べばいいんだな？　まだ慣れないけど呼ぶように気をつける」

気をつけないと会長って呼ぶよ絶対。  
だって、読者の皆さんの知らない所で麻依子を何度も泣かせそうにしていますから、ハイ。

「あ、ありがとう……で、戦略の方はどうする？」

さっきまでの微妙な行動はどこへやら、麗花は一瞬喜びの表情を浮かべた後、キャリアアウーマンモードに戻っていた。

騎馬戦の戦略ねえ…

…あまり気が向かないが、頼んでみるか。

俺は、ポケットの中から携帯を取り出し、電話帳から目的の番号を探す。

「誰かに電話でもするのか？」

「ああ、俺が知る中では最高の参謀で最低の女好きだ」

俺の電話帳は五、六名しか登録してないため、目的の番号は簡単に見つかった。

俺が電話した相手は…

「なんだよ真慈。僕にレディ達を紹介してくれるのかい？」

「んなわけあるかポケエ。五股かけてるような野郎に女は必要ねえだろ」

「なっ！？　なんで分かってるんだよ！？」

「この時期は、インド洋が五股する確率が高いという統計が出る」

「どんな統計だよ！？　てか、インド洋ってなんだよ！　僕の名字は大西だ！！」

…なんか、会…麗花から微妙な目線が注がれてる。

まあ、会話が聞こえないだろうから仕方ない。

「とにかく、今度の体育祭の騎馬戦の戦略を考えてくれ」

「…嫌だね。昔じゃないんだから、僕はもうそんなことしないよ」

やっぱりダメか…

こうなったら最終手段だ。

「…生徒会長様もお前の助けを待ってるぞ」

「なにいいいいいい！！それは本当か？」

やっぱり食いついてきた。

女が絡んでくると、洋のヒット率異様に高くなるからな。

俺は麗花に近づいて、携帯の通話口を塞ぎながら話し掛ける。

「んじゃ、こいつに『君の助けが必要だ』と言ってくれ」

「あ、ああ、そのまま言えばいいんだな」

ちよっと緊張気味のか…麗花に携帯を渡す。

「…君の助けが必要なんだ」

割とスラスラ言えた麗花。

さすが生徒会長、プレッシャーには強いらしい。

その一言だけで会長から携帯を返してもらった。

これ以上話させると、洋が口説きに始めるからな。

「つつわけだ。頼まれてくれるよなあ？」

「僕がレディの頼みを聞かないわけないだろ。明日までに完璧な戦略を立ててやるよ」

「頑張れよ女たらし」

「真慈い！ なに言っ…」

戦略さえ立てればすべてようなしだから、俺は洋が話してる途中で通話を切った。

「これで戦略は無問題だ」モーマンタイ

「わざわざそんな読み方にする必要はないだろう。…それよりも、本当に彼に任せて大丈夫なのか？」

冷静に突っ込みながら微妙な表情を浮かべる。

まあ、あんな奴に頼んだら心配するのは仕方ない。

でも…

「チャラチャラしてて女好きで股かけ上等な最低野郎だけど、俺がマジで信用してる最高のダチだ。心配すんな」

洋の戦略のおかげで、R ラグナロクは必要最低限の時間、戦力で邪魔者をぶっ倒してきた。ヤクザ相手に死者が一人も出てないのがその戦略の凄さを表している。

「…分かった。真慈がそこまで言うなら私も信じよう」

俺を通してじゃなきゃ信用されない洋…可哀相じゃない、自業自得だ。

「んじゃあ、作戦会議終了ってことで先帰らせてもらう」

俺にも色々やることがあるんだ。

特に、小夜が来てから時間が必要になってきたからな。

「ちょっと待ってくれ。この紙を見てくれないか」

俺は麗花の出してきた紙を手に取って見る。

そこに書かれてたのは…

//  
//  
//

## 任命書

一年D組須千家真慈

貴方を戸野高等学校生徒会役員“生徒会会長補佐”に任命する。  
尚、任命された者は、特別な理由があっても拒否・放棄を硬く禁ず  
る。

## 認証者

生徒会会長・戸野麗花

戸野高等学校校長・桂田源次郎

戸野高等学校理事長・戸野彩華

//  
//  
//

…へえ)

あの校長って桂田源次郎って名前だったんだ…

「って違うツ!! なんだこの文書はよお!?!」

「君を生徒会役員に任命するための文書だ」

「いや、そんな筋合いないから! なる気もサラサラないから! つか、俺は認証してないよ!?!」

俺は会ちよ…麗花に紙を叩き返す。

そのまま俺は出口に歩き、ドアノブに手をかけ…

「…なんだこれ?」

ふと、俺は自分の右親指が赤いことに気づいた。

これは…血じゃないからインクか?

渡された紙、赤い親指…

このパターンどこかであった気が…

「そんなことを言っても、「」に拇印がしっかりとあるぞ」

やっぱりかあああああああああああああ！？

なんで黒ヘルと同じ手（プロローグ参照）使ってたんだワイワイワイ  
！！

「マ、マジかこれ…信じられん」

俺、黒ヘルこと安全第二は、あの世…黄泉よみに来ていた。

来た理由は、困ったお客さんにボコボコにされた顔面を直すため、親友のアレキサンドリア・中田に頼むためだ。

…そんなのは一日で終わるから、黄泉パブ『ジュリア』で十分な目の療養したけどな、ウシシ…

…ゲホッソ！

そんなことより、俺の持っている書類が問題だッ。

現世に戻る前に、後輩の弥勒みろくからもらった俺のお客：須千家真慈に関する資料だ。

それには、その人間の過去やムフフな噂、基本的情報などが書かれてる。

その書類に書き足されてた項目は二つ…

一つは『因果封滅』をかけられたこと。

そして、もう一つは普通更新されない過去にあった出来事…

「死期極滅しききょくめつに過未消滅かみしやうめつだと……どうして今まで気づけなかったんだ  
ッ！……」

今から六年前の欄に突如浮かび上がった文字は、鮮血のように深紅に染まっていた。

「禁術が二つも使われてるなんて…ソープに行く暇もねえな」

俺はお気に入りのアケミちゃんに会えないことに苛立ちながら、急いで現世に戻ることにした。

S U I C I D E 1 5 仲間の団結、死神の意地

戦<sup>いくみ</sup>こそが人間の本性が表れる場所である

『 テメエ等！ やる気はあるか！？  
「オオオオオオオオオオオオ！！」 × 無数

『 テメエ等！ 殺る気はあるか！？  
「オオオオオオ！！」 × 亮佑を中心とした数人

『テメエ等！ モテてえーか！？』  
「ウオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」 ×洋を中心とした大多数の男

『テメエ等！ 事件は！？』  
「会議室で起こってるんじゃない！ 現場で起こってるんだッ！！」  
×ノリのいい奴ら

『テメエ等！ レインボーブリッジ！？』  
「封鎖できません！！！！」 ×ノリのいい奴ら2

『テメエ等！ どうして現場に！？』  
「血が流れるんだッ！！！！」 ×ノリのいい奴ら3（多分、全員名字は青島）

… ったく、会場盛り上げるのに時間掛けすぎだな、オイ。  
… 面倒だけどさっさと始めようじゃん。

「テメエ等！！ ……待ちに待った戸野高等学校体育祭の始まりだあ  
！！！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」  
×ほぼ全員

ここに、他とは一味も二味も違う体育祭が開会宣言された。

少し肌寒いくらいの秋空の下、ついに開催されてしまった体育祭…

「やるんだつたら優勝だぜ！」

「アタシも頑張るよー！」

「…シン…頑張る？」

「面倒だけどな」

「勝利こそ僕に相応し…」

「」「黙れ太平洋」」「

「酷ッ！！ てか、僕の名字は大西だ！」

…今、俺達は言うまでもなく体育祭の真っ最中だ。

午前中は学年ごとのリレーのために、一年の俺達は午前中最後の競技になっている。

今は、テントの下で三年の走ってる姿を見てるだけなのだ。

「それにしても、真慈が最初から行事にいるとは思わなかったぜ」  
「亮佑、それを言うでない」

俺だって、浅尾に小夜を任せただ後に二、三度寝する気だったよ。  
だけど…

「…先生の車に美人会長が乗ってるなんてねえ」

「……邪魔……入った」

「真慈？ 二人から怒りのオーラが見えるのは僕の気のせいか？」

「……俺にはさっぱりわからん」

二人の怒ってる理由はわからんが、今日の朝にいつものように迎えに来た浅尾の車に、いつもと違い麗花先輩が乗っていた。

理由は、俺が『生徒会長補佐』だから、最終調整等を手伝ってこただった。

朝からの強制労働はキツかった……

「あ、生徒会長だ」

「一年生になんのようだろ？」

近くにいた名も知らぬクラスメイトA&Bがいきなり話します。

てか……噂をしたら、ポニーテールを風に流しながら来ましたよ。

それも俺の目の前に止まっちゃったし。

「真慈、君は生徒会役員として私と同じテントにいてくれと言ったはずだ」

そう言っつて、放送用具などのある生徒会専用のテントを指差す。

「……面倒だから」

「真慈は『アタシ』達の大事な実行委員です。会長には渡せません」

麻依子……どうしてお前が答える？」

「谷津さん、彼は『私』の補佐でもあるんだ」

ギャーギャー騒ぐなって。

変な目で見られてるぞ、二人とも。

「そんなこと知りません。とにかく真慈はここにいるべきなんです」

「いや、私と一緒にテントにいるべきだ」

「アタシと！」

「私と！」

「アタシと！！」

「私と！！」

「二人とも黙らっしやいッ！！！」

「…ッ！？」

あまりに煩い二人の頭（脳天部分）に、チョップを繰り返す。

もちろん、麻依子に向かう金属製の左手の方はある程度手加減した。

「うう〜。痛いよ真慈い…左手は酷いよお」

「い、いきなりなにをするんだ！？」

二人とも頭を擦りながら、俺に抗議の視線を送ってくる。

「二人とも無駄な喧嘩すんな！俺は生徒会役員とか実行委員とか役職の前に、一人の生徒として小夜の補助があるんだ」

「……………シン…」

足がまだ不自由な小夜にとって、体育祭なんてつまらないかもしれない。ない。

だから、暇潰しに話相手にでもなれる人間がいた方がいい。

「だったら、笠井さんもつれて来ればいい」

「あんな初対面に近い人ばかりな場所は、小夜にとっては苦痛になる」

「……君は、どうしても私と一緒にいたくないらしいな」

「なんでそうなる？ てか麗花さん、左足踏むな。神経は通ってなくても気分的に痛い」

目の端で自分の足がグリグリ踏まれてるのは、見てて何となく悲しい。

「ときたま顔見せしますから、それで勘弁してください」

「……嘘は許さない」

「分かりました。……そろそろ二年のリレーなんじゃないですか？」

「ん？ そうだな。……絶対に来てくれよ」

「ハイハイ」

しつこく念を押しした麗花は、俺に手を振りながら去っていった。

ふう、これで一件落ちちゃ……

「真慈？ いつの間に会長と名前で呼びあう仲になったのかな？」  
理由はわからんが、強力な伏兵：麻衣子が落着させてはくれないよ  
うだ。

現世で悪事を働き、煉獄の業火に焼かれた者の魂は浄化され、輪廻の流れに還される。

しかし、浄化しきれない邪気の成れの果ては、暗黒の肉体を持った邪鬼になる…

その邪悪が隆起した肉体を、純白の鶴嘴が抉り取る。

「ッ、時間がねえつてのに邪魔すんじゃねえ!!」

俺は黄泉から現世へと繋がる道の途中、醜い鬼・餓鬼<sup>がき</sup>の集団に道を塞がれた。

邪鬼の中でも最低ランクだが、四、何十体もいれば邪魔なことこの上ない。

「キシヤヤヤヤヤヤヤ!!」

「黙れ! 輪廻に戻れぬ出来損ないのゲス野郎が!」

次々襲い掛かってくる餓鬼を、我が愛鶴嘴…幻羅空鶴ですべて尻ぎ払う。

その間、霊力の密度を限界まで上げ続ける。

あと…懐からあるものを探す。

2…そのあるものは黒いサングラス。

「…そして、そのサングラスをしっかりとかける。

「転生の道を外れた、世界に存在権のないカスども…無に還れ！」

その密度の霊力をすべて、鶴嘴へと注ぐ。

それと同時に純白の先端が、術の発動を意味する漆黒へと染まる。

「……このサングラスはメン・オン・ブラックでも、『お昼休みはウキウキウオッチ』でもねえぜ！！」

絶えず襲い掛かる餓鬼共が、鶴嘴から漏れ出て放たれる霊力によって吹き飛ばす。

そして、その鶴嘴を振り上げて、思い切り地面に振り下ろす。

その瞬間頭に被ったヘルメットがニット帽に変化する。

「テオー伊藤だ！！！！ 文句あるかバカ野郎ううううう！！！！！！」

一瞬、術を発動した俺でさえも眩しい光が周辺を包み込む。  
そして、その光が消えた時には、数十体の餓鬼たちも消えていた。  
それと同時にテリー伊○の状態を解く。

「…無駄な力使っちゃった…：…先を急ごう」

俺は遅れを取り戻すべく、現世に続く道を走りだした。

「一年生のリレーも後半戦に突入です！」

「随分都合のいい放送だな」

「真慈、無駄なことにツツコンでなくて準備しなよ。順番アタシの次なんだからさ」

「ハイハイ」

現在、俺達D組は見事トップで、二位と半周差以上をつけて独走状態に入っている。

…洋の立てた作戦通り、スタート時の乱戦に亮佑を入れたことによつて、力技で一位を取ってからゆっくりと距離を稼いできた成果だろ。

なんせ、この競技は『先にトラック二十周（4000m）走ったクラスが勝ち』というシンプルなルールだった。

1クラス四十人と考えて一人半周（100m）走ればいいのだけれど、しかしそれは平均で、誰がどれだけ走っても問題はない。

…だったら、足が遅く体力がない人は少なく走り、足が速くて体力がある人が多く走ればいい。

あるものは半周ほど走らず、あるものは二周以上走った。

セコくても勝てればいい。  
それが偽善者ヨルムンガンドの戦略だ。

ブーイングが聞こえてもかまわない。

……だけど、もっと二位との差が欲しい。  
俺達が勝つために……

「……久しぶりに必死になるのも悪くないな」

ラストのバトン回りは……洋（200m） 麻依子（100m） 俺  
（395m） アンカー（5m）の順だ。  
数値が中途半端なのは気にしない。

そして今、洋が半分走り終え……

「……」  
「その綺麗なお嬢さん。これが終わったら一緒にティータイムを……」  
「北極海！ 真面目にやれ！」×小夜を除くクラス全員  
「いや、もうそれ漢字まったく違うじゃん！？ てか、みんな変に  
団結しすぎ……！」

小夜も叫ばない代わりに、汚物でも見るようなジト目で洋を見ている。

「ちゃんと走ってるんだからいいじゃないか！ ……ヘイ、パス」  
「だったら、話ながら走らないの！」

文句を言いながらも麻衣子はバトンを受け取る。

走り終わった洋に近づき…

「なんだい真慈？ 頑張った友を労ってく…グビヤヒツ！？」

一発アツパーカットを食らわせてから早々とリレーゾーンへと向う。

麻衣子の足は、小さい割に意外に早くすぐに俺にバトンが渡る。

「イケエー！！」

言われなくても、バトンを手にした瞬間にスパートを掛ける。

正直、約400mを全力で走るのは苦痛だ。  
だけどやるっきゃな……

「ッ！？」

いきなり左足のバランスが崩れる。

なにが起こったかわからない。だが…このままじゃコケる…！？

無常にも倒れていく体。

クラスメートが驚きの悲鳴を上げる。

地面に触れるまでの動きがスローに感じる。

態勢はヘッドスライディング。

走る速度のまま、腕や足をグラウンドの砂利が荒く削る。

…昔からこうだ。  
なんで俺が必死になると、  
神様は俺を絶望に叩き落とすのかねえ。

…ッ  
ぎげんな。



…その傷だらけの不様な走り、後ろとの差を一周までつけた。

そして、俺はアンカーのもとにバトンを届ける。

そのゴールを飾るのは、長く艶やかな黒髪を持った、日本人形のよ  
うな片翼の少女。

…その名を笠井小夜という。

車椅子に座った彼女に、バトンを渡して彼女の脇にまわる。

「亮佑!!」

「分かってるぜ!」

小夜を挟んで俺の反対側に亮佑が立つ。

体格が同じ俺と亮佑の肩を支えに小夜が立ち上がる。

「…………ん…くッ」

小夜が俺達から手を放し、ゆっくりと一步を踏み出す。

…小夜が来てからずっと、毎日家で一緒にリハビリをしてきた。たった5m…だけど小夜はあと一步の所で歩ききれなかった、大きすぎる距離。

一周差あった二位との距離もすぐに縮まっていく。

「やっぱり笠井を入れたのは失ば…」

「黙って見てろ!!」

ふざけたこと口に出した奴を瞬時に睨みつける。

「この体育祭のクソ競技は『全員参加』とあったはずだ。この俺がサボれねえのに小夜を抜いて走れるかッ!!」

…確かに『怪我人や走行不可な人は選手から抜いてもよい』と知らされていた。

その知らせを聞いた小夜は、無表情の中に憂いを隠していた。

自分は参加できないと見越してたんだろ。

…その姿勢にイラついた俺は、実行委員の権限で小夜を含めた全員参加にし、小夜も参加できる作戦を洋に作ってもらった。

ゴールまであと一步の所で、二位のランナーが背後に迫る。

小夜の顔からあからさまに疲労の色が見える。

あの震える足じゃ、一步を踏み出すのも無理かもしれない…

…最終手段を使うか。

「小夜ッ！ そのまま倒れこめ！」

「……ん！」

ランナーが通り過ぎる寸前、倒れ込んだ小夜の体がゴールテープを切った……

《独走態勢から一気に接戦になった一学年のリレー！ 勝者は面白い作戦と友情を見せてくれたD組い！！》

『…………ウオオオオオオ！！！！』

クラスメイトの歓喜が、グラウンドに響き渡る。

「小夜…お疲れさま」

「……………うん…」

瞬時に倒れる小夜を支えていた俺は、手早く車椅子に座らせる。

「倒れる時、怖くなかったか？」

…なるべくなら、歩き切つて欲しかったけど、もしも無理と判断できる場合のために、小夜に前に倒れてもらってゴールするという緊急作戦があった。

自ら倒れこむには度胸が必要なので、躊躇して二位ぐらいになると思っただけ……

「…シン…………絶対受け止める……………信じてた」

「…ありがとうよ」

俺は小夜を保健室に運んで、午後までゆっくり休ませてやることにした。



S U I C I D E 1 5 仲間の団結、死神の意地（後書き）

そろそろ、この駄文物語も終演に向かいます

S U I C I D E 1 6 〽 天上に召す死に神〽

神を生み出すのは人

神を育てるのも人

神を殺すのも人

俺は小夜を休ませるために保健室に来た…はずだった。

だけど、道の途中で金髪赤スーツの独眼竜に半分拉致られて、理事  
長室の中に連れ込まれました。

まあ、そのおかげで左足のスペアを借りれたけどな。

「……んで、何でニヤニヤしてるんだ？」

目の前にいる金髪赤スーツの独が……まあ、彩華だけど……  
とにかく彩華がニヤケ顔でこっちを見てくるのだ。

「だってえ、二人の姿がとっても憎らしいほど羨ましいんだもん  
」  
「……訳分らないが、憎むな」

てか、『だもん』って言いながら殺気を出さないで欲しい。

今の俺の状態……三人掛けの高級ソファに座ってる。  
今の小夜の状態……毛布を被りながら、眠たそうな猫を彷彿とさせる  
仕草で横たわっている。

俺の座ってるのと同じソファの上で。

……俺を膝枕に使いながら寝ているのだ。

「だってヘルの膝枕よろ？ 十分で二十六万は出してもいいわよ」  
「時給百四十六万…ホストより金のなる仕事だな」

てか、この膝に関する金銭感覚がおかしいだろ？  
左膝は異常に硬くて寝心地悪そうだし…

「…………ふみゆ…」

…………なのに幸せそうな顔して寝てくれるよこいつは。

「いいなあ。小夜じゃなかったら捻り潰してたわ」

「いや、冗談キツイ」

「冗談なんて中国製品の安全性よりも含まれてないわよお」

「皆無に等しいな…んで、その異常に悪い機嫌を直すにはどうすればいいんだ？」

目の前で不機嫌な人間がいて、気分の良い奴はいないだろ。  
なら、そいつが不機嫌になる理由を排除すればいいだけだ。

「ん〜。じゃ結婚して」

「…よく考える、俺は未成年だ」

「じゃあ、事実婚」

「……」

ライライ、冗談もいい加減にしてほしい。

「…お前は知ってるだろ。俺はいつか自殺する。若いうちから未亡人なんてブランドつけないのか？」

「そんなつもりサラサラないわよお。私の愛しのダーリンになってもらって、戸野家の後継ぎとしてT・Cの経営を任せる気よ？」

彩華の瞳には強い意志があった。  
まさに本気と書いてマジである。

まさに愚の骨頂だな。

「死を求める人間に先の未来を話すな。気分が最高に悪すぎて血へドが出る」

「昔から言ってるでしょ？ ヘルミたいな人は、誰かに大切にされて行きてくべきなのよお」

「誰に大切にされようが、誰に嫌われようが、俺は結局俺のモノだ。早く死のうが俺の自由勝手だろうが。俺のシナリオを勝手に決めんじゃねえ」

誰にも俺の死を止める権利はない。  
いくら恩義のある彩華でも、な。

「……私はヘルにいいことだと思ってその腕や足を与えたわ……だけど、私がヨーロッパに行つてて目を離れたうちに、ヘルは実験体にされて……あなたはもう苦しみ過ぎたわ。あなたは生きて幸せになるべきよ」

どうも、彩華は俺の過去に責任を感じているらしい。  
しかし、それはゴミ以上に不要だ。

「俺はこの手足をくれたお前に感謝している。そりゃ、死ぬほどな。俺が死にたいのは誰のせいでもない。俺自身の問題だ」

周りの環境や人間が自殺願望の原因だったとしても、結局死ぬのは自分自身だ。

だからこそ、自殺者は極力他人に迷惑を掛けないように死ぬべきだと思う。

俺も含めて…だ。

俺は左手につけた時計を見る…

「やてと…」

俺は起こさないように小夜の頭を膝から降ろして、ソファーから立ち上がる。

「どこ行くのお？」

「………C棟の屋上」

「！？」

小夜が驚きの表情を浮かべる。

…完全に勘違いしてんな。

『自殺志願者＋屋上＝死』は絶対じゃないっしょ。

「…学校行事を潰してまで死に急がねえよ。ただの昼寝だ」

そう言って、俺は小夜と彩華を置いて屋上へと向かった。

「……畜生！ あのバカどこにいやがる！」

俺が現世に帰ってきた時、真慈は家にいなかった。

…もう時間がない。

精神を集中し、真慈の霊力を探す。

「この方向は…学校か！！」

あいつの馬鹿デカイ霊力は簡単に見つかった。  
だけど…

「術の発動まであと三分…って、カップ麺作れても食べねえじゃねえか！？」

でも、堅麺でいいならなんとか食える…ってそんなこと今は必要ねえ！！

「まったく、相変わらず世話がかかる野郎だ……間に合ってくれよッ  
！！」

俺は、全力で真慈の元へ向かった。

…彼を死なせないために。

俺はただ、C棟の屋上に続く階段を上る。

教師や生徒はグラウンドに出払っているため、校舎内は異様な静けさを保っている。

唯一の音は俺の規則的な足音と微かな呼吸音のみ。

この静かな空間は好きだ。

感覚が研ぎ澄まされて、余計な思考が入る隙を与えない。  
この孤独感が心の土を踏みつけ、硬く地を固める。

……大丈夫、俺はまだ死ねる。

ふと、前を見るといつの間にか屋上のドアにたどり着く。  
白い塗装がハゲて、そこが赤黒く錆びている見慣れたドア。

…なんか、いつもと雰囲気違くない？

風景描写なんて今までしたことないって！

そんなくだらない自問自答は捨てといて、俺はドアに手をかけ、引  
っ張る。

広がる青い空、所々に浮かぶ白い雲、やけに広い白っぽい床、緑色  
のフェンス、見慣れた屋上の風景。

そして、フェンスの先には見慣れない小さな子供がいた。

「んなっ！？ なにしてやがんだ！！」

何でこんな所に小学生らしき子供が！？

ここって確か高校だろ！？

それも、小学生の身長でどうやってフェンスを越えた！？

…ああ、俺が蹴で穴あけたんだっけな。

何話目だったっけなあ。

てか、この子スカートはいるから女の子みたいだなあ。

なんかもう、やってらんないなあ……



「ほれ、早く捕まれ」

少女の方にある左手を出るだけのばす。

「…グスツ……うん」

片手でフェンスに捕まりながら、あいた手で俺にしがみつく少女。

おし、このまま……

「マキ！！ それに…須千家君！？」

いきなり屋上に響くヒステリックな声。  
その声の方を見ると……

「浅尾！？」 俺

「ママ！」 少女

え……………ママって、motherであり母上でありお母様でありお袋のことですよね？

「ママ〜」

目の前のショートヘア少女は、さっきまでの涙は欠片もなく、笑顔で両手を振っている。  
あ、我が担任が子持ち…聞いたことなかったはず……

ん？ てか、目の前の少女は両手を離して手を振ってるよな…  
なんか体が後ろに傾いてるし。

……………なんか…ヤバくね？

「えっ…マキ…!」

俺の予想通り、後ろに傾いた少女の体は重力にされるがまま落下モーションに入る。

俺は腕を伸ばし…ダメだ、ほんの少し足りない。

このままだと少女は落ちる。

少女は死ぬ…

えっ…死ぬ？

死亡？

Dead？

俺の前で人が死ぬ？

冗談だろ？

…… やめろ

やめてくれ

死なないで



自分の状況が分からず啞然としている少女を、しっかりと掴み抱き締める。

数秒間のスリリングな落下。

その間に空中で体勢をなんとか整える。

それは少女を下から包み込むような体勢。

これで少女は助かる。

……………ガゴツ。

「クガツー!!」

体の芯に響く不気味な低音。  
それと共に来る背中への衝撃が、背骨や肋骨を容赦なく粉碎する。  
肺に入った空気が抜けるが、吸い込むことが出来ない。  
そのせいもあるのか、意識が朦朧になり焼けるような痛みも徐々に薄れていく。  
すべての感覚が鈍くなるのが分かり、視界もぼやけてくる。

…ん？ ああ、必死だったから気づかなかった。

これが死ぬってことなのか。

黒ヘルの術…は、どうなったんだろ……

まあ、もういい……や。

…や…っと、願……いがか…なった。

えた。

この、死を求める物語の主人公は夢を叶え、永久の眠りを迎

S U I C I D E 1 6 へ 天 上 に 召 す 死 に 神 へ ( 後 書 き )

主 人 公 が 死 ん で も 、 こ の 物 語 は 続 き ま す

S U I C I D E 1 7 〱 連続奥義は程々に〱 (前書き)

すみません。今回はいつもより短いです。

S U I C I D E 1 7 〱 連続奥義は程々に

輪廻や転生などはない  
その人生は一度きりなのだ

……あー。

ついに死んだな、俺。

結局は飛び降り自殺か……自殺屋に頼んだ割りに、代わり映えしない死に方だったな。

そういえば、黒ヘルと会った時も飛び降り自殺しようとしてたっけ。ある意味運命だったんだなあ……

「んで、ここはどこだ？」

一通り現実逃避をし終えたところで、俺は目の前の現実を迎え直った。

俺の目の前には見慣れたマイホーム。

周りにある景色も『形』はいつもと変わらない。

しかし、その景色には白と黒しか『色』がない。

風景のすべては白黒のコントラスト。

空は真っ白で、太陽か月かも分からない真っ黒な球体がぼっかり一つ浮いていた。

一つ以外は完全なる無彩色の世界。

自分で着てる服さえも、いつの間にか黒い学ランになっていた。

唯一の例外は俺の体の肌色み。

地獄とも天国ともいえない…そんな異様な空間に俺はいた。

「……………試しにどっか行ってみるか」

この空間があの世界というのなら、どこかに人（幽霊って言った方がいいか？）はいるだろう。

けど今までの間、俺は人にも猫にも虫一匹にも会っていないのだ。

俺は左腕につけた銀色の時計を見てから、ゆっくりと白いアスファ

ルトの道を歩きだした。

とりあえず白黒の世界をプラプラしてるうちに、俺は自分が落ちた屋上に来ていた。

そこで俺は初めて俺以外の人間（？）を見つけた。だけど……

「ウイツスー！ …… って、その拳を下げ  
「黙れ黒ヘル！！」ブエツ！？」

なんで第一遭遇者がこいつなんだ！？  
冗談キツいだろ。

「なんで今頃お前が現われるんだ？」

「いや、俺はなんで真慈が出会い頭にマジで殴ってきたのかが聞きたい」

「お前の顔が殴ってくれと言っていた」

「俺はそんなDMじゃない！ ソフトMだ！！」

俺の斜め上に浮いてギヤーギヤー煩い黒ヘルは置いといて、俺は俺を殺した地面を見下ろす。

その純白の地面には、漆黒の花が咲いていた。  
きつと、黒い所が俺の血の跡なんだろう。

「そっぴや、真慈が助けた子供は無事だったらしいぞ」

「……んなこと、死んだ俺には関係ねえだろ」

「そんなこと言ってるえ。本当は『よかった』とか思ってるくせに  
「黙れカス！！」

ったく、こいつと話していると疲れるな…。

「それにしても、ここがああ世ってやつか……なんだかお前の服装にピッタリだな」

黒ヘルの服装は、ヘルメットから軍手や靴の先まで白と黒。他の色は、ヘルメットで隠れ切っていない目下から首までの肌色だけだ。まったく奇妙な格好だな……

そんなことを考えてるうちに、黒ヘルの肌色部分の口から衝撃的事実が……

「……悪いが真慈、ここはああ世じゃない」

……へえ。  
それはびっくりだな。

うん、スゲー驚いたな、俺。

「ギブギブギブギブ！！　めり込んでる！！　お前の手がヘルメット変形させてこめかみにめり込んでるッ！！！！」

黒ヘルの衝撃告白を聞いた瞬間、ついつい頭を全力で握り潰す…ベアクローをしていた（ヘルメットの上から）。

「黒ヘルさあん？　あの世じゃないならここは一体全体どこなんですかゴルアアアアアアアアアア！？」

「真慈！　不良みたいなキレかたないでくれ！！　あとマジヤバいから腕の力弱めて！！！！」

仕方ないので、黒ヘルの潰れない程度の力で掴んでおくことにした。

「ふう……死ぬかと思った」

「お前、もう死んでんだろぅが。…で、ここはどこなんだ？」

俺は素で、自分の今いるこの奇妙な世界を知りたかった。

「……ここは俺が作り出した、魂の閉鎖空間『TSUTA A』のカメを越えたら、そこは大人の世界だった…」の中だ」





……なんか眠。

…俺はやることがないので、黒ヘルが目を覚ますまで昼寝をすることにした。

S U I C I D E 1 8 〱 仮面を外した死神、対峙する世界最強〱（前書き）

これで、ストックがなくなりました……………正直ヤバいです（涙）

S U I C I D E 1 8 〱 仮面を外した死神、対峙する世界最強〱

人の死はその人の世界の終焉を意味する

「……だからホニャララッてわけだ」

「…なんで俺、ホニヤララの内容が理解出来てんだろ」  
「それは…この『翻訳機能付莠莠』のおかげだ!!」  
「テムエは未来の青ダヌキ型ハイテクロボットか!!」  
「ギャブツ!?!」

…黒ヘルの説明で取り合えずこの世界のことは大体分かった。

この世界は本当に『T U T A Y A…』（以下省略）って言う名前らしく、はつきり言って不快だ。

機能としては『魂の半永久的捕獲』と『時間枠の自由移動』、『霊力増加』…etcらしい。  
ついでに、現世の時間も俺が落ちてから数秒後で止まっているらしい。

てか、簡単に言えば俺は黒ヘルに捕まえられたのだ。  
これ以上にみっともないことは、一生のうちにそうはない。

…まあ、おかげで糞の輪廻（二話目参照）にはならなかったわけだ。

「抹殺してやりてえ…」

「いや、その爛々とした目で俺を見ないでくれ……………恥ずかしいわ」

「撃滅!!」  
「ブビョ!!?」

いきなり女言葉になった黒ヘルの横っ面を、左手を使い全力で殴り飛ばす。

そして、きりもみ状に転がっていった黒ヘルに回り込み、腹部を前蹴りして動きを止める。

「ゴブツ!?! …… な、なんかこの世界に来てから暴力行為が増えてないか?」

「こっちとら機嫌が心底悪いんじゃボケェ!!」

「カハツ!?!」

俺は怒りのままに踏んでいる黒ヘルの腹部を踵で踏み潰す。

…… まあ、普通の俺ならここまでしない。

なせ、機嫌が悪いというと…

「んで、なんで俺をこんな空間に閉じ込めやがった?」

そう、せっかく死んだんだからとっとと地獄でも天国でも行かせてほしいのに、途中で止められてストレスが溜まっているのだ。

「グフツ……それはな真慈、おまえに話しておきたいことがあるからだ」

俺に腹を踏まれながらも、しっかり話している黒ヘル。  
生命力は洋ぐらいあるかもしれない。

「で？ 命をかけてまで話したいことってなになあ？」

「え…それって話したら死ぬってこと？」

「どうすればいいか分かんねえけど、殴り続ければ幽霊も死ぬかなあ〜？」

「ストロップ！！ 少し…いや、限界まで落ち着いて話を聞け！」

……しかたないなあ。

「んで、話し終わったらこの世界から解放しろよ？」

「ああ、これでも約束と非核三原則だけは守ってきたはずだ」

「両方確かに偉いな」

黒ヘルの守ってるものを世界の国々に守ってほしいと思いつながら、  
この世界からとっとと出たい俺は、黒ヘルの話聞くことにした。

(無論、黒ヘルの腹部を踏んだまんまで)

「真慈、お前が死んだのは偶然でも運命でもない。……意図されて殺されたんだ。それも最悪のオマケつきでな」



シラケた空気が何となくイヤだったので、取り合えず黒ヘルの腹を強く踏んでみた。

「んで、どういうこと？」

「人の体を痛めつけて話すきっかけを作るな！！」

俺の行動にメチャクチャ文句を言う黒ヘルに、『黙らないと踏むぞ』って目線を送ったら、一度咳き込んでから『ゴメンなさい、ちやんと話します』って目線が返ってきた。

……てか、わざわざアイコンタクトする意味ねえじゃん。

「ゴホツ……今回、真慈が死ぬことになったのは『死期極滅』しききょくめつという、自殺屋の使う術の一つだ」

「……お前、いつの間にそんな術かけた？」

「俺じゃない。この術は『対象を定時に、自然を装って死を与える』&『定時まで、対象者は死の運命を避け続ける』という効力を持つた術で、他の術を無視して発動される超高等術……そして、あまりの威力に数年前に封印された禁術だ」

……なるほど。

『死の運命を避け続ける』から、いくら危険な目にあっても死ななかつたわけか。

「で、その『決められた時』ってえのが、俺が屋上から落ちた時ってわけか」

「……驚かないのか？」

「幽霊のお前が存在してることを認めてんだ。そんなぐらいで驚かへえって」

それに、自殺屋の術とやらはこんな世界を作れるんだ。そのぐらい出来てもおかしくはない。

「いいのか？ お前の死は意図されてたんだぞ？」

「……理由はどうあれ、時間は掛かっちゃったが最終的に俺の願いが叶ったんだから問題なしの結果オーライだ。で、話はそれだけか？」

「いや、ここからが一番の問題だ。お前にはもう一つ強力な禁術がかけられている」

「たたく、どこのどいつが俺に術かけまくってた？」

俺は実験体じゃないんだぞ。

「その名は『過未消滅』<sup>かみしよめつ</sup>。効果は『対象が現世から黄泉に移動終了時、その現世に関する存在を完全に抹消する』」

「……？」

「……簡単に言えば、『須千家真慈』っていう人間が最初から存在しなかったことにするんだ」

うん、なんとなく分かった。  
でも……

「それって逆によくねえか？」

俺という存在が、関わってきたすべての人から消える……誰も悲しませないで死ぬなんて、後腐れなくていいじゃんか。

それに、過去にも関わるならもしかして……

「それって……例えば俺が過去に殺した人間は生き返るのか？」

俺のせいで消えてしまった命……

過去の俺がないことになるなら、その命が消えることはないはず。

「落ち着け真慈！」

「あ……す、すまない」

いつの間にか、俺は黒ヘルに馬乗りしながら拳を握り締めていた。俺は立ち上がり、黒ヘルの体を立たせながら高ぶり過ぎた気持ちを落ち着かせる。

「……で、どうなんだ？」

「残念ながらそれは無理だ。魂はあってもその肉体は過去に滅びている」

ダメだったか…

やっぱり、命はそんなに甘くないってことだな。

「無から有は生まれないうてことだ。……けど…」

「けど？」

口ぐらいしか見えなくても、黒ヘルの表情に陰りが見える。

背筋を駆け抜ける嫌な予感。

まるであの時のような…なにかを失う喪失感が胸を締めつけ始める。

「有は無になる。お前と関わった人間：

谷津麻依子やし まいこ

戸野彩華この さいか

笠井小夜かさい さよ

戸野麗花この れいか

櫻井亮佑さくらひらひら ようすけ

大西洋おおきよ せいりやう

浅尾真紀あしお まき

浅尾咲耶あしお さくや

この八人が死ぬ。その他数十名も不幸な運命を歩むことになる」  
「!?!」

手が勝手に、黒ヘルの襟首を掴んでいた。

「なにふざけた事行つてんだテメエ!! 俺が死んだからって、なんであいつらが死ななきゃならねえんだよ!!」

これは俺個人の問題。

なのに、なんで……

「なんなら死因を全部言っただけや。」

谷津麻依子。戸野彩華殺害計画の人質として、暴力団に拉致。その後、その暴力団とR ラグナロクの解放軍勢との戦闘に巻き込まれて死亡。

戸野彩華。谷津麻依子の死からチームの信頼を失い、裏切りによる闇討ちにて死亡。

笠井小夜。誰も認めてくれない孤独感から解放されず。車椅子で線路上に飛びだし自殺

戸野麗花。ある男子に一方的な交際を求められ、仕方なしに認めるところ強姦され、それを苦に投身自殺。

櫻井亮佑。戸野彩華の死亡でチームは解散。後に暴力ざたを起こし取り押さえに来た警官に暴力を振るい、危険とみなされ拳銃で撃たれ死亡。

大西洋。戸野彩華の死亡でチームは解散。再度麻薬を乱用し始め、数年後に麻薬中毒にて死亡。

浅尾真紀。母親の勤める高校の屋上に侵入。事故に近い形で屋上から落下し死亡。

浅尾咲耶。娘の発覚で教育委員会やPTAからパッシング。娘の死のショックと重なり、自宅で意図的にガス爆発を起こし自殺……すべてがお前が関わったから生きてた命だったんだ」

黒ヘルの言葉は俺の鼓膜を震わせるだけで、内容が頭に入っていない。

感覚すべてが虚ろだし、黒ヘルを持つ手の力も多分ない。

なんとか動く思考を働かせても、辿り着くのはたった一つの題材。

なんで、あいつらが死ぬんだよ？  
死ぬのは俺だけで十分だろうが。  
これじゃあ…おれの死又意…みガ無いじ…やネエか!?!?!

ダ、駄…めダ…抑えルんだ。  
今まデ隠し通しタんだ。  
思考を抑エろ。

脳ミソを抉り取られるような痛みを発する頭を抑えながら、感覚を  
取り戻すことに集中する。

視覚は…まだぼやけてるけど、黒ヘルが目の前にいるのが分かれれば  
十分。

味覚は…無意識に唇を強く噛みすぎて、生臭いサビの味が口を満た  
している。

聴覚は…黒ヘルが言葉を発すれば分か…

「…真慈。本当は死にたくないんだろ？」

あっ

ああっ…

…ダ、ダメだッ

隠さなきゃいけないのに

思っちゃいけないことなのに

俺は死にたいんだ…

生きたくないんだ…！！

そのハズなの…

俺は！ 才れハアアアアアアアアアアA A Aアアアアアアアアあアあ亜あAアあ

あ亜アA亜亜あ亜アaあアあッ！！！！！！

自ら破滅の道を歩むため、心を封じた鋼の感情。

その感情は心の熱は伝えられても、心の声は伝わらない……

今、その感情は音を立てて崩れ去り、それが崩れゆく隙間から心の声  
が響き渡る。

「…生きたいに決まってるだろ！！ 本当に死にたい奴なんていな  
い！ だけど怖いから、嫌だから、苦しいから、生きる意味を見失

「つたから死を求めろんだ!!」

まるで決壊したダムのように、言葉が心の底から取り留め無く溢れ出る。

「……俺は周りの人間が傷つくのが怖い。昔みたいに大切な人を失うのが怖いんだよ!! だから俺は死を求めた! 死ねば失うのもうなくなる……目の前で消えるものがなくなるんだよ!!」

……昔、俺が左半身のほとんどを失った事故があった。

簡単に言えば未遂に終わった身代金目的の誘拐事件。

誘拐されたのは俺じゃなく……豪族の戸野家の長女、戸野彩華だった。

彩華の行動を調べあげ五、六人の屈強な男どもによる綿密な計画的  
犯行。

それが未遂に終わった理由……それは、俺の食器が割れたために三人  
で買い物に出かけていた俺と親父とお袋が、誘拐途中の集団を見つ  
けたからだ……

正義感の強い両親は、何人もの男に囲まれた彩華を見ただけで、迷  
いなく突っ込んでいった。

誘拐犯は火器や刃物を持っていたが、いとも簡単に倒されて彩華も  
助けだされた。

そして、悲劇は起こった。

男達は死ぬ覚悟だったらしく、お袋を巻き込み、持ってたダイナマイトで一斉自爆。

その爆発から彩華と俺を守るために、庇った親父が犠牲になった。

二人はほぼ即死。

俺と彩華は親父のおかげで死なずにすんだけど、俺は爆発の衝撃で左半身を持ってかれ、彩華は失明はしなかったものの、飛んできた破片で片目の一部を傷つけた。

後に俺に届けられたのは、俺がいつも左腕につけてる親父の腕時計だけだった。

爆発の衝撃で壊れたらしい時計は、正確に両親の死を俺に叩きつけてきた。

それ以来、俺は何かを失うことが怖くなった。

だから、すべてを守ろうとして必死に足掻いた。

だけど現実は厳しくて、大切なものが次々と俺の手から取り零されていく。

…だから、死のうと思った。

何かが零れるたびに心が痛み、苦しみ、涙を流す。  
そんな世界が続くのはあまりに残酷で生きていけないと思った。

そしてやっと、その苦しみから解放されると思った。

だけど、俺が逃げようとしたら、すべてのものが俺の両手から零れていった。

そんなこと……望んでなんかいないのに……

「歯ア食い縛れ大バカ野郎があああああ!!!!」  
「…ガッ!?!」

いきなり、左頬に激痛が走る。

今まで見てた風景が、右にあった風景と入れ代わっていた。

それが、黒ヘルが俺の左頬を殴ったということだと理解するまで何十秒とかかった。

「生きてえんだっいたら生きろ！！ 死ぬ気があるんなら、自分の人生へしゃげるまで守ること諦めてんじゃねえボケナスツ！！」

「クツ…お前になにが分か…」

「分かんねえし理解する必要なんてねえな。テメエもタマついてんなら、死ぬ気で生きて守りたいもの守れ！！ 何もせずは今死ぬんだったら、その死ぬ気でふてぶてしく自己中心的に生きやがれ！！」

…出来るならそうしたい。

だけど、もう…

「…俺はもう死んだ。皆も死ぬ。…もうなにも出来ないんだ」

黒ヘルの言ってることは結局『俺が生きてた場合』の結果論でしかない。

結局、俺にはなにも出来ない。  
そういう事なのか……

「……？ だったら生き返りやいいじゃねえか」  
「なっ！？ そんなこと出来んのか？」

そんな、さつきは親父達は生き返らないって言って…

「術の発動は黄泉に行かなきゃ発動されないから、まだ皆は死んでない。…昔滅びた体は無理だが、お前の体は死んだばかりだ。それにこの空間は時が止まっている。あることさえすれば、まだ生き返れる」

「ある…こと？」

黒ヘルは俺の方に手をかけ、ヘルメットを通してでも分かる強い視線で俺の目を見透かすように見ている。

だけど、俺は切り換えの早い男だ。

見透かす必要はない…俺の心はもう決まってる。

「須千家真慈。お前は何かしたいことがあるか？」

「……皆を守りたい」

「お前は皆を守れずに絶望しないか？」

「絶望する。……けど、今みたいに何もしないで絶望する方が嫌だ  
！！」

「お前は現実に立ち向かえるか？」

「玉碎覚悟でやってやるさ。死ぬのは廃人になってからでも遅くねえからな」

俺の答えに納得したのか、少しだけ黒ヘルの目線が弱まる。

「んじゃ、これからお前には術自体と戦ってもらおう」

「……………へっ？」

「この二つの術は強力な分、術をかけた術者の魂とシンクロしている。そしてこの空間は意思や魂が霊力によって存在してんだ。…この空間でもう俺が術を実現化しておいた。それを倒して術と術者とのシンクロを断ち切れれば、術は消滅して術の効果で死んだ真慈は生き返る」

「……………？？」

「簡単に言えばお前に術をかけた人のコピーを倒せ」

「成る程。要するに敵を倒せばいいわけだ」

喧嘩なら俺の得意分野だ。

ガチンコなら亮佑と彩華とお袋以外に負けたことは……

「…息子。随分といい男に成長したみたいだね？」

後ろから聞こえたキリツとした女の声で放たれる女の声。

その声に俺は身震いした。

懐かしくも、この状況ではかなり聞きたくない声。

まるで、油が切れた機械のようにギギギツと音を立てながら首を後ろに回す。

そこに立っていたのは世界トップランクの日本撫子。

その後ろで結われたセミロングの黒髪に、パツチリとした黒い瞳。

俺ぐらいの身長にスタイル抜群な体、化粧なんて必要ない若々しいその肌は一児の母だったとは思えない。

唯一、その服装がデニムにTシャツ、その上に黄色いエプロン、右手にお玉、左手にフライパンという装備だから主婦だということが分かる。

そんな女性が意地悪そうに笑っていた。

「最後の質問だ。お前は目の前の敵を倒せる自信はあるか？」

「ムリ」

黒ヘルの質問を否定の一言で答えた俺は、あまりの頭痛に頭を抱えた。

目の前に立つこの女性こそ、彩華を軽く超えて俺が世界最強だと思う人。

画面に映るどんなヒーローよりも強かった正義の味方。

そして、俺の中の『絶対に敵に回したくない人ランキング』で、初代終身名誉賞を与えた最凶のトラブルメーカー！

「……お袋。久しぶりだな」

「そつだな愚息。六年も会わないうちに図体はデカくなったようだね」

「外見で判断か？俺は中身もそれなりに成長したと思うけどな」

「中身は外見じゃ分からないさ。だから今から拳を合わせて確かめるんじゃないか」

俺の目の前に現れたのは、俺のお袋にて最強の主婦：須千家 秦しんだ

つ  
た。

S U I C I D E 1 9 〱 親子戦争 壱・ガチンコ〱

親の背中を超えて初めて、子供は大人へと成長を果たす

静まり返った廊下。

その空間は白と黒のコントラスト。

俺はその一直線を全速力で駆け抜けていた。

……なぜかって？  
そりゃもちろん『あれ』から逃げ……

「クッ！」

窓の方向から近づく殺気に向かって、腕を十字に組みガードを固める。

次の瞬間、ガラスの碎ける音と共に、両腕でトラックが激突してきたような衝撃を一瞬受け止める。

その瞬間、衝撃のすべてを受け止めたら100%死ぬと判断。体を横にずらして、衝撃を滑らせるように受け流す。

しかし、その衝撃はスツとなくなり、さっきまでの進行方向の先でオリンピック級の着地をする音がした。

「息子」。逃げてばかりじゃ私には勝てないぞお？  
「ッザケんな！ 逃げる以外に俺になにが出来るッ！」

「私とガチ」

「…それは俺に『死ぬ』って言ってるのか？」

そう、さっきの衝撃は我がお袋の蹴りだったのだ。

そのすらりと長い細身の足から、殺戮兵器としか言いようのない跳び蹴りを放ってきた。

それに、足が細い分威力が一点に集中して、最強の破壊力+貫通性抜群の一撃だ。

下手すりゃ核シェルターさえ貫くだろう。

そして、その蹴りを流そうとしたら、その前に俺の腕から飛び退いた……もう、尋常じゃない反応と判断力だ。

「まったく、始まってから一度も攻撃してこないじゃないか。私がいなくなったからって、そんな屁っ放り腰に育ったのかい？」

「イヤ、攻撃してほしいなら隙見せる。今のアンタに攻撃するのは、地雷が隙間なく埋められた草原にスキップで足を踏み入れるようなもんだ」

そう、さっき屋上で黒ヘルが『ガンダ○ファイト！ レディ…ゴォー！！』と言った瞬間から、お袋にはまったくといって隙がない。今の俺じゃ、どんな一撃を放っても、その何千倍のカウンターが返ってくる。

「……挑発してもダメかい。頭の方はだいぶ使ってるようだね」

そして、逆にお袋が容赦なく殺人的な攻撃を放ってくる。黒ヘル曰く、この空間は『靈力で物質が生成出来る』らしく、さつきからフライパン（軽く当たっただけでコンクリの壁を粉々に破壊する威力）やら、万能包丁（鉄の机を豆腐の如く真つ二つにする切れ味）やらが無数飛んできていた。さっきの一撃が初めて食らった攻撃というのが、ドリーム○ャンボ宝くじの一等を当てるぐらい奇跡的だ。

…で、今現在進行方向を塞がれた俺は、取りあえずいつでも攻撃を無力化出来るように身構える。

そして、目の前に立っているお袋は少し首を傾げていた。

キリッとした女性が、エプロン姿で首を傾げる……そのギャップは破壊的だな。

親じゃなかったら撃沈しそうだ。

そんなこと思ってたなら、お袋はその首を元に戻して……

「んで、その左手…あと左足はなんだい？ 金属みたいだけど、どうやらパッドとかじゃない。……義手足にしては随分物騒だね」

背中に悪寒が走る。

……完全に見破られた。

今でも人皮をつけているはずなのに、なんで分かった……？

「なんで分かったって顔してるね？ 腕はさっき蹴った時の感覚とお前が右からの攻撃も左腕ガードするから分かった。左足は足音と足の上げ具合が左右で少し違っただよ」

……………うん、もう無理。

叫ぶっちゃねえな。

「もおおおおお！！ だからお袋と戦いたくねえんだよ！！ 主婦のくせに百戦錬磨のソルジャーみたいなスキルもんってんだもん！」

「む、主婦をナメるな。 主婦という職業を取得すると、主婦スキルと言つて、すべての能力値が100上がるのよ」

「なんだそのポケオンとかドクエでも反則的スキルはッ!？」

「他にも『プライスダウン』や『へそくりサーチ』とか、他64のスキルがつくわね」

「……………その中に『瞬歩』とかも含まれてるのか？」

「もちろん」

お袋はそついいながら笑顔を見せると…

「…クツ」

一瞬で数十メートルあった間を縮めてきたお袋を右手で横薙にする。が、その顔面を捕らえるはずの拳はそのまま空振り……

「甘いわよ？ 弐掌打にしようだ…双槍そうそう！！」  
「グブツ！？」

ガードも出来ずに吹っ飛ばされた俺は、そのまま百メートル以上後方の壁に叩きつけられた。

…お袋は俺の懐に潜り込み、両手で掌底を放ってきたらしい。

「さつきは胴体を狙うのが適策。頭とか足とかは急所だったり移動力を削いだりするのに有効だけど、さつきみたいに避けられる可能性が高い。最初のうちは確実に当たる胴体を狙って相手のダメージを蓄積させてから急所とかを狙うべき……まあ、攻撃の瞬間後ろに飛び退いて、ほとんどの衝撃を軽減したのは誉めてやるよ息子」

「…クツ…さつきの一撃はツ…蓄積というより必殺技に近いだ…ろ」

お袋の言葉に強がって立ったものの、衝撃が九割弱減ってるはずなのに肉を抉り取るような威力を持つ一撃のせいで、今だに内蔵が揺れている。

ウップ……リバーシそう。

「それに、胴体まで金属部分があるとは……いつの間に息子はサイボーグになったんだい？」

さっきの一撃でもバレたか。

……もうガチでもなんでもやるしかないな。

「……お袋達がいなくなってますぐだ。あん時あんたらが助けた女につけてもらった」

そう……彩華がつけてくれた俺の左半身。

そして、俺はまた太陽の下を歩けるようになった。

………今度も助けてもらうぜ。

太陽の下を歩くために……

「本当は許可ナシに発動は禁止されてっけど、この空間じゃバレねえだろ」

俺は左腹部の服を人皮ごと引き裂き、黒光りする金属部分を露出させる。

そして、背中の部分にある小さなピンを外してから、服の上から右手で左肩を軽く押す。

「発動……輝災禍鈴」

フリーキングダム・ベル

自分自身のリミッターを外し、俺は人知を超える。  
その機能はこの世界でも順調に動きだし、俺の体に効果を現す。

「…やっとやる気を見せたようだね。でも、どんな仕掛けが分かんなくても、先に潰せばそこで終わりだよ！」

さっきと同じように目の前に現われたお袋を、さっきと同じように左手で横雑にする。

そして、お袋も同じように懐に飛び込んできて…

「まったく、さっきから成長してっ…!?!？」

お袋は俺に掌底を放たず、十メートルほど跳躍して間を取っていた。

「チッ…まだだ！」

俺は、飛び込まれた瞬間に放った膝蹴りの勢いを殺さず、そのままお袋に向かって特攻する。

「このクソお袋オオオオオオオオオオ!!!」



「…きつと、アンタは全力の約50%しか出してない。今の俺は丁度アンタの全力に追いつける。…本気を出せお袋!!」

…だが、今の俺には諸刃だろうが関係ねえ。

俺は生きてお袋を倒す。

「いい度胸だね。さすが私の息子。…でも、右手はもう使えないんじゃないかい？」

お袋のいう通り、普通の右手からは赤黒い血が滲み出ていた。  
…痛みは感じないけど、粉碎されたのは間違いないだろ。

だけどな…

「俺はアンタを倒せば、足だろうが腕だろうがくれてやる。…  
代わりに、故人になったアンタをこの機会に超えてやるよ!!」  
「粹がるな息子。お前に親の背中を超えさせるには一千億光年早い!!」

俺達はほぼ同時に後ろに跳んで、相手との距離を置く。

俺は左腕の服を肩から人皮ごと破り捨て、黒鋼の体を解放する。  
お袋は髪止めで、艶やかな黒髪の毛を後ろで一つに結び上げる。

そして、お互いに左拳を相手に向けてから…

「俺は須千屋真慈。死神の名<sup>ヘル</sup>において、世界最強の我が母親を凌駕する」

「私は須千屋秦。主婦道を極めた私は、これから生意気な息子を抹殺する気で迎え撃つ」

ここに、神々の戦争に引けを取らない、親と息子の交流<sup>ガチンコ</sup>が始まった。

S U I C I D E 2 0 〱 親子戦争 弑・狂気解放〱（前書き）

コメディなし、ラブなしの親子戦争編：あと二回は続きそうです。  
：イヤ、マジで本当にかなりゴメンなさい（涙

SUICIDE20 ～親子戦争 弐・狂気解放～

人の心に巢食つものこそ、世界を崩壊させるもの。  
または世界を救済するものなり

「うひょ〜。こりゃ随分と派手にやってんな」

俺は、トラブルに巻き込まれない空中から親子のガチンコ……いや、そんなもんじゃない…お互いの総てを賭けた決闘を観戦していた。まさに高みの見物ってヤツだ。

てか、地上70メートルぐらい離れないと、はっきり言ってただじ

や済まない。

数秒で手足一本ぐらいは持つてかれること必須だ。

この学校全体（偽物だけどな）が息子と母親、その二人しか存在することを許されない空間になっている。

まあ、この二人に割り込むような不粹なことはしない。

二人は、お互いに親離れ子離れする前に離れ離れになった。

親に甘えきれなかった子供  
子供を育てきれなかった親

何もかもが中途半端に別れた。

そのまま不器用に育った子供  
そのまま不器用に消えた親

この決闘は、その中途半端な別れをした、不器用な親子が一緒に過ごせなかった時間を取り戻すための方法。

「まあ、もう少し素直になってもいいと思うんだけどな」

お互いに素直になれれば、もう少し落ち着いた戦いになるものを……

「……ま、あの二人には無理だな」

俺が咳いたと時を同じくして、校舎の一番高い棟が無残にも瓦礫と化した。

砂埃が舞い上がる中、俺は安全圏であるB棟の屋上に着地した。

「ゲホツ…あの野郎っ！！ 昔よりパワー上がってないか？」

「棟はお袋の踵落しによって脆くも崩れ去った。

俺達の戦闘で建物にダメージが蓄積されてたとはいえ、ぶっちゃけありえ…

「……このクソがッ！」

俺が思考を止めて横に飛び退いた瞬間、俺の立っていたコンクリの床は、お袋の拳によって粉碎された。

「息子お！！ 氣い抜いてんじゃねえ！！！」

「クッ…アンタも隙が見え始めたぞお袋お！！！」

お袋が拳を戻した瞬間、その背後に回りこみ、頭部に向かって右足で横薙の蹴りを放つ。

しかし、その蹴りは空を斬る。

「どこが隙なんだい！！！」

お袋はその場にしゃがんで俺の蹴りを避け、そのまま片足を軸に俺

の脚を削ぐような回し蹴りを放ってきた。  
でも、俺はお袋の蹴りを避けない。

「!?!」

こっちを見て、お袋の表情が驚きに変わる。

俺は蹴りを避けない。否、俺には避ける必要がないのだ。

俺は攻撃のためにバク転をして宙に浮いているから。

そして、その回転を利用して…

「いつまでも見下してんじやねえええええええ!!」

「グウ…!?!」

お袋の頭を狙い、左足で地を割る勢いの踵落しを叩きつける。

その威力に床のコンクリが負けていくつものヒビが入り、最後には  
砕けて大きな穴が開く。

それでも蹴りの威力は衰えず、お袋は総ての階に穴を作りながら、  
相当な速度で地面へと落ちていった。

…お袋は真つ直ぐな人間だ。

嫌なものは死ぬほど嫌。

好きなものは死ぬほど好き。

その事考えて右足でフェイクを入れた所、予想的中。

素直に攻撃だと思ひ込んだお袋は、本命の左足をモロに食らった。

……いや、モロじゃない。

蹴りが入った瞬間、変な違和感があった。

きつとフライパンでも生成して直撃を免れやがった。

だとしたら……

直感的に俺はその場から走り去る。

だが…

「……甘いなあ、息子」

お袋の呟きぐらいの音が、耳に響き渡る。

それと同時に進行方向から何本もの刃物が飛んできた。

避けられるものは全部避け、避けきれないものは左腕を使って流すように軌道をずらす。

それでも避けきれないものが、俺の右頬と右肩をパツクリと切り裂く。

痛みはないが鮮血が飛び散り、真っ白な床に鮮やかな朱色が弾ける。

「そのくらい Feyk じゃ私は仕留められないよ。…いい味出てきたけど、まだまだ甘いな」

どうやら、俺が蹴り落したのはフライパンだけで、お袋は瞬時に回避してたらしい。

さすが世界最強ってことか。

「…まったく、俺が甘いんじゃないやなくてアンタが厳しすぎんだよ」

「なら、なんで得物を生成しない？ アンタの霊力なら私より上等なもん作れるはずじゃないかい？」

「アホ拔かせ、作った所でアンタに破壊されるのがオチだ。それに使う武器は、時と場合と相手と状況を考えて使うべきだろ？」

「…よくわかってるじゃないかい」

状況によつて、武器を持つていることが命取りになることがある。

特に、今のような『一撃で生死が決まる白兵戦』の時には、余計な武装は死を意味する。

…はずなのだが……

「だったら私は遠慮なく得物を使わせてもらつよ？」

そう言つたお袋は手を掲げて、その手から巨大な一本の光が伸びて…

「……………ざんりゅうとう斬龍刀・れっしゅうそうが烈襲叢牙」

その光から出来たのは、持ち手が丸太のように太く、刃先4メートルはある出刃包丁……………

「……………え、これってギャグ？ ツッコんだ方がいいのか？」

「見た目は冗談だけど、武器としては折り紙つきだよ」

お袋は脇に丸太のような包丁の持ち手を挟むような形で腕を絡め、軽い感じで横に振る。

「ぐおっ!？」

そのモーションの軽さからは想像できないほどの殺気と空気の揺れを感じ、俺は衝撃に備えてガードを固める。

……あれ？

ガードを解いてお袋の方を見ると、振り終えた超巨大包丁を軽々と担いでにっこりと笑っていた。

さっき感じた殺気は気のせいだったのか……？

「あれを見てみな」

お袋が指差した方向を疑いナシに向いてみると、そこには白黒のA棟が立っていた。

そして、A棟に綺麗な横一本線が入っていた。

その一本線から上が徐々にスーツとズレていき、ついに地面に落下して粉々に砕け散る。

視線をゆっくりとお袋に戻すと、さっきのままの姿でにっこり笑って立っていた。

「これは神獣の中でも最上級の力を持つ龍さえ一振りで斬れる斬撃を放つという、我が家の家宝だ」

「んな！？ 家宝つて、こんないろんな意味でヤバいもんどこにあつた！？ 見たことも聞いたことないぞゴルア！！」

「地下の開かずの部屋（SUICIDЕ6参照）」

「……………成る程」

なぜか妙に納得できる俺。

それと同時に最悪な予感が脳裏をよぎる。

「動きづらくはなるけど、この威力でカバーすれば大丈夫 鉄の腕でも真っ二つだね」

やっぱり……………！！（涙）

な、なんとかあの包丁見たいな超SSS級危険武装をお袋の手から引き剥がさない……………

「だけど、この得物は使い勝手が悪くてねえ。一回敵を認識するとそれを斬るまで持ち主の手を離れることのない、いわば呪いの刀なんだよ」

そう言ったお袋が手を開いても、包丁は手にくっついたままだった

……………

ふぎけんなあ……………！！（号泣）

「なんだその裏技で出てきたゲームシステムを大幅に崩す超反則的アイテム見たいなのっ!!！」

「いや、本当は投げたほうが威力はあるんだけど、何十体もの龍の怨念が取りついちゃってね……いやぁ〜参った参った」

「参ってんのはこっちだボケツ!! 次元を超えた武器で攻撃されたらのソッコウ終わりだろが!!！」

「本気出せって言うてたろ？ これが私の本気ってこと」

「ぬおおおおおおお!!！」

俺の叫びと共に、凶悪な一本の包丁によって、B棟が縦に真っ二つになった。

「……………ありや、やり過ぎだろ」

傍観者として、俺は真慈に深く同情していた。

今、秦が持っている出刃包丁のような大剣『斬龍刀』はその名の通り、神に使える龍を斬るための刀であり、決して人間のような低級霊に向けるべきものじゃない。

あの斬撃を止められるとしたら、神のような力が必要だ。

…真慈にはその力が眠っている。  
それにはあいつの一番強い感情……狂気を引き出さなきゃならない。  
しかし、ここは魂だけの世界。  
魂の枷となる肉体がない今、魂が狂気に飲み込まれる可能性が高い。  
もし狂気に飲み込まれたら、あいつは餓鬼……いや、最強の鬼、鬼神になるだろう。

「……………母親を乗り越えられるか、それとも鬼と化すか」

もし、後者になったら…俺も介入させてもらう。  
あいつの尻拭いは俺の手でするべきだ…

決意を胸に愛鶴嘴を握り締め、俺はゆっくりと滲みだしてきた狂気の根源を見ていた。

「…クソッ…あんなふざけたブツ作ってんじゃねえよバカお袋」

俺は、次々と放たれる異常な斬撃を走り回って避けながら、対応策を考えていた。

…と、言っても今の俺の力じゃ到底無理。

布の服にひのきの棒装備の状態で、ラスボスに立ち向かうようなもんだ。

今のままじゃ、すぐそこで敗北が歓迎ムードで待っている。

…気は進まないけど、今は力が必要だ。俺は瞳を閉じ、久しぶりに『あいつ』に会うことにした。

完全なる闇の空間に、俺はゆっくりと浮かぶ。

どこか心地よくも、恐怖を駆り立てるこの空間。

…三年前、麻依子が誘拐された時も、俺はこの空間に來た。  
そして……

「よう、久しぶりだな俺…いや、俺の狂気」

《待ッテタゼ、相棒》

俺と同じ体格、俺と同じ姿、俺と同じ顔、そして俺の白髪とは相反する漆黒の髪。

…そこにはもう一人の俺が存在していた。

¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥

…相棒、才前八ナニヤツテイル

才前八死ニタインダロ

世界ニ悲觀シタンダロ

自分ニ絶望シタンダロ



単純で喧嘩好きな亮佑を守る  
女たらしのナルシストな洋を守る  
強い大人な女性の彩華を守る  
無口で甘えん坊な小夜を守る  
几帳面で責任感のある麗花を守る  
高飛車で強情な浅尾を守る  
たまたま出会った女の子を守る

俺に関わるすべての人を  
俺の傍にいるすべての人を  
俺が全部守る  
俺は生きなきゃいけない

いつもはテメエの力を借りてたけど、今回はちっと違う。  
…テメエの力全部寄越せ！！

¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥

…才前ハマダ、チカラガ欲シイカ？  
ハハハツ！ 傑作ダナ！  
俺ノチカラガ欲シイナラ、理性ヲ飛バシテ狂エバイイ  
狂気ヲ走ラセロ！  
狂気ニ踊レ！  
狂気ニ落チロ！  
狂気ヲ欲セ！！

／／／／／／／／／／／／／／

…俺は狂気に溺れても、理性は飛ばさない

¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥

舐メタコト言ッテンジャネエ！！  
理性ヲ飛バサズ狂気ヲ寄越セト？  
寝言ハ寝テ言工相棒

／／／／／／／／／／／／／／

テメエは俺の付属品だろ！  
オマケごときが俺が決めたことにケチつけんじゃねえ！！  
オマケはオマケらしく、寄越すもんだけ黙って寄越してとっとと消えやがれ！！

¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥

…随分言ウヨウニナツタナ

イイダロウ、才前ニ理性ガ吹ツ飛ブヨウナ狂気ヲ与エテヤル  
三年前、狂気ニ飲ミ込マレタ才前ガ、コノ狂気ニ耐エラレルカナ、  
相棒？

／／／／／／／／／／／／／／／

…極上なチキンレースだ

俺が狂気に飲み込まれたら、お前が俺を支配すればいい  
だが、俺が理性を飛ばさなかったら、俺がお前を支配する

¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥¥

キキキキツ…

ヤツパリ才前八最高ダ！ 相棒ウ！！

コレハ、俺ト才前ノ生死ヲ賭ケタ戦争ダ！  
ドンパチ死ヌマデ殺リ合オウゼツ！！

/ / / / / / / / / / / / / / / /

いちいち騒ぐなクソ野郎  
騒ぐ前にとつと力を寄せせ！

¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥

イイゼツ！！  
狂気ト血肉ガ沸キ踊ル、俺達ノ殺戮SHOW  
TIMEノ始マリダ  
！！



「ありやくヤバいな。鬼になるかもしれないね」

いきなり立ち止まった息子は、禍々しい殺気を纏い始めた。これだけ膨大で重い殺気は、今まで感じたことがない。

…それに、普通の殺気じゃない。

普通の殺気は周辺に放出される。

だけど、今の息子の殺気は放出はされず、体の中でドロドロと渦巻いている。

…今のうちに息の根を止めないと、息子はとんでもない化け物になる。

「もう少し楽しみたかったけど、親としてせめてもの世話焼きだ…」

…一思いに消してあげるよ!」

私は息子に向かって、情け容赦無い縦一線を放つ。

凶刃は真っ白な砂埃を立てながら、目標を真っ二つする。

はずだった。

「解放…ファランダー・フォラス墮落狂危」

「……………なっ!？」

斬撃が息子にぶつかる瞬間、斬撃が爆発したような衝撃が起こり、砂埃が激しく舞う。

…『斬る』だけの斬撃が、衝撃を起こすなんて事ない。

少し落ち着いてきた砂埃の中に見えたのは、人が拳を突き出しているシルエット。

その瞬間分かったのは『私の放った龍さえ殺す凶刃は、息子の拳によつて消え去った』という事実。

あの斬撃をガード出来るのは、龍よりも力が上…神レベルの力が必要だ。

これだけの狂気を生み出す神は……

「ウチの息子は鬼神にでもなった…のか…ね……………!？」

そのシルエツトが実際に見えるようになった時、私は生まれてからも死んでからも見たこともないものを見た。

「…俺は鬼神じゃねえ」

息子には鬼の特徴の角がなく、鬼神になった様子はない。

しかし、髪は異様なほど逆立ち、全部白髪だったのに、左側が私の髪より黒くなっていた。

さっきまで渦巻いていた殺気が視覚からも分かるようになり、首から下の左半身を黒い炎のようなものが包み込んでいて、その部分を漆黒で塗り潰していた。

そして、肩と膝の部分から炎を裂いて見える髑髏が、その不気味さを一層強める。

「俺は…死神だ<sup>ヘル</sup>」

私はその言葉を聞いた時、額に逆さペンタクルの刻まれた膝の髑髏が、一瞬不気味な笑みを浮かべたように見えた。



人には負けられない戦いがある

お袋の驚愕に染まった顔に、ついつい笑みが零れそうになる。  
そのまま、斬撃を相殺した拳を自分の頭に持って行って…

「ッ！ 頭イテエエエエエエ！！」

俺は、自分の意識が暴走しないギリギリの所で、なんとか狂気を抑えられた。

もし抑えられなかったら、三年前のように暴走してただろ。

頭は痛むが、数分は安定して力を発揮できるだろう。

その数分の間に……

「お袋、これが俺の本気だ。俺は命を懸けてアンタを倒す」

「……いいねえ。私が腹を痛めて産んだ息子が、こんなに楽しませてくれるなんてね」

狂気で余計な思考が消されたのか、頭がスッキリと冴えてくる。

その頭で、俺がお袋に勝つための方法を弾き出す。

…パワーは互角。

スピードはお袋が武装したから俺が多少有利。

さっきまで避けることしか出来なかったお袋の斬撃も、腕に纏った狂気を拳から放つことで相殺出来る。

問題は、あのふざけた巨大包丁で直接斬られた時と、闘いにおける  
年季の差。

飛んでくる斬撃は相殺しても、直接刃を当てられたら俺の狂気でもげ

ツクリだ。

それに、お袋は俺の何倍もの場数を踏んでいる。きつと、本気を出せば敵の攻撃を読むことも出来るだろう。

どうする……………

「どうした息子お！ お前は半分髪の毛染めただけかあ！！」

さすがお袋。

俺を斬る方法に気づいたらしい。

お袋は俺を狂気ごと斬り裂くため、直接斬り込みに来た。

まずは…この斬撃を防ぐ。

俺は左手を前にかざし、目的に合ったものを記憶の中から探し出す。

「白兵専用兵器…フング・ザ・スルト血餓狂鎌」

俺が初めて生成した武装は、お袋の包丁には負けるが、俺よりデカイ赤黒い大鎌。

その刀身は人の生命を狩るため、血を啜るためだけに存在する。

「そんなもの出した所でッ!!」

お袋は出てきたばかりの大鎌ごと、俺を縦一線で殺しに来る。確かに、これだけじゃお袋の斬撃は防ぎきれない。

「…なら、これでどうだッ!!」

宙に浮いていた大鎌の柄を左手で掴む。

その瞬間、赤黒いその刀身が左半身を包む炎のような狂気のオーラに包み込まれ、その色を漆黒に染める。

そして、その鎌を真つすぐに目の前に突き出す。

空間に響く金属が擦れ合う音。

「………つたく、素直に切り刻まれなさいよ」

「それは無理な要求だな」

予想通り、俺の大鎌はお袋の斬撃を見事に止めた。鎌の構造上一番厚い刃の背を突き出してなんとか耐えた。

「それにしても、武器に殺気と一緒に霊力を纏わせて強度を上げたのか…それも随分と物騒な得物だね。それだけ精密に生成したってことは、想像じゃなくて一回持ったことはあるんだろ？」

「…いやあ、たぶんお袋曰く主婦スキルなんだろうけど、その分析力は反則級だろ。」

「ああ、これは戦場で沢山の生命を狩る予定だった大鎌だ」

「戦場？ そんな武器をなんでアンタが持つ機会があるんだい？」

「…持つ機会なんていくらでもあったさ。  
手放しても何度も何度も持たされたからな…」

「簡単なことだ。俺自身が戦場で生命を狩りに迎う予定だった」

「!?!」

俺のこの左半身についている機械…シンクロ・ギアアーム生体機械義手は基本的には『便利な義手』だ。

神経の微弱な電気信号を瞬時に解析、機械に伝達することで機械が手足の役割を果たす。

しかし、その性能の良さの代わりに適合条件が厳しく、結局は開発中止となった技術。

…と、世間ではこんな感じだろう。  
しかし、本当の所は違う。

「俺がつけているタイプの義手足は、傷ついた兵士達を『兵器』として戦場に駆り出すために開発されたもんだ」

彩華も最初はそのことを知らず、ただ俺を助けるためだけにこの義手足をつけてくれた。

「ただ、この技術を開発した人物にとって、適合者の俺は格好の実験台だった。」

それから一年間、T・Cの中でも技術開発部の極秘で、俺は地獄のような実験を受けさせられた。

様々な人殺しの道具をつけられて、武装ロボット相手に何度も死線を見てきた。

フリーキンダ・ベル、フング・ザ・スルト、輝災禍鈴も血餓狂鎌も、その実験から生まれた兵器だ。

その実験は、俺が逃亡して彩華や彼女の父親に事実が知れて、関係者と技術資料が処分されるまで続いた。

「俺の力は龍なんて殺せないが、人相手だったら忌々しいほど十分な力だ」

「……………息子も壮絶な過去歩んでるのね」

「ああ、アンタ達がいなくなってから数年間の話だけだな」

地獄のような日々だった。  
世界が嫌になって死にたくなつた。

それでも死ななかつたのは、俺の周りにはお人好しな奴らがいたからじゃないかと思う。

そして、俺はこれからもそいつらと一緒にいたい。

だから…

「隙あり!!」

「…おっ!?!」

お袋の隙を突いて一瞬で後ろに飛び退く。  
いきなり押し合う相手を失つたお袋の包丁。

その刀身は勝手に振り下ろされ、勝手な斬撃を放つ。

俺に迫る勝手な斬撃を、狂気を纏った鎌の側面で打つ叩いて消滅させる。

昔話はもう終わり。

…今は過去に引きずられるわけにはいかない。

俺は大鎌を振りかざし、迷いなくお袋に斬り込む。

「今を俺は生きる。…」ここで過去のアンタに負けることは許されな  
いんだッ!」

「お前が許さなくても、私には関係ないねッ!」

音速レベルの連撃をとめどなく繰り返す。

だが、一向にお袋本体に擦りもしない。

その代わり、人を狩る鎌と龍を斬る包丁が幾度となく刃を交える。

そのたびに空気が歪み、衝撃がビビシ体伝わる。

…その乱れた空気の中で、不気味な気配がうごめく。

「…息子、お前は少し勘違いをしているようだね」

「なに?」

不意にお互いの刃が深くぶつかり合い、その動きを止める。

お袋の顔を見ると、その瞳には俺がよく知るものが存在していた。

それは…狂気

「狂気を持つてるのはアンタだけじゃないってことをさっ!！」

俺の神経が危険を察知する。

鎌を捨て、体を反射的に後ろへと飛び退かせる。

その瞬間、お袋の包丁の刃が黒く染まる。

そしてその刃は、さっきまで擦り合っていた俺の鎌を真っ二つにした。

俺はさらに飛び退いてかなりの距離を取る。

「狂気を持つてるのはお前だけじゃない。人は誰だって持つてるもんだよ」

「それくらい知ってるけど…アンタがそんな芸当を出来るとは思わなかった」

「お前みたいに、可視出来るほどの密度で体に纏わせるような異常なことは無理だけど、この世界なら狂気で武器を強化するぐらい私にも出来るね」

……ヤバいな。  
お袋の攻撃力が半端なく上がったせいで、直接斬り込まれても防御しきれない。

《…モット壊セ》

頭の中で抑えていた俺の狂気が、徐々に目覚めて心を蝕み始める。  
…俺が狂気を制御出来る時間も少なくなってきた。

…一か八か、『あれ』を使える環境を作る。  
『あれ』はリスクがあまりに高すぎてこの環境じゃ敗北にもなりかねない。  
けど、成功すれば俺を勝利に導く切り札になる。

「さあ、死ぬ覚悟は出来たかい？」  
…そのためには、目の前に立ちふさがる世界最強の動きを止める必要がある。

「今の俺は死んでるつつーの。…生き返る準備なら万端だけどな」  
《ヒヤッヒヤッヒヤッ！！ 犬死ニシチマエ！》

…俺はお袋にも狂気にも負けない。  
負けるわけにはいかないんだ。

S U I C I D E 2 2 〱 親子戦争 死・終焉乃刻〱

人間は一番壁を作る生物

人間は一番壁を見る生物

人間は一番壁を越えてきた生物

人間はこれから壁を越える

簡潔に説明しよう。

俺はグラウンドを走っている。

以上ッ！

「逃げ回ってないで、いい加減刻まれなッ!!」

「いや、絶対ヤダ」

お袋は包丁を振り回し、幾重もの斬撃を飛ばしてくる。狂気の含まれた斬撃を、俺は避けるしかない。狂気を纏った左拳でも、ちよつとを大幅に超えてヤバい。

《ヒヒヒツ…斬り刻マレルツテ、ドンナ気分ナノカネ》

俺が知るか。

てか、テメエは黙ってる。

回避に集中できねえだろが。

「あゝ！！ もーヤダツ！ 全然当たんないとつまらないね！」

「こっちは当たったら洒落になんねえって！！」

こっちだって輝災禍鈴<sup>フリーキнда・ベル</sup>+狂気によって運動能力が上がってるから避けられるわけで、どっちかがなかったら数十回前の斬撃でお陀仏してた。

俺がそんなことを思ってるのを知ってか知らずか、こっちを見てため息を吐いたお袋は左手を前にかざし……

「まったく埒が開かないね……突虎槍<sup>とつこそう</sup>・白縛破迅<sup>ひやくはくはじん</sup>」

お袋の前に現われたのは、見た目は糸の通ってない縫い針。大きさは包丁と一緒に、長さは四メートルはあり、人の腕ぐらいの太さがある。

「これは龍に対をなす虎を殺す槍で、見た目はあれだけど威力は筋金入りだよ」

「そして、家の開かずの部屋にしまわれてた家宝……であつてるか？」

「正解。さすが私の息子だね」

…オシ、生き返ったら開かずの部屋を無理矢理開けて、中にあるものの全部処分しよう。

「…だけど、烈襲叢牙とはちょっと違うんだよね」

そう言つて笑みを浮かべたお袋は、左手を上げて後ろに引き伸ばし、右手と右足を体の前に持つていく。

…それは、まるで槍投げのよう。



「クソツ……血餓<sup>ガラム</sup>狼刀」

片足では立ち上がれないため、左手に黒い刀身を持った諸刃の日本刀を出現させ、それを支えに何とか立ち上がる。

「なんつう攻撃だボケ!!」

「だから言ったじゃない。『烈襲<sup>これ</sup>叢牙とは違う』って。…やっぱり投げられるって色々便利ね」

「ドアホツ!! 便利どころか小さな戦争を一発で終わらせかねない威力だろが!!」

実際、投げられた巨大針は地を這うように飛んでゆき、地面に長くて巨大なクレーターを残してつた。

上から見たら一直線の地上絵が出来てるだろうな。

…それにしてもだいぶヤバい。

片足がやられたことでスピードが著しく下がった。

骨はやられてるけど、ギリギリ体を支えるぐらいは出来る。しかし、移動どころか回避も出来やしねえ。

《シシシッ！ 串刺シニサレルツテ面白ソウダナ!!》

まったく、テメエは死にてえのか殺してえのかどっちなんだよ。

《俺八楽シケリヤドオデモイイネ！ 血ガ湧キ踊ルヨウナコトナラ  
ナ！！》

…テメエは取り合えずしばらく黙ってる。

《ツマンネエ相棒ニ俺カラノPRESENTダ！！》

狂気の言葉と共に、背筋に冷たいなにかが走って…

「…グガアアアアアアアアアア！？」

体中が燃えるように…熱い。

灼熱の鉄を体に埋め込まれたようだ。

心臓が狂気と共鳴し、その狂った鼓動が体中に響き渡る。

その響きによって、脳ミソがドロドロに溶けるような感覚が俺を襲う。

《ウヒヨヒヨ！ 小サクマトマツテ渴イテンジャネエヨ！ ソノ血  
デ渴キヲ潤セ！！》

「コッ…カグッ…このッ野郎ッ！」

狂気が全身に回る。

体に纏っていた狂気が、右半身にまで侵食を始める。

「ギガッ…バツ…ツザケてんじゃ…ねえッ！！」

唇を噛み千切る勢いで噛む。

痛みを感じないが、口に血生臭さを与える。

その血を飲み込みことで、広がる狂気の欲を一時的に満たす。

《……チッ！ 中途半端ナコトシヤガツテ…アー萎エタ》

体の熱が急激に引き始める。

心臓の鼓動も一定の落ち着いたリズムを刻むようになる。

…狂気に飲み込まれずすんだが、侵食が進んだ。

胸部から右腕に掛けて、黒い狂気に包まれてしまった。

あと、左の目や耳がやけにクリアだ。

獲物を狙う獣のように、動くものを瞬時に捉え、その足音を確実に聞き取る。

…たぶん左の顔も狂気に包まれたな。

「息子ー！ ボオツとしてると次当たるぞー！」

その声に反応して前を見ると、さっきの巨大針を持ったお袋が居た。

「ハア！？ なんでさっき投げた針がそこにあんだよー！」

「ん？ 投げちゃったからもう一本出しただけ」

「…何本もあんのか？」

「いや、一本だけだね。この世界では『現世から呼び出す』んじゃなくて自分の靈力で『創る』んだから何本でも出来る……らしいよ」

「ライライ、らしいってなんだよ、らしいって。」

「……だけど、いいことを聞いた。」

『創る』んなら、俺も思う存分出来るじゃんか。」

「お袋ッ！ー！」

「どーした息子。降参して素直に殺られる気になったのか？」

「いや、降参した相手を殺るのは人道的にどうかと」

「私の息子だけにならオールオーケー」

「いや、その線引の意味分かんねえから」

嫌な意味で特別だな……って話しがずれた。

「取り合えず降参はしない。てか、今から空気読めないことするか  
ら謝る。スマン」

「なに？ 『実はマザコンでしたあ』 って言っただけで私の胸に飛び込  
んできて、そのまま黄泉で親子の禁断の愛を…」

「昼ドラ並のドロドロだけど、ちよつとどころか全然違う」

そう言っただけで俺は刀を投げ捨て、左腕を後ろに向かって直角九十度  
に伸ばす。

「…最終安全装置解除コード、ヘルヘイム…発動・煉獄焰砲」  
グニバヘル

俺にとって、記憶に何度も刷り込まれた忌々しい言葉に反応し、左  
腕が変形を始める。

肘等の関節部が固定。

肩の骸骨が真下を向くように腕が九十度回転。その骸骨を前に突き  
出すように、肘の部分が肩の方に来るまでスライド。

そして、骸骨の顔が前を向く位置に行くように、骸骨だけが上九十  
度にスライド。

最後に、ズレがないように完璧に固定…

俺の左腕は、骸骨が先についた狂気の炎を纏う一本の筒と化した。

「…今のお前、スーパーロケット大戦に出てきそうだね」  
「あんなドデカいやつと一緒にすんな。こっちは人間サイズだ」

正直、人サイズの武器にこんな変形なんて必要性ゼロだと思う。  
あの時の開発者の中に超合金好きがいたに違いない。  
さて、そんなことは後にして……

「息子」？ 変形は面白かったけど、あんまり待たせると先に殺つ  
ちゃ……!？」

お袋がその場を飛び退いた瞬間、その地面が爆発炎上し、強烈な爆  
風が砂を巻き上げ、空には黒煙が立ち上る。

「チツ…外したか」  
「息子ツ!! お前なにしゃがる!!」

その爆発を回避したお袋は、超人的反応でこっちに斬撃を放つが、  
暴走して増した狂気を放って相殺する。

「なにつて…お袋に向かって弾撃<sup>ミサイル</sup>ってる」

お袋から少し目を逸らせば、さっきまで閉じていた腕の骸骨の口が

開かれ、そこからは白い硝煙が立ち上っていた。

…さっきの爆発は俺の腕から撃たれた一発の実弾ミサイル。

「AGM114 正式名称『Helicopter Launched Fire And Forget』…通称『ヘルファイア（Hellfire）』。アメリカ軍が使用するの対戦車用ミサイル。これはそれを小型化したやつだ」

「…私は戦車扱いか？」

「息子を龍や虎扱いするよりましだろ」

正直、戦車より龍とかの方が扱いヒドいだろ。

「…でも、KY宣言してたわりにはあっけなかったね。その腕には一発しか装填されないみたいだし、靈力で一発ずつ生成したとしても、さつきみたいのじゃ私は仕留められないよ」

包丁と針を軽く振りながらお袋は自信満々に笑う。

「…お袋の言う通り、この腕には一発しか弾は装填されない。

現世では、捨て駒の最後の足掻きとして使われる予定だったため、腕の部分に一発あれば十分だったからだ。

無論、俺は日常生活に不要どころか危険なものを体につける気はないから、装填されてないのを使ってるけどな。

「…確かに、生成して装填するその間にお袋に切り込まれたらその時点で終わりだ」

…しかし、俺には装填の必要がない。

「…でも、これでどうだ？ …死爪ナグルファル方舟」

生成したものが俺の後方で轟音を立てて地面に落ちる。

かなりの質量があるため、地震のような重々しい地鳴りが周辺に響き渡る。

「な、なんだいそのデカブツは？」

お袋が驚くのも分かる。

俺が生成したのは漆黒の箱。

しかし、その大きさは輸送船に積むコンテナの如くデカイ。

「急がなくても見てりゃ分かるさ」

俺はそのコンテナについた穴に、左手の拳部分だった所を突っ込む。穴の中で腕とコンテナが、構造に基づいてドッキングを始める。

続いて、左足のふくらはぎ部分から、二方向の地面に向かって鋼の棒が伸びる。

いわゆる三点支点法を片足一本で行う。

そして、腕に纏っていた漆黒の狂気がコンテナに広がる。

そして、コンテナに積まれたものが俺の腕に……

「まさか弾倉庫！？ 撃たせてたまるかッ！！」

お袋はコンテナの正体に気づいたらしい。  
包丁を振り、幾重もの斬撃を放ってくる。

「邪魔すんなボケェ！！」

その斬撃を、正面に黒炎のような狂気を大量に放って相殺する。

「チッ、これで串刺しになりなッ！！ 空貫弾！！！！」

斬撃が効かないと気づいたお袋は、手に持った針をさっきと同じように投げてきた。

空気を貫きながら迫ってくる巨大縫い針。

さらにその針の後ろから、お袋自身が包丁を振りかざして迫ってくる。

この状況を打破する方法はあるか？

煉獄焔砲を解除して針を回避、お袋の包丁を白刃取りする……

…ダメだ！

針を避け切れずに貫かれるか、包丁に真っ二つにされるイメージし

か想像できないッ！！

こうなったら…

《クククツ…分カッテンダロ？ 相棒》

…分かつてるさ。

フリーキンダ・ベル

輝災禍鈴の効果がもう切れそうだってことも。

体にガタが来てるってことも。

…これが決まらなかつたら、俺の負けは決定だってことも。

《ソンドケ分カッテンナラ、死又覚悟が出来タノカ？》

いや、俺は死ぬわけにはいかない。

俺は死ぬまで生きることを諦めない！

《…知ツテタカ相棒。ソコマデ生ニスガルコト自体、狂気ダツテコトヲ》

なら、俺は今も昔も狂気の塊ってわけだ。

…面白いじゃねえか。

《面白イネエ…ヤツパ相棒二八モット楽シマセテ貰ウコトニシヨウ  
…!!》

…なら、もつと力を寄越せッ!!!

《イイネエ! 強欲コソ最高最大ノ狂気ダ!! 俺ノ狂気ト相棒ノ  
狂気デ、描イテミヨウゼ酒肉池林ノ地獄絵図!!》

「…グッ!?!」

さっきと同じように、体が芯から熱を発する。

呼吸は激しくなり、心臓の鼓動が激しく高鳴る。

…しかし、苦しくはない。

むしろトランス状態の如く気分がいい。

さっきは狂気のベクトルが違ったため拒絶反応が出た。

…二つの狂気のベクトルが一緒になった今、その方向は決まってい  
る。

迫り来る針…いや、その後ろにいるお袋を見据えながら、狂気に包まれたボロボロな右拳を強く握り締める。

「俺は生きるために…」

《俺八楽シムタメニ…》

右拳に纏う狂気が一層強く、燃え上がるように大きく揺らめく。

「立ちはだかる敵をすべて倒す!!」

《目ノ前ノモノ全部破壊スルゼ!!》

俺は拳を突き出す。

拳と針の衝突によって、衝撃破が周辺に広がる。空気が吹き飛び、立っている地面が大きく歪む。

「生身の拳で白縛破迅をツ!? いくら狂気を纏ったって無茶だ!」

お袋が針の後ろで衝撃破に耐えながら叫ぶ。

…その通り。

無茶苦茶なことしてるさ。

「…グガアアアアアアアアアア！」

《チツ！　コノタイミングで薬ガ切レタカ》

輝災禍鈴の効果が切れ、身体中に殺人的な激痛が流れだす。あまりの痛みに意識が朦朧とするが、意地でも踏み止まる。潰された右足が、まるで灼熱の鉄板をゴリゴリと押しつけられているような痛みに襲われる。

でも、一番ヤバいのは右腕だ。

腕の骨が次々と粉碎されていくのが、骨を直接ハンマーを打つ叩かれるような衝撃と激痛を伴うことで分かる。

正直言つて、この腕はもう持たない……

《相棒！！　分カツテンナ！！》

…ああ、分かつてる。

俺は右腕に狂気を集中させ、その右腕に纏う狂気の密度を限界を超えて無理矢理引き上げる。  
その腕の周りは、漆黒を超えてドス黒い暗黒と言つべき色になっていた。

「息子ッ!? そんなことしたら…!!」

そして、右腕は許容力を超えたものがする反応の一つを起す。

《ヒヤヒヤヒヤ!! 芸術八爆発ダ!!》

漆黒の爆発。

表現しきれない激痛と共に、骨肉がバラバラ引き千切られ、血の臭いが一瞬で周りに広がる。

その衝撃は、針を破壊したり、足で固定された俺の体を吹き飛ばすほどでもなかった。

…しかし、接していたものの軌道をずらすには十分だった。

さっきまでの針は、斜め上に軌道がズレて、空の彼方に飛んでいく。その様子に唾然とするお袋。

…そして、俺の左腕の準備には十分過ぎる時間が経っていた。

「…AGM-144L『Longbow Hellfire』  
Modular Missile。通称『Longbow Hel  
ウ・ヘルファイア  
lfire』は本当の意味で『Fire And Forget  
撃ちっ放し』を実現した…」

限界を超えた痛みは、俺の意識を覚醒させ、周囲状況の理解速度を急激に上昇させる。

…このミサイルはコンテナから弾が連続で装填されるため、コンテナの方に靈力で弾を生成すれば、装填の手間などが省けて、ほぼ無限連射が可能になる。

そして、武器が手放せないお袋にこの連射は避けきれない。

それに…

「…アンタってやつはまったく…こんな芸当どこで覚えたんだい」

お袋は負けを認めたようにため息を吐く。

その体には、地面から伸びた赤黒い鎖が何重にも巻きつき、まるで十字架に磔はりつけられたキリストのような姿をしていた。その鎖で包丁も束縛されて、得意の斬撃も放てない状況だ。

《ケケケツ！ イイ的ノ出来上がりダゼ！！》

…右腕を爆発させた時に飛び散った骨肉や血には、多くの狂気と一緒に霊力が含まれていた。

その飛び散った狂気が、霊力を使ってお袋を拘束する鎖を生成した。俺の狂気が勝手な行動してくれたが…ずいぶんいい仕事をしてくれた。

《後八、目ノ前ノ的ヲ思ウ存分撃チマクツテ、消シ炭ニシチマイナ！！》

ああ、分かってるぞ。

「お袋…覚悟はいいか？」

「ああ、立派とは言えないけど、息子がいい男に育ってるようですよ。良かったよ」

「アンタも相変わらずいい女で最高の主婦だよ」

「…お世辞も上手くなったみたいだね」

「世辞じゃねえ。俺にとっってお袋は最高にいい女で、親父は最高にいい男で、アンタ等は世界一の夫婦だ」

「…じゃあ、その夫婦の子供は最高によくできた息子だね」

「フツ、上等だ」

似たようなやり取りに、お袋と俺はお互い不敵に笑う。  
…最後の最後になって、たわいもない会話が出来た。

「…息子。アンタには辛い思いをさせたな…本当すまなかつ…」  
「そういう話はナシだ。らしくもないことするな」  
「…分かった。なら一言だけ、遅くなっただが私からの遺言だ」

お袋は真剣だった顔を笑顔に戻し…

「お前は純粹すぎる。穢れた社会に真つ正面からぶつかってくことしか出来ない不器用なやつだ…だからこそ穢れるな。大切なもののために不器用に生きて、大切なものために不器用に死にな」

その言葉を一字一句忘れないように心に刻む。  
しかし…俺がお袋と戦う前に黒ヘルが言った言葉に近いな。  
似た者同士なのか？

「…てか、一言じゃねえじゃん」  
「いやあく私も不器用だからね。言いたいこと言うのは一言じゃ無理だ」

お袋は世界最強に相応しい、最高級の笑顔を俺に向ける。

「まあいい、遺言は受け取った。これでサヨナラだ。親父にもよろしく伝えとけ」  
「ダイちゃんには伝える必要ないよ」  
「……………」

…ついでに、この両親の汚点は親父の女好きとお袋の馬鹿力と…お互いを『ダイちゃん』『シンちゃん』で呼ぶ合うようなラブラブっぷりだ。

親父は時々女遊びをしてたみたいだが、お袋の方はそりゃもうゾッコン。

親父のことも、一目惚れして数日後に半脅迫で結婚にまで持ち込んだらしい。昔、その話をしてた親父は、メチャクチャはにかんで

いた。

…このバカ夫婦が。

「そんなことはいい、私の屍を越えて行け！！」

「…言われなくても飛び越えてやる！！」

俺は容赦なく標準をお袋に合わせる。

この戦いの幕を下ろすために…

「千リユースニル地獄城絵図モード発動……………ヘルファイア・アンド・フォーゲット煉獄女神乃業火！！！！」

…俺は引き金を引く。

お袋に向かって戦車さえ破壊する兵器を容赦なく撃ち続ける。

体にはかなりの反動が来るが、足の支えによって倒れることはなく、目標と着弾地の誤差はほぼゼロだ。

弾が着弾する度に、空が震え地が揺れる。

目の前で起こるのは、ただ純粋な破壊のみ。

「お袋………ありがとうよ」

俺の言葉は爆音に飲まれ、頬を流れる一筋のぬくもりは、爆風によつて吹き飛んでいった。

S U I C I D E 2 2 〱 親子戦争 死・終焉乃刻〱 (後書き)

やっと親子喧嘩が終了……飽きずに呼んでくださった皆様  
に感謝です (激涙)

S U I C I D E 2 3 〳 サイナライ

人も含め全ての生物は、生存本能に純粹である

壮絶なるお袋との戦い…

俺は過去を掘り返し、狂気に飲み込まれながらも、その偉大な主婦を倒すことが出来た。

ひとまず足の支えを解除、煉獄焰砲を左手の状態に戻す。

《……疲レタ。俺ハ寝ルゼ》

その声と同時に、纏っていた狂気が一瞬で四散する。  
黒く染まった左側の髪も白く戻り、逆立っていたのが嘘のように垂れる。

「…で、ここはどこ？」

俺は真っ白な空間に立っていた。  
いつ移動したなんて分かんない。  
お袋に着弾さんの夢中で周り見てなかったし。

…まあ、原因は分かり切ってるけど。

「いやあ、お疲れちゃん。結構ボロボロだブエ!？」

取りあえず、目の端に原因物質が映った瞬間、反射的に左手でフックを放つ。

「…グッ」

天地が回って逆転する。

俺は拳を適当に放ったせいで、バランスを崩して仰向けにぶっ倒れた。

だけど…痛みがない。

今気づけば左足はボロボロ、右腕にいたっては爆発で吹き飛んだのになんともない。

「…ムリすんな。俺の空間から解除したから痛みはないが、魂自体はかなり傷ついてる。回復するまで無理しない方がいい」

「…ウツセーよ」

俺の拳でぶっ倒れた黒ヘルから気遣われるのはムカつく。

…が、痛みの代わりに心身を襲ってくる疲労感が俺の体を動かそうとさせない。

「…ご苦労さん。お前は母親を超えた。これで術は無効化されて、お前は望み通り現世に戻る」

「『ご苦労さん』じゃねえよ。マジで死にかけた」

右半身の殆どが潰されたし、狂気にも飲まれかけ、左手の忌々しい兵器まで使った…俺はギリギリだった。

けど…

「……それに、俺は『本当の』お袋を超えてない」

お袋は世界最強の主婦。

家庭を支える『主婦』に、型や武器の制限はない。

その肉体と精神が主婦の刀になり盾になる。

「……？ いまいち意味が分からないんだが？」

「……お袋が得物を出すつてことは、『このぐらいの力なら楽しめるだろ』つて計算がされたからだ」

あの巨大包丁は確かに超強力だ。

しかし、お袋の戦闘スタイルは完全接近戦型のファイター。

むしろ、その存在自体が最強のお袋にあんな巨大な武器などはお荷物に近い。

…俺が勝ったお袋は『楽しむために自分にリミッターをつけたお袋』なのだ。

もし、お袋が武器を出さずに拳だけで戦ってたら、俺の負けは目に見えていた。

「…俺はお袋の予想を超えただけだ」

結局、俺はお袋にはかなわないうつてことだ……

「…別にいいじゃねえかよ」

「よくねえ」

「いや、別にいいことだ。今回の目的は母親の分身を倒して『術を解く』ことだ。目的は達成したんだし、今は予想を超えられただけで十分だろ」

「……………」

黒ヘルの言うことにも一理ある。

…それに、俺は心のどこかでお袋達を恨んでいた。  
勝手に突っ走って俺を残して死んでいった二人を…

それと同時に後悔していた。

…俺が間接的に二人を殺したようなものだから。

今まで引き摺って来たすべての未練や恨み、そして罪悪感。

お袋との戦いは、そのすべてを吹き飛ばしてくれた。  
親父の分までしっかりと。

「……………まっ、そんなこんなでこれで俺とはお別れだ」  
「文脈が分からねえが『自殺願望のない俺に憑いてる意味がない』  
ってことだろ」

「この坊っちゃん相変わらず理解力があるねえ…っ」と

動けない俺に対して、黒ヘルは立ち上がり、俺を見下すような姿勢になる。

それでも見えないヘルメットの中身って……ん〜ミステリアス。

「自殺屋の癖に俺を生かそうとすなんて…クビになっても知らねえぞ」

「ハッ！ クビが怖くて仕事時間中にキャバクラなんて行ってられるかつーの」

「いや、仕事中はムリだろ」

「気にしない。おーるおーけー」

黒ヘルの口元が愉快そうに歪む。

…俺の口も人のことは言えないだろう。

「お前が現世ですべきこと…分かってるよな？」

「ああ、まずはひとしきり暴れ回って…それから、大切な人達の一人を助けなきゃな」

「分かってんならそれでいいさ」

過去の俺は自分が死ぬこと中心に生きて。

今の俺は周りの人達を護るために生きる。

未来の俺は最期を不敵に笑って迎える。

一度は捨てる気だった人生…

少し無茶をするかもしれないねえが、汚泥がぶ飲みしてでも生きてやるさ。

「ダチ大切にしろよ」

「分かつてる」

「ムダ死にするなよ」

「分かつてる」

「…んじゃ、暫く右腕&足は使えないから気をつけろよ」

「分かつて… ツはあ！？ 肉体じゃねえから大丈夫じゃねえのかよ！」

俺は黒ヘルの言葉についつい声を荒げる。

「無理言つなボケ。足は複雑を超えて粉碎骨折、腕にいたつちや爆発で消滅… 真慈の莫大な霊力がなきゃ、完全不随になってたな。それでも完全回復に最低一カ月半かかる」

… 黒ヘルに言われて、俺は自分の体（正確には魂）のことを考える。

・ 擦り傷切り傷は数え切れず。

・ 右足は骨が見事に粉々。

・ 右腕は… 吹っ飛んだ。

確かに… 現世だったら助からなかったな。

「それに、出血だって既に危険値を超えてる。霊力を垂れ流してたようなもんなのに… お前の生命力は恐ろしいな」

「ウツセー。台所の漆黒帝王なみのテメエには負ける」

でも、普通なら大量出血で死亡決定だな。

今現在、俺の傷が出血してないのも、傷口の血が狂気によって固まってるからだ。

……おっ、いいこと思いついた。

おい狂気、ちょっと起きろ。

《……ツタク、俺ダツテ疲レテンダヨ。人ライタワレ相棒》

いいじゃねえか。

制御は俺がするからちよつと寄越せ。

《分カツタヨ。ヤルカラ暫ク寝サセロ》

サンキューな。

《……ナンカ、受け入レラレテカラ相棒八扱イガ難シクナッタ》

そりゃ、俺も生きるための狂気だ。

似た者同士は相性悪いんだよ。

《ケツ：クダラネエヨ相棒。俺八寝ルゼ》

ああ、永眠でもしとけ。

「…これでどうだツと」

俺の腕の傷口から黒いオーラが流れだし、ある形を形成していく。そしてそのオーラが体を下に這っていき、右足全体を包み込む。

「!?!? なんだそりゃ!?!」

「ん？ 俺の狂気だけど」

黒ヘルにメチャクチャ驚かれた。

俺はため息を吐いて立ち上がり、黒ヘルと真つすぐ向き合う。  
もちろん、左半身の手足だけじゃ人は立てない……

「予想通りだな。狂気で右半身の代わり出来るじゃん」

「…………お前は何者だ」

「須千家真慈ですけどなにか？」

黒ヘルはまじまじと俺の右手足を見てる。

…俺の右足には狂気の黒炎が絡みつき、右腕があつた部分には真っ黒な狂気が腕の形をしていた。

俺はただ、ボロボロの右足を補強して、なくなった右腕を狂気で代用してみただけだ。

「これで、手足が治るまで動かせるだろ？」

「ん？ ああ、それなら霊力も含まれてるから、現世の手足も大丈夫だろ。…でも、その状態じゃ現世時間で二週間が限界だな」

「そんだけもてば十分さ。残りの一カ月は小夜の気持ち进行を味わうさ」

「…お前、霊力と狂気の使い方なら親を超えてるな」

「それほど嬉しくない誉め言葉ありがとよ」

あんな超人×2を超えてる…………素直に喜べないな。

やっぱ、あの二人は一生超えないほうがいい壁だ。

俺の中で永遠の理想でいてもらおう。

「…じゃッ、そろそろお別れの時間だ」

そう言った黒ヘルは、なにもない空間からいつもの鶴嘴を取り出す。

「ふっ、感動なんて欠片もない別れだな」

「感動なんて無用だ、男同士の涙なんてムサ苦しいっいたらありやし

ない」

「フツ、言えてるな」

鶴嘴の鉄部が、純白から術の発動を意味する漆黒に染まっていく。

「これから、この空間と共に俺がお前にかけたすべての術を解除する」

「いいのか？　もしかして、気が変わって自殺するかもしれねえぞ」

「お前の瞳は死んでねえし、しつかりと先を見据えてる。お前を支えるダチ公がいる。そんな奴は自殺なんかしねえよ」

「すげえ洞察力。さすが自殺屋の黒ヘルさん」

「…今更だが俺は安全第二だ。出来ればダイチャ…」

「呼ぶかボケ」

んな名前で呼ぶわけねえよ。

「あんたは黒ヘルだ。名前で呼ばれたきゃその被ってるものとして面見せろ」

「！？　お前まさか」

「そのまさか。気づかないとでも思ったか？」

周りは鈍感って言うけど、そうでもないんだなこれが。

…気づいたのはついさっきだけ。

俺は黒ヘルの様子をじっと見つめ、俺の言葉への返答を待つ。

「……………サイナラ」

「いや待てよッ!？」

俺の反論虚しく、黒ヘルはいそいそと鶴嘴を振り、俺は鶴嘴から放たれる光に飲み込まれた。



S U I C I D E 2 3 サイナラ (後書き)

これから、なるべく土曜日に更新することになります

S U I C I D E 2 4 〱 天下に還りし死に神〱

恋とは恐ろしいものである

暗い闇の中、身体を感じるがままに先へと進む。  
数え切れぬ戦火に燃やされた心が、その場所を求める  
そこは自分が帰るべき場所……

『ソ○モンよ…私は帰ってきた!!』

霧のかかる意識の中、俺は無理矢理目を開く。

クソ黒ヘルめ、逃げやがって…

てか、なんだったんだあれは。

巨大な機体に乗ってるポニーテールの渋いオッサンが見えた…

てか、ソ○モンってドコだよソ○モンって。

そんな自問自答をしているうちに、意識の霧が少しずつ晴れてくる。

状況を確認すると…

- 1、俺は小さな子供を抱き締めて仰向けに倒れている。
- 2、この周りには俺と少女の二人だけ。
- 3、どうやら俺は落下した時間にちゃんと戻ったようだ。
- 4、ちよつとだけ体が痛むのは、仕方ないこととする。
- 5、てか、頭から真つ赤な血がドクドク…いや、ドバドバ出てるわあ。

……よし、俺は問題ないな。

それよりも俺の腕の中でガクガク震えている少女の方が問題だ。

「おい、お嬢ちゃん。大丈夫か？」

「ヒッ……生き……てる？」

俺の声に反応した少女は、顔を上げて俺を驚き60%、恐怖40%の顔で見る。

そんな驚かなくても恐がらなくてもよくねえか？

「ああ、お嬢ちゃんも生きてるし俺も生きてるぞ。それより痛い所はないか？」

「…だ…いじよ…うぶ……………ヒッグ…」

「ったく、…あんま泣くなよ」

俺には泣く人に対する対処法は分からん（麻依子を除く）。

「二人とも大丈夫なの！？」

急いで駆け降りてきたらしい浅尾が、息を切らしながらこっちに近づいてくる。

「ああ、二人とも無事だ」

「ドコが！？」

浅尾+いきなり泣き止んだ女の子に、おもいきりツッコまれた。

「俺もこの子も生きてる。イコールおーるおーけー」

「お兄ちゃん。せっかくの綺麗な白髪が血で真っ赤だよ？」

「真紀ちゃん…だっけか？ 白髪のことはいじらないでくれないか？ 結構コンプレックスなんだ」

「大切なのはそこじゃないよ？」

なんか、泣き止んだら口が達者になったなこのお嬢。

……浅尾の娘というのも頷ける。

「そんなことより！！ 早く保健室…いや、救急車を！」

浅尾はだいぶ焦った様子で携帯を取り出し、病院への無料タクシーとして使われてしまう車呼び出そうとする。  
病院嫌いだし……そうなるとやっかいだな。

「ゴメン。ちょっとどいてくれないか？」

「あっ、うん」

俺は俺の上に乗った少女にどいてもらってから、スッと立ち上がった……

「ハイ、ケータイ没収」

「なっ！？ なにするの！！ 早く返しなさい！！」

「センサーがこれから二十四時間あらゆる電話の1と9を押さずに、病院の半径一キロ以内に入らないって、その命と一千香港ドルを賭けてくれるならいいですよ？」

「そんなバカなこと言ってないで返しなさい！！」

「まったく、冗談の通じない人だなあ。  
……じゃあないなあ。」

「真紀ちゃん。君のママが救急車とかを呼ばないように見張っててくれないかな？」

「なんで私なの？ お兄ちゃんは私を助けてくれたけど、私はママの味方だよ？」

「どんなことがあっても親の味方……いい子だなあ。  
でも……」

「俺は君のママの敵じゃないし悪いことはしない。それに……」  
「それに？」

俺はその穢れのないガラス玉のように透き通った瞳を見つめる。

「…君の魂は本当に綺麗だ。そんな君を俺は信じたいんだ」

瞳の見れば分かる。

どんなに魂を偽りで塗り固められようが、純粹な魂は瞳を輝かせる。  
…自分の言ったことに少し恥ずかしくなり、俺は少しはにかんで誤魔化す。

そして俺の顔を見ていた少女は一瞬固まって……

ボンッ

頭から爆発音。

その頭からは蒸気らしき白煙が上がっている。  
大丈夫か……？

「…っ／／／」

そして少女は急に俯いてしまった。

…俺の笑顔って目を背けたくなるものなのか？  
もしそうだったら、シヨックで一生立ち直れないぞ？  
さっそく生きることには挫折するぞ？

「……タイ」

「ん？」

俯いたまま喋る少女の声はうまく聞き取れない。

「鯛？ 隊？ それともThailand?」

「…ケータイ返して！」

「あ、ハイハイ」

取りあえず浅尾から奪った携帯を、少女が突き出してきたその手に乗せる。

『「デメエら!!」これから騎馬戦が始まるZ E! 死亡覚悟で合戦<sup>グラ</sup>場に来いやッ!!」』

話の途中で、開会式の悪乗り放送者の声が学校中に響き渡る。

「んじゃ、頼んだよ真紀ちゃん」

俺は一暴れするために、二人に背をむけ急いでグラウンドに…

「お兄ちゃん! 真紀だよ!」

「へ?」

後ろから聞こえた予想外の声に、俺は首だけ振り返る。そこには顔を真っ赤に染めた少女が俺を見つめていた。

「ちゃん付けはイヤ。真紀って呼んで」

ああ、ちゃん付けが恥ずかしかったから怒ってるのか。

なら、顔が赤いのも納得だ。

「…ゴメンゴメン、分かったよ。真紀、あとは頼んだ」

俺は今度こそ、一暴れするためにグラウンドに向かって返事も聞かずに駆け出した。

私は二人のやりとりをずっと見ていた。

話は一部聞こえなかったけど、真紀に携帯を預けた須千家君は、グラウンドに走り去って行った。

真紀は須千家君が庇ってくれて無傷だけど、彼は目視しただけでもかなりの傷を負っていた。

早く救急車を呼ばないと…

「真紀。ママに携帯返して？」

私は真紀の背中から声をかける。

私の声に反応した真紀は、こっちに身体ごと振り返って…

「なにに使うの？」

「もちろん病院に電話するのよ」

「…じゃあダメ」

「えっ!？」

今までこの子を育ててきた中で、初めて反抗された…

反抗期かしら…いいえ、まだ反抗期には早い。

「真紀？　ママの言うことが聞けないの？」

「ん〜。私はママの味方だけど…やっぱりダメ」

「それは彼が命の恩人だから？　だったら彼のためにも…」

「うづん。違つよ」

助けてくれたからじゃないの？

……二人にはさっきまで面識はなかったはず。  
他に私よりも彼を優先する理由は……

「……ママ、あのお兄ちゃんの下の名前教えて」

「えっ、須千家君は……確か真慈だけど」

「ふん。シンお兄ちゃんかあ……」

そう言つて惚けた顔をする真紀。

その顔はまるで……

「まさか真紀！ あなた須千家君のこと……」

「ふふふっ……シンお兄ちゃんって年下好きかなあ？」

真紀は両手を胸の前に持つていき、どこか遠くをキラキラした瞳で見ている。

これは完全に『あれ』……

私の目の前の愛娘は、教師生活中に何度も見た『恋する女の目』になつていた。

相手は……言つまでもないだろう。

でも、今のうちに……

「…ダメ！ 約束守ってシンお兄ちゃんにほめてもらうんだから！」  
「うっ」

惚けてる間に携帯を取り返そうとしたら、初めて娘に凄く頑固な態度をとられた。

「ゴメンね？ ママは大好きだけど、シンお兄ちゃんも大好きなんだ」

「……………」

目をウルウルさせて娘に迫られた私は、生徒の怪我よりも娘の願いを叶えることを優先するしかなかった。

取り合えず、俺はグラウンドに集まった自分達の仲間の近くに駆け寄る。

そして、すれ違う人達全員が俺を見て驚愕の顔を見せる。

「あつ真慈遅い……って、お前髪染めた？」

「そうそう、この短時間で血のように真っ赤な髪に……」

「ってそれ本物の血じゃない！！なにやってるのよ……！！」

亮佑と話していると、麻依子が大声を上げながら、どこからか取り出した医療道具で俺の傷を神業で治療し始める。

「もう、またムチャして…治療する方の身になってよ！」

「すまないな。ちよつと人助けをしたらちよつと屋上からダイブして、主婦と死闘を繰り広げてたらちよつと怪我した」

「いや、意味分かんないから。言い訳なら、もう少しまともなこと言いなよ」

いちよう本当のことなんだけどな…

いくら言っても信じてもらえないだろう。

「その怪我の様子だと後頭部を打ってるけど…平然としてる。ゾンビにでもなつたか？」

「…頭腐つてんじゃないかねえのか○泉洋？」

「いや、そのテンパ男の名前はいろんな意味でダメだろ！そして俺の名字は大西だし、『洋』の読み方は『ヨウ』じゃなくて『ヒロシ』だ!!」

…こいつはいろんな意味でスルーしとく。

「真慈、無理するな。その怪我じゃ騎馬戦に出るのは難しいんじゃないのか？」

「…シン…見てるだけで痛い…休んだほうがいい…」

軽く騒いでいると、麗花先輩が小夜の車椅子を押して来て、二人とも心配そうな表情で俺を見る。

そんなに心配しなくてもねえ…そろそろ終わってるだろうし。

「…麻依子OKか？」

「…はい、応急処置は終わったから十分行ける。だけど、今日帰ったらちゃんと私の診察受けなさいよ」

「了解ツと…これで俺は心配しなくても大丈夫だ」

俺の主治医様様がOKサインを出してくれた。

それに…

「『全員参加』。…それがこの体育祭のルールだろ？」

「……ふっ。生徒会長たる私がすっかりルールを忘れていたようだ」

会長は俺の言葉の意味が分かったようだ。

そして俺は、軽く前かがみになって小夜と目線の高さを合わせる。

「俺は大丈夫だから。一緒に最後まで楽しもう」

「……………うん」

小夜も理解完了だな。

後は……

小夜から離れ、俺は戦友の方を向く。

その二人は呆れたように笑みを浮かべていた。

「おっと、僕達には説明無用だよ」

「一緒にドンパチ楽しもうぜ！」

亮佑と洋は、俺の言いたい言葉は百も承知らしい。

「つたく、流石は兄と弟フェルつてことか。」

俺は今一度、呼吸を整え俺は心からの言葉を紡ぐ。

「紡ぐ…いや、そんな綺麗なものじゃねえ。」



ええ！！！！」

3年G組 田所さん

「えっ騎馬戦……須千家君ね……ポッ」

1年D組 胃潰瘍君

「だ・か・ら！！ 僕の名前は大西洋だ！」

運動部の方々

「ぜひあの三人を我が柔道部に！！」

「いや、ぜひ彼等はバスケット部に！！」

「あのパワーはラグビー部にいてこそ生かされる！！」

「……いや、彼等は俺達の部に……」  
「……etc」

2年D組 戸野生徒会長

「この勝利は全員の協力なしにはなかった。一緒に戦えた仲間達に私は心から感謝する」

1年D組 笠井さん

「……シン……かつこよかった……」

戸野高校理事長 戸野彩華

「みんなよく頑張ってくれてよかったわ……結果は分かり切ってたけど」

後日情報

負傷者 94名

死者 辛うじて0名

(D組と対戦したA・C・F組の負傷者が91名)

こうして、傍迷惑な体育祭は幕を閉じた。

S U I C I D E 2 5 〳 過ぎ去りしもの、迎えるもの〳 (前書き)

少し早いですが、新年です。

SUICIDE25〜過ぎ去りしもの、迎えるもの〜

108の煩惱は、神の力でも無くすことは不可能である

時は夕暮れを超えて、夜闇が空を満たす頃。  
俺はキッチンに立ちながら、正方形の箱に食品を詰める。

「…シン…紅と白…どっち勝つ？」

「ん？ 俺に聞くな。俺はあんま歌好きじゃねえんだ」

小夜は、テレビから目を離さずに俺と会話する。

「仕方ないよ。真慈本当に音痴だからね」

「あれは鼓膜への暴力だぜ」

「いや、あれは決戦用音波兵器だね」

…そして、三人分の声が聞こえる。  
ノイズ

「……黙れチビ、バカ、全身生殖器。俺は興味がねえだけだ」

「チビ（バカ）って言うな！！」

「いや、俺の言われ方酷くなっ！？ 全身生殖器ってなんだよ！！」

「……いや、だってそうでしょ」「」「」

「………もういいよ」

…今日は同居人の小夜以外にも、麻依子と亮佑、洋がいる。

なぜかって言うと……まあ、年越しを暇な奴らで騒ごうって話になつて、俺の家でパーティーってわけだ。

亮佑とは分かるとして、麻依子は家族がいるし、洋はナンパに走りそうなのに、なぜか大晦日だけはいつもここに来る。

ついでに、今用意してるのは明日のためのお節だ。

「それにしても……全部手作りのお節って今時珍しいよね。アタシの家も伊達巻とか蒲鉾かまぼことかはスーパーで買うよ」  
「お袋が昔から『主婦をナメるなあ!!』って作ってたからな。この時期になると、お節を作らないと落ち着かないんだ」

五日前程から煮豆やら栗きんとんの準備を始めてる時点で、完全なる習慣だな。

「…さて、これで準備完了っ」と

あれこれ会話してる間に、重箱の中に色とりどりの料理を詰め込み終わった。

「ほれ、余ったものはツマミにしていどうぞ」

「…待ってました!!」「」

俺が余りものをテーブルに置いた途端、テレビの前から速攻で料理に群がる三名のハイエナ。

「やっぱりおいしい!! 豆嫌いなアタシでも真慈の煮豆は食べられるんだよね」

「ヤベーぜこれ!! 全部ウメエ!!」

「真慈は食材を選ぶ目も一級品だね。この数の子と海老は見た目も味も最高だ」

「まったく、喋りながらももの食うんじゃねえよ。節操ねえな。」

「……………」

そんなハイエナ達に比べ、テレビの前から動かない小夜。…こっちのほうの問題だな。

俺はキッチンに戻り、冷蔵庫を開ける。

そこには、ハイエナ達が群がる前にあらかじめ分けておいた料理が入っていた。

その中から好き嫌いの激しい小夜でも食べそうな二、三品を小皿によそる。

そして、テレビの前に居座る小夜に持っていく。

「小夜。お前の分だ」

「…私…の分…?」

「そうだ。あのハイエナが群がったら、お前は絶対諦めると思ったからな。一緒に住んでるんだしそれ位の配慮はしてやるよ」

「……………ありがとう」

小夜はこっちに顔を向け、伊達巻を手掴みで取って遠慮気味にちよつとだけ食べる。

「……おいしい……」

「当たり前だ。俺が作ってんだからよ」

「……うん……」

小夜の顔からは、喜びの感情がはつきりと読み取ることが出来た。作った側として、三人の言葉よりこっちの方がうれしいな。

「真慈、お客さんみたいだよ？」

「ん？ ああ、分かった」

小夜と話してたため、チャイムの音を聞き逃していたらしい。

「じゃ、小夜。自分で持ってきてくれ」

「……分かった」

取り合えず小夜に小皿を渡し、来客を迎えに玄関に向かう。

「どちら様ですかあ……って、来客は一人の予定だったんだけどな」

一様、俺は会長補佐という立場なんで、生徒会長である麗花をこの場に招いてみた。

それに、体育祭の時に小夜のことを世話してくれたらしいので、そのお礼もかねてだ。

なのに…

「…すまない真慈。細心の注意を払ったのだが…つけられてしまった」

「かたいこと言わないのお。みんなで楽しみましょ」

「シンお兄ちゃん！ 遊びにきたよ！！」

上から麗花、彩華、真紀である。

麗花と彩華は分かるが、何で子供の真紀がここに？

…まあ、仕方ないので玄関の扉を開ける。

「失礼する」

「ヘルう、久しぶりい」

「お兄ちゃん遊ぼー」

取り合えず、突撃してきた後者二人の頭を掴んで、本体への衝突を避ける。

「どうぞ麗花さん。…そして二人。しょうがねえから入れてやるけど、狭い所で暴れるな」

「ええ」

「彩華は酒の飲ませねえし、真紀は浅尾の所に返すぞ」

「はあい…」

なんか、こいつら似たもの同士だな。  
まあ、彩華の精神が低年齢なんだろうけど。

……それにしても、四人目の来客はずいぶん素直じゃないみたいだな。

「おい、ここは託児所じゃねえんだから、保護者もいねえと預かんねえぞ！」

「おい、真慈なにを外に向かって叫んでるんだ？」

「まあ待つてろ。…そのまま外で年越す気かあ！」

麗花を押さえて、俺は外の暗闇に向かって大声を上げる。  
すると、電柱の影からバツの悪そうな顔をした白衣女が現れた。

「浅尾先生!？」

「遅いわよお、サクちゃん？」

「ママ!？」

麗花と真紀は驚きの表情でその人物を見て、彩華は最初から分かっていたらしい反応を見せる。  
てか、サクちゃんって……

「…いや、あの、その、えっと」

「いちいち動揺すんな。どうせ、娘が心配でついてきたんだろ？俺も鬼じゃねえ。中に入って甘酒でも飲みな」

「……お言葉に甘えることにするわ」

浅尾は諦めた顔で、玄関に入ってきた。

「んで、いつの間にか右腕に引っついてるこの子だけリビングの連れてっくれ」

「リビングはこの先ね…分かったわ。ほら、真紀も諦めて離れなさい」

「うーいじわるう」

浅尾に真紀を預かってもらって、右手が開いた。  
残りは…

「麗花さん。いつの間にか左手に引っついてるこいつを預かってくれ」

「……………」

……………あれ、反応なし？

左手に絡みついてた彩華を外してもらおうと思ったら、麗花は何も反応せずじっと彩華を見てる。

まるで、宿敵を見るような瞳…

「麗花サン？ どうしましっ……………なっ！？」

その姿は一瞬で俺の視界から消え…

「……麗花さん。あなたがそんなことするとは思いませんでした」  
「わ、私だつて、やってもいいだろッ！　これでバ、バランスだつていいはずだ」

……いきなり消えたと思つたら、俺の右手に抱きついてました…  
テメエ等はコアラか？

「麗花も大胆になつちやつてえ…本気みたいね」  
「い、言つたはずだ。最後に勝つのは私だと」

右手には執拗にねっとり絡みつく姉の彩華。  
左手には恥ずかしそうに抱きつく妹の麗花。

「真慈はまだ？」

…そして、タイミング悪くリビングから近づいてくる足音。

「遅いよ真慈……姉妹丼の食事中？」

「消え失せる放射性セクシャルハラスメント物質……！」  
「ブベツ……！」

洋がウザイ発言をしたので、塞がった両腕の代わりに左膝で顎を打ちぬいた。

「……この仕打ち……グスツ、暴れ回っていい？ 泣いていい？」

「やってみる。しかし俺の敷地内で行ったら………殺ス」

「ゴメンナサイ」

洋は見事なジャンピング土下座を廊下でかましてから、リビングへと去って行った。

……で

「テメエ等二人はとつとと離れるやあああああああああ……！」  
「「キヤー……！」」

あれからなんとか收拾して、無事に年を越す準備が出来た。

と、言っても…

「…何だこの有様」

「みんな寝ちゃったね」

「……………お酒…すごい…臭い」

俺はキッチンの方でくつろぎながらリビングを見る。

我が家のリビングには、大量の死体…という名の酔い潰れ達が酒に

飲まれてブツ倒れてた。

最初は甘酒だったんだけど……家の酒蔵秘蔵のスコッチ、コニヤック、バーボン、ジン……などなど、<sup>スベリッ</sup>蒸留酒の嵐が吹き荒れた結果だ。

最初は彩華に無理矢理飲まされた浅尾が酔い潰れ、続いては浅尾が落ちたことで調子づいた亮佑と洋……

そして、酒の匂いだけで酔った麗花が倒れた。

真紀は子供だから眠くなつたみたいだ。

いちよう全員に毛布を被せてやったから、風邪はひかないだろ。

そして今生き残ってカウンターに座ってるのは三人……

飲んだのは果物酒ぐらいで、ほとんど酔ってない麻依子。

アルコールが苦手で、ノンアルコールワインしか飲んでない素面の小夜。

そして……

「ヘルウー　　もっと飲みましょう」

……天下の酒豪、彩華だ。

こいつはさっきから蒸留酒をストレートでいってる。

普通だったら一口で喉が焼ける代物を、水のようにグイグイ飲み干していく。

……まあ、俺もその勢いに付き合ってる分、結構飲んでるんだけど。

「なにが飲みたい？」

「次はアクアビットお」

「分かった…にしても、あんたは底無しの酒豪だけど、妹の方は全然だな」

「しょうがないのよお。麗華はビールだって一口でバタンキューなんだもん」

俺は頼まれた酒と共に、輪切りライムと塩を渡す。

これは少しは喉をいたわれよってことだ。

「そういう気遣いもいいのよねえ」

「…家主として当然のことだ」

気恥ずかしさを誤魔化すために、グラスに入ったバーボンを軽く呷るあお

「……それにしても、足の方は大丈夫なの？」

「今のうちはな、…あと数日でダメになると思うから、全員に迷惑かけるわ」

「いいわよお、生きてるだけで十分なんだからあ」

「……本当に…よかった」

麻依子の言葉を皮切りに、四人の中だけで分かる会話が始まる。

…俺は三人にだけ、俺が一度死んだこと、そして生き返るまでを話した。

理由は、俺の狂気の効果が悪くて左手足が動かなくなった時に、周りにかける迷惑を最小限にするためだ。

彩華には車椅子を用意してもらったため。

小夜には同居人として迷惑をかけるから。

麻依子には家事を手伝ってもらったためだ。

信じてもらえるか心配だったけど、三人は笑いながら信じてくれた。

だから、三人は知っている。

…俺が生きたいと想ってる事を。

そのことを伝えた時、麻依子はボロ泣き。

明るく気丈な彩華や、感情表現が乏しい小夜までに泣かれたことはビックリした。

みんなは俺は死なないと言ってたけど、内心ヒヤヒヤしてたらしい。俺は一つのこと夢中になりすぎて、周りの人達の心を考えてなかったようだ…

「…さて、新年から難しい話はやめよ！」

「…もうすぐ…年越し」

麻依子が指差す先には時計があり、あと数分ですべての針が真上に上る。

「んじゃ、全員起こすか…」

「いいじゃない。せつかくいい気持ちで寝てるんだから、私達だけでカウントダウンしましょあ？」

「だけど……まあ、いいか」

四人だからカウントが半端だけど、たまには少数で楽しむのいいだろ。

「フォー！」

一年の晦つごもじが暮れる時…  
その時、世界は塵芥じんがいごと終焉を迎える  
その時、世界は浄らかな開闢を始める

「……スリー」

さっきまで過ごした世界は過去になる  
そして、今生きてる世界は未来になる

「トウ」

世界は『年』という世界で区切らずとも、回り続けるもの  
しかし、人は立ち止まらぬ刻ときに区切りをつけることにより、自分の  
中に新しい真つ白なページを作り、そこに道標となる夢を描く…

「ワン…って、テメエ等引つつくな!!」

そして俺は、七福神だろうがイエス様だろうが、相手はいとわねえ  
から心の底から願う…

「「「HAPPY NEW YEAR!!」」」  
「……イヤー……」

……今年という年が、周りの人達が幸せでいられる年であるように  
そして、そこで俺も一緒に笑っていられるように……

S U I C I D E 2 6 〱 諦めの教え人〱

情報と地の利を制し、戦力と人選に大差がなければ、万戦に負ける  
こと無し

俺は俺のしたいように生きる。  
文句は誰からも受けつけない。

これから俺はどんな汚い手を使っても、俺の周りの人達を守る。  
それは俺一人だけでもやり通すけど……

『 どちらY O 3 通信状況O K? 』

耳につけた無線イヤホンから聞こえる、俺を手助けしてくれる仲間の声。

「こちらH01 通信状況良好。事前作戦通り、プラン01Aを遂行する」

「いや、目標03、12の予定位置がM/26、D/05に変更されてる。僕としてはプラン01Aよりインパクトのあるプラン03Aを推奨するよ。どうする？」

「作戦会議の時に言っただろ？ 作戦指揮は任せたって。…F01、M01、R01にもその趣旨を伝えてくれ」

「了解。プラン03AのFirstシークエンスからNextシークエンスからに移行するタイミングは、僕が見計らって通信を再開するから、絶対聞き逃さないですよ」

「ラジャ。で、あと何秒だ」

「カウント10で突入して。健闘を祈る…いや、<sup>「コンプリート」</sup>完勝を望む」  
「望む必要はねえ。俺がそつするからな」

俺は通信を切り上げ、目の前に立ちふさがる扉を見据える。

「カウントスタート…10…9…8…」

…この先に俺の守るべき人がいる。

「5…4…」

大丈夫、お袋に比べれば今度の敵はカス共の集まりだ。

「…3…2」

俺は目の前のドアノブをしっかりと掴み……

「…1…GO!!」

俺は自分の世界のために、必要不可欠な欠片<sup>ピース</sup>を守るために、今話題の怪物<sup>モンスター</sup>たちに横槍ブツ刺すような喧嘩を売る事にした。

私は今、生徒会室にいる。

私はただの教師であって、この部屋に入ったことは教師生活で片手で数えられる程である。

そんな私がこの部屋に入ることになったのは……

「彼女のような教師に、私達の子供を教育する資格はないザマス」

そう発言しているのは、目が痛いほど豪華な装飾品をしている小太りな女性。

…この学校のPTA会長である。

私がかここにいるのは、この前の体育祭で、私と真紀がいる所を一部の生徒に目撃されたから。

「まったく、生徒の見本となるべき教師が、未成年時に出産してるとような人だったなんて……よく今まで黙っていられたザマスね！」

私に向かってこれでもかと罵声を浴びせてくる彼女と、その横に並んで首を縦に振る十数名のPTA役員たち。

……彼女の言う通り、十二年前…私は十五の時に真紀を出産した。私と同級生だった真紀の父親は、私の妊娠を知った時に何も言わず蒸発した。

両親にも反対されたけど、私は真紀を出産して、子育てと勉強を死に物狂いでした。

教員免許をとってすぐ、迷惑をかけた家と離縁して、今まで数年間二人で過ごしてきた。

…そしてこの学校に就職した時に、私はその事実を隠していた。

今の理事長にそのことがバレた時には、潔くやめようと思ったけど、理事長は私の事情を知った上で私を雇うと言ってくれた。

その期待に応えるため、そして真紀に不自由な思いをさせないために、私は必死にこの仕事を頑張ってきた。

477

「理事長も理事長ザマス。こんな人を雇っておいて私達の前に姿を現さないなんて…」

「高崎様。最初に申し上げた通り、理事長は多忙なため私が代理として出ているのです」

「……まったく、肉親と言えど生徒を寄越すとは…驚きザマス」

しかし、PTAとしてはそれが面白くないのだろ。

私の隣に理事長の代わりとしている生徒会長に突っ掛かってくる。

「まあいいザマス。あなたが辞めてくれれば、私達は文句ないザマス」

「……………」

私に鋭い眼光を向けるPTA達。

その瞳は『辞めると言え』と迫ってくる。

……確かに理事長に甘えてここまで来たけど、そろそろ潮時なのか  
もしれない。

真紀には悪いことだけど……私は疲れた。

私じゃない誰かに幸せに育ててもらえることを願うことに……………」

「失礼します」

間の抜けた声の後、突然の轟音と共に私とPTA達との間を、異物が  
が高速で通り過ぎる。

それは、この部屋の扉だと気づくのに時間はかからなかった。

なぜなら、轟音がしたほうを見たら、扉が抜けてしまった出入口だったから。

そして、その先にはこの学校の中で三つの指に数えられる問題児。その白髪が、凍てつく風と共に揺らめく。彼はいつもと同じ…だけど違う姿をしていた。

「鍵がかかってでたんで、ブツ壊させていただきました」

不適に笑う須千屋の左肩は、黒く光りを放っていた。

S U I C I D E 2 7 〱 救済の黙示録〱 (前書き)

『酒樽』 P T A 会長』 っ て 思 い な が ら 読 ん で く だ さ い

1 / 2 5 に 本 文 中 の 『 四 谷 』 の 文 字 を 『 戸 野 』 に 変 更 い た し ま し た 。

不 自 然 な 文 章 に な っ て し ま っ た こ と を お 詫 び 致 し ま す 。

S U I C I D E 2 7 〱 救済の黙示録〱

秘密を握られた人間ほど、弱いものはいない

取り合えず、作戦通り突入完了つと。  
さて、どーすっかな。

「な、なにザマス!? あなたは…」  
「あー、ハイハイ。扉はちゃんと弁償しますから心配ないです」

最初に目についたのはにケバケバしい酒樽みたいな人……あれPT  
A会長だな。

その酒樽の制止を遮ってその目の前に歩いていく。

「その腕はな、なんザマス!? そんな危険なもの早く外すザマス  
!!!」

酒樽はヒステリックな声を上げながら、俺の左腕を指差す。  
…外せと、言われましても。

「これ、俺の腕なんで簡単に外せないんですよ……」

腕を外す代わりに、右腕で肘部分の赤い十字架の中心を押す。  
すると、左腕全体の外装がパツカリと開き、中のワイヤーや配線が  
外に露出する。

その中に、人の腕が入るようなスキマはない。

「…分かってもらえましたか?」  
「……………」

これは、緊急時のメンテナンス専用の後づけした機能だ。その様子を見た酒樽は、口を金魚のようにパクパクしていた。てか、この部屋にいる麗花以外の人は、全員が同じ顔してるし。

取り合えず、開いた外装の一つ一つを手作業で閉じる。そして、しっかりと動くことを確認した後、その腕で左足のズボンを膝が見えるまで捲り、その足を酒樽の前の机に乗せる。

その行為と鉄製の左足を見て、さっきまで驚いていた人の目が更に見開かれる。

「俺の名は須千家真慈…地獄の黙示録の正当な所有者として、この集会の決定権が一方的な物と判断。よって須千家真慈は黙示録の第二の権限を執行し、この集会での発言権を取得する。無論、そちら側に正当な拒否理由が存在する場合、そちら側はこの権限を無効とすることが可能である……ってことで、文句ある奴は手エ上げる」

俺は、左膝部分の髑髏の額に彫り込まれた逆五望星を指差しながら、小難しいセリフをPTAの奴らに言い放つ。

……黙示録の第二権限。

それは『戸野周辺での会合や裁判等での一方的な決定や拒絶に対して、正当な発言権を得ることが出来る』

…この世には拳で解決できないことだってある。  
この権限はそんな時、拳の代わりに言葉を武器にする権限だ。

ま、使うのは今回初めてだけだな。

「……そ、そんな、ありえないザマス！！ アナタのような不良生徒が戸野の権限を……」

「不良生徒とは心外だな。この髪は染めたんじゃなくて地毛だ。まあ、信じなくてもいい……本物だと思ったら反抗した場合、それなりの制裁があるけどな」

「……………」

俺の言葉にこの場の空気は固まった。

何人も動けない沈黙。

それほど、この権利は驚異的なものなのだ。

「……………では、黙示録の権利を許可し、須千家真慈はここでの発言権を持ちます」



つつい普通に喋ったけど、ここは敵前。  
洋の言葉に、俺達は話を切り上げる。

「な、なんザマスその紙は！」

「生徒712人の署名用紙だ」

「違うよ。さつき5人も署名したから717人だよ」

… 第一段階、署名提出。

人の名前が権力になる方法。

その名前が多ければ多いほど力は大きくなる。

「この署名は浅尾咲耶教師の解雇に抗議するものです。生徒の九割がこの解雇を不当と認識している」

「なに言ってるザマス！ この教師は学生出産なんてことをしてたザマスよ？ そんな教師にウチの子を教えるなんてとんでもない！」

酒樽の言葉に、PTA達の威勢が良くなる。

… 同時に、怒りが俺の沸点に近づく。

元々プツンしやすい性分で、すぐ殴る癖は治ってない。

『… 落ち着いて。手を出したらその時点でアウトだ』

洋が俺の状況を察して、的確に指示する。  
分かってる…でも、今の俺は狂気を出さないようにするだけで精一杯だ。  
隠した右手を握り、下唇を噛んで精一杯押さえ込む。  
もし、気を抜いたら……

「…真慈」

怒りを抑えるために握り締めた拳を、暖かな何かが柔らかく包み込む。

それは、俺の中で暴れる狂気を動きを止め、俺を落ち着かせてくれる。

後ろを振り返ると、そこには小さいけれどとても強い幼馴染み…

「落ち着いて真慈……アタシがついてる」

そうだ。

俺はこんなところで挫けるわけにはいかない。

…ホント、ありがとな。

俺は感謝の気持ちでその手を握り返すことで麻依子に伝える。

「…へえ、アナタの息子さんはそんなに価値があるんですね」

「当たり前ザマス！ あの子は成績優秀で将来有望。アナタのような人とは格が違うザマス！」

『予定通りだね…F01の用意も出来たから3ndシーケンスに入るよ』

…2ndシーケンスで俺の仕事は『署名の提出』と『PTAの会長に息子の話をさせること』。そして次の仕事は、隙の出来た敵（PTA）に詰めの一手を食らわせること。

「んじゃ、その息子さんは今なにをしてるのか見てみましょうか。

麻依子、『アレ』を」

「はい」

「…は？」

酒樽の呆れたような声を無視して、俺は麻依子から『アレ』をもらう。

…まあ、『アレ』って言っても正体はワンセグ携帯だ。

ちよつと、受信できる電波を変えたT・C特製の改造をしただけだ。

早速、その携帯の画面を横に倒し、問題の電波を受信する。そこに映し出される映像は…

よし、ナイスショットだ。

「へえ〜。あなたの息子さんって万引きが趣味なんですね」

「……………ホホホッ！！　なに言ってるザマス！　あの子がそんなことするわけ……………」

「はいどーぞ」

「……………！！！？」

映像を見せた瞬間、酒樽は固まってしまった。

そりゃそうだ。溺愛してる息子が十字架に磔はりつけられてるんだからな。

『オイ！　テメエ本屋でマンガ万引きしただろ！！』

『ハ、ハイイ！！　僕がやりました！　ホント許してくださいッ！』

『…だ、そうだ。すべて自供したぜ』

…亮佑も無理矢理吐かせやがったな。

まあ、フルボッコにしなかつただけでもよしとするか。

「んじゃ、返してくださいね」

俺は固まっている酒樽の手から携帯を取り上げ、麻依子に返す。

「……こんなことする生徒にこの学校にいる権利はあるか？」

「……………」

酒樽は完全にショックで固まって、動かなくなってしまった。  
酒樽が崩れたことで、PTAの威勢は見事に下がっていた。  
……………あとは仕上げだ。

『3rdシークエンス終了。Finalシークエンスに移行。…これから僕の言うことを復唱して』

「と、その前に一つ言う」

『ちよつと！ ……まったく、一分以内に終わらせてよ』

洋の作戦を<sup>プラン</sup>遮って、俺は言いたいことを言う。

…最終段階が終わったらPTA達が意識を保っているか分からないからな。

それに……………

俺は後ろを振り向き、啞然とした顔をした我が担任を見た。

「オイ浅尾！！　ここで俺達は勝手にお前を助ける！」

俺が勝手に考えて、みんながついてきてくれた。

それは浅尾の迷惑かもしれない…が、そんなことはカスだ。

「この後は、この地から逃げようがなにをしようがかまわねえ！  
…だかな、テメエが朽ちる時、娘がテメエを自慢できる生き方して  
から死ね！！」

俺が部屋に入った瞬間、浅尾の目は死んでいた。

…それは、昔の俺を彷彿とさせる目。

自らの命を消そうとしてることを示唆していた。

…守らなきゃならないモノがあるのに、それを投げ出しちゃいけない。

「…さてと、次はこっちな」

浅尾に言うだけのことを言った俺は、PTA達の方に向き直る。

最初はギャーギャー言ってた酒樽の顔はすでに真っ青だ。

「モンスターペアレントの皆様方。…これを聞いてもアンタ等より  
立派な母親を攻められるかな？」

多分、今の俺は最高に悪い笑顔をしてるだろう。

なんせ、これから言葉一つで人の心を壊せるのだ。  
楽しもうじゃないか。  
Finalシークエンス『精神破壊と自然強迫』を…

∴ 20分後、PTAは浅尾咲耶教師の辞任を求める議案を急に取り下げた。  
審議が行われた生徒会屋でなにが起きたかは、PTA達は誰も語らなかつた。

S U I C I D E 2 7 〱 救済の黙示録〱 (後書き)

先週は更新できずに申し訳ございませんでした。今月は多忙を極めており、次回の更新もままなりません。更新は遅れますが必ずしますので、これからもこのバカ作者をよろしくお願いします

S U I C I D E 2 8 ～ 暖かな雫 ～ (前書き)

最近不定期更新ですね。ハイ……今度の更新も不安です。

S U I C I D E 2 8 ～ 暖かな雫～

汗をかくことはいいことだ。  
体の汗も、心の汗も…

「真紀は俺ん家でアంతアの帰りを待ってる。俺と一緒に帰るか、一人で帰るかどっちがいい？」  
「…一緒に帰るわ…聞きたいこともあるから」

作戦終了後、浅尾の言葉によって、俺は今浅尾と二人で帰っている。左手足の取り換えや片付けに時間がかかったため、結局学校を出た時には太陽はすでに顔を隠していた。

…てか、スゲー喋りかけづらいですけど。

なんせ、俺達は浅尾の人生プランを勝手に変えた。

そして浅尾の覚悟を土足で踏み躪ったのだ。

そんなことしたのに、どう声をかければいいのか分かんねえ…

「…まったく、あなたにはいつも驚かされてばかりね」

…って、普通に話し掛けてきたよ、この人。

まあ、そっちの方がこっちも話しやすい。

「そこまで驚かすことしたか？」

「当たり前じゃない。教え子がサイボーグだったり、有り得ない権限を持つてたり…：…それに、命まで救われたんだから」

「おいおい、これは義手だ。あと、命まで助けた記憶は…：…」

「あなたは私が死ぬつもりだった事を見抜いていた…：…そうでしょう？」

「…さすが知性の象徴と評されし我が担任だな」

見抜いてたことを見抜かれてた…伊達に教師やってないな。

「私の事は、粗方理事長に聞いたのかしら？」

「ああ、プライバシーの侵害にならない程度にな」

「……………」

「どうした？」

突然、隣で浅尾の歩みが止まる。

振り返ると、浅尾は暗闇に僅け込みそうなほど暗い雰囲気を出していた。

「…分かっていて、なぜ私を助けた？ 真実を知っててなぜ私を拒絶しない？」

いや、暗いのは雰囲気じゃない。

冷たい絶望が浅尾を包み込んでいる。

今まで他人から受けた嫌悪や同情の目線や言葉が、その心に絶望の闇を作り出していた。

……まるで亮佑や洋、彩華やR ラグナロクの仲間に出会う前の俺のようだ。

人を疑い、世界を疑い、自分の存在さえ疑っていた。

……まったく、守んなきゃならないものに気づいてるってのに……ちょっと気が引けるが、荒療治してやるか。

「浅尾、ちよつと眼鏡外せ」

「いきなりなにを言っ……」

「いいから外せ!!」

「わ、分かったわ」

眼鏡を外した浅尾の顔は、予想を超えるほどの美人だった。白い素肌に眼鏡から解放されたキリツとした瞳が俺を疑問の目で睨む……いや、見てるだけだけ。

「んじゃ、歯ア食い縛れよ」

「いつたいなにを……」

「舌嚙んでグロい死にたくなかったら従え」

「ッ!?!」

俺の脅しに浅尾の顔が強ばる。  
んじゃ一発いきますか…

「……………グツ!?」

予想通りブン殴りました。

右手で情け容赦なく思いつきり左頬をファイト一発。

殴られた勢いで、浅尾の黒髪が暗闇の中をフワリとなびく。

「な、なにするの!?!」

「いや、アンタを殴った。ただそれだけ」

ギリギリで倒れなかった浅尾は、俺の行動に驚愕の表情を浮かべる。  
そう、ただブン殴っただけ。

「はい、次は浅尾、アンタが俺を殴れ」

「……さつきからあなたはなにをしたいの!？」

「やられたらやり返す。それが普通だろ？」

知性の象徴でも、説明しないと分からないのか？

「つたく…蓄めたストレス全部拳に込めて俺を殴れ」

「!？ 私は、私の生徒は殴れない」

「んじゃ、俺を生徒としてじゃなく、須千家真慈という自分を殴った憎い人間として見る」

「そんなこと出来ないわ…」

殴れない…教師としては確かに満点の回答だろう。

…けど、一人の人間としては赤点だ。

「アンタには殴られて悔しいって思う誇りはねえのか？」

「…そんなもの、とっくの昔に…」

「なら、なんで真紀はあんなに真っ直ぐな瞳をしてる？ …それはアンタが母親としての誇りを持つてる育ててるからだろ。娘を誇りに思ってるからだろッ!！」

子供は親の鏡だ。

親が真っ直ぐ向き合っただなら、鏡もそれに答える。

親が悪いことをしてれば、鏡は曇り始める。

親が鏡に背を向ければ、鏡は一人歩きを始める。

親が鏡に拳を振るっただなら、鏡は簡単に割れる。

いずれはダチも鏡に影響を与えるけど、鏡の根っこを作るのは親なのだ。

だから、真紀を見れば分かる。

浅尾は教師をしながらしつかりと真紀を育ててる。

蒸発した父親の分も真っ直ぐ向き合ってるから、浅尾に似て少し高飛車で行動力のある子供に育った。

「アンタは立派に娘を育ててる。それはアンタの誇りじゃねえのか!?」

「…真紀は私の誇りよ」

「だったら! だったらなんでその誇りが馬鹿にされた時に、なんで黙ってたッ!」

「それは、あの状況で…」

「火に油を注ごうが関係ねえ! あそこで黙ってたって事は、アンタはあそこで娘を捨てた!」

「……………」

浅尾は力なく俯いた。  
俺はそれを肯定と解釈した。

「ハッ！ こりゃ傑作だ。娘が誇りとか言っときながら簡単に手放してやがんの！ ったく、くだらねえ！ そんなもんしか持ってないような奴に教師なんか勤まるかってーの！ 結局、アンタはそんなもんなのか？ そんな奴の子供じゃ真紀もくだんねえッ！？」

罵倒の途中で左頬に衝撃を受け、俺の視界は暗転した。

後ろに吹き飛ぶ須千家の体。

暗闇に、彼の白い髪がさらりと揺れる。

つい…殴ってしまった。

彼があまりに言うから…我慢しようと思っていたのに。

…私はともかく、娘を馬鹿にされて私は許せなかった。

でも…どうしよう。

怒りに任せて生徒を殴ってしまった。

…ああ、やっぱり私は教師としてもダメなのね。

もう………

「…まったく、遅いんだよ殴んのが。無駄な世話かけさせんなよ」  
「!?!」

倒れてた須千家が、手だけを使っていきなり目の前に立ち上がった。  
本気で殴ったはずなのに…

「俺がそんな拳で気絶すると思ってたのか？ 舐めてもらっちゃ困る。これでも耐久性なら自信があるからな」

さっき、私を罵倒していたのが嘘のような笑顔と口調で私に話しかけてくる。  
まさか……

「…私に殴らせるために…わざとあんな酷い事を？」  
「ああそつだ。ちょっと言い過ぎたのは謝る」

謝ると言いながらも、平然としたままの須千家。  
その左頬は私が殴ったせいで赤くなっていた。

「俺ん家じゃ、迷った時に殴りあって気持ちが悪くならさ

……で、スッキリしたか？」

「…そんな、人を殴ってスッキリなんて出来ないわ」  
「ダメかあ……んじゃ、次はどうしよう」

困ったようにそう言うと、目の前の須千家は顎に手を当てながら本気で悩みだした。

…彼は彼なりに私を心配してくれている。  
生徒に心配されるなんて…教師失格ね。  
でも……

私は彼に近づき、頭から軽く自分の体を彼に傾ける。

「……………？ どうした？」

「少しだけ…ほんの少しだけ弱くなるから、ちょっと胸貸しなさい」  
「…へいへい、分かりました。いくらでも貸してやるよ」

彼は面倒くさそうな声で答えながらも、その両手で優しく包み込んでくれた。

そのぬくもりがとても暖かくて

その優しさがあまりに暖かくて

その心が本当に…本当に暖かくて

私は赤子のように泣いた。

喉の奥から叫び、枯れるまで涙を流した。

一人で泣くのは悲しいけれど、今の私にはその叫びに答え、その涙を拭ってくれる人がいる。

…久しぶりに流した涙は、どこか暖かった。

S U I C I D E 2 9 生命のリズム (前書き)

黒ヘルがいなくなつてからコメディが急激に書きづらい……………  
ちよネクロマンス死者復活でもしますか!! (作者暴走)

S U I C I D E 2 9 生命のリズム

人は時に歴史を刻む

人は楽器でリズムを刻む

人は自分の生きた証を刻む

あーあ。

地獄だ地獄。

ここはこの世にあってはならない純白地獄だ

異様な臭いは俺の嗅覚を麻痺させ、水の滴る音は俺の精神を破壊する。

……ああ、ここで俺は朽ちるのか。

「なに言ってるんのよ。ただの病院じゃないの」

「いや、病院はこの世に存在する最悪の地獄だ。ここに動けない俺を拘束するなんて……お前等は悪魔だ！」

病院なんて大ッ嫌いだあ！

消毒液の臭いも、点滴の音も嫌で嫌でたまらない。

「まったく……真慈の病院嫌いも筋金入りね」

「当たり前だ！ 医者なんて裏金とか医療ミスとかで信用できねえし、ナースだってあの笑顔の裏でなに考えてるか分かったもんじゃねえ」

「だから他の病棟から隔離してもらって、アタシが主治医代わりに来てあげてるんじゃないの」

「……まあ、確かに麻依子だったら信用できる」

「素直でよろしい」

俺の言葉がよかったのか、傍から見ても上機嫌になる麻依子。

…そう、ここは病院だ。

個室のベッドで上半身だけ起こしている状態だ。

俺がなぜここにいるかというところ、霊力と狂気の限界が来て右手足が動かなくなっただけだからだ。

元々は自宅療養の予定だったけど、寝てる間に彩華に拉致られたらしく、朝起きたらここにいた。

逃げだそうにも、右手と右足が動かない＋左義足を取り上げられたため、左手以外は行動不能。

松葉杖突いて十メートル先のトイレに行くのがやっとの状態だ。

「まあ、アタシの診断結果としては無理すぎるの限界突破。一週間昼夜を問わずにブツ続けで腕立て伏せとスクワットやってた感じね」

「なんだその地味にツラそうな表現は」

「だって、筋繊維や骨がボロボロだし、神経細胞も切れてはないけどちゃんと信号を伝達してない……ここまで酷い疲労状態は初めて見た」

いや、向こうの世界じゃ足は粉碎して、腕は弾けてたしねえ。

まだ、マシなんじゃね？

「ま、あと二週間はおとなしくしてなよ。理事長権限で明日からの学校は出席停止にしておくってさ」

「彩華も無駄に権力使ってるな」

「まあ、彩華さんはアレだしね」

「確かにアレだな」

俺達が言ってるアレとは『アノ人は見た目美人なのに、やることなすこと男勝りでえげつない。痛い目にあいたくなかつたら傍観してなサレ』の略だ。

R ラグナロクが出来る前に彩華が俺達三人を倒した時も、洋の手の小指をハイヒールのヒールで踏んだり、亮佑の両膝の関節外したりとか、俺の左腕を破壊したりとか…  
あんなのは二度とゴメンだ。

「…じゃ、今までの分しつかり返してもらおうかな」  
「？」

突然、訳の分からないことを言い出す麻依子。  
返すっていったって、金借りた記憶もないし……あッ！

「医療費の返済か？」  
「違うわよバカッ!!」  
「ゴブウ!?!」

ベットに寝てるため、完全フリーの腹部に麻依子の拳がクリティカルに入る。

…さ、さすが我がお袋に護身術という名の殺人武術を習っただけあ

る。

「アタシが医療費なんて取るわけないでしょ！」

「じ、じゃあ、なに返せばいいんだよ」

「ハア……まったく、鈍感にもほどがあるよ」

言葉にため息混ざった麻依子は、俺を呆れた顔で見る。

「まったく、なん……ッ!？」

赤みがかった髪の毛が、目の前で風にふわりと揺れる。それと同時に、俺の胸に麻依子が飛び込んできた。

「ちょ、ちょい待てっ!! いきなりなん……だ……っ……って、聞く必要もねえか」

…麻依子と肌が触れた瞬間、俺が返さなきゃならないものが分かった。

麻依子はいつも俺のそばで、俺を心配し続けてた。

俺がケガしたり風邪引くたび、病院嫌いの俺の治療や看病をしてくれた。

今回も、俺の手足が動かなくなる前にしつこく入院を勧めてた。

そんな麻依子が俺が自殺しようとして、心配しない訳がない。

つまり、俺の返さなきゃならないものは『今まで心配をかけた分、安心させる』ってことだろ。

俺の胸に顔を埋めたまま小刻みに震える麻依子。

俺は泣かせたくないのに、きつとこいつは泣いている。

その涙を止めるために今俺が出来る事は…

「こんな時に腕が動かないのは不便だなッ…」

俺は左手で自分の右腕を掴む。

その腕はだらんと垂れて、まるで自分の腕じゃないような気がする。まあ、どんなこと言っただって俺の腕にはかわりない。

俺はその腕を麻依子の背中にゆっくりと置き、左腕をそこに重ねる。

…今の俺には、その体を抱き締めることぐらいしか出来ないから。

…トク…トク…トク……

麻依子の心臓の音が体を伝わってくるたびに、俺の心臓もそれに答えるように強く脈打つ。

それはまるで、麻依子が俺に話し掛けているように。

それはまるで、俺が麻依子に答えているように。

それはまるで、お互いが生きてることを確認するようにな…

「今までゴメンな…これからよろしく頼む」  
「……………うん」

俺の腕の中にいる小さな温もりは、返事をした途端に眠ってしまった。

これは安心させることが出来たってことなのか…？

「…ふあゝ…てか、俺も眠くなってきたな」

座ってる状態じゃ眠りにくいけど、麻依子を退かすわけにもいかな  
いしなあ…

俺は、起きた時の体の痛みを想像しながら、腕の温もりをそのまま  
にしてゆっくりと意識を手放した。

S U I C I D E 3 0 ～ 黒い悪夢と白い雌豹 ～ (前書き)

本編30話突入+私の別小説『遅刻魔チーズと氷月姫のヴァレンタイン』が2/14に学園ジャンルでアクセスランク1位(短編)になった記念に……黒ヘル復活<sup>リボーン</sup>!!!

敵対していた者達が突然同盟を組む時は、必ず裏がある

見慣れた構造空間に見慣れた家具構成、そして自分が住んできた独特の雰囲気。

…そう、ここは我が家で、場所はリビングだ。

…入院してたはずの俺がここにいるのは変だ。  
それも、彩華に没収された左足がある＋五体満足に動いてる時点で  
おかしい。

けど、もっとおかしいものが俺の目の前にあった。

「真慈イ〜。取り合えずメシ食わせる」

「メシの代わりに拳はいかが？」

「『食う』のは好きだけど『食らう』のは……ちょっとだけよん」  
「……………」

「いや、無表情＋無言で拳を振り上げんなよ。ほら、いろんな意味  
でおいしくないじゃん　だから、せめてなんか面白いこと叫びな  
がら殴れビヨホオツ!？」

俺の拳は、ウザイ野郎の水月…すなわち鳩尾に誤差なくめり込んだ。  
感触からして指の第二関節ぐらいは入ったな。

でも、それだけじゃ終わらせない。

その野郎の被った黒いヘルメットを、右手でガシツと掴む。

そして、左拳でひたすらその腹部を打つ。

その打撃は内臓ごと抉るが如く。

打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし  
打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし  
打つべし。

「ゴボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボオ!?」

「フイニイイイシユ!!」

「ゴバア!?!」

最後に膝蹴りを一発食らわせてから、掴んでたヘルメットを放した。倒れこんだその体の上に、俺は容赦無く足を乗せる。

「…あ、相変わらず…いや、以前より容赦がな、なくなってるな」

「黒ヘルに容赦なんて必要ねえ…俺の辞書にはそう書いてある」

「うわ、素でひでえ」

…俺の目の前には、黄泉に帰ったはずの黒ヘルがいた。

「で、なんでお前がここにいるんだ」

何となくラツシュを浴びせたものの、なぜここに黒ヘルがいるかさっぱり分からない。

てか、また変な空間に移動させられたかも……

「なんとなくだけど」

「なんとなく?」

「ああ、なんとなくだ…へブツ!？」

「なんとなく?」

「…OKブラザー、ちょっと顔面キックはキツイぜ…グビツ!?!？」

「ナントナク?」

「いや、マジでもうやめてください」

このまま続けても、出来るのは顔面ミートパイ一枚だけなので、仕方なく蹴りを止め、足を退ける。

「ふう、もう少しで俺のナイスガイな顔がダメになって、世界が涙するところだった」

「お前が存在してる時点で、世界は絶望で号泣してる」

「存在否定!？」

黒ヘルは俺にツッコミながら、ゆっくりと立ち上がった……

「サイナラ」

「またかよ!？」

俺はデジャヴを感じながら、再び光に包まれた。

俺はいきなり目が覚めた。

そして、そのおかげで助かった。

「うゝ。もう少しだったのに」

「ああ、もう少しで飢えた雌豹に食われる所だったな」

「雌豹なんて人間きが悪いわ。淫魔サキュバスにしてよお」

「そっちの方が数万倍タチ悪いだろ」

…俺が目を覚ました瞬間、目の前にあったのは、鼻先数センチ先まで超接近した彩華の顔。

それを見た瞬間、俺の左手が無意識に反応してその額を押さえ、接近を阻止してくれた。

自分自身の反応速度に感謝だ。

「んっ、もういけずう。寝ていた王子様を熱いキスで起こそうと思っただけじゃない」

「俺は王子じゃないし、キスで起こすのは姫の方だろ。……てか、迫ってくるな!!」

「ふふふ、私の愛は片手で受けとめ切れるほど軽くないわよお」

「片手しか動かねえんだよ!」

そんなことやってる間に、ピンク色した彩華の艶やかな唇が紙一重

まで近づいてきた。

動きたくても、一本しかない足に彩華の両足が絡みついて動かないし、首を動かそうにも、頭を両手でガツシリ捕まれてビクともしない。

……あ、もう無理だ。

食われる……

「姉さん。それ以上は許さないぞ」

そんな声と同時に、紙一重まで迫ってきた彩華の顔が一気に遠退く。その先には、彩華の襟首を掴みながらため息を吐いている麗花がいた。

「麗花、ありがとう。…マジで焦った」

「うちの姉が失礼をした……だが、それほど焦ってたようには見えなかったぞ？」

「自分が抵抗出来ない状況で猛獣に襲い掛かれたら、生きとし生けるものすべてが腹決めるさ」

「なぜか物凄く説得力があるな」

「体験者は語る！ ってやつさ」

「……なるほどな」

手元の彩華を見て納得したようにうなずく麗花。  
てか…

「……彩華、その格好は何だ」

「やっと気づいてくれたあ　　どお？　　結構似合ってるでしょお？」

彩華は目の前でキャツキャツと騒ぎ立てる。

その姿はいつものビシツとした深紅のスーツではなく、純白の服に純白の膝上スカート、そして頭には一部の人間しか被らない独特の形状をした白いキャップ…

その姿はまさに女性看護師…通称ナース。

「……彩華、俺の嫌いなものを三つあげてみる」

「いきなりねえ……他人の涙、自分自身の弱さ、そして病院ね」

「正解だ」

「…なぜか最後だけ幼稚に聞こえるのは私だけか？」

麗花は義理堅くツッコんでくる。

しかし、ツッコミはこの際全面無視。

「さて、病院にいたるだけで胸クソ悪くなる俺が、ナース服なんてものを見たらどうなるでしょう？　　彩華！」

「ムラムラする」

「どつちかって言えば怒りの業火がメラメラしてるぞ。次、麗花！」  
「わ、私か！？ ……殺意が芽生える？」  
「それは病院にいる時点で成長して満開の花を咲かせてる　はい、二人ともハズレ。正解は……」

正解を言おうとした瞬間、俺の第六感が叫んだ。  
『それを言ったら命の保障はない』と。  
そして『早く思い出さないと、手遅れになる』と。

そんなことが頭を巡っている中、突然開く病室の扉。  
そこには、前回の最後で一緒に寝ちゃった人。

「真慈、起きた？ あ、彩華さんに会長さん。もう来てたんですか。  
あーあ…彩華さんダメですよナース服なんて来ちゃ…」

しかし、第六感は一足遅かったらしい。  
俺のことを一番知っている麻依子おさなじみが、いつの間にか消えてたことに気づかなかった俺のミスだ。  
そして、麻依子は当たり前のように口を開く。

「真慈は病院内でナース服とか見ると全身の力が抜けちゃうんだから」

ありがとう麻依子。  
見事な死刑宣告だよ。

「んじゃ、アタシはこれから用事があるから、あとは頼みます」

そういつて麻依子は部屋を出て行ってしまった。  
残されたのは三人だけ。

「：麗花あ。ちょっと提案があるわん」

「奇遇だ。私も姉さんと話したいことがある」

「協力する（わよ）」

ヤバイ！！

姉妹が同盟を組んだ。

さらに、二人揃って俺ににじり寄ってくる。

「彩華も麗花も落ち着けッ！ お前等俺に何する気だ！？」

「もちろん、襲う（わよ）」

「待てッ！！ 特に麗花は待てえい！！ いつもならそんなこと言わないでしょ！？」

「そんな細かいことを気にするな」  
「気にするわボケエ!!」

二人の眼が完全に据わってる。  
ヤバい。今度こそ…

「いっただつきまーす」

「し、失礼するぞ」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

それから数十分後に亮佑と洋が来るまでに、俺は二人のオモチャと化していた。  
そして俺がさらに病院嫌い、ナース嫌いになったのは言うまでもな

61

SUCHIDE30〜黒い悪書と白い雌豹〜（後書き）

真慈にはあと一話ほど入院していてもらうことになりそうです

S U I C I D E 3 1 片翼天使と指切りしましょ (前書き)

この小説がついにランキングに乗りましたあッ!! 評価してください  
さった皆様や、読んで頂いた皆様に心から感謝します!

S U I C I D E 3 1 片翼天使と指切りしましょ

ゆーびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんのます  
ゆびきった

「ハア…疲れた。てか死ぬ」

俺はベットの上で、シーツと同じぐらい真っ白に燃え尽きていた。

右手一本であの超人姉妹の猛攻をガードするのはもう限界だ。

麻依子と亮佑と洋が連れて帰ってくれなかったら、確実にやられ…  
…いや、食われてたな。

「シン…真っ白…大丈夫…？」

「ああ、死ぬ寸前だが、いちよう生きてる」

そして、今は小夜が見舞いに来ていた。

亮佑と洋が連れてきて、ここに置いてきたのだ。

「ムリしないで…シン」

「ああ、大丈夫だ」

小夜はベッドの左側で、ただ車椅子に座っている。

あの姉妹のようなことをしない分、俺としてはありがたい。

「俺のことは別にいいさ。それよりも、俺がいなくても大丈夫か？」

「ダメ……さみしい」

「……………」

普通、『大丈夫？』って聞かれたら『大丈夫』って言わないか？

…まあ、そこが小夜らしいんだけど。

「まあ、彩華とかがいるだろうから、寂しくはないだろ」

「…サイとマイ…サクとレイも来る。………だけど、シンいない…それだけで…さびしい」

確かに、小夜の表情の中には、微かに寂しさを感じられた。

「………つたく、んな恥ずかしいことをやすやすと言いやがって」

俺は少し手を伸ばして、小夜の頭に手を乗せる。

小夜は猫のように、目を細めながらその手に頭を擦りつける。

「そんなこと言うより、さっさとリハビリして、立てるようになれ」

「シンいない…だからムリ」

「アホ抜かせ。お前には十分出来る」

小夜が過去にリハビリを失敗したのは、精神的に不安定だったからだというのは、すでに知っている。

そして、その問題はすでに解決した。

周囲の協力もあり、小夜の精神状態はよくなっている。さらに、最近は表情も少し柔らかくなってきた。そして、リハビリだって精力的に続けてるから、残り一カ月もあれば自力で立つことが出来るだろう。それは本人である小夜が一番分かっているはずんだけど…

「ヤだ…シンがない…ダメ」  
「…つたく」

俺は自分の左腕を、小夜の頭から自らの頭に持っていく。自分自身のことなのに、なんで俺が必要なんだ？

「…理由…かんたん」  
「ん？」

頭を抱えていた俺の左手に、小夜の右手が重ねられる。そして、その顔には微笑み…小夜にしては満面の笑みが浮かんでいた。

「シン、私…助けくれた……だけ…私、なんにも返せない…。だから、私が立つとき…シンに見てほしい。…ぜんぜん足りない…けど…少しだけ、恩返ししたい」

小夜にしたら珍しく言葉を続けた。

そして、その言葉一つ一つに、感情がしっかり込められていた。  
そんな気遣い不要なんだけど…

「…分かったよ。その代わり、俺が退院したらビシバシいくぞ」  
「………わかった。だから…早く帰ってきて…」

そう言って小夜は右手を降ろして、小指を立てた左手を俺の前に出す。  
なんとなく察した俺は、その小指に自分の左手の小指を絡める。

「約束する。俺も頑張る、お前も頑張れ」  
「………うん」

…たわいもない指切り。

その指に込められた決意や思いが交わされる。  
手の中で一番小さな指で、お互いの心が繋がる

小夜の純粋に温かな心に触れて、疲れた心がほんの少し癒された気がした。

S U I C I D E 3 2 2 ぬくもり〜 (前書き)

アクセス5万突破！ 神酒は読者の皆様に心から感謝しています。

SUICIDE32(ぬくもり)

人がこの世に生を受け、最初に感じる温度は人肌のぬくもりである

：俺が『強制的』に病院へと入院させられて早くも二十五日。  
看護師を一切進入禁止にしているため、まだマシな入院生活  
だった。

そして、残り数日で退院が可能だと、俺の専門医マユコが言っていた。  
正直、病院という名の煉獄から脱出できる事に、心の中で小踊りしながら喜んでいた。

…そして、周りの人達に、これ以上の心配を掛けずにすむことに、感謝していた。

冬休みが終わり、学校が始まった時に、浅尾が口を滑らせて俺が入院してる事をクラスメートに言ったらしい。

それが学校中に伝わって、病院を訪れた…らしい。

俺は左足がない&左手が機械義手の状態を他人に見せたくなくて、面会謝絶にしてもらっていたから、実際は見えていない。

…しかし、恐ろしい量の見舞いの品が、その人数を物語ってた。

そこには、クラスや学年も違ったり、名前も知らない奴らからの励ましの言葉が添えられていた。

…正直、ここまで反応があるとは思わなかった。

……まあ、さすがに約一ヶ月経っただけあって、見舞いの人間もいなくなる……

「シンにい　遊びに来たよ」

「こら真紀、病院内は静かにしなさい」

…と、思ってたのに今日も来たのかよ。

ノックもせずを開いた扉の先には、可愛い少女と白衣を纏った

美女が立っていた。

「……浅尾、確か今日は平日のはずだが？ 真紀も学校があるんじゃないのか？」

「大丈夫よ。今日の授業は全部自習にしておいたし、HRは副担任の先生に任せたから」

「今日は創立記念日で休みなの。もちろん、学校でも真紀は来るよ！」

「……親子揃ってアホか？」

わざわざ見舞いのために休むなって。

そんな俺の心情をよそに、真紀がパタパタと近づいて、ベットの横にある椅子に座る。

その後ろを、ゆっくりと浅尾がついてきて、真紀の隣に座る。

「まったく……何度も何度も見舞いに来て、飽きないのか？」

基本的に見舞いの人数は、日が経つごとに減っていった。

だけど、真紀や浅尾を含めた入室を許されてるいつものメンバー（麻依子、亮佑、洋、彩華、小夜、麗花）は、代わる代わる病院に顔を出してきた。

ありがたいことなんだろうけど……正直精神的にキツイ。特に彩華は毎度のように襲い掛かってくるため、迷惑な事この上ない。

今日は浅尾と真紀の定番セットでマシだけど、これで六回以上は見舞いに来ている。

二人とも…いや、全員よく飽きないと思う。

「生徒の心配をするのは、教師として当然のことよ?」

「その教師が、私事で授業をしないのは感心しないけどな」

「シンにいのためなら、なんでも出来るよ」

「だったら、俺のために家に帰って勉強してな」

適当に二人の意見を流しながら、感覚が戻ってきた右手を軽く動かす。

……うん、握力は著しく下がったけど、日常生活に支障はないだろ。

「あ、せっかくお見舞い持ってきたのに、車の中に忘れてきちゃったわね」

「いや、別にいらねえよ」

浅尾は見舞いに来るたびに、作った料理を持ってくる。

病院の食事は味気ないし、旨い料理が食えるのは嬉しいけど、何度ももらうのは気が引ける。

「遠慮しないで。…真紀、鍵渡すから持ってきてくれない?」

そう言って、浅尾は真紀に鍵を見せる。

「え〜。わたしはシンにいと一緒になりたい」

「その須千家君が喜んでくれ…」

「取ってくるね」

真紀は笑顔で浅尾の手から鍵を取り、病室を出ていった。

「俺を餌に娘にパシリらせるな」

「いいじゃない。『使えるものは親でも使え、ましてや子供はこき使え』ってね」

「どんな持論だ？」

…まあ、そんなことは後回しで十分だ。

「……で、話はなんだ？」

「…え？」

「見舞いは今までも持ってきてた。あんたが今日に限ってそんなミスをするなんてありえない……真紀にわざわざ席を外させたとして考えられねえんだよ」

「……さすがね」

俺の指摘に、浅尾はため息一つをついてから俺と視線を合わせる。そのレンズ越しの目には…多少の哀しみが見えた。

「私ね…あなたに沢山のことを教えてもらったわ。だから、少し頑張ってみたの」

「なにかを教えたつもりはないんだけど…まあいい。で、なにを頑張ったんだ？」

「真紀のことを生徒達に話したわ」

「……………」

……………え、マジかよ。

折角、俺達がPTAどもを情報をネタに口止めしといたのに。

「そんなことしたらあんたが…」

「ええ、多くの生徒から嫌悪の目で見られたり、同僚に罵倒されたりしたわ」

「なら…ッ!？」

俺が文句を言おうとする前に、浅尾は人差し指を俺の口にそっと重ねた。

その行動にびっくりして前を見ると……………浅尾の顔は自然に笑っていた。

「いいの。私は自分の生徒達に嘘を吐きたくなかったの。私は全然後悔してないわ」

「……………」

「それにね。応援してくれる人もいたのよ。特に1 Dの子達は、

ほとんど私を受け入れてくれたわ。…それが本当に嬉しかった」  
「……」

浅尾は本当に嬉しそうだった。

その笑顔に嘘偽りはなく、無理をしてるわけじゃない。  
けど……な………

俺は浅尾の手をやりわりと退かせて、小さくため息を吐く。

「ハア…退院したらさっそく仕事かよ」

「い、いきなりなに？」

「ん？ 退院したら清掃活動の予定が出来たんだ」

浅尾の頭の上に『？』が三つほど浮かぶ。

確かに、話は全然繋がってねえから、分からねえのは仕方ない。  
けど、俺の法則からすれば『浅尾の発言』と『清掃活動』から、  
一つの答えが割り出せる。

俺の法則…それは『ム力つく野郎は、誰であるつと薙ぎ倒す』。

「浅尾、俺はあんたのことを偏見で見る人を一掃する。」  
「なっ！？」

俺の言葉に、浅尾は驚きの表情を見せる。

「やめなさい！ 私達のことはいいか……」

「自惚うっほれるなよ」

「……えっ？」

浅尾の表情がさらに驚きを増す。

……俺は浅尾と真紀のために動くんじゃない。

「俺は頑張ってる親子を偏見だけで愚弄する野郎が許せねえ。だから、俺はそいつらの曇った目ン玉と薄汚れた脳ミソ、腐った心をブン殴る。それは『他人のためにする』なんて大層なもんじゃねえ。」

……『俺がしたいからする』、ただそれだけだ」

そう、それだけ。

それだけをこの体で受け取って、ズタボロになったのだ。

「したいことをする。それに大きいも小さいも関係ねえ。じゃねえと……それをしたくても出来ねえ奴に失礼だからな」

……この体をズタボロにした張本人は、生きたくても生きられなかった。

ズタボロな張本人は、死にたくても死ねなかった。  
…でも、本当は生きたかった。

その二人がぶつかり合って、分かったことは簡単なこと。

「『死ぬんだつたら、バカみたいにしたいこと死ぬほどしてから死ぬ』。…お袋から教わった教訓の一つだ」

「……ずいぶん豪快なお母さんなのね」

「ああ、最強の主婦で最高に誇れる母親だ」

「…マザコン？」

「殺すぞ？」

お袋の尊敬して誇りに思っているが、マザコンと言われれば殺意が芽生える。

殺意を放つ俺をよそに、浅尾は軽い笑みを浮かべる。

「…そんな母親に、私もなれるかしら」

「んなこと、俺に聞くな」

俺は浅尾から顔を背ける。

「…聞くんなら、自分の娘に聞きやがれ」

「えっ？」

「シンにいっ！ お見舞い持ってきたよ」

タイミングよく、真紀が扉を開けて入ってくる。

「…そういう事ね。それじゃあ期待せずに頼りにしてるわ。…それにしても、あなたってツンデレ？」

「…ウッセー」

「真紀がいないうちに二人だけ楽しそうに…ズルい！ シンにい！  
真紀も混ぜて！」

「おいおい、あわてなくてもいいって。てか、序盤から聞きたかったけど『シンにい』ってなんだ？」

「シンにはシンにいだよ」

「いや、訳分かんねえし」

それから、まるで家族団欒のような時間がゆっくりとすぎた。

一言で表せば…：人肌に触れたように暖かった。

S U I C I D E 3 3 3 ヘルメットの下には…… (前書き)

十日以上放置してしまいすいません!! (号泣)

試験や短編『氷月姫つきりんと遅刻魔のホワイトデー』を書くの  
に手間取ったりで、こんなにも時間が空いてしまいました。

これからちゃんと約一週間で更新しますので、作者を見捨てない  
ください(懇願)

S U I C I D E 3 3 3 へルメットの下の字は……」

子供は母親の顔を見て育つ。  
子供は父親の背を見て育つ。

……やっとこの日が来た。

この日が来るのを、俺がどれだけ待ったことか。

「やっとだな。待ってたぜ」

「まったく、僕としては、もう少し早くして欲しかったよ」

部屋の出口では、俺の兄弟とも言える二人が立っていた。今は憎まれ口を叩かれても、悪い気はしない……

「グフア!？」

…訳がないので、ほざいた方…洋に速攻近づき、右手で顔面を思いっきりブン殴った。

「テメエ等、迎えはいらねえって言ったはずだが？」

「右手もしっかり動くようだな。安心したぜ」

「おう、久々に人をブン殴れてスッキリした」

洋を見てニヤニヤ笑っている方…亮佑と軽く言葉を交わす。

しっかりと彩華から義足を返してもらい、人皮もつけた。そしてなにより……今俺は、自分自身の脚で立っている。

「酷いッ！ せっかく退院の出迎えに来たのに」

「んじゃ、祝いにメシ食いに行くぜ!」

「おう、行くか。二人でな」

そして、俺と亮佑は一カ月も世話になった、忌々しい部屋を後に……

「……………えっ、完全にシカト？ 酷ッ！ 僕も連れてってくれビヨッ！？」

騒ぎながら追い掛けてきた洋に、俺は左手で追撃の一発を放つ。

……………おし、左手も順調

「さすが真慈……………容赦ねえぜ」

……………こうして、俺は無事に退院した。

「…………ふう、食った食った」

俺達は退院祝いということで、新装開店した焼肉屋に行った。

浅尾が見舞いに持ってくる料理以外、味の薄い病院食ばかり食ってたため、久しぶりの濃い味を味わえて最高だった。

……九十分食べ放題（一人五千円×3＝一万五千元）で、約二十七人前（合計二十万円以上）を食った。  
もちろん、支払いはすべて洋持ちで

俺達三人が店を出る時には、店長が俺のような涙を流して見送ってくれた。

亮佑は『俺達の食いつぶりに、店長も感動してるみたいだぜ！』と  
言っていたが……店長の目には悲しみしか映ってなかったぞ。

まあ、そんなことがあった後、手持ちぶさたになった俺達はそれぞれ解散することにした。

そして今、俺は久しぶりに我が家に帰って、リビングでソファに座り寛いでいた。

「……ああ、やっぱり我が家は最高だ。病院なんて二度と行かねえ」

俺の独り言を、消毒液臭くない馴れ親しんだ空気が飲み込む。

その空気を堪能しながら、リビングに設置されている壁掛け時計に目をやる。

すると、ちょうど長針がてっぺんに登り、短針が四時を指していた。

「……さて、そろそろ小夜が帰ってくる頃か」

……実を言うと、今日は平日。

亮佑と洋は学校をサボって俺の見舞いに来たのだ。

もし今日が休日だったら、いつのもメンバー全員が病院に押し掛けて来ただろう。

てか、夜には退院祝いをするらしい。

場所は……家だ。

祝いに出る料理は、祝われる俺自身が作ることになるだろう。

「……今のうちに下ごしらえしとくか」

俺はゆっくりと立ち上がり、台所に向かう。  
まずは冷蔵庫を開け、作れる料理を確認……

「……なんじゃこりゃ」

冷蔵庫の中には、肉やら魚やら野菜がありえないほどいい割合で入っていた。

これって……最初から俺に料理を作らせる気満々だったわけね。

「これ揃えたのは絶対彩華だな。……酢豚にパイナップル入れてやる」

俺は彩華への嫌がらせを考えながら、戸棚からグラスを二つ取り出す。

そして、なんの変哲のない台所の床を三回ほど蹴る。  
すると、床の一部が正方形に抜け落ち、その抜け落ちた部分から、目的の物が見える。

「まったく、これを見るのは何年ぶりだ？」

俺は目的の物……濁酒どぶしゅの入った古い酒瓶を手に取る。  
そして、その中身を二つのグラスにそれぞれ注ぐ。

一つは俺のため  
もう一つは……

「おいッ！ 出てくるならとっとと出てい」

俺は空くうに向かって声をかける。

……端から見れば危ない人間に見えるだろう。  
しかし……

「……………つたく、この坊っちゃんは何でわかるかねえ」

さっきまで誰もいなかった空間に、少し気を悪くした声する。

それと同時に、まるで幽霊のように人影がゆらりと浮かび上がる。

……いや、幽霊のようじゃない。

「よ！ 久しぶり」

「黙ってそこ座れ」

「へいへい」

その人物は、俺の指したダイニングの一席に堂々と座る。

黒いヘルメットを目の下まで深く被り、そこはみ出た白い髪は肩まで伸びている。

薄汚れた作業服を着て白い鶴嘴を持っているその姿は、嫌でも覚え

てる。

そいつは幽霊『つぱく』現れたんじゃなく、幽霊『らしく』現れた。

「毎度毎度、靈感もないのになんで俺の存在が分かるんだ？」

「その悪質ストーカーとしか思えない目線で分かる。あ、女を連続して十秒以上見るなよ。妊娠しかねないから」

「……ははは、言葉の暴力も痛いなあ」

俺は、笑いながら涙を流すそいつ……黒ヘルに、片方のグラスを渡す。

この酒は親父の好物であり、酒税法を完全無視して造られた物である。

この酒は生粋の酒豪の酒豪でないと、グラス一杯で泥酔し、たとえ高度数の洋酒を飲める外人でも、濁酒独特の風味や味によって酔い、ナメてイツキ飲みすると、アル中で簡単に逝くような危険物だ。

現在、周囲の人間でこれをまともに飲めるのは、大酒豪である親父の血を受け継ぎ、風味にも慣れてる俺ぐらいだ

「お、言葉の割りには気が利くねえ」

酒豪の彩華でも眠りに誘うその一杯を、黒ヘルは俺から受け取った瞬間、一気に煽る。

幽霊とはいえ、味覚もすっかりしてる黒ヘルなら、この酒の威力は確実に食らう。

こんな殺人酒をイツキするなんて、俺でもそんな無茶はしない。  
しかし……

「……くううッ！ やっぱ酒は最高だな！ もう一杯！」

黒ヘルは何もなかったかのように、笑顔で追加を注文してくる。  
別に無理してるわけじゃなく、本当に飲むことを楽しんでるようだ。

「もう一杯の前に……その被った物取れや」

「お！ すっかり忘れてた。今日は自殺屋として来たわけじゃないから、取ってよかつたんだな」

黒ヘルは手の平をポンツと叩いてから、自分の被ったヘルメットに  
手を掛ける。

……このヘルメットを外した瞬間、黒ヘルは黒ヘルでなくなる。

それは世界最強の主婦であるお袋と肩を並べる男。

『現在』は俺しか飲めない殺人酒を『過去』に製造し、イツキ飲み  
していた男。

そして……俺にとって最高の男。

「改めて……久しぶりだな。我が息子」

ヘルメットを取った人の目は、意志の強いはっきりとした目線を俺に向けていた。

その素顔はあの頃と変わりなく、随分と懐かしい……

「……本当に久しぶりだ。このクソ親父」

須千家 すせんや 大慈 だいじ……お袋と死んだ、俺の親父がそこにいた。

S U I C I D E 3 4 俺と親父と、なぜかお袋（前書き）

後書きにある提案が書かれていますので、この小説に影響を与えてくださる気がある方は、ぜひともお読みください。

S U I C I D E 3 4 俺と親父と、なぜかお袋

父親は背中を向けていても、必ず我が子に大切なものを与えている。

「プツハー！！ やっぱり酒は美味しい！！ もう一杯！！」

目の前で殺人酒をガブ飲みしているのは、六年……いや、七年前に死んだ須千家大慈。<sup>オヤジ</sup>

……さあ、親父との再会で一番最初にすべきことは？

- A、殴る
- B、ぐーぱんち
- C、拳を振る
- D、鉄拳制裁

……分かったか？

これはサービス問題だぞ。

この数秒で考えがまとまったとは思わないが、正解発表する。

正解は……

フルボッコ  
……全部

「チヨツ、真慈！ 落ち着け！ その振り上げた手を降ろ……ギャ  
――！！！」

しばらくお待ちください

「ふう〜、スッキリした」

親父をフルボッコし終わった俺は、キッチンに戻り料理の下ごしらえを開始する。

「ちょッ……ゲボフッ！ な、何事もなかったように……料理してんじゃねえ……ゴブッ……」

幽霊じゃなければミンチになってたろう親父は、ぐったりと空中に浮かんでいた。

……まあ、手先から肩&足先から股の関節を外す荒技を使ったからな。

実体じゃないから自然に治ると思うけど、それなりに時間はかかるだろう。

「てか、なんで正体明かしてすぐに、息子にフルボッコされなきゃなんねえんだ？」

「俺のことをおちよくった報いだ」

「いや！ 俺がいつお前をおちよくった!？」

手足の関節が外れて、タコのような動きしか出来ない親父は、自分のした愚行を忘れてるようだ。



また、しばらくお待ちください

「はあく、スッキリした」  
「……………」

親父はボロ布のようになって、今度は地面に仰向けにブツ倒れてた。衛生上の事を考えて、俺は親父を切りつけた包丁を流し台に移し、違う包丁を手を取った。

「で、なんのようだクソ親父」  
「……………」  
「まるで屍のようだ、な」

俺は反応しない親父を放置して、下ごしらえを再開する。  
すると、目の端でモゾモゾと動く物体A……

「……ああ、なんで俺は息子にDV被害を受けなきゃならんのだ」

「俺のことをおちよくった報いだ」

「まったく同じ回答は止める！ 同じ繰り返しで次こそは死ぬッ！」

物体A……親父はまるで軟体動物のように動き、カウンター席にグツタリと座った。

俺としても、これ以上不毛なことは面倒だ。

「……黒ヘルとして俺に近づいて、平然と下劣極まりない行動しやがったろう」

「あつ……忘れてた忘れてた。ゴメ〜んね」

親父の軽い態様に、俺は親父の頭部をなにも持ってない左手で掴んで持ち上げる。

親父の体は関節が外れてるせいか、プラプラしていた。

「忘れてたじゃねえよ。へっどくら〜っしゅ」

「ピギャー……！！ 頭蓋骨がへへこむへこむ凹む陥没へつむ  
うううううつうつうつ！！」

俺が左手に力を入れた途端、暴れだす親父。

片手で料理しようと思ったけど……ムリだな。

「ふんっ!!」

「げべしっ!!」

右手を空けるために、サイドスローで親父をブン投げると、親父は顔面から壁に激突した。

「で、なんのようだ？」

「……ゲホッ……俺、いちようお前の父親なんだけど。こんなに暴力受けるとは思わなかったんだけど」

「で、なんのようだ？」

「いや、その切り返しはねえだろ。せめてちゃんと反応してくれ」

「で、なんのようだ？」

「……もういいよ」

一度ため息を吐いた親父は、さっきとは違い普通に立って、普通にカウンター席に座った。

さっきまでの軟体動物的行動は、たぶんノリだな。

言っちゃ悪いが、親父はほぼノリで生きてる人間だ。

その親父がノリを止めたってことは……

「真慈お前……左目見えてねえだろ？」

……やっぱりな。

さすが世界最強の主婦と肩を並べる唯一の男だ。カンが異常に鋭い彩華や、医療に詳しい麻依子でも騙せた俺の演技力も、親である二人には無駄なんだろう。

ノリを止めた父親は、俺の目を見据えていた。

……だけど、俺の片目はその視線を返すことが出来ない。隠し事はムダだな……

「ああ、お袋との戦闘で狂気に耐えきれずに喰われたらしい。狂気を流せば一時的に視覚が戻るけど……下手すれば脳ミソが犯される」

実際入院中に一度試した時は、脳ミソが焼け焦げそうな痛みを味わった。

あんなことを一日中やってたら、確実に俺は狂人になる。

「ほう……」

俺の言葉に驚きもせず、親父は納得をした顔で自分の顎を撫でている。

「その目、治したいか？」

「なッ！？ そんなことが出来るのか！？」

俺は狂気で失った視力は一生戻らないと思って、みんなに黙ってるつもりだった。

けど、その視力が戻るなんて、驚かないわけがない。

「簡単な話だ。狂気を霊力で抑えながら左目と脳ミソを繋ぐ神経の代わりにすればいい。……まあ、霊力や狂気の繊細な調整を覚える必要があるが、覚えれば二十時間は影響ナシに左目が見れるだろうよ」

「……ムリだ。俺はそんな霊力やら狂気を調整なんてしてねえ」

俺の場合は暴走に近いだろう。

狂気は俺を喰う気でいたからな。

喰われないように必死な俺が、狂気を制御するなんて……

「まったく、真慈！ それでも俺と秦の息子か？」

親父の言葉に、いつの間にか停止していた視界を復活させる。目の前には、ため息を吐いてうんざりした顔をした親父がいた。

「俺と秦が夜中の頑張った努力の結晶に、出来ないことがあるはずないだろうが……それに、なんのために俺がここにいると思ってるんだ？」

「そこは『愛の結晶』辺りで表現して欲しかったのは置いて……もしかして、俺に教えてくれるのか？」

「おうよ！　一カ月で最強の霊能力者にしてやろう」

親父は自信満々に俺に言う。

さすがにこの後の数十年、片目が見えないことを、周囲に隠し通すことは出来ないだろう。

最強の霊能力者には興味ないが、教えてもらえるならありがたい。

「……そのかわり、条件がある」

真剣な表情の親父は、俺を人差し指と中指で指す。

条件は二つということだろう。

「ああ、出来ることならやってやる。ぜひ教えてくれ」

多分、俺は大半の条件を飲み込むだろう。

距離感がつかめないのは不便だし……なにより、みんなに心配を掛

けたくない。  
俺は親父の言葉を待った。

しかし、その言葉は信じられないほど最悪で……

「お前には一カ月後……秦と戦ってもらおう」

……最高の再戦チャンスを俺に与えた。



## S U I C I D E 3 4 ～俺と親父と、なぜかお袋～（後書き）

こんにちは、夷神酒です。

さて、この小説もそろそろ終焉が見えてきました。

本当はもう少し早く終わる予定でしたが、予想以上の評価の声をここまで来ることが出来ました。

特に、にこ様には母親との再戦のアイデアリターンマッチを使わせて頂くなど、読者に頼りっぱなしの作者です。

…なので、神酒は最後まで読者の声を聞きたいと思っています。

最終話の方向として、神酒は三種類考えております。

一つ目は、すべての恋愛フラグを無視して、コメディ一直線で終わらせる。

黒ヘルが好きな方は、この意見だと勝手に思っています  
作者としては、これを一番有力と思っています。

二つ目は、一人のフラグに集中して、ラブコメで終わらせる。  
この場合は、メッセージや感想、評価で届いた読者の意見が尊重されます。

ただ今の時点では、にこ様の評価に小夜、コロコロ様の評価に麗花の名前が出ていますので、これ以上の意見がなければ、そのどちらかが選ばれるでしょう。

三つ目は、全員のフラグを尊重して、全員分の最終話を書く。  
これはある意味平等な終わり方です。

執筆時間等の問題がありますが、作者の睡眠時間と根性を削りだせば出来ないことはありません。

『○番目がいい』や『他の終わり方があるだろう』などの意見があれば、是非とも点数はいりませんので、作品に感想や作者ページからのメッセージ等で、貴方の意見をお聞かせください。  
一度ご評価頂いた方も、ぜひとも意見をお願いいたします。

そして最後に、後書きが異常に長くなってしまったことを心からお詫びします。

申し訳ありませんでした。

S U I C I D E 3 5 〉 決意の死神、 制止する天使 〈 前書き 〉

しつこいようですが、是非とも前回と今回の後書きを見てください  
！！

S U I C I D E 3 5 〉 決意の死神、制止する天使〈

人は神の創った土人形……

……人が醜いのは、神が手え抜いて適当に創るからだろ？

「お前には一カ月後……秦と戦ってもらう」

親父の口から出てきた言葉……それは確実に『お袋との再戦』を意味していた。

「……理由は？」

「ん？ なんとなくだけど」

……

親父のふざけた答えに対して、俺は親父の顎に出刃包丁の側面を当て、その切っ先を喉仏に向ける。

「……もう一度聞くぞ？ 理由は？」

「チヨツ、チヨイ待てツ！！ 喉元カツ裂かれるとしばらく話せん！」

「その場合は紙に書いてもらうから問題無し。さあ、首チヨンパかまともな理由を吐けや」

「分かった！ 分かったからやめれ！！」

両手を上げて完全服従のポーズを取った親父は、額に汗を浮かばせながら弁解する。

まあ、書いた紙の処分が面倒クセエから言葉で聞こうじゃないか。

「じゃ、簡潔に説明するぞ。正確に言えばお前には俺と一緒にある組織を破壊してもらう」

「組織？ 私設武装組織のソレスタルなんかか？」

「いや、戦争根絶とかしねえし、最終回で二部に向けてキャラ&機体の一掃なんてしねえ」

「……だいぶ詳しいな」

……そういや、黒ヘルとして家ココにいた時も毎週見てやがった。

つか、毎週楽しそうに見てたクセしてだいぶ辛口コメントだな、オィ。

「まあ、そつちの話は置いて本題に戻るぞ。その組織は黄泉に蔓延はびこる鬼の団体様だ。鬼は人の欲望や狂気の集合体で、黄泉に辿り着く前の魂を喰らってる。今までは鬼も輪廻バランスの一部だったが、最近では自殺や猟奇的殺人が多くなったせいで、生命力が残った魂を鬼がガボガボ喰って力つけてやがる。そのバランスを修正するために、俺達は一部の鬼が作った組織を破壊する。……これで説明は終了だ」

親父は説明が終わり、グラスに残った少量の酒を飲み干す。

てか、それ俺のグラス……まあ、今はそんなことは問題じゃない。

「……大体のことは分かった」

大体といっても、輪廻やら鬼やらの意味はほとんど分からない。

……でも、それは本当に些細なことだ。

『輪廻なにかのために鬼テキを倒す』

これさえ分かれば問題ない。

……………で？

「俺の耳がおかしいのかなあ？ 俺の鼓膜には『お袋』や『秦』や『世界最凶』の言葉が一字もヒットしなかったんだけど？」

「落ち着けッ！！ 重要な事をちよつと言い忘れただけだから……………そのアイスピックを早く退けてくれッ！！ 喋るたびに喉にチヨイチヨイ突き刺さ…痛ッ!？」

俺に『お袋と戦ってもらおう』と言っておいて、説明聞いたら『鬼と戦ってもらおう』じゃねえか。

ここで一思いにグサツと殺ツてやりたいけど、話が進まなくなるので一先ひとまずアイスピックの先端を親父の喉元から外す。

そして、親父はここに来て何度目かも分からなくなつたため息を吐いた。

呆あきれからじゃなく……………憂あきいを帯びたため息を。

「ハア……その組織の頭が秦なんだよ」

……は？

「あいつは俺がキャバクラ通いしてたの知ってから、報復とばかりに鬼を率いて俺を攻めてくる。……鬼達が魂喰らいしてるのを知らずにな」

……はあ！？

「まったく、困ったもんだぜ。男の夢とロマンを奪おうとするなんて……」

……。

うん、これはあれだな。

一度、抹殺けすしかないね。

「あそこは天国だぞ……ってや、やめろ!! 俺は男のロマンについて語っただけジャブオツ!？」

容赦なく肅正開始。

またまた、しばらくお待ちください

親父は頭に作られたタンコブの山から、白煙を上げて倒れていた。

「ゲフツ……この展開、そろそろ飽きてきたぜ？」

「うつせえ、テメエの発言がその原因だ。文句があんならその口一生開くんじゃねえ」

「うむ、自由な発言権は欲しい」

親父は頭のコブはそのままに立ち上がり、さっきまで座っていた席に戻る。  
平然としやがって……俺は除霊師じゃねえから幽霊を抹殺しないのが残念だ。

「で、どうすんだ？ お前のことだからもう決まってるんだろ？」

「取り合えずな」

「まあ、ここまで言っというてなんだが、一つだけ忠告しておく。……黄泉の戦いで足を失ったら、現世で下半身不随だ。そして黄泉で鬼に食われれば……二度と現世に帰っては来れない」

親父の瞳は真剣みを帯びている……つーことは、本当のことだな。  
黄泉で下手すりゃこの左目のようになるって事か……

けど……それがどうした？

お袋は世界最強の主婦で、正義の味方だった。

そのお袋が、夫婦喧嘩のために悪に手を貸している。  
例えそれが騙されてるとしても、事実には代わりない。

親の不始末だ……俺が一発ブン殴って目エ覚ましてやるっじゃねえか。

「分かった。分かった上で結論だ」

俺は俺の意志を伝える。

左目を治すためなんかじゃない、俺自身の魂が求める答えを……

「俺は……」「行かない」

……えっ？

俺じゃない言葉が入ったぞ。

「……行かねえのか？」

「いや、俺は……」「行かない」

なぜか関係のない声が被る。

それも、俺と親父の声とは違う。

この部屋には俺と親父の二人しか……

「シン……行かない。行っちゃダメ」

リビングの入り口に、その声の主がいた。

……どうやら、時間を伸ばしすぎたらしい。

「小夜……」

「超長髪少女か。帰ってたんだな」

俺と親父の視線の先には、無表情で俺を見つめ返してくる片翼天使……笠井小夜がいた。

S U I C I D E 3 5 〱 決意の死神、制止する天使〱（後書き）

携帯水没によって、文章と執筆意欲を失った神酒です。

細かいことは聞かないください……トラウマですから（涙）

さて、前回の後書きで読者の皆様に意見を聞いた所、予想を超えた量の意見が送られてきました。

この場で再度感謝させていただきます。

留龍隆様、封禁様

タナチユウ様、ジョーカー様

魚磁様、RUMOUR様、神羅様

本当に有難うございました。

中間結果としては三番、一番、二番の順位です。

……しかし、まだ決定ではありません。

評価点はいりませんので、感想やメッセージで読者の言葉をドンドン下さい……

お願い致します。

S U I C I D E 3 6 ～ 帰れる場所、 帰らなきゃならない場所、 帰る場所～（前書

前回、 前々回、 そして今回の後書きをぜひお読みください（願

S U I C I D E 3 6 へ 帰 れ る 場 所 、 帰 ら な き や な ら な い 場 所 、 帰 る 場 所 へ

生者は『死』を受け入れて<sup>そら</sup>天空に帰る。  
死者は『生』を得ることで<sup>ち</sup>大地に帰る。

これが輪廻の根源

親父との会話の途中で表れた小夜。

「なあ、小夜……」

「ヤだ」

現在、俺はその小夜に……つまり『ヘルの休息』（参照）状態で拘束されていた。

『ああ、そんなモンあったなあ』とか思ったそのあなた！！  
実は見えない所で一週間に二、三回は行われてるんですよ！！  
……と、言っても、ここまで離れることを拒否されるのは初めてだ  
けどな。

「なあ、小夜。そろそろ離してくれな……」

「ヤだ」

さつきからこの会話を何度続けてるだろうか……  
完全に取りつく島もない小夜。  
てか、最後までしゃべらせろ！！

「ほら、お前の好きなクッキー焼いてやるから」

「いらない」

「んじゃ、シフォンケーキ」

「いない」

「……チーズタルト」

「いない」

「コロラのマーチ」

「……いない」

うおおおおお!!

○ッテの定番菓子に心が揺らいだ!?

……でも、ケーキやタルトは作れても、さすがにコロラのマーチは無理だわ。

好物で釣れないなら……

「そんなにワガママだと、夕飯にグリーンピース入れるぞ?」

「!?!」

後ろから抱きつかれてるから小夜の顔は見えないけど、俺の両脇に通された腕からビクツと反応が伝わる。

「……」

完全に沈黙

更にギュッと抱き締められる。

「…………むう」

唸る。

手がソワソワと動く。

「……………」

更に沈黙。

腕の力が緩む。

うしツ！ このままいけば、離してくれる！

俺は勝……………」

「……………いい。シン、どこにも行かないなら」

……………てませんでしたああああ。

それどころか、小夜の腕は再び俺の体をガツシリと抱き締めた。

もう一人じゃ無理だぜ、こりゃ。

……………あのクソ親父、こんな時に逃げやがって。

『まあ、結論を早まるこつたねえ。三日後にもう一度来っから、そんな時に答えな』

そんな言葉を残して、親父はどっかに消えてった。

だから、小夜の拘束を外すためには、俺一人でなんとかしなきゃならない……！  
いいこと考えたッ！

「いや、このままじゃ料理できないし、退院パーティーできなくなるぞ」

小夜は優しい子だ。

周りのことを考えて行動すれば、ここで俺に料理をさせるはずだ。

「……」

お、手が離れた。

……と思ったら、ベルト!?

俺の腰には、車椅子についていると思われるシートベルト(？)がしっかりと装着されていた。

「ヲイ、ちょっと待てや」

「……」

「シカトか……って！ ちょっと危ねえッ!！」

両手がフリーになった小夜は、車椅子を手で漕いで、俺を乗せたまま移動する。

そして、二人を乗せた車椅子が着いた先は……まな板の目の前。

「もしかして……この状態で料理しろと？」

「……」

俺の左首筋に、小夜のあごが一瞬だけ触れる。

きつと、うなずいたんだろう。

「……小夜、なんで俺がいなくなると思うんだ？」

俺が質問すると、小夜の腕が俺の胸で交差して、俺を後ろに強く抱き寄せる。

……小夜は、俺がどんなことをしようとも、こんなに強く止めることは今まで一度もなかった。

その小夜が今のように行動する理由が、俺には分からないのだ。

「……わか……い……」

「ん？」

「わからない……わからない……けど……こわい……」

小夜の震えた言葉が聞こえた時、左肩に『何か』が押しつけられる。左目が使えないから見えないけど、左頬に触れた絹糸のような小夜

の髪が、その『何か』が小夜の顔だと教えてくれる。  
そして、その左肩に伝わる弱々しい震えが……小夜の涙を伝えてくれる。

「シン…傷つく…心…イタい…悲しい…ツライ……」

……小夜は本当に優しい子だ。

その優しさは、きつと小夜の根底にあつて、感情が欠乏した今でもそれは変わってない。

そして、涙を流しながら絞りだされる小夜の震えた声が、今の行動がその優しさから来たものだを教えてくれる。

「……だから……おね……がい……行かな……いで……」

小夜の儂<sup>はかな</sup>く消え入ってしまいそうな声が、俺の心を揺さ振る。

小夜の縊<sup>すが</sup>るように抱き締めてくる両腕が、俺の決意を引き止める。

クソツ……俺はどいすりゃいいんだ。

「もお……小夜。真慈を困らせちゃダメでしょ？ て、言うよりズルい！」

「真慈も真慈だ。笠井さんのなすがままで……まあ、そこが君らしいけれどな」

俺の心に迷いが生じた時、突然耳に入ってきた二人の声。

その声のしたほうに視線を向ける。

すると、リビングの入り口に見慣れた二人の姿があった。

片方は俺の幼馴染み。

赤くキラめくツインテールを揺らし動く小さな姿は、小動物のような愛くるしさがある。

その名前を谷津麻依子と言う。

片方は俺の恩人の妹。

光の加減で青く輝くポニーテールなびかせ歩く姿は、女性の中に凜とした精悍さを見せる。

その名前を戸野麗花と言う。

「なんでお前等……」

「アタシはパーティーの準備を手伝おうと思って来たんだけど、たまたま真慈と小夜が話し込んでるのを聞いてちゃったんだ」

「そこに私も来て、そのまま二人で聞き耳を立てていたわけだ」

二人ともまったく悪怯れなさそうな顔をして、俺達に近づいてくる。小夜は二人が目の前に来ても、俺の肩に顔を埋めたままだ。

「……まあ、いい。んじゃ、俺がどっか行ってくつてのは知ってるな」

コクン、と首を振る二人。

「場所は死者の逝く世界、黄泉。理由はお袋に会って一発ブチかます。行くのは一カ月後だ。下手すりゃ死ぬ」

ここでなにを隠しても無駄だ。

俺は正直に、そして簡潔に話す。……さあ、どう反応するのか。

「……まったく、真慈もバカやるね。バカもバカ、大バカ者だね」

「ああ、行動が意味不明すぎる。私の姉以上に理解不能だ」

「お前等……結構ヒドいな」



「真慈ウルサイ！ そんな驚く必要ないじゃん」  
「いや、だってさ……」

びっくりした。

正直、反対されると思ってたからびっくりした。  
いや〜びっくりした。

「真慈、私達も馬鹿ではない。君が私達の制止を受け入らない事ぐらい分かってる」

「アハハ……やっぱり分かってた？」

麗花の言ってることは正解だ。

俺は誰が制止しようと、お袋に会いに行く。

「だからこそ言わせてもらう。いくら反対されるのが分かっていたとしても……そのような重要な事は私達に相談してくれ」

「……気が乗つたらな」

「絶対！ 絶対だよッ!!」

「ハイハイ……」

麗花に言われ、麻依子に念を押された。

どんだけ信用ねえんだよ、俺。

取り合えず、二人はなんとかなつたみたいだ。  
問題は……

「小夜」

「……………ヤだ……」

このだっ子はどうするか……………だな。

俺は、小夜の頭を左手で優しく撫でる。

「小夜？ そろそろ真慈のこと離してやりなよ」

「そうだ。それに……………羨ましすぎるぞ」

「……………」

二人の説得にも、小夜は顔を埋めたまま……………

「……………マイ……………レイ……………シンいなくなる……………こわくないの……………？」

……………無言だと思っていた小夜は、以外にも声を出した。  
震えながら、怯えながら。

「……………怖くないって言ったら嘘になるよ。でもね、アタシは真慈を  
信じてるから」

「私には、彼が死ぬところが想像できないのだ。だから、私は彼を

送り、彼を待っている」

二人は少しだけトーンの下がった声で、小夜を優しく諭すように声をかける。

その声に答えるように、小夜の腕の力が少しづつ抜けていく。だけど、まだ腕の震えは止まってない。

俺は小夜を……いや、大切な人達を少しでも安心させるために約束する。

「麻依子、麗花、そして小夜……俺は必ず黄泉に行く。そして、必ず帰ってくるから」

必ず、絶対、必死に守る約束。

例え大地が割れ、天空が裂けようと……

「帰ってきたら……お前等の好きな食い物作ってやるよ」

俺は帰る。

俺には帰らなきゃならない場所があるから。

俺には帰るべき場所があるから。

俺には帰れる場所があるから。

そして……

「……シン……約束……だよ……」

小夜の腕がゆっくりと、俺の体から離れていく。

俺はすぐには立ち上がらずに、もう一度小夜の頭を撫でる。

「ああ、約束だ。必ず帰ってくる」

俺は笑顔で小夜に答える。

俺は立ち上がって、背伸びをしながら息を吸い……その空気を声にして吐く。

「よしっ！ パーティーの準備始めるぞ！」

「おーッ！」

「うむ、手伝わせてもらおう」

「……うん……」

俺は帰る。

俺には帰れる場所があるから。

そして……俺の帰りを待ってくれる人がいるから。

S U I C I D E 3 6 ～ 帰れる場所、帰らなきゃならない場所、帰る場所～（後書

皆々様、お久しぶりです。

最近更新が滞っている夷 神酒です（汗

さて、まずは前回&前々回の呼び掛けに新たに答えてくださった……

ソラ様、桜坂 世蹴様、おおーいお茶様、漆黒の咎人様、涼舞様

ご意見、ご評価誠にありがとうございました。

今回、人気の三人を登場させた話となりました。

実際の順位としましては

一位、麻依子

二位、麗花

三位、小夜

でした。

また、まだ集計途中ですが、最終話のご意見では3番がダントツです  
すね。

又、一部の方からは『コメディENDを書いてから各フラグメントを書く』案が出ています。

その場合ですと

『私の実力では、コメディENDとフラグメントEND、その二つに違和感のなくバトントス出来る前話が書けない』  
と、言う問題が発生します。

原因はすべて神酒の実力不足です、申し訳ございません。

しかし、その問題の解消策として神酒が考えた意見があります。

『【コメディ+フラグメント】がダメなら、【コメディ フラグメント】ならどうだろうか?』

つまり、コメディENDを書いた後、その時間軸を少し進ませて、数年後の各フラグメントを書くということでした。

この場合は、告白シーンなどを回想で送るしかありませんが、コメディENDと各フラグメントをまともなものに仕上げるためには一番確実な方法です。

前々回の意見募集はもちろんのこと、この案に対する賛成、反対、別意見なども受け付けます。

神酒は貴方のご意見を、心より欲しております。

貴方のご意見が今後の話を左右しますので、是非とも参加してください。

よろしくお願いいたします。

S U I C I D E 3 7 拳で交わす約束、ソシテ狂気(前書き)

今回の前半は大分はしゃいでます。苦手な方は……ゴメンなさい。  
あと、後書きをぜひ読んでください!!

S U I C I D E 3 7 拳で交わす約束、ソシテ狂気

人は狂気に打ち勝つて強く……ナレナイ

狂気〃人、人〃狂気

裏返シナンカジャナイ、イコールナンダヨツ!!

c r a z y  
m i n d

……キャハッ！！

皆サンオ久シブリDeath！

愉快デ樂シイ狂気サンダヨー！！

久々ノ登場ニ、俺ハテンション上がりッパナシダゼエエイ！！

サツキマデ寝テタカラ、トツテモ面白イ夢見ンダヨオオ

教エテ欲シイ？ ショウガナイナア、教エテヤルヨ！

グヒッ……俺ガ皆ヲ喰ッチャウンダヨオ

飛ビ散ル臍物ノステーキ……抉リ取ツタ目ン玉キャンデー……滴

ル鮮血ノ赤ワイン……恐怖ニ染マツタ悲鳴ノ極上スパイス……アア、  
美味シイソウダッタナア……ウツ、ヨダレ垂レソ。

アア、正夢ニナツテクレナイカナア。  
ソレトモ……

俺ガ正夢ニシヨウカナ……





「フツ、フツ、フツ、フツ、フツ……」

闇が明けたばかりの白霧しろきりが立ちこめる早朝。  
俺はその霧の中を走っていた。

目的はない、ただ道なりに走るだけ。  
理由はない、ただ前へと走るだけ。  
意味はない、ただ無心で走るだけ。

たまたま早朝に起きてしまい、たまたま走りたくなった……それだけだ。

「フツ、フツ、フツ、フツ………フウ」

俺の足が不意に止まる。

そして気づく、目の前に立ちほだかる存在に。  
それは俺と同じ白髪を持った男で、地面から数センチ浮くという物理学上ありえないことをやっていた。

……まあ、幽霊だから仕方ないけど。

「どけ、クソ親父。物理的には問題ないが精神的に邪魔だ」  
「父親に会って第一声がそれってどうよ？」

そう、目の前に表れたのは俺の親父。

それにしても邪魔だ。

俺はゆっくり大きく息を吸い……

「……俺は『どけ』と言っている、邪魔親父。そのふざけたツライ  
つまで俺の眼中に入れる気だクソカス。目が腐る。それともあれか  
？ お前は邪魔するだけしか脳が無いゴミか？ 大体、真っ正面に  
突然現れるって、どこの変質者だ？ 女子高生にロングコート着て  
同じことやってみろ。一発で警察に捕まる。つか、捕まれ。そして  
消えろ」

いつもは鉄拳制裁で解決するけど、今日は罵詈雑言をやってみた。  
結果は……

「……うう、息子に苛められた……死のうかな……もう死んでるけ  
ど」

物凄くいじけてる。

膝を抱えて座りながら、人差し指一本で地面に何か書いてる……っ  
て!??

「なに地面にモナリザ書いてんだよツ!? いじけて書くモノじゃねえだろ!」

「…息子にゴミ扱いされたぐらい…いいもん…」

「分かった! 言い過ぎたことは謝る! だから、モナリザの隣に最後の晚餐書き足すなツ!」

いじけた親父は、アスファルトの地面に指先だけでモナリザ（完成）と最後の晚餐（途中まで）を書き上げていた。しかもフルカラー＋同サイズで。

コイツ、指先にどんな仕掛けしてんだ?

「んなもん道に書くな。車に踏まれたらダ・ヴィンチに失礼だろ」

「む、珍しく伏せ字使わないな」

「いや、そこツツコむところじゃないから」

相変わらず、親父はどこかがズレている。

行動も思考も、ズレまくってる。

それがいいのか悪いのかは分からな……どっちかって言えば悪いな。やっぱりこいつはダメ親父だ。

「おい、なんか失礼なこと考えてるだろ?」

「気のせい気のせい。そんなことより……答えが決まった」

俺の言葉に、親父の口角がピクツと動く。

そう、今日が約束の日。

親父が俺を見る目も、徐々に真剣味を帯びてくる。

「俺は……行く。親の尻拭い、俺がしっかりケリつけてやる」

俺の言葉を聞いた親父は、どこか小馬鹿にしたように鼻で笑う。

「ずいぶん凶に乗ったことを言うようになったな……それぐらいじやねえと困る」

親父は不適な笑みを浮かべながら、右手を天に掲げるように上げる。

「来い……幻羅空鶴げんらくうかく」

その手の平にどこからか光の粒子が集まり、見慣れた真つ白な鶴嘴つるはしが完成する。

「早速だが、これからお前にやってもらわなきゃならないことがある」

俺の目の前では、無風の中で靄が異様に逆巻き、親父の長い白髪が空中に踊る。

……不思議な世界がそこに展開していた。

「ハッキリ言う。お前は狂気に蝕まれ始めてる。左目が喰われたのがその証拠だ」

親父の言葉を聞いて、俺は自分の左目に右手を覆い被せる。

……体温を感じない。

診察結果で血は通ってるが、死んだような冷たさを感じさせる。

「普通、狂気は感情の一端に過ぎない。だが、お前の狂気は『一つ  
の人格』として感情から独立している。所謂、二重人格に酷似して  
いる状態だ」

親父は淡々と語る。

俺の狂気は『殺意や快楽に忠実な意志』だ。

狂気は、元々俺の感情の一端だった……そう思うだけで吐き気がする。

「だが、正確には二重人格とは言えない」

「……なんでだ？」

「お前には二重人格特有の『人格入れ代わり』がない。これは俺の  
勝手な会見だが、お前の人格は『勝者が人格を支配する』って仕組

みだと思つ」

「……つまり占領してる部分が多い方が勝ちってことか？」

「俺の考えはそういうことだ」

親父の言葉を簡単に説明すればこうだ。

俺の肉体や精神を多く支配下に置いた方が勝ち。

勝者に主人格メイン・キャラクターの地位を与えられる。

そして現在、主人格の地位は俺にある。

つまり、副人格サブ・キャラクターの狂気にとって、俺は邪魔者……

「そして、狂気はお前の肉体と精神を喰って『勝者』になろうとしてる」

俺が喰われれば、主人格の地位は狂気のものとなる。

そうなれば……死ぬまで止まることのない狂気の暴走レクリスが始まる。

「……で、俺になにをさせるつもりだ？」

「今から俺がお前の精神内に術式を打ち込んで、魂の閉鎖空間を作り出す」

「ヲイ、打ち込むって……大丈夫なのか」

「安心しろ。空間術は俺の得意分野だ。だが、術の内容は単純化してるから靈力による武器創造は出来ねえし……お前が狂気に喰い尽くされる可能性もある。だからこそ……」

親父は話すのを止め……俺に笑顔を見せる。

まるで子供が悪戯を成功させた時の、本当に無邪気で楽しそうな笑顔。

「……………狂気と和解出来なきゃ、お前らしくブン殴って服従させる」

親父は満面の笑みでそう言っただけ。

俺らしくって……………黒ヘルの時に殴ってたこと根に持ってたんじゃないよクソ親父。

だけど……………

「ああ、俺を喰おうなんて生意気なこと出来ねえようにしてやるよ」  
「……………相変わらず図太い根性してやがる。さすが俺と秦の息子だ」

相変わらず笑みを浮かべている親父は、俺に向かってゆっくりと拳を突き出す。

それに答えるように、俺は親父の拳に自分の拳を突き合わせる。  
そして、お互いをゆっくり『殴り合う』。

「お前は俺を殴った！ 後でこのケリは必ずつける！！」  
「だから、絶対帰ってくる！ 首を洗って待ってやがれッ！！」  
「だから、絶対帰ってこい！ 拳を握って待ってやるよッ！！」

俺と親父は約束した。

自分のケリをつけるため、相手のケリをつけさせるため……俺はここに帰ってくる。

「そんじやとつと行つてこいッ！！ 空間術式『そつれつあんぎや葬列行脚』！！」

親父の言葉に反応して、鶴嘴が強烈な光放つのを見ながら、俺の意識は静かに沈んでいった。

……あ、俺の体どうするだろ。

道の真ん中……に放置だけは……やめてほし……い……

ケケケ……

イラッシャイマセエ)

お客様八一名デゴザイマスネ？

デシタラ、コチラノ席ヲドウゾ。

ギロチン標準装備ノ特別席デゴザイマアス

グピピ……

ドウゾ、最後ノ晚餐ヲ才楽シミクダサイ……ソシテ、俺ノ最高級ノ  
ゴ馳走ニシテヤルヨッ！！



S U I C I D E 3 7 拳で交わす約束、ソシテ狂気（後書き）

お久しぶりでございます。

最近、 ユツパ ヤップスのコーラ味のみハマっている（五本以上常備）夷神酒です。

さて、皆様に協力いただいたアンケートもそろそろ々切りです……  
てか、次の更新で最後になりそうです。

雨太郎様、 A 様。

ご意見、ご感想ありがとうございます。

そして、神羅様、タナチュウ様。

何度もご意見をいただき、ご足労ありがとうございます。

あと、神羅様にはメッセージで内容の厚いご意見を頂きましたので、  
この場で回答させて頂きます。

神羅様のご意見、確かに書きやすいものです。

しかし、エンディングが単調になってしまふという欠点があります。  
それは読者として面白みに欠けるものとなるでしょう。  
てか、未熟者の私ではそう書いてしまいます。

この意見は、私が行き詰まった時に頼らせて頂きます。  
神酒は貴方のご意見を心より感謝致しております。

様々なご意見が寄せられて、私としては感謝感激雨霰です！！  
……しかし、残念ながらすべてのご意見を採用できるわけではありません。

今のうちに謝っておきます。

スイマセンゴメンなさい申し訳ありません許してください神様仏様  
読者様。

では、そんな私のバッシングを受けまくりそんな最有力案を発表し  
ます。

V Sお袋までに各フラグの分岐点をつけながら『死にたくても死ね  
ない！？』はコメディエンドで終わらせる。  
その後、短編 or 短期連載(二、三話)で一つのフラグの分岐点か  
らそのヒロインとのエンディングを書く。

#### 特記事項

#### プラス面

・このエンドの場合は各エンドを充実させることが出来る……と思  
います。  
・マルチエンドの嫌いな方も、コメディエンドで読み終える事が出  
来る。

・特殊フラグのバッドエンドつき

#### マイナス面

・今以上に更新に時間が掛かります。  
・人気のあるキャラのフラグを充実させるため、一度も名前が出な

かったフラグ（麻衣子、麗華、小夜以外）はエンディングを省くことになりそうです。

（しかし、次更新まで一定数の名前が出れば、そのキャラは候補として追加されます）

……さあ、どうでしょうか？

ああ、バッシングが目につかぶ……

しかし、これが現在の私が考えられる最高のパフォーマンスなので

どうぞ、次更新まで二週間ほどかかりますので、それまでに貴方のご意見を頂けることを神酒は信じています。

では、また。

SUICIDE38〜ぬいぐるみ達の前奏曲（プリレコード）〜

貴方を見ると胸が疼く。

私は貴方を嫌いなのかもしれませぬ。

貴方を見ると胸が疼く。

私は貴方を好きなのかもしれませぬ。

貴方を見ると胸が疼く。

私ハ貴方ヲ殺シタイノカモシレマセン。

目を潰しそうな程強烈な光に目蓋を閉じた俺。  
その俺が次に目を開いた時、視覚に飛び込んできた色は……黒。

「……………なんだこれ」

真っ黒な地面に重く薄暗い空間が乗っかっている。  
それほどに足元はペンキで塗り潰されたように黒く、実体があるかのように暗い世界に俺はいた。

そして、目の前にはクマやウサギを模した、ぬいぐるみが積み重なってできた四、五メートルはある山。

その中には某黄色いクマや某耳がデカいネズミ等、お馴染みのぬいぐるみもあった。

この暗く気味の悪い空間に、ぬいぐるみなんて合わないと思えるが、そのぬいぐるみ達の『状況』がこの世界と異様にマッチしていた。

「現実じゃないとしても……酷いな」

そのぬいぐるみ達は、すべて『壊れて』いた。

一つは手足をもぎ取られ、一つは頭を跡形もなく切り刻まれ、一つは体中に釘やネジが埋め込まれている。

さらに、その切り口からは真っ白な綿じゃなく、真っ赤な肉が飛び出し、赤黒い血が滲み出していた。

そんなぬいぐるみが何十個……何百個も山になって、地面に生臭い黒血の大海を作っていれば、不気味としか言いようがない。

《……ククツ……ククククツ……》

そして、その山の頂上で不気味な笑みを浮かべながら、某アヒル型ぬいぐるみの目玉<sup>ポタン</sup>を引き千切ってる者がいた。

その姿は、黒髪以外はまさに俺の生き写し……そして俺自身。

「まったく、随分と悪趣味だな……このクソ狂気がツッ!」

《クケケツ……人ノ趣味ニイチャモンツケルナンテ、不粹ジャネエカ? ナア、相棒》

睨み合う俺と狂気。

狂気は笑いながら、引き千切った目玉<sup>ポタン</sup>を指先で粉々に握り潰した。

「この空間……元々こんなじゃねえだろ？」

《オウ、サイコーダロ？ 生血滴ルノ人形ナンテ現実ニハネエカラナ》

「最悪だつて言ってるんだろ？がクソが。……それにしても、この空間は創造は出来ないと親父に聞いてただけだな」

《ナニヲ言ツテヤガル。ココハ相棒ノ精神、ツマリ俺ノテリトリーダゼ？ 喰ツチマエバコツチノモンダ》

そう言った狂気は、不快な笑みを浮かべながら、手に持ったぬいぐるみを上に投げて……

《朽ち果テロ……ディス・ル・ラクシス破滅乃絶望》

……創造した漆黒の刀で、そのぬいぐるみの胸部を綺麗に貫いた。黒い刀身にぬいぐるみから溢れ出る真っ赤な血が、ゆっくりと刀身を赤く塗り潰していき、鏝つばまで流れていく。

「なるほど……」

狂気の言ってることは大体理解した。

それを踏まえて、俺は屈みながら血の海と化した地面に手の平をつける。

まだ生暖かく、独特のぬめりを感じながら……念じる。

……俺はこの空間を支配する。

俺の手を中心として、世界は黒から白に変貌を開始する。  
黒い地面は崩れ去り、薄暗い空間は霧散していく。  
そして、趣味の悪いぬいぐるみの山を残し、世界は白に染められた。

《……ヤツテクレルゼ、相棒》

「ハッ、テメエに出来ることが俺に出来ねえわけねえだろうが」

俺は立ち上がりながら、手の握ったり開いたりして、空間の感触を確かめる。

……確かに、これなら創造できるな。

「生み出せ……リジエール・レナンス 創生乃祝福」

創造によって、俺の目の前に白銀に輝く一振りの刀が現れる。  
その刀を右手に掴んで、切っ先を狂気に向ける。

「ダメ元で聞いてやる。お前は勝手に暴れないことを約束できるか？」

《……ハア？ ナニイカレタコト又カシテヤガル。暴走ヲ止メタラ、俺ハ廃人ニナツチマウ！ 腐ツチマウダヨオオオオオツ！?!》  
興奮し始めた狂気は刀を振り上げ、突き刺したぬいぐるみの頭部を半分に斬る。

頭から胸を真つ二つに斬られたぬいぐるみは、血肉を撒き散らしながら空中に舞い上がって、気味のいいダンスを踊る。

「じゃあ、交渉決裂だ」

《ツマラネエコト言ツテンジャネエコ相棒オ！！ 交渉ナンテスル気ハサラサラネエコ！！》

俺と狂気は同時に左脇腹の服を人皮ごと引き裂き、背中に設置されたピンを外してから、服の上から左肩を押す。

空中で踊っていたぬいぐるみは、重力に引かれ落下を始める。

「発動………輝災禍鈴」  
フリーキнда・ヘル

《発動オ！！ 輝災禍鈴！！》  
フリーキндаア・ヘルウツ

俺達は力を解放する。

それは本気で相手をブツ倒すため。

その殺意に誘われ、自然と訪れる緊迫状態が、この場に静寂を生み出す。

きりもみ状態で落ちてくるぬいぐるみが……グシャリと音を立  
て、二人の間に落ちた。

《キャツハアアアアアッ！！ 刻ンデ刻ンデ刻ンデヤルヨオ！！》

先手を取ったのは狂気。

山の頂上から飛び上がった狂気は、重力加速を加えながら俺を真つ  
二つにするべく、黒刀を振り下ろしてくる。

その黒刀の軌道を予測しながら、俺は自らの白刀を鞘に収めるよう  
に腰の位置に持つていく。

そして狂気が俺の間合いに入った瞬間、実際は存在しない鯉口を斬  
り、上空に向かって抜刀横一線を放つ。

そして……「コンタクト」接触。

「ハアッ！！」

《ラアアアアアアアッ！！》

鏢迫り合いは起こらない。

刀同士の放つ高エネルギーによって、刃自体は触れ合っていないか  
らだ。

……神器・破滅乃絶望。  
デイス・ル・ラクシス

因果を断ち切り、如何なるものも破壊する呪われし黒刃。  
こくじん

……神器・創生乃祝福。  
リジエ・ル・レナシス

因果を断ち切り、如何なるものも生み出せる奇跡の白刃。  
はくじん

俺も親父の使っていた書齋で見た、古い文献の中でしか見たことのない、伝説級の代物。

『万物創生』の力を持つ、聖神が創った最高傑作。  
『万物破壊』の力を持つ、邪神が創った最悪兵器。

黒刀がその場に『有』る空間を破壊し、分子を破壊し、原子を破壊し、電子を破壊していき、最終的に『無』とする。  
白刀がなにも『無』い所から、電子を創り、原子を創り、分子を創っていき、最終的に『有』とする。

対極の存在であるこの二振りの刀が力をぶつけ合った時、その間には強い反発が生じる。

「……クッ……！」

《ウヒョーッ……！》

俺と狂気の間で、爆発的な衝撃波が起こる。

その衝撃に吹き飛ばされる寸前、バックステップで安全圏まで距離を取った……

《キャツハアアアアアアッ！！》

「ツ！？」

衝撃を掻い潜ってきた狂気が、俺の懐に飛び込んできた。

刹那の斬撃、寸前で黒刀の軌道を読み、その軌道上に白刀を差し込み相殺。

懐で起こった超近距離の衝撃波で、今度こそ二人とも前後に吹き飛ばぶ。

「チツ！！」

《油断シテンジャネエゼ相棒！！ スグ殺シチマウゼエ？》

俺はなんとか衝撃を耐え、追撃に備えて刀を構える。

しかし、狂気は追撃してこない。

手に持った黒刀を、そこから辺で拾った棒切れのように弄びながら、ヘラヘラ笑っているだけだ。

《ナア、相棒。ソナ出来損ナイノ武器ナントテ使ツテモ、俺ノ攻撃ヲ防グシカデキネエヨ？ ツマンネエカラ、モット俺ヲグチャグチャニシチャウヨウナ武器使オウゼ？》

……確かに、俺の持つ白刀は狂気の持つ黒刀に比べて攻撃力は著しく低い。  
ついでに言えば、この白刀は『直接物体を斬る』という、刃物として当然のことができない。  
つまり、この白刀直接的な攻撃力は、そこら辺の工事現場に転がってる鉄パイプと大差ないのだ。  
確かに、武器としては出来損ないだ。

……けど、これは単なる不良共の武器なんかじゃない。  
『万物破壊』と言う反則的能力を持った黒刀と同等の扱いを受けている、神が創った白銀の刃。

「……クソ狂気」  
《アン？》

「お望み通り、グチャグチャの挽き肉にしてやるよッ！！」

俺は抜刀の構えを取ってから、白刀の力を解放する。  
その力は『万物創生』。

創り出すのは……そう、すべてを切り裂く幾重もの鋭刃。

俺は横一線の抜刀を前方に向かって放つ。  
その刀身が描く楕円の軌道からは、白銀に輝く光の刃が無尽蔵に発生し、狂気に向かって高速で飛翔していく。

その輝く刃の群れに意志もなければ容赦もない。

ただ切断し両断し裂断し分断する。

ただ引き裂き切り裂き断ち切り切り捨てる。

その刃に触れたものにある未来は『斬』の一つ。

狂気が背にしていた生肉製ぬいぐるみの山も、飛来する光の刃に肉塊にされ、細切れにされ、ミンチにされ、最後には新鮮な100%生肉のトマトジュースと化す。

「……………ふう」

何百何千と放たれ続けた刃が、力の供給を止めることで途切れる。斬撃が地面を抉り取ったせいで、真っ白な土埃が立ち込めている。

これで俺は狂気に勝った……なんて都合のいいことは絶対にありえない、こんなんじゃない。終わらない。

相手は誰だ？

狂気という名の俺だぞ。

俺は追撃の準備をするため、手に持った白刀に『万物創生』以外に備えつけられた能力を使用する。

神器・創生リジエ・ル・レナシス乃祝福。

その形状は白銀の刃を持つ抜き身の日本刀。

けど……神がわざわざ固定の武器、しかも極東の小さな島国の刃物を模して『万物創生』なんて飛び抜けた代物を作る必要はない。

つまり、ここで俺が言いたいのは『この武器には決まった形状はない』ということだ。

そして、俺は目を瞑りながら刀の形をした神の武器に念じる。

……元々、俺は現代人だ。刀なんて得物、使いづらいたらありやしねえ。

俺がまともに使える戦闘スタイルや武器なんて、たかが知れてる。

俺が念じて数秒後、俺が目を開くと手に持った白刀は消えていた。

そして、その代わり右拳に装着された、白銀に輝く手袋状の籠手。ガントレット

拳の攻撃力を上げ、拳で防御力を行える、拳主力の喧嘩にはもってこいの武装。

「やっぱ、俺には喧嘩しかねえよな……さて、そろそろ出て来たらどうだクソ狂気ッ!!」

俺は右手の調子を確認しながら、晴れてきた土埃に向かって挑発する。

……けど、返答はない。

……まさか、マジで終わりか？

いや、ちよつとまで。

ここまで準備しといて終わってたら……メツチャ恥ずかしいぞオイ。

俺は狂気の生死を確認するため、土埃の立ち込める方へ足を進め……

ブロロロロロ……ギュイイ……ギュイイイッ……ギュイイイ  
イイイッ！！

獲物を狙い、低く唸<sup>うな</sup>っていた機械の獣が、ついにその大牙を獲物に突き立てる。

異質な音を聞いた瞬間、体が本能的に左へと跳んで転がる。

その瞬間、土埃を吹き飛ばしながら地面を切り裂く……いや、すべてを『破壊』する漆黒の波が、俺のすぐ右横を駆け抜ける。

そして、その波が通った後には底無しの谷が出来上がっていた。

一瞬が俺の命を左右していた……まさに肉薄。

「クソッ！ 不意討ち上等ってわけかよッ……」

俺は転がる反動で体を起こし、吹き飛んだ土埃の先を睨みつける。

《卑怯卑劣不意討チ上等ツ！！ ヨウハ勝テバイイ！ 殺セレバイ  
インダヨオオ！！》

俺の視界に現れたのは、相変わらず不快な笑みを浮かべた狂気。

……けど、その手にはさつきまで持っていた黒刀はない。

その代わり、ある意味刀より立ちの悪い得物を持っていた。

2ストロークエンジンが唸りを上げながら、『斬る』より『抉る』  
ことを得意とするチェーン状に連なった刃を回転させる。

黒光りするガイドバーは、メートルを軽く超えた規格外の長さを  
持ち、そのガイドバーに巻きついたチェーンは、その長さを無視し  
て世にも凶悪なスピードで回転している。

その凶器の名前は鎖鋸。<sup>チェーンソー</sup>

高機動の工具兼有名な殺人用凶器。

……俺が創生<sup>リジエール・レナス</sup>乃祝福を刀から籠手にしたように、狂気が持つ破滅<sup>デイス・ル・</sup>乃  
……<sup>ラクシス</sup>絶望も同様の能力を持ち、刀から鎖鋸に変化させたらしい。

「つたく……テメエは単純だな。凶器＝鎖鋸なんて、小学生でも想像できる組み合わせじゃねえか」

《キャハハツ！！ 単純デ結構ダゼ！！ 俺ハ単純ニ殺シタイダケナンダカラサアアアツ！！》

狂気は不快な笑みを更に歪め、悪質な笑みを俺に向ける。

その顔に向かって、俺はリーチ的に絶対届くはずのない右拳を突き出す。

拳は届かない……だけど、それでいい。

拳の代わりに、右拳に装着された籠手から『創生』をする。

創り出すのは……新幹線を思わせる程の大きさとスピードを併せ持つ、鋼鉄製の巨大な槍。

名前なんてない。ただ敵を潰すためだけに考えた、槍というより破城槌はじに近い鋼鉄の鉄柱。

「テメエの馬鹿げた単純な欲望なんて、単純に打ち砕いてやるうじやねえかよッ！！」

そんな巨槍を俺は籠手から創出し、拳から打ち出す。

数百t級の鉄柱が時速数百kmで襲い掛かってきた場合、対兵器級のシエルターでもないかぎり、避けることも守ることもできず見込みなんてない。

しかし、それは『人』の限界。

ギュギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

俺が創り出した規格外の巨槍は、規格外の鎖鋸によって止められた。『神』の作った最悪兵器は機械の猛獣となり、俺が創った『ただの物体』を火花を散らしながら破壊し、凶悪な咆哮を上げる。やがて巨槍は完全に破壊され、跡形もなく消え去った。

《ヒヤヒヤヒヤアアアアッ！ モットモット創り出せ相棒！！ 俺ガ全部ゼンブZENBU破壊シテヤルカラサアアア！？》

「クソが……桁外れな武器持ってんじゃねえよッ！」

鎖鋸一本であるの巨槍を止めるだけでもありえねえのに、跡形もなく破壊するなんて反則だがっ……

しかし、分かったことが一つある。

神の武器同士は反発し合うけど、俺が武器で『創生』したものは触れた瞬間破壊されちまうらしい。

きつと俺が放った光の刃さえ、その力で破壊したんだろう。

「さて……っと、大体戦い方は分かった」

俺は立ち上がりながら、この戦いに必要なことを整理する。

一つは、あのふざけた鎖鋸に籠手以外が触れたら終わりってこと。

一つは、狂気はクソしぶとってこと。

そして、最後の一つは……

俺は握り締めた右拳を、狂気に向かって構える。けど、籠手の力は使用してない。

ただ相手に『俺はお前を殴る』ってことを伝えるためだけに構えた拳。

「狂気」

《ドウシタヨ相棒オ?》

「一発殴らせろ」

《殴リタイナラ勝手ニ殴レヨ。タダシ、殴レルモンナラナア!!》

狂気は悪意のこもった笑い声を上げながら、俺に向かって走って来た。た。

その手には、万物を破壊する史上最狂の鎖鋸。

《ソノ前ニ俺ガ相棒ヲミンチニスルカモシレネエナア!!》

その凶刃が激しい唸り声を上げながら、俺に向かって振り下ろされる。その刃に触れたら俺は死ぬ。

……けど、だからどうした?

「ギユイギユイうつせーんだよ。そのポンコツノコギリ」  
《！？》

俺は少し左に体をずらしてから、右拳で鎖鋸のガイドバーの横つ面をブン殴る。

その時起きる、神器同士の反発反応からくる爆発。

その衝撃に鎖鋸は大きく軌道が変わり、狂気は突然のことに体勢が大きく崩れる。

籠手も同様に衝撃を受けるが、俺はそれを想定していたため、なんとか追撃の間合い内に踏み止まる。

そして、握った左拳を狂気の右頬にゆっくりと接近させる。

……この戦いで必要なこと。

その最後は『恐れず怯えず逃げず隠れず。たとえ死の淵に立たされても、ただ真つすぐ立ち向かうこと』。

「んじゃ、思う存分殴らせてもらっぞこんにやるっツッ!」

右足で踏み込み、右膝で力を蓄めて、腰を回転させ、左肩を捻り上げ、左肘を曲げきる。

お袋が教えてくれた、拳一発のために全身の筋肉や関節を使い、最小の力で最大の威力を引き出す一撃必殺の強拳。

ドゴンッ!!

狂気に拳が触れる寸前、蓄めた力の一つ一つを一気に解放して、左拳を思いっきり振り切る。

俺の一撃で、狂気は鎖鋸と一緒に思いっきり吹っ飛んだ。

当れば確実に気絶する一撃、下手をすれば人を殺せる一撃。

その一撃を食らった狂気は、ブツ倒れて動かない。

……だけど、油断も安心もしない。

「ほら、狸寝入りなんてしてしてないで立てよ狂気。まだ終わりじやねえだろ?」

《……ケケツ。ヤッパリ相棒相手二八、二度目ノ不意討チデキネエカ》

俺に指摘された狂気は、平然と立ち上がる。

口を切ったらしい狂気は、口角から血を流しながら笑っていた。

「あんだだけ吹っ飛んだくせに、そんなデケエ鎖鋸離さないで倒れてんのは不自然だっつーの。誰だっつてわかる」

《ソウカ? 俺ナラ迷ワズミンチニシチャウケドナ》

「……アホ」

俺は狂気の単純さのため息を吐いた後、俺は狂気に宣言する。

「クソ狂気、殴らせてもらっという悪いけど、今度は死んでもらう」  
《オイオイ、ソリヤナイゼ相棒。殺シ八俺ノ先輩特許ナンダカラサ  
アアアアアアッ！！》

前座はこれで終わり。

これからは子供の楽しい『遊び』じゃなければ、誇りを賭けた一騎  
打ちの『戦い』でもない。

お互いの存在を否定する、本当の意味での『殺し合い』がこの場で  
始まった。

S U I C I D E 3 9 〱 運命の狂想曲 (カプリッチオ) 〱 (前書き)

この選択が彼の運命を左右する……

S U I C I D E 3 9 運命の狂想曲（カプリッチオ）

貴方の存在が死ぬのは何時？

貴方が生きる事を諦めた時？

貴方の呼吸が止まった時？

貴方が死を受け入れた時？

貴方の肉体が灰になった時？

否、肉体の死は貴方の存在の死ではない。

貴方の存在が死ぬのは、この世に生きている人達の記憶から貴方が居なくなつた時。

「このクソオ、あんなところで術掛けるんじゃないぞ」

みんなのアイドル黒ヘルこと俺は、我が家で……いや、『元』我が家のリビングで後悔していた。

『葬列行脚』は俺が作り出した空間創造術式。

元々の術は『閉鎖空間による魂の半永久的捕獲』と『時間枠の自由移動』、『霊力増加』等の効果を持つ術式だ。

その術式を解体、再構築を繰り返して作り上げた特殊な術で、『生命体内での空間展開』と『超硬度閉鎖空間による魂の半永久的確保』を主体としている。

その代わり、魂と人体の間に壁を作るようなもんだから、術をかけた瞬間に肉体は死んだように動かなくなる。

つまり……

「無理矢理な術式でバカ見てえに霊力使ってるのに」

俺の目の前には、真慈がまるで人形のように椅子に座っている。

さすがに路上に長時間放置すると、死体と間違えられて警察に通報されかねないからな。

そうなるその後々厄介になるから、俺が汗水垂らして必死にこの家まで運んだんだぜ。

……いや、実は瞬間移動ワープしたから一瞬だったけど……無駄な霊力を使っちゃまった。

「これからが一番霊力使ってるのによ」

俺はため息を吐きながら、手に持った鶴嘴を両手で握り直して振り上げる。

あー、これで真慈の意識が戻ったらスゲー殴られるんだろうなあ。

「……まあ、殴られるだけで済むならいいんだけどな」

そう、今から発動する術は『真慈が戻ってこなかった場合の保険』。信じたくはないが、もしそうだった時は……俺が殴られるぐらいじゃ済まない。

下手すれば、止まることを知らない殺人兵器となりかねないのだ。

「我知らず、我認めず、我想う。我、この隻影せきえいを知らぬ、この意味を認めぬ、この存在に想ふ……悠久ゆうきゆうに眠れ」

言葉を一言紡ぐたび、振り上げた鶴嘴は言葉から生まれた幾千もの細かい黄金の鎖を纏う。

その黄金の鎖が鶴嘴を全体を覆った瞬間、俺は鶴嘴を目の前へと振り下ろす。

その先には……魂と肉体が分離され、微動だにしない真慈。

「天上天下唯我独尊ッ！！ 万物連鎖封禁術式……罪滅神枷ざいめつじんかッ！！」

振り下ろした瞬間、黄金の鎖が鶴嘴から解き放たれ、その一本一本が真慈の体に巻きつき、拘束していく。

そして全身に巻きついた鎖は、真慈の体に溶け込むように色を無くし、最後には見えなくなつた。

ふう、これでオツケー……っ!?

「クッ……霊力切れなんて何年ぶりだコンチキショー」

いきなり体から力が抜けて、俺はその場に膝を折る羽目になつた。

……この術式は殺人的な霊力消費と引き換えに『形無き鎖で万物を封じる』ことが出来る。

もし、真慈が喰われた場合は……俺がこの術式で肉体ごと封じる。  
自分の息子が人殺しするところなんて、どんな親も見たくねえはずだ。

「……あーあ、こんなにダリーのは六年ぶりだ」

人より膨大な霊力を持つてる俺でも、無理矢理構築した術式+殺人  
的霊力消費する術を休みなく発動するのは疲れる。

俺は立ち上がるのも面倒になって、その場に天井を仰ぎながら倒れ  
こんだ。

「……そうか六年ぶり、か」

ふと、自分で言った一つの言葉を繰り返す。

……六年前、俺は罪滅<sup>これ</sup>神枷を発動した。

その時は今回とは違って、形の無いものに対してだった。

それは『記憶』。

術式の対象者は沢山いた。

麻依子ちゃんや眼帯ねーちゃん、真慈もその対象だった。

その何百人つて人達は、今でも無形の鎖で『記憶』を封じられてい  
る。

それは俺と秦の身勝手に、ねじ曲げてしまった事実。





《キャヒイイイイツ！！ 切断！ 肉塊！ 細切れ！ ミンチダ  
ア！！》

狂気が振り下ろす禍々（まがまが）しい漆黒の鎖鋸。チエーンソー  
その咆哮は空間さえも破壊し尽くしそんな殺気を放つ。

「ツタク！ その汚ねえ口開くんじゃねえ！！」

俺はその軌道上に、純白の籠手ガントレットを装着した右拳を突き出す。  
力を温存するために、無駄な創生はしない。

「うおらっ！！」

《キャヒツ！！》

二つの神器が接触する寸前に強大な力がぶつかり合い……そして拒  
否反応の爆発。  
その爆風を利用し、長距離バッグステップで狂気の間合いから外れ  
る。

「クソッ……」

《ヒヤヒヤヒヤヒヤッ！！ ソンナ防一戦ジャ、オガクズ二ナツチ

マウゼエ！？》

狂気は鎖鋸を唸らせながら、フラフラと動き回る。

……その脱力な動きのわりに、隙がまったく無い。

まったく……さつきからこの繰り返しだ。

俺が隙を見極めてる最中に、痺れを切らした狂気からの攻撃。そして俺が防御しながら距離を取って仕切り直し。

あのバカデケエ鎖鋸を軽々と振り回しやがって……間合いが広すぎる。

間合い外からの遠距離攻撃は、鎖鋸の『万物破壊』によって無効化。間合いに入っちまう中距離攻撃は、入った瞬間に迫ってくる鎖鋸を防ぐのに精一杯。

この籠手を銃や剣に変えても、状況は変わりそうにない。

クソッ、こんなんじゃ埒が開かねえ……どうすりゃいいんだ。

……シンジ……

……こんな時になんだ？

俺は勿論、狂気でもない……誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

それも、頭に直接語り掛けるような少年の声……

《オイオイ、ポケットトシテルト殺サレチマウゼ？》

突然左側から聞こえる声……  
周囲にうつすらと漂う殺気。  
声に注意を奪われ狂気の接近を許した！？  
鎖鋸のエンジン音がしない……エンジン止めやがったか。  
この立ち位置じゃ右拳での防御は間に合わない。  
無理に防御しようとすれば、爆発の衝撃に対応体勢が取れず、右腕  
が体から吹き飛ぶ。

「このッ……！」

俺は防御を断念し、右拳を地面に向ける。  
そして、右拳の籠手から瞬時に灯台のような特大の鉄柱を創生する。  
その鉄柱は下に伸びてすぐ地面につき……今度は俺を上へと押し上  
げる。

《クハアーツ！！ サスガ相棒、機転ガキクウ！！》

狂気の感嘆の声を無視して、俺は力の配分なんて考えずに鉄柱を創  
生し続け、上空へと回避する。  
どう降りるかした後でいい、今は狂気ヤッの攻撃範囲から逃げるのが先だ  
！！

…ダメ……逃げ切れナイ

再び頭に響く少年の声。

なに言つてやがる、このまま逃げ切れればあの鎖鋸は届かない……

《デモナア……最終安全装置解除コード、ヘル Heim……発動オ！  
グニバヘル煉獄焰砲ツ……！》

まさかと思い狂気のいる下の方を見ると、そこには漆黒の髑髏がこ  
つちに大口を開けていた。

その状態からして、既に射撃指揮ロックオンされている！？

《甘インダヨナア……クヒツ》

ヤバいッ！！ 右腕で創生を止めて……いや、間に合わないッ！！  
この状態だと、どうやっても避けきれねえ！！  
直撃を免れるためには……

「一か八かッ……最終安全装置解除コードヘル Heim！！ 発動！  
グニバヘル煉獄焰砲……！」

《遅インダヨオ！！ ファイアアアアアアッ……！》

狂気の砲弾が発射されると同時に、俺も左腕を砲身に変形、発射口の髑髏を下に向ける。

高速で迫り来る砲弾。

その弾道を見極め……いや、そんな時間はない!!

「吹ッ飛ベツ!!」

俺は一か八かの大博打で、下に向かって砲弾を撃ち出す。

これで撃ち落とさなきゃ大痛手……へたすりゃ死ぬ。

二つの砲弾は擦れるようにぶつかって……何事もないように擦れ違う。

そして俺の砲身に砲弾が擦れるようにぶつかって……爆発。

「グガッ!？」

《当ッタリイ》

俺は急いで鉄柱の創生を中止し、追撃を防ぐためにその鉄柱の上に

乗る。

そして、運悪く砲撃が着弾した自分の状況を確認する。

……うわ、最悪だ。砲身になってた左腕は完全に大破して、肩の根元から赤黒い血が溢れだしてやがる。

しかも、左腹の一部も爆発の威力で抉り取られて、各部でショート  
の火花が散っている。

外傷はそれほどじゃないが、左足も調子悪い。

フリーキнда・ベル  
輝災禍鈴の効果は後二、三分……とても戦える状況じゃねえな。

諦メチャダメダヨ

さっきから脳ミソに話し掛けてくるこの声はなんだ？  
いったい誰だ？

真慈、勝ツンダ

分かっているツツーの。

だから、今勝つ方法考えてるんだろつが。

ガキが邪魔すんな。

この不利な状況から戦局を引つ繰り返すにはどうすりゃいい……  
まともに使えるのは右拳と右足のみ、時間も短い。

……このクソツ！　こんな体で狂気を出し抜く方法なんて、全然思いつけねえ。

ソナノ簡単ダヨ。ホラ、リジェ・ル・レナシス創生乃祝福ヲ劍ニ戻シテ

「んなこと…って!？」

信じられない……

俺は何も念じてない……なのに、俺の右手に装着された籠手は、最初に手にした一振りの白刃に戻って、俺の右手に納まっていた。いったいなんなんだ？

サア……ソノ劍デ自分ノ頭ヲ貫イテ

……いや、フザケンじゃねえ。

頭貫けって、完全に自殺行為じゃねえか。

いくら斬れない刀だからって、鉄パイプ頭に突き刺せば死ぬのと一緒だぞ？

大丈夫、僕ヲ信ジテ

ああウゼエ。

俺はお前の姿も見えねえ顔も知れねえ、声も聞いたことねえ。  
そんなヤツ信じるわけねえよ。

デモ、早くシナイト……

「ッ!？」

突然、足元がぐらつく。

落下しないようにしがみつきながら下を覗き込むと、狂気が根元から鉄柱を切り倒そうと、鉄柱に鎖鋸を押し当てていた。  
その鎖鋸も、唸り声を上げながら易々と特大鉄柱を斬っていく。

コノママ落トサレチャタラ、真慈死ンジャウヨ?

……この声の言う通り、右手足しかまともに動かない状況で落とされたら、まともな着地は出来ない。

それに着地に成功しても、今度は狂気からの襲撃が待っている。  
左半身を負傷してまともに戦えない俺が、狂気に勝てる確率は極めて低い。

サア、早く

しかし、この声の主が分からない限り、完全に信用は出来ない。  
それに、頭に白刃をブツ刺す意味が分からねえ。

……タイムリミットは、俺に深く考える時間を与えず、刻々とその針を進めていく。

「……迷ってても仕方ねえな」

そして、俺は決めた。

一六勝負、長か半か、やってやろうじゃねえか。

……この時、俺は何の確証もなく選択した。  
この選択が俺の運命を大きく左右するとも知らずに……

S U I C I D E 3 9 運命の狂想曲（カプリッチオ）（後書き）

皆さんこんにちは。

最近適性学科を調べるテストをして、『商船学』（この学科がある大学は日本に三校しかない）の適性が奇跡の85%以上（それ以上の目盛りがなかった。つまりMAX）だった、夷神酒です。

はてさて、今回の話は真慈の選択が物語を左右します。

『声の誘惑を振り切り、自力で狂気に挑む』

『声の言う通りに、頭に刀をプツ刺す』

この二つのどちらかを選ぶと物語は分離し、愉快的バッドエンドストーリーが幕を開けます。（次の更新はバッドエンドじゃないほうを選択した場合です）

『エッ、バッドエンドって母親との戦いからじゃないの？』と思っ  
た方もいるかもしれませんがね。

しかし、真慈にとつての本当のバッドエンドは『自分の死』ではあり  
りません。

本当のバッドエンドは……既に知ってる方もいらっしゃるんですが、  
ここはあえて言わないでおきましょう。

なので、バッドエンドの話が投稿された場合は『あ、この話からの  
分岐だったっけ』と、思い出してください。

あと、各フラグメントは現在も続行中で、人気によって書く順番が  
変わります。

私は評価や感想、メッセージに『〇〇がいい』的なコメントが書いてあれば、投票者が重複しても投票に加算します。（一度のコメントで複数投票もOK）

その算出方法だと現在は、一位麻衣子、二位麗花、三位彩華、四位小夜の順になっております。

一位はブツちぎりですが、二位以下はなかなか接戦です。

さらに、この四人の間にバッドエンドも入りますので、人気下位のエンドは随分遅くなってしまうです。

『〇〇のエンドが早く見たい』と言う方。ぜひ、感想やメッセージ（評価だと点数稼ぎの為みたいなので……）でのご投票を！！

それでは、また。

S U I C I D E 4 0 〱 殺戮の舞曲 (ポレロ) 〱 (前書き)

後書きに謝罪文有り (涙)

S U I C I D E 4 0 ～ 殺戮の舞曲（ポレロ）～

人は創る力を持っている。

人は壊す力を持っている。

そして『破壊と創造は表裏一体』と人は謳<sup>うた</sup>う。

人は創って壊している？

人は壊して創っている？

それとも……壊しているだけ？

サア、早く

仰向けにブツ倒れてる俺を、直接頭の中から急かしてくる少年<sup>ガキ</sup>の声。  
俺が狂気に勝つ方法を教えてくれるみてえだが、その条件が『白刃  
で頭串刺し』っていう、自殺でもそんな方法取らねえって言いたい  
ヤツだ。

普通だったらシカトするような条件だが、今の俺の状況は左半身が  
破壊され、とてもじゃないが狂気に勝てる状況じゃない……

けど……それがどうした？

「分かった分かった……俺の生き方は俺が決める」

……俺は決めたじゃねえか。皆を守るって。

死んで幽霊にでもなつて、皆を見守ればいいやなんて思ったことも  
あったけど、やっぱりそんな俺には合わねえ。

俺はどんなに運命にブツ飛ばされようが、どんなに宿命にハツ倒さ  
れようが、汚水啜って泥まみれになつても立ち上がってやるうじ

やねえか。

俺はその決意と誇りと意地を胸に右半身の力だけで立ち上がり、右手の刀を握り直す。

俺の意志に答えるように、カチャリと鳴る白刃。

「俺には守りたい場所がある。守りたい人がいる。守りたい世界がある。だから　だから！！　死んでも勝たなきゃならねえんだッ！！」

唳<sup>たけ</sup>り立つ猛獣の如く魂を揺さ振るように咆<sup>ほ</sup>えた俺は、一片の迷い無く右手に持った白刃を右のこめかみからブツ刺す。

グシャリ

美しく

……生々しい

……肉が

……潰れる

……音が

……頭の

.....中から

.....聞こえ

.....視界は

.....暗転した

……ココハ、ドコ？

ここは、親父の使った術の中。

……キミハ、ダレ？

今、頭を串刺しにしたアホな男だ。

……ナニ、シテルノ？

俺は……狂気を倒そうとした。

……ナンデ？

俺の目を見えるようにするため？

……いや、そんな目ン玉一個のために命をかける意味が分からねえ。  
お袋を倒すため？

……いや、狂気を倒したからって、劇的に強くなるわけじゃねえだ  
ろ。

親父に言われたから？

……いや、んなの論外。

俺が狂気を倒す理由はそんな細かったり、夢みたいだったり、アホらしくはねえ。

俺が戦う理由……それは俺が俺であるため。

傲慢で貪欲な人間らしく、生存願望を自己中心に叶える。  
純粹で単純な生物らしく、生存本能のままに喰い尽くす。

俺は……

微睡<sup>まじろ</sup>みに飲み込まれかけた意識が、一気に覚醒する。

そして、その意識が俺に叫べと騒ぎだした。

例え絶望に飲み込まれそうになっただとしても、余裕綽々（よゆうしやくしゃく）に気高く猛々しく『自分を叫べと。

それに答えるように、俺はふてぶてしく薄笑<sup>にや</sup>ける。

頭に刀が突き刺さって、半身が吹き飛んでる、生きてるのも怪しい人間だと分かっているながらも、俺は笑い……そして叫ぶ。

「俺は 生きるッ！！ 例え辛くても苦しくても悲しくても、自分が見えなくなって深く深く絶望しても、俺は生きるッ！！」

俺は、俺自身に向かって叫ぶ。

まるで、自分の存在を確かめるように。



そして、彼は伝説となる。

それは、世界最強の主婦のように何かを極めることなどしない。天界から舞い降りた聖騎士のように、正義を貫くなどはしない。冥界を一人で統一した魔王のように、頂点に君臨などはしない。

ただ、『産まれた』意味を人より少し学んだだけ。

ただ、『生きる』強さを人より少し持てただけ。

ただ、『死ぬ』宿命を人より少し受け入れただけ。

けれど……いや、故に彼は伝説になる。

人間らしく人間の枠を超える人間。

ビ・オーバー・ヒューマン  
『人間超越』

後にそう呼ばれることになる彼は今、伝説としての覚醒を開始した。

「ウオラッ!!」

俺は創生されたばかりの左手を握り締め……足場である鉄柱を殴る。

ただの拳　しかし、それは最硬の体から放たれる最速の技。

狂気が『鎖鋸』<sup>チェーンソー</sup>によって根元を『破壊』する前に、その拳を受けた鉄柱には無数の罅<sup>ひび</sup>が走る。

その罅が鉄柱全体に広まった瞬間、鉄柱は一気に崩壊を始める。落下していく鉄柱の破片は、容赦無く地面にいる狂気に襲い掛かる。しかし、狂気は手にしている鎖鋸を振り回し、襲い掛かるすべての破片を破壊していく。

俺は自らの足場が無くなる寸前、狂気に向かって跳び、落下しながら狂気の脳天めがけて左踵<sup>ガイドバー</sup>落しを放つ。

しかし、俺の一蹴は鎖鋸の側面で受け止められ、流れるように凧ぎ払われ横に吹き飛ばされた。

俺は空中で体を捻り、体操選手並みの着地をする。

《キャヒウー！！ ナンカ頭二突キ刺サツテンダケドオ！？ 傷モナンカ治ツテルシ……スゲーオモシロツ！！》

俺の頭に刺さった白刃を指差して、大口開けて笑う狂気。確かに、落ち武者でもこんな奇妙な姿はしてないだろう。

「笑ってられるのも今の内だ……」  
《ソレハドツチノ台詞カナ？》

突然笑うのを止めた狂気は、ドロドロと渦巻く禍々しい殺気を纏い始める。

このやるッ、短期戦に持ち込む気だ！！

《解放オ！！》  
ファランダ・フォラス  
《墮落狂危！！》

狂気の体が突然現れた黒い狂炎に包まれる。

その狂気の炎は、まるで風にはためく漆黒のロープのように不気味に揺らめく。

その手に持つ物が鎖鋸でなく大鎌だったら、その姿は……正に死神<sup>ヘル</sup>。

《……サア、ココデ選手交代と行コウジヤナイカ、相棒。善人面八モウ飽キ飽キダ。俺二生キテル証拠ヲ感ジサセテクレヨ！！骨ヲ砕イテ肉ヲ抉ツテ血ヲカキ回ス感覚デサア！！》

空間全体に悍ましい程の重圧<sup>プレッシャー</sup>が襲い掛かる。  
普通だったなら簡単に人の心を折り、殺してしまう狂気の波動。

ホラ、早く倒シテ……

相変わらず俺を急かしてくる、脳裏に響く声。

……てか、勝てる方法を教えてくれんじやなかったのか？  
体は治ったのは助かったけど、それだけで倒せる狂気<sup>あいて</sup>じゃねえぞ。

君ガ勝ツ方法ハ、君ガ『創ル』ンダヨ

……あ、成る程。

そう来たか。

《ヘイ！！ バトンタッチノ時間ダツ！！》

俺が納得してる間に、狂気が纏った黒炎のロープは、鴉の翼のように羽撃く。

そして、すべてを破壊する鎖鋸を唸らせながら低空高速飛行で俺との距離を急激に縮める。

その様子を見ながら、俺は勝つ方法を創る。

そう、『考える』んじゃない。俺が『創る』勝利の方程式。

「……………テメエに渡すバトンなんて、はなっからねえんだよッ！！」

俺は両手の拳を握り締め……………狂気に向かって迷い無く走り出す。

……………俺の勝利の方程式なんて、小学生で習う計算より簡単だ。

拳⇨勝利

プラスもマイナスもねえ。ただの横棒二本。

俺は……………この手でしか守れねえし、この手でしか戦えねえ。

「ハアアアアアアアッ！！」

《グヒヤッハアアアアア！！》

すぐに縮まる俺と狂気の距離。

狂気が放つ殺意、ファランダ・フォラス墮落狂危の狂炎、デイス・ル・ラクシス破滅乃絶望の威圧感。  
そのすべてが研ぎ澄まされた無数の刃物のように、俺の精神に容赦  
無く突き刺さる。

しかし、最強の心は折れることを許されない。

怯ま<sup>ひる</sup>ない、脅えない、迷わない。

俺はただひたすら前進する。

《死ニニキヤガツタカア!?!》

狂気は鎖鋸で地面を抉りながら飛行し……俺に向かって突き上げる。  
鎖鋸から放たれる破壊の黒波は、狂炎を纏ってその威力を上げ、俺  
へと迫り来る。

その波を俺は避けない。

確実に直撃コース。

それでも、俺は避けない。

「グガツ……」

正面からの衝撃に一瞬体が止まりそうになる……が、俺は進むこと  
を止めない。

右手の感覚が無い……そう思って横目で右を見ると、右肩から先が  
なかった。

切り口からドバドバと鉄臭い赤が流れ出る。

フリーキンダ・ベル輝災禍鈴で痛みはない……だからこそ走れる。

右腕が無いなら……創るまでだ。

俺は骨を創り、血管を創り、筋肉を創り、皮膚を創り、右手を創生する。創生途中で、狂気が放った第二波が俺を襲い、今度は下半身を両断される。

内蔵がグチャグチャ破壊され、鮮血が口へと上って溢れ出るのを無視して、すぐさま下半身を創生し、そして全力で前へと走る。

そして……狂気は俺の間合いに入った。

「これでも食らえエエツ！」

俺は右拳を全力で突き出す。

しかし、その右拳は狂気の左手に捕まれ、グチャリと不気味な音をたながら、恐ろしいほどの怪力で握り潰される。

次は左手刀を横風ぎに放つ。

その手刀は、狂気に届く寸前に肩ごと鎖鋸の餌食となり、跡形もなく破壊される。

蹴りを入れようとした両足は、既に狂炎に飲み込まれ、立ってるのが奇跡的な状況になっていた。

《キヒヒッ……才疲レ様デシタア》

鼻先まで迫った狂気の顔が笑った瞬間……ドスツという、小気味のいい音が俺自身から聞こえた。

同時に、血と肉片の深紅の濁流が喉を流れ、口からドボドボ流れ出る。

俺がゆっくりと下を向くと、俺の胸には一本の腕が『生えて』いた。その腕は俺の左肺を肋骨ごと貫通してようだった。

《デモ、残・念》

狂気は右手に持っていた鎖鋸を手放し、その手で俺の胸を貫いたらしい。

狂気の楽し気な声が、鈍り始めた俺の鼓膜に響く。視界もぼやけてきて……意識も霧が掛かってきた。

俺は勝つ。

俺は……かつ

おれ、は……かつ？



## SUICIDE40〜殺戮の舞曲（ボレロ）〜（後書き）

こんにちわぁ

最近学校のレポートの期限と執筆の目標更新日に追われっぱなしの  
夷神酒です。

はてさて……今回はちよつとバッドエンドの練習してみました。

これプラス狂気の状態やさらなる血肉の描写を加えて書く予定  
です。

グロツちい描写も、まだまだ未熟ですけど、頑張つて書かせて頂き  
ますー！！

あと………スイマセンでしたー！！

今回で狂気の正体を明かすはずだったのに、肉付けしすぎて最後まで  
書き切れず、次回持ち越しになってしまいました。

あと二日あれば書き切れますが、更新のリズム（最低二週間に一回  
更新）を崩すと、怠惰な神酒はダメになってしまうので、寛大な心  
でお許しください。

あーあ、コメディなのに、ここ二、三話笑う場所が無いよ………（し  
くしく

あ、あと、各フラグメントで『○○、○○で○○が○○なシチュエ  
ーションだと面白いんじゃない？』ってアイディアがあれば教えて  
ください。

参考になる意見があれば、考える時間が短縮されて、早く投稿する

ことが出来ます。  
また、上手くいけばあなたのアイデアを丸々使うかも……（作者  
失格

頼りない神酒ですが、更新だけは絶対しますので、よろしく願  
います。

では、また……

ああ！？ 前回の更新でPVアクセスが10万Hitに達しました  
！！

個人サイトを持たず、ランキングタグも付けずによくここまで来れ  
たと思います。

この作品を一度でも見てくださった皆様、そして更新の度に見てく  
ださった皆様、ホンツクトオにありがとうございます。そしてこ  
れからもよろしく願います！！

S U I C I D E 4 1 真実の奏鳴曲(ソナタ) (前書き)

後書きに謝罪文あり m ( m

S U I C I D E 4 1 真実の奏鳴曲（ソナタ）

君は自分を否定し、自分を追い詰め、自分を殺す

だから、僕は君を認めてあげる、貴方を解き放つてあげる、貴方を  
救ってあげる

だから……生きて

おれ、は……かつ？

……つて、何バカな事考えてんだ俺は。

右拳握り潰されて、左腕ブツタ斬られて、両足飲み込まれて、胸突き破られた……『ただそれだけのこと』じゃねえかよ。

俺はまだ折れてねえ、まだ負けたわけじゃねえ。

《ヒヤッーハハハッ！！ 勝ちダア……俺ノ勝ちダアアアア！！》

狂気は俺が反撃しないことで、勝利を確信したらしい。

……不意討ちのチャンスだけど、そんなの狂気きやうきに通用しない。

《ツヒツヒイ！！ ヤット！！ ヤットコノ渴キカラ解放サレル！

！ 血デ潤オワセル！！ 俺トイウ存在ヲオ！！》

「んなこと、お前には一生無理だな」

《……アアン？》

俺の声に気づいた狂気は笑いを止め、冷たい目線を俺に突き刺す。

俺はその目線を真っ向から受ける。

まるでさっきまでの狂気のように……笑いながら。

「テメエの目の前にいる男を、誰だと思ってやがる」

俺は拳を握り潰されている右手を、無理矢理引っ張る。  
ブチブチブチッと、筋肉の繊維や軟骨が千切れる音を聞きながら、俺は右拳と右腕を引き千切る。

そのささくれた右腕の傷口に、握り潰されたのと同じ右拳を創り出す。

……しかし、このまま拳を突き出してもまた握り潰されるのが関の山。

「今の今までテメエが飲み込めなかった男だ。そしてこれからテメエは俺を飲み込むことなんてできやしねえ」

だから、俺はその拳を背中に回し、貫通している狂気の右腕をガツシリ掴む。

その腕を折ることも押し返すこともしない……引っ張る。

「グアッ!？」

《………血迷ッタカ?》

狂気の腕を引っ張ったことで、その腕は余計に俺の体を深く突き刺す。

俺の口から溢れ出る赤黒い吐血が白い床に飛び散る音を聞きながら、フツと意識が飛びそうになる。

もう、どこからどう見たって死に損ない状態だ……でも、これでいい。

これで『狂気との距離』か鼻先が触れるほど近づいた。

ほぼゼロ距離の超接近戦ショート・ショートレンジにおいて、『振るう』や『風ぐ』といった曲線軌道を描く攻撃は、力が分散しその威力を発揮できない。この場合、効果的な攻撃方法の一つとして上げられるのは……『突く』。

それはただ、一点に向かって直線状に力を打ち出せばいい、単純かつ軌道が読まれやすい基本攻撃。

しかし、竹刀よる『突き』は、剣道で一定年齢まで禁止技とされている程危険であり、打ち出す力が強ければ強いほど、打ち出すものが硬ければ硬いほど、打ち出す業わざが鋭ければ鋭いほど驚異的な力を発揮し、目前の敵を突き破る。

そして、俺が現状で出来る突きは一つのみ。

それは人体の中で一番硬い部分の前頭部を使った、喧嘩にも実用される超接近戦技。

すなわち……頭突ヘッドバットき。

「ハアアアアアアアアッ!」

《ッ!》

俺は頭を後ろに振り絞る。

その様子を察したのか、狂気は空いた左手を防御にまわす。  
けど……遅い!!

「グッ!!」

《ガッ!?!》

頭突きを『打ち込んだ』せいで、俺自身もダメージを受けて視界が  
白黒する。

俺は視界の回復を待たず、感覚だけで自身の右腕を正面にいるはず  
の狂気に向けて伸ばし……掴む。

そして、狂気を掴んだ手と行動不能になった両脚の靴底に『ある物』  
を作り出す。

それは超危険薬品ニトログリセリンで作られた、たった一握りの超危険爆発物ダイナマイト。  
しかも、着火済み。

「フツ飛ベツ!!」

《ツ!?!》

鼓膜を破るような爆発音。

同時に体を吹き飛ばす衝撃波。

その衝撃波に俺の体が宙に舞う。

狂気の腕が俺の胸からズルリと抜け、嘔むせ返るような生暖かい鉄の  
臭いがこの空間全体に充満する。

輝災禍鈴フリーキнда・ベルの効力で痛みは感じないが、体中がボロ雑巾のようになり、  
両足と右腕はただの肉片となって吹っ飛んだ。

これでもう俺の手足はない……でも、これでいい。

「ワリイが一気に片をつけるぞ。『創生』ッ!!!」

俺の声に答えるように、頭部に突き刺さってる白刃から特別な力が流れ出し、その力は俺の全身を駆け巡る。

そしてその力によって、両手足や胸部の傷口から細胞が一つ一つ創り出され、骨や血肉、鋼鉄製の部品を構成していく。

動作確認なんて必要ない、その時に無茶苦茶でも動けば十分。

俺は創生された足で着地した瞬間、さっきの爆発による爆煙が立ち込めてる方へと走る。

そして、爆煙の中でも感知できる禍々しい殺気に向かい、迷いなく右拳を放つ。

「フッ!!!」

《グガッ!?!》

放たれた拳は見事に狂気の腹部へと『打ち込まれる』。

これ以上の追撃は返り討ちにされる危険性があるが、俺は容赦なく追撃の拳を放つ。

そして俺はひたすら『打ち込む』。

滅亡への『恐怖』を  
戦闘への『疑心』を  
敗北への『絶望』を

狂気に拳が触れた瞬間、その心に『創生』される戦闘終結への階段。  
ひたすら、一方的に殴る。

反撃を許さず、回避を許さず、ただ殴って殴って殴り続ける。  
防御もへつたくれもない……狙いをつける暇もなく、硬く握り締め  
た拳を振り回す。

狂気の頬に肩に胸に腹に、拳の言葉が当たれば当たるほど、狂気の  
心には恐怖が創生<sup>うみださ</sup>れる。

狂気の心に生まれた疑心は、あっという間にその心を埋め尽くし、  
戦う意志を飲み込んでいく。

そして……ついに狂気の膝が地に着いた。

「はあ……はあ………」

俺は息を切らしながら、振り回していた拳を止める。

右拳は皮膚が剥がれ血が滲み、左拳は変形していて開くことが出来  
なくなっていた。

それに……力を使いすぎた。

俺は自身の頭を貫通してる白刀の柄をなんとか開く右手で掴んで、  
ゆっくりと抜き取る。

刀を抜いた跡は創生によって瞬時に血肉が創られ、埋められていく。  
『神』の創った最高傑作……たとえこの空間で作り出した模造品リカだとしても、人がその力を行使するにはそれなりに負担があるらしい。

「ふう………つたく、クソ狂気が………なめんじゃねえよ」

吐血で口の周りにこびりついた血を右手で拭いながら、俺は目の前の狂気を見る。

俺の拳をフルで受けたその姿は、乱れた黒髪が覆い被さって傷だらけの体を隠れていた。

そして、見るからに戦意喪失………いや、動くことさえ億劫になっている。

………さっきまで狂った笑みを浮かべ暴れ回っていた狂気の姿は、今はもうなかった。

君八勝ツタ………ダカラ、君八シル必要ガアル

何度も俺の頭に響く声………知る？ なんのことだ？  
てか………お前は誰だ？

ソレモ知ルコト………二人ガ隠シタコト………ソシテ真慈ノ宿命

声の主は意味の分からないことを言う。

てか、俺はこれからどうすりゃいいんだ？

……黒イ刃ヲ持ッテ

クソツ……肝心な事は言わねえくせに、命令ばかりしやがって。けど、俺はなにすればいいか分かんねえし、こいつのおかげで狂気に勝てたと言っても過言じゃない……なんか癩しかくだが、俺はその声に従うことにする。

「さて………っつて、」

狂気と少し離れた所に、鎖鋸チェーンソーが規格外のガイドバーの殆どを地面に突き刺していた。

その性質上『斬る』より『抉る』を得意とするこの鎖鋸が、こんなにスッパリ地面に生えているのは、『万物破壊』の為せる業か……俺は取り合えず白刀の柄を開かない左拳にねじ込んでから、この最悪兵器の持ち手を取り、この空間に作り出された時の形……抜き身の黒刀へと形状を変化させる。  
さて……この後なにをすれば？

……破壊スルンダ……記憶ヲ封印スル鎖ヲ

………は？

記憶？ 封印？ ナンノコトデスカあ？

万物ヲ破壊スル刀ニ念ジテ…… 『記憶ヲ束縛セシ黄金ノ鎖ヲ破壊セヨ』ト

……もう文句は言わねえ。

俺は目を閉じ、右手に持った黒刀念じる…… 『記憶を束縛せし黄金の鎖を破壊せよ』。  
呼吸を整えいらぬ感覚をシャットアウト…… ただひたすら念じることに集中する。

自分ヲ貫ケ！！

迷いはない。

俺は声に反応して、手にした黒刀を自らの胸に突き刺す。  
黒刀は肉体を貫通する…… しかし、胸に痛みはないし傷もない。

頭の中でカチャリと細い鉄が当たる音がして……俺の心がバキ  
ンと鳴った。

……溢れだす

『……真慈』

忘れていた記憶が

『僕が兄で君が弟だ。だから、僕が君を守ってあげる』

無くしていた思い出が

『ほら、男の子は泣いちゃいけないって母さんが言ってたろ？』

消えていた存在が

『大丈夫、君ならできる。だって君は僕の弟だから』

見逃していた矛盾が

『ほら、麻依子ちゃんにゴメンなさいしょ？ 僕も一緒に行くからね』

感じていた違和感の答えが

『え？ なんで僕が君のこと名前で呼ばないって？』

欠けていた断片が

『それは君が二番はイヤって言ったからじゃないか』

見失った過去が

『僕が一で君が二。だから僕が君の……真慈のお兄ちゃんなんだろ？』

……流れ込んでくる。

濁流が今まで俺が『過去』としてきたものを飲み込んでいく。

「……忘れてた……そして思い出した」

俺は混乱しそうな事実に対して、冷静に胸に刺した黒刀を抜いてから、狂気の目の前に向かう。

覇気も殺気も感じない……まるで脱け殻のように跪いたままびくともしない。

「確かに……俺が知らなきゃならないことだよな」

そして……俺は狂気の名前を呼ぶ。

後悔に唇を噛み千切る寸前まで噛んでから、さっきまで本気の殺し合いをしていた敵の真名を……

右拳を鬱血寸前まで堅く握り締めながら、俺のせいで狂気となってしまうた、俺の大切な家族の名前を……

「なんで……なんでこんな姿なんだよ……真吉兄ちゃん」



S U I C I D E 4 1 真実の奏鳴曲（ソナタ）（後書き）

ア—ア—ア—、テステステス、ただ今マイクのテスト中……

まずは、私事による勝手な長期連載中止、誠に申し訳ありませんでした。

私の作品を読んで頂いている読者の方々には頭が上がりません  
二カ月以上の更新を延期していた『死にたくても死ねない』ですが、  
作者の復活により再開させていただきます。

これからも見捨てずにこの作品を読んでください。切に、切に願  
いします。

S U I C I D E 4 2 存在の聖譚曲（オラトリオ）

自分が誰に必要にされているかは、自分自身では分かりにくいものだ。

……須千家真吉。

須千家の長男で俺の双子の兄貴。

俺が親父と同じ白髪なのに対して、兄貴……いや、真吉兄ちゃんは

お袋と同じ黒髪で俺と同じ顔をしていた。

真吉兄ちゃんは、同い年……ましてや俺と双子とは思えないほどしつかりしてて、当時ワガママだった『弟』を『兄』として面倒見てくれた。

俺はそんな真吉兄ちゃんが誇らしかったし、アホな親父や桁外れのお袋よりも、まず最初に真吉兄ちゃんへの憧れを抱いていた。

「……クソツ……訳分かんねえよこんなこと……なんでこんなことになってやがんだよツ!!」

俺は疑問と憤りが入り交じった言葉を吐く。

……その真吉兄ちゃんは、今の今まで俺の記憶から消え去り、『狂気』と言う名で俺の目の前に力なく座り込んでいた。なぜ、こんなことになってるのか全然分かんねえし……何より、俺が真吉兄ちゃんのことを覚えてなかったことが腹立たしくて仕方ない。

仕方ナイヨ。君ハ記憶ヲ封ジラレテイタンダカラ

俺の頭に直接語り掛けてくる声……ああ、この口調……今なら分かる……

「……でも、どんなことがあっても、忘れたくないことはあるだろ。なあ……真吉兄ちゃん」

ソノ呼び方……分カツタンダネ

「そりゃ、分かるさ。俺をいざという時しか『真慈』と呼ばないクソ丁寧な口調……何年も忘れてたけど今ならハッキリ分かる」

君八口調ガ悪クナツタカナ

「そのへらず口も変わんねえよな……なにもかも思い出したさ」

戦う前から俺の脳に直接話し掛けてきたこの声は……真吉兄ちゃんの声だった。

俺がどんなに文句を言っても、最終的に真吉兄ちゃんに言い負かされてた。

それに逆ギレして殴りかかって、いつも簡単にいなされた。

そして、俺が悔しくて泣くと、慰めてくれるのは涙の原因である真吉兄ちゃんだった……俺もガキの頃はバカやってたもんだ。

毎日同じことの繰り返し……でも、憧れだった真吉兄ちゃんと遊べることがガキの頃は楽しくて仕方なかった

……でも、その繰り返しは唐突に終わりを告げた。

それは親父とお袋が死んだ日……俺達家族は『四人』で俺が割った皿の代わりに買いに出かけた。

そして、その時は名前も知らない彩華が誘拐されている所に遭遇……

……誘拐犯の自爆までの流れは変わらない。

でも、今思えば『俺を親父がかばった』なら、俺は左半身を失うはずない……世界最強の主婦と肩を並べるあの親父が命を捨ててまで彩華と俺を庇ったなら、そんなへマをするはずない。

俺が左半身を失ったても生きてた理由は、親父以外が俺を庇ったが、俺の全身を守り切れる程体格がよくなかった。

……ここまでくれば分かり切ったことだ。

「そう、思い出したさ……あんたはあの時俺を庇ったことも。そしてあんたが目の前で死んだこともなッ！」

……ゴメン、君ノコト守リ切レナクテ

「俺はそんなこと聞きたかねえンだよッ！」「なんで庇った!?」なんて言わねえから安心しやがれ。……だがな、なんで死んだあんたが俺の中にいる!? 狂気に成り下がってやがんだッ!?」

俺は、実体のない自分の兄に怒号をぶつける。

俺を庇った理由なんて『兄だから』の一言で済まされちまうのは明白……だが、俺を庇って爆風の衝撃を受け、ほぼ全身をグチャグチャに引き裂かれながら熱波で焼かれて……さながら焼き挽肉にされて死んでった真壱兄ちゃんが、なんで俺の中に生きてる理由がどう考えても分かんねえ。

そして、なによりあの優しく強かった真壱兄ちゃんが殺戮と快楽に負けた存在……狂気になったことが俺には認められなかった。

……簡単ナ話ダヨ

「なに？」

君八僕達ガ死又ノヲ目ノ当たりニシテ、『魂』ノ一部ガ抜ケ落チタ。欠ケタ魂八時ガ経ツト共ニ崩レテ、最後ニ八死又……ソノ穴ヲ埋メルタメニ、父サン八僕ノ魂ヲソコニ埋メ込ンダ

「んなつ!? そんなふざけたこと……あの親父ならやりかねないな」

あの親父の行動は予測不能。

今思えば生前の親父と黒ヘルの調子は完全に一緒だった。  
そんな親父ならそんなことやっても……いや、おかしいが、そのお  
かしいことを飄々とやってのけるのがあの親父だ。

ソシテ父サンハ君ヤ周囲ノ記憶カラ僕ノ存在ヲ消シ、母サンハ  
禁術ヲ使ツテ君ガ死ヌコトヲ防イダ……ワザワザ戦ウ意味ハ分カラ  
ナカッタケドネ。ソレカラ、僕ハ君ノ中デ生キルコトヲ決メタ。デ  
モ、ソウ簡単ニハイカナカッタ

「……狂気か」

ソウ、君カラ生マレル悲観、苦痛、哀感、ソシテ絶望……君ガ  
全テヲ受ケタラ自ラ命ヲ絶ツ感情ヲ、僕ハ出来ル限り受ケ止メタ。

君ト一緒ニ悲観シテ苦痛ヲ味ワイ哀感ヲ受ケタ……ソレヲ続ケテル  
ウチニ、イツノ間ニカ僕ハ絶望に快樂ヲ得ル狂気ニナツテタ

「なんでそんなことした！！俺の感情は俺の問題だろ！？なの  
になんで……」

君ガ死ネバ僕モ死ヌ……ソレハ、君ガ死ナナケレバ僕モ死ネナ  
イトイウコト。母サンノ計ライデ君ハ死ナナイ……ダツタラ、僕ハ  
君ノ苦シミヲ和ラゲル事ニシタ

声を荒げる俺とは対象的に、真吉兄ちゃんは酷く落ち着いていた。  
まるで何かから解放されて安心しているように……

デモ……ソレモ今日デ終わリ

真吉兄ちゃんの声が脳に響くと同時に、目を離していた狂気の体が異様な光を放ち始めた。

金色のやわらかい光……

その光に包まれた狂気の体は、まるで夏夜に舞う蛍のような儂い光の粒子を飛ばす。

そして……両足から徐々に光に飲まれていき、光に飲まれた体も粒子と化す。

「なにが起こってんだ!？」

君ガ死ネバ僕八死ヌ。ソレヲ裏返セバ、僕八君ニヨツテ生死ガ決マル……ツマリ君ダケガ僕ヲ殺セル

「ッ!? それって!!」

ソウ……君八狂気ニ打チ勝ツ強イ心ヲ持ツテイル。苦境ノ中デモ助ケテケレル仲間ガイル。魂ノ穴八十分埋マツタカラ、魂ガ崩レル心配ハナイ……モウ僕八用済ミンダヨ

真吉兄ちゃんの声は、絶対的事実を叩きつけるように冷たく俺の中に響く。

けど……俺はその事実を頭から否定する。

「……なんだよそのふざけた理論」

理論ジヤナイ。事実ダヨ

「んなことは問題じゃねえんだよ!! 俺が言ってるのはテメエの考え方がふざけてるってことだ!!」

俺は光に変わりつつある狂気に近づき、その胸倉を掴み上げてその

顔を睨みつける。

その体は生気が全く感じられずだらんとし、顔は人形のように固く死んだ魚のような目をしていた。

……この中にいつも正しかった真吉兄ちゃんがいる。

……この中にカスの考え方しか持たないクソ兄貴がいる。

そして……この中に過去の俺がいる。

「自分が用済みだと？ ツざけんな！！ アンタはモノじゃねえだろ！？ 個人としての意志はねえのかッ！！」

ナニヲ言ツテルンダイ。僕八君ノ感情ナンダカラ意志ナンテナ  
イヨ

……ああ、今の真吉兄ちゃんは死にたがった頃の俺だ。

世界を見限って、何にも見えてなかった俺自身の生き写し。

真吉兄ちゃんが過去の俺なら……ここで俺が修正しなきゃならない。

「はあ？ バカじゃねえの？ 俺の感情がそんな敬語なんて使うはずねえだろ。アンタは俺の意志なんて関係なく、勝手に動いて発言してやがる。それはアンタが個人である証拠じゃねえか」

……ソレハコジツケダネヨ

「こじつけはアンタの方だろうが。アンタは勝手になにもかも背負いやがって、勝手にいっぱいいっぱいになって、勝手に疲れて、勝手に諦めやがる。しかも、『もう大丈夫』なんて言っただけで自分が消え

ることで、目を逸らしきれねえ現実から逃げようとしやがる。これをこじつけと言わねえでなんて言っただよ？」

全ク……口ガ巧クナツタネ。デモ、君二僕八否定デキナイハズ。ダツテ君モ死ヲ求メテタンダカラ。僕ノ氣持チ八君自身ガヨク分カツテルハズダヨ

「……」

真吉兄ちゃんの言ってることは事実だ。

過去の俺は死を求めていた。

真吉兄ちゃんは俺の負の感情を請け負って狂気になった……つまり、俺以上に死を求めている。

けど、自分では死ねないためさらに絶望を重ねた。

そんな、真吉兄ちゃんの気持ち、俺は痛いほど分かってる。

ここで俺に……真吉兄ちゃんを苦しめた張本人である俺に止める権利があるのか？

そう考えてる間にも、狂気の体は足から徐々に光の粒子になって空に舞い上がりながら儚く消え去り、ついには掴んでいた胸倉まで光に飲み込まれていく。

狂気八僕ガ持ツテイクカラ、君八僕ノタメニ強ク生キレバイイ

……いや、違う。

俺が真吉兄ちゃんのために出来ることはそんなことじゃない。

その絶望が分かる俺だから止めるんじゃないのか？

掴んでいた胸倉が粒子と化し、俺の手から狂気の頭が滑り落ちていく。  
作り物のように生気の無かった顔が、落下しながら優しく微笑んだ気がした。  
そして……血の気のない唇がゆっくりと動き言葉を紡ぐ。

《色々アツタケド……サヨナラ、真慈》

最期にふさわしい言葉。  
別れにふさわしい言葉。

自分の行き先を知った言葉を最期に、狂気の頭は落下しながら光に飲み込まれる。  
その光は床に着く前に、残った頭部を全て粒子とする勢いだ。  
全てが粒子となり空に舞散ったとき、狂気は消える。

………けど、俺は認めねえ。

自然落下する狂気の頭が、一閃で地面に叩きつけられる。  
その一閃は眉間のド真ん中を貫いた白刃の突き。  
『斬る』ことの出来ないはずの刀は、デタラメな力で眉間から後頭部を貫き、真っ白な地面に捻込まれていた。  
突きを放ったのは……もちろん俺だ。

《ナニヲ……》  
「一寸黙っとけ」

俺は白刃の柄を両手で握り締め、万物創生に必要な霊力を流し込む。しかし、狂気との戦いで俺の霊力は殆どすっからかん……でも、やるしかない。

俺は創生する……『真吉兄ちゃん』の存在を。

「グッ……このクソッ!!」

戦闘に殆ど使いきってしまった力を限界を超えて捻り出してるため、代償となる負荷が直接体中に鈍痛として広がる。

そうして白刃は俺の力を対価とし、光となって空に舞い消えた狂気の体を創生する。

《真慈!? 僕ハソンナコト望ンデナイ! ソレニ、ソンナコトシ  
タラ君ノ魂ニ傷ガ……》

「黙ってるッ!! これは俺のお節介で自分勝手な行動だ!! 文句はあとで聞いてやるッ!!」

クソッ……口を開くだけで喉の奥から深紅の液体が零れ出しやがる。集中しないとすっかりと創生できない……俺は五感全てを遮断して、創生に全身全霊をかける。





S U I C I D E 4 2 〱 存在の聖譚曲（オラトリオ）〱（後書き）

『お暇書き！！』

投稿形式 連載

ジャンル コメデイ

作者 doubter様

神酒の主観 ほのぼの暇人系コメデイ

是非とも御覧ください。

doubter様からの要望により、私の後書きに宣伝させていた  
だきました

これを期に、是非とも自らの作品を宣伝してほしい方は、何らかの  
形で私に連絡してください。

それほど有名ではないため効果は少ないと思われませんが、後書きを  
中心として無償、無利息、無賃金で宣伝させていただきます！！  
ミキビノケティンク  
MYMの提供でお送りしましたあ。

……はてさて、色々忙しく執筆時間が取れないでうだうだしてる神  
酒です。

取り合えず今回で狂気（真菰）との戦いは終了。現実世界に戻りま  
す。

遅いネタバレですが、麻依子に真慈の狂気が効かないのは、過去に

真巻と仲良くしてた事実により、狂気（真巻）に恐怖を感じないことにあります。  
流れとしては、私のようにうだうだしてても仕方ないので、現実世界でフラグヒロイン達と一通り行動　お袋との戦闘　コメディエン  
ドとなります。

そして言うておきます……VS狂気が最大の戦いで、お袋の戦闘は意外と呆気ないです。

ではまた！！（書き逃げ！！）

S U I C I D E 4 3 親父の涙と約束の拳

人は死を認識しなければ己の生を確認できない。  
ならば己の身が滅ぶ刻、蔑む生で死を認識する者と誇る生で死を認  
識する者……その死は同等と言えるのだろうか？

……フウ、結局死ネナカッタナ。コノ小説ノ題名ミタイジヤナイカ。  
全ク酷イ弟ダヨ……唯一無二ノ兄弟ダツタ僕ノ、最期ノ願イヲ聞キ  
入レテクレナカッタんだカラ……ッテ、死ンデナイんだカラ最後ジ  
ヤナイカ。

チャンスハコレツキリダツタノニ、コレジャア真慈ガ僕ヲ否定シナ  
イ限り僕ハ消エラレナイ。

コレジャア自由モ人権モナイナ……

ダカラ、ソノ責任ハ真慈ニシツカリ取ツテモラウカラ

実ハ、真慈ハ精神的ニ強クナツタカラ狂氣ニ打ち勝テル……真慈ガ  
狂氣ニ飲ミ込まレナケレバ、僕ガ狂氣ニ染マル必要ハナクナル。

ツマリ、僕ハナニモシナクテイイツテコト。

今マデ蓄積シタ狂氣モ、今回ノ件デ殆ド消失シチャツタカラ、僕ニ  
悪影響ハナイシネ。

僕ハ真慈ノ中デ楽シマセテモラウヨ……ソレガ、滅ブハズダツタ僕  
ノ世界ヲ生カシタ、君ノ罪ダカラ。

.....

「.....#.....」  
「.....」

「…きる…真……しっかり…る」

…っ…なんだ？

意識がはつきりしねえ…

「起きろ！ 真慈ッ、しっかりしろ!!」

…ん…なんだかうっせえな

「くそッ……こうなったら奥の手を出すしかないか」

そついや……真吉兄ちゃんはどうなった？

俺は意地を通せたのか…

「…この白髪マザK…」

「死ねええええええええええええッ!!」

「ゴブア!？」

聞き捨てならない単語を聞いた俺は、無意識の内に声の主へ拳を振るっていた。

はつきりしてなかった意識の中で放った拳は完全にレバーに入って、声の主を黙らせることに成功した。

声の主……ってか、黒ヘルもとい親父は、幽霊のくせして床を転げ

回ってマジで痛がってる。

「イッテエーッ！！ 不意打ちか！？ 意識不明のように見せ掛けて実は狙ってやがったな！？」

「い、いや、体が勝手に動いた。実際、今もちよつと意識が薄いので……立てない」

朦朧とする意識は、軽く叩かれただけでも簡単に闇へと溺れてしまいそうなほど薄らいでいる。

親父はそんなことを気にせず、転げ回りながら怒鳴りまくってる。

「なんだこの野郎ッ！ 責任能力なしで無罪を勝ち取るうってか！？ そんな息子に育てた覚えはありませんッ！！ お前はマザコ……」

「チエイサーッ！！」

「ンブッ！？」

親父の腹部に深くめり込む俺の肘。

気絶寸前の意識はどこへやら、俺の体は親父にフライングエルボーを食らわせていた。

左手を使った見事な技を食らったのに、目立ったダメージがないのは幽霊だからか、それともお袋との夫婦生活において超人的な耐久性に鍛えられたか……両者だな、うん。

「ゲホッ、ゴホッ……コノヤロ容赦ねえなッ」

「テメエのおかげで覚めましたぞこのクソ親父」

「なに、そんなに『母親が好き』と言われるのが嫌か？」

「一回と言わずにあと四、五回死ぬか？」

「ハハハッ……ジョークだジョーク」

俺が立ち上がって拳を振り上げると、親父は両手を頭の後ろに回して無抵抗を示した。

俺も、無抵抗なやつをブン殴るほど腐っちゃいない。

仕方なく握った拳を解いて降ろすと、親父は溜め息混じりに上半身を立て、床にあぐらを掻く。

俺は周りを見回して、ここが我が家のリビングであることを確認する。

「確か、俺が術をかけられたのは道路だったはずだけど……」

「それは俺が運んだからだ。道路に人が倒れてたら、通報されて病院に直行だろうからな。お前、病院とか大嫌いだろ？」

「病院とかマジ勘弁」

「だろ？」

俺は背中に嫌な寒気を感じながら、苦笑いをする。

その寒気を振り払いながら、取り合えず報告をする。

「狂気はブン殴ってきた。んで……真吉兄ちゃんと話し合って、勝手に死のうとしたから勝手に助けた」

「そう、か」

行儀の悪い格好で俺の顔を見上げる親父は、安心したような、それでも悲しそうな顔をしていた。  
そして、これから俺の言う言葉に対して構えてるようでもある……でも、こんなことで遠慮するほど、俺は甘くない。

「……クソ親父。俺になんか言うことあんだろ？」

俺は怒鳴ることなく至って冷静に、そして鋭く親父に言葉を投げ掛ける。

……今回の件は、俺の過去が改竄されていた。

俺の為を思つての行動だとしても、それを俺に隠してたことは明確で、俺はそれが許せない。

それは騙されたとか、そんなちっぽけな理由じゃなくて……真吉兄ちゃんの存在をこの世から消した事実を知ったからだ。

「……すまなかつた」

「それは誰に対してだ？」

「お前と……真吉にだ」

親父は殆ど憔悴した様子で俺の問いに答えた。

……親父は親父なりに苦渋の選択をしていたんだろう。  
疲れ切った表情の中に、どこかスッキリしたような表情をしていた。

「人体錬成だろうが魔界転生だろうが……もし、二人とも救える方

法があれば、俺は迷わずそっちを選んでただろうさ。でも、俺ができたのは、肉体が半分以上残ってたお前の精神に、真吉の魂を移植してお前の精神破壊を防ぐ……そんな中途半端なことしかできねえクソ親父だったんだよ」

「……おい」

「死んでからもシンと一緒に、二人を救う方法を探した。……けど、神に近い英霊でも聖人でもない俺達にできることは『自分達が幽霊として活動を維持する』ことと『自ら術を研究して編み出す』ことしかなかった」

「……ちよつと、シカトですかあ？」

「でも……結局ダメな俺にできるのは『周囲から真吉に関わる記憶を封じる』ことで、お前の精神的ダメージを減らすぐらいだった……」

「無視ですかそーですか。珍しく真面目な話してんのは分かるけど、度を過ぎると心優しい真慈さんもブチキれるぞ？」

「しかも、その結果真慈は狂気に目覚め、真吉はその狂気を取り込み狂気に塗り潰された……俺は結局なにも出来ないクソ野郎……」

コナツククラッシュ  
「脳天頭突」

「ゴカアツ!？」

人の話を聞かずに話し続ける親父にむかい、俺は自分の頭を親父の脳天に叩きつけた。

親父は脳天を押さえて崩れ落ちた。

「ツ!？ 何すんだこのクソが!! 痛いだろうが!!」

「吠えるんじゃないよ」

「ああ!？ ナメた口きいてんじゃないやねえぞ真慈ツ!!」

親父は崩れ落ちた姿勢から一瞬で立ち上がり、怒りに満ち溢れた表情で俺の胸ぐらを掴み上げた。

俺はその目を見て……悲しい気持ちになった。

「……そんな顔で喚くんじゃねえよ。痛々しくて見てらんねえだろ  
うが」

俺の言葉を聞いた瞬間、親父はハツとした顔になった。そしてすぐにその顔をクシャクシャにした。

汚い泣き顔を見せる親父に対して、俺は親父に掴み上げられたままの胸ぐらに、ゆっくりと右手を添える。

「……あんたが俺達ことを必死に考えてたことぐらい、『俺達』は知ってる。だから、泣きながら懺悔なんざしてんじゃねえよ」

俺が死のうと思った時も、俺だけじゃなく真吉兄ちゃんも生かすために、黒ヘルなんて被って赤の他人のフリして……

「夫婦揃って無茶苦茶で、馬鹿ばかりやってるけど……俺は、ア  
ンタが親父でよかったと思う。真吉兄ちゃんだってそう思ってるに

決まってる」

親父は男泣きを必死に堪えながら、俺から視線を逸らさない。それに対するように、俺も意地でその泣きつ面を見続けながら口を開く。

「……アンタは息子から見ても馬鹿で馬鹿で仕方ない親父だ。女たらしの癖に、目障りなほどお袋ラブラブだったし、死んでからも目の前に現われやがって、目障りに拍車がかかりすぎてブン殴りたくなる。しかも、本当にブン殴ってもゴムパッキンのカビとか、世間に巣くう汚職級に生命力がありやがるから、殴るだけじゃ気が済まずにマジ殺してえ。しかもこんなふざけた茶番劇に付き合わせやがって、百回殺しても殺したりねえよ」

無尽蔵に浮かぶ親父への文句を口にしながら、俺は開いてる左手で拳を握り、親父の右頬にゆっくりと痛みがないように『殴る』。これは俺が狂気と戦う前に、親父と交わした約束。それを果たした今、俺は親父に向かって言葉を紡ぎ、気持ち伝える。

「そんなアンタに……俺は助けられてんだよ。ウジウジしてねえで黙って感謝されてる」

……俺は親父を誇りに思ってる。

家族のために体張って働くだけでも十分なのに、この親父は化けて  
でるほど俺達のことを思ってくれてる……そんな親父の息子になれ  
たのは、幸せなことだと思う。

俺の言葉を聞いた親父は、泣き顔を隠すように俺の胸ぐらから手を  
放して、俺に背を向けた。

鼻水をすすする音やら、しゃくり上げる音が聞こえるけど……俺はそ  
れを指摘せずに、自分の部屋に向かうために玄関に通じる扉に向か  
う。

そして、ドアノブに手を掛けた時、背中になにかが触れた。

俺の後ろにいるとしたら、親父しかいない。

多分、背中に当たってるのは親父の拳だろう。

「……俺だけ殴られんのは……不公平だろうが」

「確かにそうだな」

男泣き丸出しだろう親父に背を向けたまま、俺はドアを開けてリビ  
ングから出る。

「……テメエ達が息子でよかった」

ドアが閉まる瞬間、僅かな隙間から小さいながらも自身溢れる声が聞こえた。  
突然、背後から胸をひと突きされたような感覚に、俺はゆっくりと胸に手を当てる。

「……………最初からそれを言え、このクソ親父」

俺は一人呟いてから部屋に行き、ベッドに横たわって寝た。  
見なくても分かる、今の自分の情けない顔を、誰にも見られたくなかったから……

## SUICIDE 43（親父の涙と約束の拳）（後書き）

はてさて、ここ二カ月更新がままならない状況に陥っている夷神酒です。

読者の方々には更新が遅く、非常に悪いことをしていることは重々承知しております。

しかしながら、現在『ネタは尽きてないけど、書き方が分からない』という、非常に困ったスランプ状態にはまってしまい、中々書き出せない状況にあります（汗

なんとなく始めた執筆活動ですが、これほど辛いものとは……しかし、私は投げ出さずに書き続けたいと思います。

ちなみに、次回はいきなりトンで一ヶ月後の話……つまりは秦との戦いとなります。

この一カ月の中に『なにもおきなれば』、ノーマル黒ヘルエンドです。

後三、四話で本編は終了……フラグは特になし、どんでん返しもないの、種も仕掛けもない内容になりそうです。

先が見据えやすい薄っぺらな話ですが、見放さないで頂きたいです。

では、また。

S U I C I D E 4 4 最強VS死神 再会のち再開

主婦……それは戦利品おかいとくを手に入れるため、戦場やすうりを駆け抜ける疾風の  
猛者。

主婦……それは家庭の財政において、独占的な実権を握る権力者。  
主婦……それは家庭や家族を癒し支え護る、史上最強の守護者。

体は闘神ヘラクレスの如き豪傑で、神鎧アイギスよりも神聖な鎧エフロンを纏った伝説の戦女神。  
心は聖女ジャンヌよりも高潔で、聖剣ギョラントルよりも強靱な剣ほつちやうを手にする達人。

その後ろ姿は勇者しゆふ。  
その生き筋は伝説しゆふ。  
その進む道は無双しゆふ。  
そして、その存在が世界最強しゆふ。

とある青年が自身の兄と出会い、自身の父親をブン殴ってから  
一カ月後

世界最強の主婦である私の足元には、深々と土下座をしている者がいた。

私はその者に対して、ドスを利かせた声をかける。

「テンメエ……分かってるね？」

「ス、スイヤセンツ！！二度とこんな真似はいたしやせんツ！！  
で、ですから、是非ともご慈悲をツ！！」

引きつる声で必死に謝るその男は凶体の人より一回りデカく、両耳の上辺りに牛のような角が生えている……その角が鬼である証拠だ。他はわりと人間っぽい姿をして、そのギャップが面白かったりする。

しかし、今の私は鬼の土下座なんて珍しいもの見せてられても、治まらないほどの怒りを抱えていた。

「……私に一発殴られるのと、この屋敷を隈無く掃除するのがどっちがいい？」

「掃除！！隅から隅までチリ一つなく掃除させて頂きやすツ！！  
ですからその拳を降ろしてくださいませッ！！」

私が言う『屋敷』というのは、鬼が根城としている古城コウのことで、その広さは普通の家屋とは桁違いだ。

私の主婦スキルを発動しても、全部掃除するとなると丸一日かかる。この鬼がやるとなると……半月は寝れないね。

この鬼だつてそんなことぐらい分かつてるだろうに、一瞬で終わる

鉄拳制裁を恐れてる。

「……………はあ」

私は小さくため息を吐く。

まあ、反省の色はあるし、相手は鬼でも私は鬼じゃないからね。必要なのは反省して、次の過ちを犯さないことなんだから、虐待的なことをする必要はない。

「……………仕方ないねえ。一ヶ月間トイレ掃除、できるかい？」

「ヘイイツ！！ 便器を舐めてもいいぐらい綺麗にさせて頂きやすー！！」

「そこまでしなくてもいいけどね。許してあげる。だからさっさと行きな」

「ありがとございすツ！！ 失礼しやした！！」

顔を上げた鬼は、冷や汗を滝のように吹き出しながらも、安堵した表情で私の前から脱鬼の如く走り去っていった。

「まったく、困った子だね」

「チャーハンのグリーンピースを残しただけで、大男を震え上がらせる脅し方するんですか？」

「人が丹精込めて作った食事を、自分の好き嫌いで残すなんて最悪な行為なんだよ。なんなら、アイツの代わりにアンタが鉄拳制裁受けるかい？」

「それは勘弁してください。姐さんに本気で殴られて死にかけてる野郎を何人も見てますから」

「アンタ等が好き嫌いしすぎなんだよ……怒っちゃいるけど本気のほの字も出してないしね」

私の横には黒いスーツに身を包み、サングラスをかけたオールバックの男がいた。

さっきの鬼とは少し違い、その耳の上には羊のような巻き角が生えている。

私はその男をあまり気に掛けず、一通り片付けが終わった台所の掃除を始める。

水垢を落とすのには酢がいいのは有名だけど、シンクに湿気を残さないように掃除して、水垢を予防するのが一番いい。

「……いや、完全に放置しないでください。姐さんに言付けがあるんです」

「ん、なんだい？」

「正門の前で姐さんの息子を名乗るヒョロいガキが、『とつととお袋早く出しやがれ』とかぬかしてやった」

「……ふうん」

「まあ、警備の奴らが追っ払いにかかりやしたんで心配いりやせんが、一応報告いたしやす」

鬼の言葉の半分以上を聞き流しながら、私は台所の掃除を一先ず済ませてから、手近な収納棚からフライパンを取り出す。

「あれ、姐さん？　なんでフライパンなんぞ出しとるんですか？」  
「ん？　息子が来てんだろ？　なら、出迎えてやらなきゃな」  
「……姐さん、俺の聞いてました？　俺達はそのガキを追い出した  
んですぜ。それにガキが姐さんの息子さんとはかぎりやせんでしょう？」

鬼の顔には、私の言うことが信じられないことがあからさまに出ていた。  
けど……それじゃあ甘い。

「ダメだね。相手は仮にも『私の息子』を語ってるんだ。油断するな、安心するな、注意を怠るな。心眼を鍛えるなんて言わない。相手が豪勢な名を語るなら、見た目なんて眼中からとつぱらって、その名に釣り合う戦力で立ち向かってやりな」

「は、はあ………ん？　なんか揺れてやせんか？」

私が話してる間に、屋敷全体が不自然に揺れ始める。

その揺れの原因は……いや、考える必要はないね。

私は芯深く轟く揺れに笑みが零れる。

そしてその笑顔のまま、隣で混乱している鬼に声をかける。

「さて………よく見ときな。これから主婦の本気を見せてあげるよ」

ドガンッ……！

揺れが最高潮に達した瞬間、爆音が響き渡り、目の前の壁が爆発する。

爆風と共に粉塵が吹き付ける中、私は直感的に手にしたフライパンを横薙ぎに振るう。

ただの調理器具も主婦が持てば武器となり、粉塵に紛れて飛来する物体を正確に捉える。

「ゴブア！？」

横に弾き飛ばした飛来物は、近くにいた鬼を巻き込みながら、壁に横穴を一つ増やして飛んでいった。

私は即座に意識を目の前へ戻し、横薙ぎの動作を無駄にせず、そのままの態勢でフライパンを爆発によって開いた大穴に向かって投擲する。

私の力によって音速級の手速を得たフライパンは、立ちこめる粉塵をその風圧で切り裂く。

すべて粉碎する砲弾となったフライパンは……大穴を通過する前に、一つの影に止められた。

「感動の再会にフライパンを全力投球つてのは、ちつとばかり奇抜すぎねえか。なあお袋ッ！！」

「自分の父親を投げるあんたに言う権利があるのかい」

私の視界に映るのは生気をまったく感じさせない純白の髪に、骸骨を模した漆黒の不気味な義肢。

そいつは異常な殺気を放ちながら、その義手の左手一本でフライパンを握り潰した。

「いや、飛んできたのが親父って分かってて、本気で叩き落とす方が問題だろ」

「あれぐらいだったら、ダイちゃんはおすり傷さ」

「……まあ、あの親父が打撃でくたばることはねえだろうな」

その影の正体は須千屋真慈。

正真正銘私の息子だ。

そして……その体の中にはもう一人の息子もいる。

二人の息子は一つの体で、私の前に堂々と立っていた。

鼻の奥に込み上げてくるものを押さえ込みながら、私も二人にあいたい相対する。

「まあ、用件は分かってたんだろ……取り敢えずブツ潰しに来た。その他諸々はそれからだ」

「抜かせバカ息子。アンタの母親を誰だと思ってる？ アンタが前に相手したのは私だけど私じゃない。今、アンタの前にいるのは正真正銘本物の私だよ」

「んなもん百も承知だ。その上で、俺はここに立ってたんだよ」

私と与える気迫にも、息子は屈することなく私に対峙する。

その目に映るのは虚勢ではない、恐れさえ押さえつける本物の闘志。

「……でも、こんな屋内トでアンタと戦ったら、生き埋め決定だな」  
「なんなら外出るかい？ 喧嘩は外でやるのがマナーだろ？」  
「いや、その必要はねえよ」

そう軽く言った息子は潰れたフライパンを投げ捨て、瞳を閉じながら地面に左拳をつける。

その拳には黒い炎が灯り、それと同調するようにもう片方の右拳が白く輝き始める。

「……黒の名を冠す炎の巨人よ、その身を焦がしながら先陣を切り、我らを決戦の地へと導け……」

聞いたことのない詠唱……でも、組み方はダイちゃんの術に似てる。しかし、術に込められている霊力の量が異常に多く、両拳に流れ込んでいる霊力は美しく澄んだ金属が鳴るような音を放ちながら、通常の何十倍もの密度に圧縮されている。  
一体なにをする気が分からないけど……これは止めないとヤバいかもしれないね。

「私は戦隊ヒーローの悪役じゃないんだ。敵の隙を待つ義理も道理もないねッ……」

私は接地を勢い良く蹴り、息子との距離を一步で縮める。

息子は集中しているのか、私の行動を意に介さずにピタリとも動かない。

(……攻撃系の術じゃなくても、あれだけ靈力を込められた拳で殴られたらたまったものじゃないね)

そう判断した私は、息子に肉薄する寸前に床を蹴り、バク中の要領で息子を飛び越える。

そして空中で体を捻り、着地態勢を半回転させる。

そして着地した瞬間に、正面に見える息子の背中に向かって一直線に跳ぶ。

初動から約五秒の業、私は拳を振り上げながら息子の背に迫る。

息子はその速度に追いつけず、顔を横に向けるだけ。

だが……

「ッ!？」

私は前進を止め、バックステップで息子と距離を取る。

……完全に詰んだはずだった。

でも、一瞬見えた息子の顔に私の本能が危険を察知した。

ほんの少しだけ見えた、息子の大胆不敵な笑み……勝利を確信した者の表情に、私は詰みを放棄した。

しかし、当の息子は振り返りかけた顔を戻し、私に背を向けたまま愉快そうに肩を揺らすだけ。

「ハッ……さすがお袋。相変わらず恐ろしいほどいい目をしてやがる。でも、陽動フレイントにも反応してちゃキリがねえぜ?」

息子の声は私を小馬鹿にするように軽い……しかし、さっきの笑みは陽動にしてはあまりに不気味すぎる。

私は早々に戦闘の構えを解き、息子の術の発動阻止を諦めた。でも……そう簡単に思い通りになってやるのも癪だ。

「なら、私も大技繰り出してやろうじゃないの」

私は一切構えを取らず、ひたすら集中する。

無駄な装備は必要ない……この肉体は既に最強。

しかし、最強はいくら突き詰めても最強であり、『完璧』ではない。故に最強に限界はなく、鍛え高め極めればその力は更なる『最強』へと至る。

この際一切の出し惜しみはしない。世界で最も強い主婦と言われる力を、この場で証明する。

「縛劫……夢想幻壊」

これは、ダイちゃんを手に入れる時に使った、主婦流の原型となった最初の奥義。

この奥義は発動しても私の体に大きな変化はない。

でも、私は今までの最強が持つ限界を超える。

そして、世界最強に相応しい心を持った私は、真に最強の主婦となる。

「うわ……えげつねえ。最初からブチのめす気満々じゃねえかよ」  
「ナメるな息子。アンタの母親……世界最強の主婦相手に喧嘩を売  
るってのは、こういうことなんだよ」  
「おー恐ッ」

息子は減らず口を叩きながら地に片腕をつけるポーズを解き、私  
方を向く。

その右拳には白い力が、左拳には黒い力がそれぞれ凝縮され、球体  
として形成されていた。

「なんだい、その青狸ネコがたロボット機械人形の手みたいのは」  
「うっせー、黙ってみてろ」

その両腕を顔の前でぶつけ合う。

その衝突の瞬間、白と黒は接触し交差し乖離し、空間さえ歪める力  
を生じさせる。

震える空気を肌に感じながら、私は息子の行動をただ見据える。

「さあ、始めよう。高潔で醜悪なる最終決戦を………ラグナロク終結乃戦場ヴァイグリーズツ！」

息子の叫びと同時に、歪んだ空間から『力』が溢れだす。

その『力』は空間を侵食しながら異世界を作り出し、今ある世界を  
塗り替えていく。

その世界は血に汚れた荒野。

大地は深々と抉られ、草花は皆さんに踏み躪られ、空には燻る黒煙が立ち上ぼる。

獣の咆哮や人の雄叫びが響き渡り、空気と大地……空間をも芯から震わせる。

その荒野は憎しみと怒りが渦巻き、荒々しき戦が繰り広げられる戦場。

そのド真ん中に私達はいた。

「空間移動でも時空移動でもない……結界だね」

「ご名答、ここは俺が作り出した結界の中だ。名は『ヴァイグリーズ終結乃戦場』。この中なら室内でも十分暴れられるぜ」

術を発動した息子は、既に黒い義肢に黒炎を灯らせ戦闘態勢に入っていた。

……前見た時は、黒炎に飲み込まれるようだったけど、今は黒炎を思い通りに纏っているイメージになってるね。  
まあ、いい……私は目の前の息子を倒すのみ。

「さて……地面に頭擦りつけて土下座する準備はできてるかい？」

「その言葉、利子と熨斗つけて盛大に返してやるよ」

私達はお互いに言い合いながら、ふてぶてしく笑い合う。

それは親子の再会というよりも、何十回も拳を交えた宿敵と見えた時のように、最高に面白い状況。

かつて幕切れした親子喧嘩は、再びその幕を開けた。

S U I C I D E 4 4 最強VS死神 再会のち再開（後書き）

アケオメでございます。

神酒は毎年のごとくの寝正月……と思いきや、大学から課題が来てその課題を完遂させるのに必死でした。

……いや、投稿が遅れたのは、年末大人買い（ただし古本屋）した小説読むのに時間を消費してただけです、ゴメンナサイ。

読者の皆様には今年もご贖罪にして頂きたいと思います。

そして、今年こそは順調に小説が更新できることを願います。

SUICIDE 45 語られぬ戦いと語り継がれる戦い

失って取り残された子は、死神になった。

失ってさえ弟を想う兄は、狂気と化していた。

失っても先に進んだ女は、世界最強のままだった。

失って自分を呪った男は、二度と失いを繰り返さぬために、世界を穿つ術を得た。

「うっ……あ……」

霞みが掛かった視界が戻る。

何があつた……姐さんが言い出したと思おたら、突然体が吹っ飛んで……腹がイテえと思おたら男の頭が腹に突っ込んどるし……あ？  
男？

気を失つとつたらしい俺の目の前には、見たことない男が仰向けにぶっ倒れとる……お、目え覚ました。

「イテエな畜生ッ……自分の親父をスクリユー回転かけて投げるか普通？ てか、秦も秦で本気で打ち返すなよ」

「……誰やアンタ？」

「ん？ ああ、ぶつかつてすまねえな。文句なら全部ウチの息子に言ってくれ」

長髪白髪頭の男は、謝りながらもデカイ態度で立ち上がる。

っ……ダメや、頭がボーとして状況が整理できとらん。

さっきの地震も訳わからんし……そういえば姐さんの姿が見えんな。

「ああ、秦を探してんのか？ アイツならあの中だ」  
「なッ!？」

俺の考えが分かっただらしい男は、ある方向を指差した。  
その先には、馬鹿デカイ真っ白な箱があった。  
その白い表面には不気味な黒い文字が四方八方から流れとる。  
あん中に姐さんが閉じ込められてる 瞬発的に箱に駆け寄ろうとする俺の前に、その男は立ちはだかりおった。

「ジジイツ!! 邪魔すんなッ!!」

「頭使え。それはこっちのセリフだ。あの二人の邪魔はするもんじやねえよにーちゃん」

「うるせえ……黙ってどけやワレッ!!」

カツとなった俺は、右拳を硬く握り締める。

それに応じて、俺の拳は岩石の如く巨大化し、岩盤の如く硬くなる。俺は邪魔なジジイを頭から叩き潰すつもりで、その巨大な岩塊と化した拳を振り下ろす。

そして、肉が潰れる独特の生々しい鈍い音が俺の耳に届く。

そう 自分の拳が潰れる音が

「ガアアアツ!？」

時間差で来た痛みと同時に、ひしゃげた拳から真つ赤な血が勢い良く噴き出す。

俺は血が溢れ出る拳を庇いながら一步後ろに下がった。味わったことのない痛みが、右腕から全身にジワジワ流れ込んでくる。

そして痛みと同時に沸き上がる疑問。

『なんで俺の拳が潰れとるのか?』

その答えを知るために……俺は目の前を睨みつけた。

「血の気が多いのは大いに結構だぜ、にーちゃん。俺の家族も喧嘩っ早いからそういうのは嫌いじゃない。でもワリーな、俺をブン殴つていいのは女房と息子達だけなんだよ」

俺の睨みつける先には、傷一つ負つたらん男が微動だにせんと立つとった。

まるで何事もなかったかのように、飄々とした面構え。たった一撃で分かることは少ない……やけど、この男と俺の間には圧倒的ななにかがあるんは明かや。

「もう一度言つとくか。あの二人の邪魔するもんじゃねえよ三下。<sup>にーちゃん</sup>あれは次元が違うんだ。……ま、それでもちよっかい出したいって

言うんなら……」

男は天に手の平をかざす。

その手の平がゆっくりと握られるんに合わせ、なにもない場所から特殊な形の光が現れおった。

光は男の手に収まり、その全貌を明らかにする。

それは……純白の鶴嘴つるはし。

「俺が相手してやるよ。一部じゃ『無彩神壁』モノクロームシエリとか『無尽なる境界』なんて、随分けつたいな名で呼ばれてんだわ」

「ッ!?!」

「あと『靈極』れいきよくなんて呼ばれてたが、あの隠れサド狐や腹黒フリーターにとつちや俺なんかただのオッサン……個人的には豪勢すぎる肩書だと思ってたんだ。やっぱり、『世界最強の主婦の亭主』って肩書きが一番分かりやすい」

無彩神壁……靈術の知識があるなら少しは耳にしたことがある名や。『参極の術士』さんごくの一人で、『空間を区切る』結界靈術を極めたヤツの術はその枠を外れ『世界を創る』とまで言われとる。

そんな化けモンがこんな所におるなんて……やけど、それなら俺の拳が潰れたんも、見えんなんらかの結界が男の周りに張られれば説明がつく。

時々姐さんが話してた『ダイちゃん』言うんはこいつのことか……  
なんや、夫婦揃って化け物やないかッ!!

「……ったくあの息子、レベルが高いからって一直線にラスボス倒

しに行っても、モンスターは全滅しねえから平和にはならねえつー  
ことが分からねえのか？」

俺が男を睨みつけてる間に、騒ぎを聞きつけたヤツ等が集まってき  
たらしい。

百を超える鬼が壁に隠れて遠巻きに男を囲んどるこの状況は、普通  
は地の利もあるこつちが優勢や。

やけど、俺にはそう思えん。

なぜなら、俺の目の前の男はこの状況で……笑つとつた。

あまりに世界最強に酷似しとる、ふてぶてしい笑みで。

「仕方ねえ……キャラじゃねえが、息子の尻拭いしてやつか」

男は手にしとる鶴嘴を大きく振り上げ、振り下ろす。

堅いはずの床に深々と突き刺さる鶴嘴の柄を持ったまま、その男は  
なんの構えも取らんで無防備に目を閉じた。

そして、その口からは言葉が紡がれる。

「 我は開拓の使者。我が持つのは自らの強き意志と一本の鶴嘴  
のみ。その黒き幻影は厳格なる玄人さえ騙し、紅き羅刹は深々と螺  
旋を刻み、蒼き天空は世界を喰らい尽くし、白き折鶴は如何なる汚  
れも隔絶する……」

体の芯が震えとる……その震えに耐えながら、俺は前を見ることを  
止めん。

俺の視界に映り続ける男は、床に突き刺した鶴嘴を片手に長く永い詠唱を続けとる。

異常な威圧感が襲い掛かり、俺はその場から動くことさえできんかった。

「我、開拓者が命ずる。その仮初めの姿を解き放ち、この柵しがらみに縛られた世界を穿うがつ戟ほことなれ……玄螺喰隔げんらくうかく」

男の詠唱が止まると同時に鶴嘴が光り輝き、俺はその眩い光に耐え切れんと目を瞑る。

その間、どこからか聞こえる鳥の甲高い鳴き声が空気を揺らす。

「そついや自己紹介がまだだったな」

気の抜けた声と同時に目への刺激が消えたのを感じ、俺は瞑った目を開く。

その時俺の視界に飛び込んできたのは、鶴嘴を持った男やなくて……ドリルを持った男やった。

そのドリルの見た目は鶴嘴以上にこの状況に似合わんし、一見俺達を馬鹿にしているようにも見える……だが、醸し出す雰囲気は鶴嘴以上に恐ろしい。

……そしてそのドリルを持つとる男こそが、一番恐ろしくてたまら

ん。

「俺の名前は安全第二もとい、須千家大慈。覚えるか覚えないかは  
テメエしだいだ。お前は名乗らなくていいぞ。むさ苦しい男の名前  
なんて覚えるつもりなんてサラサラねえからよ」

さつきまで聞こえとつたなにかの甲高い鳴き声は、いつの間にか高  
速で稼動するドリルの回転音キターに変わつとる。  
両手持ちのドリルを片手で持ち上げ悠々と担ぐ黒白の術士は、その  
存在だけでこの場を主導権を握つとつた。

「まあ 手加減はしてやる。安心してかかってこい」  
「クツ……このクソがあああああー!!」

俺は砕けた拳を振り上げ、その男に突撃する。  
それを皮切りに、隠れとつた鬼も一斉に襲い掛かる。

……やけど、俺等が束になつてもかなわんのは、その時点で分かり  
切つとつた。

神聖なる戦い……世界で最後の戦いと言われる神々の運命、最終決  
戦。<sup>ロク</sup>  
世界を司る神々と悪戯好きの神が率いる巨人族は、九つの世界を破  
壊しながら戦乱を極め……巨人達が敗北し、世界が大海に沈むこと  
でその戦いは幕を閉じた。

「やっぱり私達の戦いには、こんぐらい大舞台じゃねえといけねえよ……なあ、息子ッ!!」

「ああ……最悪に傑作だッ!!」

空を裂く雄叫び、大地を揺るがす地響き……荒々しい空気に満ちた戦場。

そのド真ん中で、俺とお袋は拳を打合せる。

左ストレートを右裏拳で軌道をずらし、右の肘鉄を左のアップパーで叩き上げ、ハイキックはエルボーをふくらはぎに落とす。

一発、十発、百発……まともに食らったら致命傷になるお袋の攻撃を、俺は避け切らず受け切らず最低限の動作で受け流す。

下手に完全回避をすればこの均衡状態が崩れ、それこそ危険だ……

だから、俺はお袋の攻撃全てに反応して、それをほぼ無効化する。

……来たるべき時のために

「今の私をいなすなんて……なかなかやるじゃないか」

「吐かせ、喋る余裕があんならもっと本気出しやがれ」

「言っようになっただねえ……なら、期待にこたえてやるよッ!!」

お袋の顔に不敵な笑みが浮かんだ瞬間　消えた。

「ッ!?!」

俺は反射的にバックステップで跳ぶ。

攻撃を避けるために。

そう……避けるためにッ!!

さっき消えたはずのお袋の笑みが、俺の視界いっぱいまで近づく。飛べない俺は着地してない状態で回避はできない。

んなクソッ!!

「残念だったな、む・す・こ」

「ッア!?!」

横に吹っ飛ぶ　体が　意識がッ!!

冗談みたいなスピードで空中をブツ飛ばされる。

下手に地面に叩きつけられたら無事じゃすまない……霧散しそうな意識を無理矢理叩き起こし、まるで水切りのように地面をバウンドしながら、出来る限りの受け身をとる。

クソッ、早く止まらねえと……

「ほら、休んでる暇なんてないよッ!!」

「ぎッ!?!」

腹を抉る衝撃。

それがお袋の蹴りと気づいたのは、反対方向に吹っ飛ばされてからだった。

腹の底から鉄臭い液体が喉を通して沸き上がる。

確実に内臓が逝った……このままじゃやべえ。

「ほれっ、このままやられっばなしかい？」

吹っ飛ぶ先の方から、既に先回りしたお袋の音がする。  
あんな蹴り二度も食らったら、正真正銘に腹が抉れる。  
でも、この状況じゃ防御も回避もできやしねえ。

なら、俺の行動は決まってる。

俺は左手の薬指だけを折り曲げ、左腕に施された仕掛けを発動する。  
それは左腕の脱装<sup>バシ</sup>備。  
お袋に接触する前に呆気なく外れたそれは、砂埃が舞う地面に落ちると同時に俺の体のバランスを崩す。  
バランスが崩れた飛行物体はその軌道を急激に変化させる。  
お袋が予想しない方向へと……迎う途中で右足が吹っ飛んだ。

「アゲツ！？」

また吹っ飛ぶ感覚が体を襲ったが、お袋はまだ腕がある右腕を足蹴で地面に埋め込んで、俺の動きを止める。

バキリッとお手本通りの音が、腕から脳髓に直接響き渡る。

痛覚は遮断されているが、異常を知らせる体のサイレンが意識を切り裂こうとする。

「まったく、甘いねえ。私はプロサッカー選手じゃないけど主婦なんだよ。その程度の変化球を蹴り逃すわけないね」

お袋は俺の右足を踏んだまま、結い上げられた黒髪を梳いて、そのついでのように俺の事を見下ろしている。

有り難いことに右足の感覚が残ってる……だが、今は神経が骨と一緒に粉碎してるらしく、まったくといって力は入らない。

……パンが無いならお菓子を食えばいい　右足を使えないなら左足を使えばいい。

俺は左足の爪先をお袋の脇腹に叩きこむ。

しかし、お袋の体は揺らがない。

むしろ、お袋は俺の腕を踏む力を一層強める。

「蹴りは斬撃と一緒に、軌道がしっかりしてないと真の威力は発揮できない……そんなぐらい三歳児でも分かるよ」

分からねえよ。

冷静に内心でツツコンでる間に、お袋に上がったままの左足を捕まえた。

その黒炎に包まれた鋼鉄やワイヤーで形作られてる足は……いとも簡単に膝上から捻切られ、投げ捨てられた。

こうして、俺の左手足はなくなった。

「……なんだか、つまらないねえ」

「なにがだ？」

「いや、私としては痛めつけてるのに反応が薄いのは面白みに欠けるんだよ」

「このDSが。痛みを感じねえんだから痛がる必要ねえだろうが」

「連れないねえ……なら、こいつはどうだい？」

妙な微笑みを浮かべたお袋は、俺の腕を踏んだままその場にしゃがみ、俺の胸部にゆっくりと左手を乗せる。  
なにを

「主婦流無打奥義……かんき 歡喜、かくど 赫怒、あいせう 哀切、らくらく 樂天」

「ア！？」

右肺、左肺、気管、横隔膜　すべての呼吸器官を潰さ　殺された。  
た。

たとえ痛覚はなくても息ができなきゃ苦しいに決まってる。

体中が脈打つ。

視界が白黒。

体の異常に思考さえ危険信号を放ち始める。

「ッ　イ？　！！」

「やっぱ、反応がいいとやりがいがあるねえ。……ああ、心配いらないよ。『ちよっと押しただけ』だからすぐに戻る」

けどねえ……と、お袋は含みのある言い方をしたのち、俺の左胸に

手に乗せる。

「 躰のために右肺かたほうぐらい壊しとこうか」

クソがッ!!!

待てッ!!!!

躰だあ!?! ふざけんじゃねえ!!!

俺が負けたみたいじゃねえかッ!!!

勝手に勝敗決めんじゃねえッッ!!!

ダンッ!! と、とてつもない衝撃に視界からお袋が消える。

そう、俺が目を閉じたわけじゃない……視界からお袋が『吹き飛んで』消えた。

その代わり、俺の視界に割り込んできた黒い影。

俺はその影を見て……鼻で笑う。

「ハッ……おせーんだよ。あやうく死にかけたじゃねえか」

「無理を言わないでほしいな。最初はこの状態に持つていくのに約五十八分かかったんだ。左腕を媒介にして、三十分以内に形成できるようになっただけでも誉めてほしいよ」

「お袋に対して二十分以上無傷だった俺に賞賛はないのか？」

「今はボロボロだけどね。でも、それだけ喋れるんならケガは大丈夫みたいだし、僕から賞賛されるほどのことじゃなかったようだ」

「……ウッセー」

お袋似の黒髪が戦場の風に揺れる。

四肢はいつも俺が装着してると同型の義肢。

そして、その四肢に蛇の如く絡みつく黒き獄炎。

そして……俺の生き写しのような姿。

「……ああ……アンタは……」

影を目にしたお袋は、珍しく困惑した声を漏らす。

それもそのはず、その影は一生見ることのないだろう姿だから。

そして、その影はお袋に対して笑いかける。

「お久しぶりですね、母さん。因みに、さっきのキックは再開の印だったんですけどどうでしたか？」

その名は須千家真吉。すせんや しんいち

世界最強の主婦とバカ親父の息子の一人。

そして、長い間俺の存在を支えてくれていた兄貴。

俺の魂の中で生き続けるはずの人間は、その存在をこの空間の中で確立していた。

「さて、前哨戦は終わりだ。ここから一気に決着つけるぞ」

俺は困惑の色を隠せないお袋の前で立ち上がる。

『押し折られた右腕』と『砕かれた右足』は、元通りに復元され、

『外した左腕』と『捻切られた左足』は、義肢ではない生きた脚腕に変化していた。

これが『ワイグリーズ終結乃戦場』の力。

「っーわけで、こつからは二対一でボコらせてもらっぞ」

「母さんは世界最強。これぐらいのハンディはあっても許されるよね」

俺が兄貴の横に並び、二人揃ってお袋に対して拳を向ける。

この拳が示すのは、闘争の意志。

二つの拳を向けられたお袋は、その表情を見慣れたものへと変化させる。

それは世界最強の主婦らしい、ふてぶてしい笑み。

「……いいねえ。こんな嬉しいのは久しぶりだよ」

お袋はゆっくりと両腕の袖を捲り上げ、エプロンの紐を締め直し、後ろに纏めた髪的位置を確かめる。

これは術とか解放とかじゃない、お袋が本気で家事をする前にする癖。

そして、世界最強の主婦としての力を最大限発揮する時を意味する癖。

「死にたくなけりや二人纏めてかかってきな。母親の偉大さをその魂に刻んであげる」

瞬間で空気が変わった。

お袋の覇気によって俺達の勝利ムードが霧散させられる。

……やっぱり、このお袋だけは敵に回したくねえ。

「……今、僕はここに来なければいけなかった理由を過去の自分と今の君に小一時間拝聴したい気分だよ」

「言つな、俺だって後悔してるところだ。でも、今の俺達は小一時間どころか一分一秒で勝ち負けが決まっちゃう状況なんだぜ？」

「分かってるよ。僕は気分と言っただろう？ ……母さんを蹴った時点で覚悟は出来るよ」

「俺はこのお袋から生まれた時点で出来てたな」

俺達は口では色々言いながらも、お袋に対して臆することはない。なぜなら、既に覚悟があるから。

越えられない壁をブチ破って、先に進む覚悟が。  
世界最強の主婦をブツ倒して、先に進む覚悟が。

「……それじゃあ、ちゃんと有言実行するのでしょうか」  
「ああ、二人で盛大にボコってやるうじゃねえかッ!!」

この最終決戦おやこげんかは、まだ始まったばかり。

S U I C I D E 4 5 〱 語られぬ戦いと語り継がれる戦い〱 (後書き)

今回は黒ヘルが頑張った気がする夷神酒です。

作者として、この物語はあと二、三話でエンディングとなる予定です。

最近はどうも執筆のてが止まってしまうがちですが、極力努力いたしますので残り少ない物語をどうぞお楽しみください。

S U I C I D E 4 6 } T h e s t r o n g e s t h o u s e w i f e i s

サブタイトル『The strongest housewife

in the world』は、見ての通り『世界最強の主婦』

の直訳です。ただただ単純で特に深い意味はありません。

生きることには価値があり、死ぬことも意味がある。  
故に人は精一杯に生き、自らの死を受容する。

生きることには意味があり、死ぬことには価値はない。  
故に人は必死に足掻き、一度限りの生に縋る。

死ぬことに価値があり、生きることには意味はない。  
故に人は自らが望む死を求めて、生を彷徨う。

死ぬことに意味はなし、生きることには価値はない。  
故に人は終焉を迎えるまで、怠情に生を貪る。

生死の価値に正解はなく、死生の意味に不正解はない。

なぜなら、生きている限り生死の意味も死生の価値も確定が不可能だから。

なぜなら、死んでからでは生死の意味も死生の価値も確証が持てないから。

故に、私はこの身が朽ちるまで精一杯一度限りの生に縋り、生を彷徨い怠情に貪る。

故に、私はこの身が朽ちる時に必ず訪れる死を受容し、自らが望んだ終焉を迎える。

そして、私はこの身が朽ちる瞬間に、生死の価値と死生の意味を自らの魂に刻む。



俺は地べたに胡坐をかきながら、疲れて上がらない肩を回す。

……ああ、もしかして四十肩か？ やっぱり年は取りたくねえな。

「つーか、死んでんのに年は取らねえか……って、なんだこの自己完結」

俺は独り言を零しながら、鶴嘴に戻した幻羅空鶴を右肩に担ぎ、首をコキコキ鳴らす。

「にしても……どんだけいんだよ。あれか？ 台所の黒帝悪魔と一緒で、一匹見たら周りには百匹居るってやつか？」

俺の周りには、意識が無くぐったりした鬼どもが、どこぞの廃棄物の山のように乱雑に積み上がってる。

……まあ、全部俺がやったんだから、クレームのつけようがないんだがな。

そんな適当な感じで周りを見ていると、視界の端でゴソゴソと動く影があった。

「待て……敵意は、もうあらん」

「おお、気付けもしてねえのに早いお目覚めだな」

よく見ると、そいつは俺が真慈に投げられて、秦に打ち返された時にぶつかっちまった鬼だった。

右拳が碎けてるのがその証拠だが……他に目立った外傷がないとはいえ、あの状態で立ち上がるとは根性のあるやつだ。

「こんなにやられたんは……姐さん以来や」

「まあ、こんなオツサンでも世界最強の主婦と連れ添ってんだ。それなりの力は持つてるさ」

その鬼はふらつきながらも俺の隣まで歩き、倒れるように座る。

俺はその鬼に、肩に担いだままの鶴嘴の先を向けた。

「待ってくれや……俺は負けを認めたら、もうなにもやらん。あん

だけの差を見せられたら、アンタに楯突く気もあらん」

「そんなんじゃねえよ……瑠璃光<sup>ルリヒカル</sup>」

鬼が力なく抵抗しようとする前に俺は術を紡ぎ、鶴嘴の先端が淡く光り、灰色の正六角推が鬼の右拳を包むように出現する。

「面が七つに頂点が七つで線が十二。点を黄泉への旅路とし、面を繰り返しの数とすることで四十九日の意味を抽出、そして点と面を立体にする線を十二の大願と置いて……いや、創り方はどうでもいいな。取りあえず、その結界はその手をちゃんとした形で治してくれる」

「いいのか……これは敵に塩を送るっていつやつやる？」

「いいんだよ。こんなもん塩つつーよりしょっぺえ汗みてえなもんだ。それに俺は刺されるような大層な背中を持ち合わせてねえんだ

よ

「姐さんにも言えることやけど……アンタ、理解不能や」

「秦を理解できなねえのは、にーちゃんが世界最強の主婦じゃねえからだ」

俺は懐から煙草の箱を取り出し、トントンと叩く。

出てきたフィルターをくわえて抜き出してから、人差し指を煙草の先端に近づけ、煙草の先を包むように極小の黒い結界を作り出す。結界はすぐに溶けるようにして消え、煙草には火が点いた。

その煙草の煙を吸って ゆっくり吐く。

「ふう〜、やつぱ一仕事終えた後の一服は最高だな」

「……それも結界術なんか？」

「おう、俺は結界以外はあるま知らねえんだ。本来は『かいじんれんそう灰塵煉葬』  
つつ結界内を空間ごと焼き尽くす危険な術なんだが、チヨチヨイと小さくして詠唱端折ってライター代わりにしてんだ」

俺は紫煙のわっかを作りながら、人差し指の先で、足元の床に手のひらサイズの四角を書く。

その四角の内側は黒く染まって、すぐさま溶けるように消え……平らだった床には正方形の穴が完成した。

ただ、一瞬だけ立ちこめる異常な熱気だけが、この結界の内部で起こった出来事を証明する。

「まあ、準備ナシでやれるのは精々こんなもんだ」

「……」

「ん？ どうしたにーちゃん。顔色悪くなってるぜ？」

沈黙している鬼を見ると、見事な顔面蒼白状態で、俺の作った穴を見ていた……なるほど、これがまさに青鬼か。

「……マジで手加減しとったんやな」

「ちゃんと言っただろ？ 手加減してやるつて。『本気』は出してもいいが、『全力』出すのは疲れつから趣味じゃねえんだよ……女房と息子は大好きみてえだけだな。てか、これは対生物に使ったことは五回しかねえから心配するな」

「ご、五回……？」

「この術は結構昔から使えたんだが、どうも運が悪い術みてえだから全力じゃ使わねえようにしてるんだよ。因みに一回目はボンミスして自分が焼かれそうになって、二回目は魚焼こうとしたら消し炭になった。最後に使ったのは自称大学生のフリーターに灸据えてやるうと思つたら、魔物のねーちゃんに打ち消されたな。残り二回は秦に食らわせたが……二回とも意味なかった」

あの頃は集中して結界に取り組んでなかったとはいえ、まだ世界最強の主婦じゃなかったあいつは、真つ直ぐに俺を看破して打破しやがった。

てか、あいつに紆余曲折や右往左往なんてもんは微塵もねえ……俺との馴れ初めも、直線的で一方的で圧倒的だった。

……ああ、今思い出してもあれはトラウマもんだぜ。

「……なあ、聞きたいことがあるんやけど。いいか？」

俺が焦げすぎたカラメルのような、控えめな甘さと共に壮絶な苦味を含んだ思い出を振り返っていると、青顔に「ちゃんが声をかけてきた。」

「別にいいぞ？ 俺の知らねえことと秦のスリーサイズ以外は何でも応えてやる」

「……。なあ……。なんでアンタはそんなに強いんや？ それに姐さんも」

「あ？ 秦は強いに決まってるじゃねえか。世界最強の主婦だぜ？ まあ、死んだ身だからしばらくすりゃ『世界最強の主婦』の座から名前を下ろされるだろが……。主婦としての志は歴代最高（じく）だったらしいから、なんらかの形で語り継がれるじゃねえの」

下手すりゃ英霊級の力を持つてるからな、秦は。（あいつ）  
その身体自体が対軍宝具（たいぐんほうぐ）って感じか……。いや、我ながら冗談にしちやあ笑えねえ。

「さつきから思ってたんだが……。アンタは姐さんのことばかり話してるけど、アンタはどうや？」

「あ？ 俺か？ 勘弁してくれよ。俺は身内自慢は得意だが自分自身を過大評価するのは苦手なんだ。俺は俺に自信がねえからよ」

「……。アンタの噂は耳にしたことある。世界を創るとまで言われる結界術……。この世界の中で最強の主婦やとしても、『違う世界を創る』ことができるんなら姐さんの力も関係ない……。」

「一寸黙れ」

俺は特に動かず、一瞬で鬼の口の中に簡単な結界を形成する。突然口を目一杯広げられて混乱し暴れだそうとする鬼の体に、間髪入れずその体の主要な関節を覆うように鼠色の結界を形成し、空間に固定することでその動きを封じる。

「!?!?」

「その想像力があるんなら、俺がなんでこんなことしたか分かるよな、にーちゃん。俺は身内自慢は得意だが、俺の身内を過小評価する野郎の扱いは苦手なんだ」

世界最強の主婦やとしても……そう、鬼は言った。

例え仮定の話だとしても、秦が敗北することを身内以外が話すのを俺は許さねえことにしている。

……まあ、俺は家族には甘いからな。

その気になれば全ての結界を爆散させて、そのふざけた想定をしやがった脳漿をぶちまけることもできるが……まあ、俺はそーゆーのは趣味じゃねえ。

俺は動きたくても動けない鬼を視界の端に捉えながら、フィルター寸前にまで短くなった煙草を最後に小さく吸う。

煙草独特の上手さと焦げ臭さの不味さを含んだ煙……それはそれで俺は好きだ。

「さて……そろそろあっちも終わるようだから、親切心でにーちゃんに質問に答えてやるよ」

自慢じゃねえが、俺は結界術に関しては人より詳しい。  
真慈が作り上げた『ウイークリース終結乃戦場』だが、許容範囲を超える力によつて、その世界との境界線が揺らぎ始めている。

……まあ、俺と真慈じゃ年季が違う。

俺が教えたとはいえ、ものの数カ月で覚えた結界に綻びがあるのはしかたねえことだ。

「俺が理解不能なのは、にーちゃんが家族を救えない絶望を知らねえからだ。俺が強いのは家族を守るためっつー、不甲斐ねえオッサンの独り善がりな努力の成れの果てだ」

俺は気怠だるく立ち上がってから、フィルターまで火が進んだ煙草を吐き捨て、靴底で磨り潰す。

鬼につけた結界は……まあ、そのままにしておいてやろう。

この戦争の最後は、アリーナ席で見たほうが楽しいからな。

……まあ、席替えは認めねえけど。

「んじゃ、休憩は終了。もう一仕事行くとすつか」

俺はもう少しでやってくる時への準備を開始した。

面倒だけどな……ちよっと気張ってやんよ。

俺が展開した『ワイグリーズ終結乃戦場』の内包する意味は、大きく分けて三つ。

一、『空間掌握』

一定空間を世界から完全に隔離、その空間を自分のイメージに描き換える。

二、『輪廻乖離』

結界内に存在する魂の消滅を、靈力による再生を促進、加速化させることで防ぐ。

### 三、『終繕幻界』

結界が解除及び崩壊した場合、結界内の魂、空間が如何なる状況でも結界前の状況へ返還する。

この中の『輪廻乖離』を応用して、義肢で切り離し可能な左腕に、俺の魂に残留している真吉の魂を切り離し、促進された魂の再生によってその魂を結界内で回復、体を具現化させることを可能とした。そして、俺も外れた左義肢を再生した生身の手足で補い、真吉と一緒に二対一でお袋に挑むことにした。

……でも、俺達は神々の戦場を横に並んで爆走していた。無論、俺達の後ろには……

「ヴオラアアアアア！ 逃げんじやなよ息子共オツ！！」

世界最強の主婦がいた。

そりやもう、最高に楽しそうな笑顔で俺達を追走していた。

俺達から見れば、その笑顔は恐ろしいことこの上ないのと言つまでもない。

「今更ながら、僕はこの場に出てきたことを後悔しているよ、真慈。しかし、僕はこの場に出てくる以前から、この場に出たら自分が悔やむ事ということが確実に分かっていた。ということとは、

時系列的に考えれば僕が今感じている感情は『後』々『悔』いる『後悔』ではないと思うんだ。その所、君はどう思う?。」

「そんな戯言タレてんだったら後ろのアレ止めやがれッ!!」

「無理難題を言うものじゃないよ、真慈。御機嫌フルスロットルの母さんは、ミサイル程度じゃとまらないと思うよ。なにより、僕は投身自殺はしたくないな」

俺達は真つ正面から特攻しても即死するだけと本能で悟り、一先ず逃げて手を考えようとしたけど、これが失策。

俺達が並走してる今、お袋の意図で一定の距離は保たれてるが、俺達が二手に分かれたら、お袋は確実に片方を仕留める。

裏づけなんかなくても、後ろからビシバシ来る気配がそう語ってる。最初に同じ方向へと走ったのが運の尽きで、俺達はひたすら走るしかなかった。

「このままじゃ埒があかないね。いつかは僕達がへばっちゃうだろうし、その前に結界の限界も近いよ。でも、この結界がなくなったら僕は消えるから、後は一人で頑張ってね、真慈」

「テメエ、大層な登場シーンかましといて結果はただ逃げてるだけか? このチキン野郎」

「生憎、僕はアメリカ人じゃないから鶏呼ばわりでもかまわないし、逃げるが勝ちって言葉通り、仕方なく逃げることは恥じることはないと思ってるから」

「黙れ、舌回してねえで頭回して打開策打ち出せ」

この結界が解けたら真吉は現在の状態を維持できず、俺も左義手は戻ってきたとしても霊力はそれほど残らない。

そんな状態じゃ勝負する以前に決着がついてるようなもんだ。

「なら、僕が考えついた有効な戦法は一人が一定時間の陽動して、もう一人がその時間をかけて形勢逆転の一手を放つ。定石だと思うよ」

「……いや、それより最上級の手がある」

「へえ、それは僕が出した案より勝率が高いってことかい？ 是非とも聞かせてもらいたいね」

俺の言い方が癢しゃくに触ったのか、軽く挑戦的に俺に質問してくる。

でも、俺は確信していた。

真吉は俺の答えを知った上で、あえて質問した。

そして、俺がその答えを出すのを信じている……なら、俺はその期待に応えるだけだ。

「ンナもん決まってるじゃねえか……二人で手え出してして、二人でブツこむンだよ」

小手先の勝負なんて無駄だが、お袋に正面からぶつかるなんて自殺行為。

でも、小手先が二本あれば少しは有効だろうし、正面からぶつかるとしても二人だったら、分散でも同時でも疑動でもいい、幅は広がる。

……わざわざ人柱みてえに一人犠牲にする必要はねえ。

「それを言うためにわざわざ僕に策を出させたのかい……それにしても、これ以上なく最上級の無謀な策だね」

「無謀がなんだっーの。お袋を倒した時、俺達二人がへばってもしつかり立ってなきゃこの勝負は勝ちじゃねえ」

「確かにそうだね」

「んじゃ、文句ナシの可決っーことで、十秒後に行くぞ」

「分かった」

自殺行為なのは分かっている。

だが、逃げっぱなしは性に合わねえし、決着<sup>ケリ</sup>つけなきゃ終われねえんだよ。

「ねえ、真慈。兄弟喧嘩と親子喧嘩の大きな違いは、兄弟喧嘩は『本能』で争い、親子喧嘩は『知能』で対立するものらしいよ」  
「……ふん。だったら頭使って戦ってやろうじゃねえの!!」

俺達は合図もなしに同時に振り返り、進行方向を逆転させる。そして、真っ正面から猛進してくるお袋に向かって跳ぶ。

「ウラアッ!!」

「ハアアッ!!」

二人で体を翻し、その体の真っ正面から蹴り二閃をブチ込む。

不意打ちに対して反応しきしきれなかったのか、お袋は俺達の蹴りに突っ込むような形で食らい、土埃を上げながら後方に吹っ飛ぶ。

「真吉ッ！！」

「分かつてるよ。最終安全解除コード、ヘルヘイム……発動・煉獄グニバ  
焰砲ヘリル 矛双ツイン・ハウリング」

着地した瞬間、真吉の両腕は髑髏を模した二つの砲筒に変形する。本来の用途は砲弾を打ち出す……しかし、今回は違う。

「……白きは狼の冬」

俺は詠唱開始と同時に砂埃の中に突っ込む。

お袋の姿を探しながら、右腕にありったけの力をブチ込む。

「……黒キ八焰ノ剣」

真吉の口から狂った発音で紡がれる言葉。

脇目で見ると、左砲からは激しい黒炎が燃え上がっている。

刹那、お袋の影を砂埃から捉える。

自身の背後に

「ッ！？ 太陽を喰うは嘲笑う狼ッ！！」

俺は詠唱を途絶えさせず、感覚で真つ正面に跳び、お袋の間合いから逃げる。  
お袋の殺気はそんな些細な抵抗を無視して、俺を飲み込んで 後  
方から爆音が響き、殺気が失せる。

「月ヲ喰ウハ血濡レタ狼」

体勢を立て直し振り返ると、そこには爆炎を振り払うお袋が立ち止まっていた。

その爆発は真吉の右砲による援護射撃 真吉の生み出した隙を無駄にしないために、俺は迷いを切り捨てお袋の懐に飛び込む。

「生は礎、死は目的」

詠唱を続けながら、足を刈るように横一閃の蹴りを放つ。

しかし、お袋は俺の姿を確認する事無く跳んで、難なく回避する。俺は無理に食いつかず、一步下がって反撃に対するため距離をおく。そして計ったようなタイミングで、目の前のお袋を再び爆炎が包み込む。

「生八至宝、死八終結」

真吉の力は臨界点を超え、左砲を飲み込む業火は、髑髏を模したその銃口に喰われる。

俺は右腕に満ち溢れる力を、握り締めた拳に一点に集中させる。しかし　今の俺達で完璧に押さえられるほどお袋は甘くない。

「生の担い手は愚者、死の担い手はその半身」

「死ノ担イ手ハ愚者、生ノ担イ手ハソノ半身」

真吉の砲撃を片手で振り払ったお袋は、俺との距離を一瞬で詰める。振り上げられたお袋の拳を左手で受け切る。

バキボキと、愉快で不快な音が左拳から身体へと響き渡る。

霊力を供給すれば左拳は再生するが……今は右拳に全力を注ぐッ！！

「生死の女神が名の下に」

「死生ノ女神ガ名ノ下ニ」

二度目の拳を受けた左腕が肩口から根こそぎ吹き飛ぶ。

しかし、俺はそれを無視して右拳を振り上げる。

そんな俺の攻撃を、お袋は『回避』より腕による『防御』で対応した。

「その魂に生きる痛みを刻むッッ！！」

俺は右拳を渾身の力で振るう。



続ける。

しかし、その爆発の威力は術式に納まり切らず、漏れ出る衝撃に俺は為す術なく吹き飛ばされる。

自力で止まることさえできず、地面にしこたま打ち付けられてから自然に止まる。

「アガッ……ああ、死にそうだ……ッ！ このクソ……真吉は……死ん、でねえだろ……う、な」  
「うん、死んでないよ」

……真吉は俺の脇に立っていた。  
息絶え絶えの俺の脇でそれはもう平然そうに、両砲も元の腕に戻して何事もなかったように。

「……テメエ、なんでそんな平然としてやがんだ？」

「だって、二人でブツこむって言っても僕の役目は援護射撃だし、真慈がよく頑張ってくれたから母さんに一撃ももらってないからね。それに接射してないから撃って直ぐに逃げて、早々に危険区域を出させてもらったよ」

「このクソッ！！ 少しは俺の苦勞を味わえ！！ そして敬え！！」  
「僕は極力苦勞はしたくないし、弟を敬う気はさらさら無いけど、倒れてる弟に手を差し伸べるために反対方向から駆けつけるぐらいのささやかな優しさは持つてるつもりだよ。それに『俺達二人がへばってもしっかり立ってなきゃこの勝負は勝ちじゃねえ』、なんだろ？」

「……あんがとよ」

俺は差し出された真巻の左手を乱暴に取って立ち上がる。  
……握った真巻の手に力が入ってない……このバカ兄貴、澄ました顔して無理してんじゃねえかよ。  
本当は辛いはずなのにそんな様子を見せずに真巻は微笑した後、すぐにその表情を曇らせる。

「それにしても、母さんはどうなっただろう。手応えはあったけど……もしかして無傷で出てきたりして」  
「縁起の悪いこと言うな。全力の攻撃であんなだけブツ倒れてと割に合わねえぞ」

実際問題、これでケリがつかないと満身創痕な今の俺達が勝利を得るのは難しい。

俺は左腕の再生に回す霊力さえまともに残ってない身体を、俺達が起こした爆発の爆心地へ向け

「 やつとやる気になったかい。愚息共<sup>バカ息子</sup>」

突然、目の前に広がるスラツとしながらも力強い真っ白な手。  
俺と真壱の間に、音も気配もなく現れた一つの影。  
その影は紛れもなく 世界最強だった。

「でも 私に張り合おうなんざ百万光年早いッ!!」

その手に顔面をがっしり捕まれた瞬間、世界が反転する。  
後頭部から異常な痛みと衝撃が全身に走った時には、俺の意識は黒

く塗り潰されていた。

S  
U  
I  
C  
I  
D  
E  
4  
6  
~  
T  
h  
e  
  
s  
t  
r  
o  
n  
g  
e  
s  
t  
  
h  
o  
u  
s  
e  
w  
i  
f  
e  
  
i

LAST・SUICIDE}死にたくても死ねない

生きたいから死ねない

大幅に遅れましたが、これで最終話です。  
どうぞ、最後までお付き合いください。

LAST・SUICIDE}死にたくても死ねない

生きたいから死ねない

「亜鎚、禍吹、鎖魅、焚詠、奈逸……」

俺は真慈の創った結界の前で、鶴嘴を正面へと突き刺し、割と長い詠唱をしていた。

詠唱なんて面倒クセエから、大半は無詠唱か意味の薄い言葉を連ねるのが俺の警石だ。

でも、今の俺はそんな耐震偽装の手抜き工事みてえなことはしてねえ。

一つ一つの言葉に、俺が短時間で振る舞える最上級の意味を持たせる。

「破無為、真無野、夜妖、螺古狐、環遠……っと」

真慈の結界を困うように不可視の結界を十回、重ね終えた。

衝撃吸収や霊力遮断、能力低下等々、すべての結界に違う意味を持たせ、いかなる状況でも対応可能にする。

……さて、俺がなんでこんな七面倒なことをやってるかと言えば、それは至極単純明解。

そんだけ『危険』なことが起きるってこ

「…………ツ！！」

突然、空間に覇気が炸裂した。

その異常な圧力は、ボロボロになった屋敷の屋根や壁を容赦なく吹き飛ばす。

爆心地は……真慈の結界の中。

チツ、覇気だけで結界が一つ破壊されたツ！！

「駿龍梅、執虎竹、華朱菊、凍玄蘭ツ！！」

咄嗟に俺は更に強固な結界を展開する。

四つすべてが城壁級の防御力を誇り、そして内部からの攻撃を弾く『封禁級の拘束力を誇る』。

「紅紫の創造、藍緑の繁栄、雄黄の破壊ツ！！」

そのまま間髪入れずにすべての結界に上級の『術式強化』を追加する。

透明な結界に色が塗り込まれ、最終的に純白に染まる。

これで根本である術式を破壊することはほぼ不可能、現象としてある結果をブツ壊さねえ限り俺の術は打ち破られることはねえ。

……畜生、さすがにこれだけ連続すると疲れるな。

でも、これで真慈の結界を含んだ十四の防御壁が、『超ド級危険物』の周りを囲った。

これで万が一真慈達があの手をミスって自分の結界ブチ壊しても、精々四、五の結界で威力を潰すぐらいで終わりだろう。

だが、もしも

「ッ!?」

クラッシュ  
破壊  
クラッシュ  
爆砕  
クラッシュ  
壊滅  
クラッシュ  
破砕  
クラッシュ  
爆裂  
クラッシュ  
破砕  
クラッシュ  
粉砕  
クラッシュ  
破裂  
クラッシュ  
損壊  
クラッシュ  
破損  
クラッシュ  
玉砕  
クラッシュ  
粉々  
クラッシュ  
断末  
クラッシュ  
消滅  
ダメージ  
損傷

一瞬……もの一瞬で殆どの結界が消えた。  
それは、結界がただの衝撃に……『純粋な衝撃』を結界にぶつけ、  
その殆どをブチ破ったってことだ。

「十三か……あつぶねえ。マジで肝が冷えるぜコンチキショー」

俺は大々的にため息を吐いてから、まさに紙一重で残った結界を、  
指を鳴らして自ら解除する。

白い結界はガラスが砕けるように消え去り、中の様子が開示される。

「誰の仕業だ……って、息子にやまだこんなブツ飛んだ真似は出来  
ねえわな」

そして中から表れたのは……まるでその一ヶ所だけ何百発ものミサ  
イルが打ち込まれたような、小規模ハルマゲドンのような、リング  
上の超サ○ヤ人の戦い跡地のような……一言で言っちゃまえば、ありえ  
ねえ惨状がそこにはあった。

そして、そのありえねえ惨状の中心には、この状況を作り出したヤ  
ツが仁王立ちしていた。

「フッー！！ 久しぶりに息子と遊んで元気ハ・ツ・ラ・ツー！！」

俺の結界を粉碎するには息子には無理だ だが、もしも相手が世界最強の主婦なら、話は別だ。

暴れに暴れたように見える秦は、グツタリしている真慈を肩に担ぎながら、元気そうに叫んでいらっしやった。

我が女房ながら恐ろしく、我が女房ながら恥ずかしい姿だった。意識が戻りかけた鬼も、第一波はきでその意識を刈り取られてる……この場面を俺達夫婦以外目撃してねえことを確認してから、俺は秦に近づく。

「お、ダイちゃん」

「おう、その様子だと圧勝か？」

俺は真慈を指差す。

真慈の結界の効力で、傷は元に戻るから問題ねえだろ。

……まあ、この戦いでトラウマの心の傷は治らないから真吉も合わせて後々

大変だけどな。

「そりゃ、私が本気だしたんだ。容赦はするけど手加減はしないよ。それに息子に勝利を譲るのはまだ早いさ。でも……」

「でも？」

「……まさか、エプロンを脱ぐことになるとはね」

秦の身体を見ると、その言葉通り主婦の証とも言えるエプロンが無かった。

……多分、主婦なのに忍者の如く身代わりの術でもやったんじゃないかねか。

まあそれは推測だが、确实なのは秦がエプロンを犠牲にしても勝利を掴んだってことだ。

「あー、やっぱり余裕こいて大技受けなきゃよかったな」

「……ワイワイ、あれは終結ヴァイケリース乃戦場を破壊しないために攻撃範囲を限定してるとはいえ、あいつらの本気をワザと食らったのかよ」

「まーね。息子が本気なら、私も真摯に受けてやらなきゃダメだと思っただからね」

「……そのやり取りがもう少し平和的に行えねえかな」

親にそんなだけの理解力があるんだったら、喧嘩上等超人戦争ヨロシクにやり合う必要なさそうなんだが……そこは家族のスキンシップってことで諦めてってけどな。

秦はぐったりしてる真慈を、そっと地面に下ろす。

「まあ、これで私達の仕事は終わりだね」

秦の問い掛けに、俺はただ頷く。

「いろいろあったが……まあ、お疲れさん」  
「ダイちゃんもね」

俺達は罪を犯した。

一人の息子を救えず、もう一人の息子を孤独にした。

そのことに心を痛めた俺達は、身勝手な贖罪を始めた。

二人の魂を共存させることを目標として、俺達は見守る他にも様々な方向でサポートする……予定だった。

しかし、そんな過去に縋る愚者の予定表なんぞ受け取ってくれるほど、神様つてのは甘くなんかない……そんなこと、自分達の死で重々分かり切ってることだった。

結果として、俺達の意図にそぐわない方向に転がり始め、生き残った真慈は死に魅せられ、真吉は真慈を飲み込む負の意識を一人で背負い自ら狂気と化した。

そしてあの日　真慈が学校の屋上で投身しようとしたあの日、俺は最後の足掻きで……直接干渉した。

後は……説明するまでもないだろ。

まあ、秦が真慈に禁術なんて仕掛けてたとは思わなかった。

過去に冗談で公式だけ教えた術を、いつの間にか完璧に解答を導き出していたとは……流石と言っていいべきか、恐れ慄くべきか分かんねえ。

「私は誇るべきだと思っね」

「分かった。俺は自分の女房を誇りに思う」

「もっツ！ 恥ずかしいじゃないのさ！！」

「アガツ！？」

言う通りにしたのに、秦はおもいつきり俺の肩を叩き落とした。

もちろん、肩がモゲるなんてスプラッタなことは起こんねえけど、

俺は身体ごと地面とハグする羽目になった。

俺は立ち上がってから、全力で秦に恨めしい目線を送る。

「あの、一つ言っついていいか？ …… イテエよこんにゃろっ」

「まったく、そんなに私と居たいのかい？ もう！ ダイちゃんの

甘えん坊！！」

「バボツ！？」

訳の分からんこと言い出した秦に、今度は頭を叩き落とされた。

もちろん、首がモゲるなんてシユールなことは起こんねえけど、俺

は顔面ごと地面とキスする羽目になった。

コイツ、戦った後でテンション上がって、人の話を聞いてねえな。

……てか、このままにしても天井ループしそうな気がして、俺は立ち上がる気もなくなった。

「……前々から思っってたんだが、オマエって主婦の領域を超えてい  
る気がするんだが」

「そっだよ、既に主婦は神の領域を超えた存在だ」

「だったら、オマエの耳を天地創造で創り直してくれ……ったく、この女房は親バカじゃなく主婦バカだな」

「主婦を馬鹿にするなアアアアアッ！！」

「いや、そんな意味じゃナヴィツ！？」

今度は容赦なく後頭部を踏まれた。

もちろん、脳漿ブチ撒けるなんてファンキーなことは起こんねえけど、俺は地面とディープキスする羽目になった……三連続同じネタは辛い。

つか、俺的にはこれ以上のダメージが辛い。

「ストップ！！ オマエは勘違いしてる！！ 色々と言いつつさせる！！」

「簡潔に十文字以上、十文字以内にならないよ」

「俺はシンちゃんを愛してる」

「……………字余り。だけど許す」

俺のコツテコテの誠意が伝わったのか、早々と足を除けてくれた。

俺は後頭部を擦りながら、ゆっくりと立ち上がる。

そして、ズラーっと周りを見渡して、惨状を視界に取り込む。

「スツゲー悲惨だな。これじゃ鬼達も暫くは動けねえだろ」

「殆どダイちゃんがあったんでしょ……まあ、ここの鬼達は割とデカい徒党組んでたけど、平和的だったからね。なにもなきや、修繕されて元通りさ。けど……………」

「けど？」

「徒党がありゃ、その徒党の敵は十倍いるもんさ。そしてこの壊滅状態は敵にとっては好都合」  
「なるほど」

俺は秦が言いたいことを理解した。

つまり いつもは勝てねえヤツが弱ってる所で、ボコって潰そうとしてる外道がいるわけだ。

実際、精神を集中させるとヤル気満々の気配が四方八方から近づいて来てるのがよく分かる。

「まあ、鬼同士の喧嘩は私達には関係ないよ」

「ああ、『親子喧嘩第二ラウンド』って目的は達成したし、後はトングズラすればいい」

俺は地面に刺さった鶴嘴を片手で引き抜き、それを肩に担ぐ慣れた態勢を取る。

その隣で、秦はを結っていた紐を解き、その自慢の黒髪を惜し気もなく流す。

「けどなあ」

「けどねえ」

世界最強の主婦は、一度解いた髪を更に硬く結い上げ……笑つ。  
無尽なる境界は、手にした鶴嘴を袈裟形に振り下ろし……笑つ。

最強で最狂な最高の笑みで。

「  
「 気に入らないッ!!」」

気に入らない……俺達がこの場で戦う理由はそれで十分。  
早速、俺は鶴嘴を片手に術式の組み立てを開始する。

「ダイちゃん。私達の勝鬨かちどき、派手に頼むよ」  
「任せとけ」

花は咲き、花は散る」

俺は期待にそぐえるよう、最高の術式を組み上げる。

手始めとして手にした鶴嘴を振り回し、その軌道上に白く丸い結界を作り出す。

「夢に見るは五つの閃光、四つの紫光じゃ飽き足らん。松桐坊主の  
三光に柳が交わりゃ、光が差し込み雨が降る」

俺を取り囲むように作り出された結界は四十八。

球体の結界は飛ばず沈まず、ただ空中に浮いて漂う。

境界線の無い、中心である一点と湾曲した面のみで構成された立体。少ない条件で成り立つ球体は、不安定の中で確立された一つの形状カタチ、一つの具象カタチ、一つの極地カタチ。

「梅松桜の表菅原で春一番。花見で一杯、月見で一杯。雨と霧で流れりゃ、てっぼう形なし飲む酒もなし」

意図して色を取ったような白一色で統一されていた球体は、詠唱によって十二の異色に彩られる。

鮮やかな球体が空中を漂う……まるで、幼い夢のような世界が広がる。

しかし、これは幻想ユメではなく確立した現実カタチ。

「萩に紅葉、牡丹を手向けに風が吹き、芒が踊り梅と藤の華が舞う赤青二色の短冊が、七つ六つとゆらめいて、草葉とそよぐはあかよろし」

そして、宙に浮かぶ球体は風に吹かれた綿毛のように空へ飛んでいく。

そうして、球体が四方八方に散った時……術は完成した。

「切り立つ絶場に舞うは鳳凰。雨降る時には番傘さして、柳並木を闊歩する」

……結界の基本は『特定の空間を仕切る』ことだ。だが、今の結界は空間を仕切るどころか、自体の位置さえ固定されない、結界としての基礎や基本が欠けている。

それは 結界術として破綻しているということ。

だから、この術の名は

「結界術……否、決壊術」

瞬間、空に光の花が咲いた。

広大な空を埋め尽くさんばかりのいくつもの閃光、そして幾重もの爆音……それはまるで大人でも見とれるような、色鮮やかな打ち上げ花火。

色とりどりの輝きを放つ数千の花びらは、まるで菊物きくもののように緩やかな尾を引く。

その綺麗で儂い花びらは、その僅かな残灯は地へ落ちて

「爆散魅華」

地を焼き尽くす爆轟と化す。

俺達を中心として何千という爆発が地面を打ち砕き、何万という爆発が空気を引き裂く。

遙か遠くの爆発は、単純な『破裂音』ではなく純粹な『破壊音』を俺の耳に届ける。

その様子は先程の儚さなど微塵も感じさせない、まるで空爆による  
烈火地獄のように容赦なく、まるで隕石落下による灼熱煉獄のよう  
に考慮ない爆撃。

その実体化した地獄絵図を目の当たりにした俺は……ちっと後悔し  
ていた。

「……ヤベ、ちっとやり過ぎたか？」

「いやあ、最高最高。派手だし綺麗だし強いし、やっぱりこんぐ  
らい派手にいかなきゃね」

「……ま、お前がそういうならいいか」

まあ、見た目は派手だが手加減はかなりしたから、直撃したとして  
も鬼なら精々再起不能程度だろう。

それでも、鬼達は認識したはずだ。

おれたち  
自分達が敵に回した者の実力を。

「んじゃ、頭の前から爪の先、一から十まで纏めて包んで綴じ込ん  
で、懇切丁寧誠心誠意手抜きも手抜きも手加減も容赦も陽動も要  
撃も血も涙も心なく、虱潰しに握り潰してあげる」

「霊力もだいぶ使ったし鬼を相手すんのつまらなくなってきたな…  
…早く終わらせてえから、こっからは片手間じゃなく手加減なしで  
遊んでやるよ」

《須千家夫婦VS鬼》

個体数 2:62500

戦力 20000 秦 18000、大慈 2000 :1250

000 鬼 20

戦力比 2:125

備考

- ・決壊術により鬼の約半分が戦闘不能 - 650000
- ・世界最強の主婦の誇り 秦×100
- ・世界最強と肩を並べる者 大慈×600
- ・最強で最狂な最高の夫婦の絆コンペネーション 秦&大慈×1000

補正戦力比 500000:1

戦闘時間 7分24秒

勝者 須千家夫婦

俺はどこぞの無双よりも悲惨なワンサイドゲーム一方的蹂躪を、当事者の片割れから聞かされた。

「まあ、お前が気絶してる間にんな感じなことがあった」  
「……よく分かった。アンタ等鬼より鬼だ」

俺は呆れてため息を吐く。  
まったく、余計なことに首突っ込んで好き勝手暴れやがって……こ

こが屋上という学校中に声が通る場所じゃなきや、俺は怒号を発しながら目の前に浮かぶ親父をブン殴ってたことだ。

「てか、俺とお袋を戦わせるために夫婦喧嘩なんて大層な嘘吐きやがって……」

「いや、あれはマジ。後日談でポッコボコにされた」

「……アホ」

わざわざ授業をバツクレて話を聞いた俺だけど、なんだかもうどうでもよくなった。

俺は親父を見るのを止め、硬いコンクリートの床に座り込みフェンスに背中を預けて空を見上げる。

広すぎる空は自分の存在の小ささを教え、青すぎる空は自分の汚れの多さを教える。

「あー、死にてえ」

「ツイ、この前の前向き発現はどこいった？ 原点復帰か？ ゴール前の振り出し戻るなのか？」

「そんなんじやねえよ。死にたくなるのは仕方ねえことなんだ」

「自分の息子ながら病んでるな」

どんなことがあっても、俺の根底には死にたい感情があり続ける。それは仕方のないことだ。ずっと向き合ってきた感情だから、きつと突然なくなつた方が問題だろう。

「あんま気にすんな。実際に死んだりしねえからよ」

「その言葉を信用できない俺は親失格か？」

「んなことねえよ。俺の言葉を信用しろっていう方が無茶だろうよ。でもな……」

話の途中で屋上のドアが開く。

『屋上で独り言洩らしてる変な奴』とは思われたくない俺は即座に口を閉じる。

けど、突然の来訪者を見たときに口が開く。

「なんだ、麻依子か」

「『なんだ』じゃないよ。一緒に学校来たはずなのにいつの間にか消えてるんだもん。びっくりしちゃったよ」

「気にしなくてもいいのに。てか、今授業中じゃねえの？ サボりか？」

「実際にサボってる人に言われたくないなあ」

それは小さな小さな、俺の幼馴染みだった。

タメとは思えないミニマムな姿でトテトテと走り、フェンスにもたれかかっている俺の目の前まで駆け寄ってくる。

流石に、座ってる俺はその顔を見上げることになった。

「……ちっちゃいに見下された」

「ちっちゃいと言わないのー！」

「ゴメンスマン謝る、だから俺の目の前にある目潰しにちょうどいい指を引いてくれ。危険すぎる」

「もう、今度言ったら許さないんだからねっ」

きつと、これからも謝れば許してくれるだろ幼馴染みは、眼球スレスレにあつた指を引いてくれた。

そしてその代わりのように、差し伸べられた手。

「ほら、咲耶ちゃんの授業だから今から行っても出席扱いにしてくれるよ」

「そついや浅尾って最近甘くなってるよな」

担任の浅尾は、俺達が関与したあの事件の後から、遅刻を厳しくカウントしなくなったりテストの採点が甘くなったりと、徐々に軟化してきている。

「まあ、生き生き仕事してんだからいいか」

「けど、ファンが増えて困ってるらしいけどね」

「そりゃ」愁傷様」

適当に感想を述べながら、俺はダルい体を立ち上げる。

空を仰ぐように思い切り体を伸ばしてから、麻依子を見る……うん、やっぱりこの高低差が麻依子らしい。

「真慈、今酷いこと考えたでしょ」

「そんなことまったく」

「ダウト」

「スマン」

「うん、許す」

このくだらないやり取りで、麻依子は柔らかな笑みを浮かべる。それにつられて笑いそうになる自分がいた。

「ほら、優しくなった咲耶ちゃんでも、そろそろ昔みたいに怒っちゃうよ」

「そりゃ怖い。そして面倒だ」

麻依子は俺のことを先導するように屋上のドアへ走っていった。俺もそれに着いていこうと足を踏みだして……立ち止まった。ふと、さっきまで親父がいた場所を振り返る。しかし、そこには誰もいない。

「死にたくても死ねねえよ……俺はまだ自分の命に死ぬ価値を持たせるほど生きてねえんだからな」

だから、俺は独り言を呟いた。

誰にも届かない言葉は時を待たずに消え去る。

「ほらー！ 早くー！」

「分かった分かった」

そして俺は歩きだす。  
俺に価値をくれる場所へ

「スイマセーン。屋上でサボってたら麻依子が呼びに来たんでしようがなく出席することにしたんで遅れましたー」

「清々しくて逆に怒る気がしないわね……分かったわ。取り合えずそのバケツに硫酸入れてあるから、それに手を入れて廊下に立ってなさい」

「めちやくちや怒ってるじゃねえか」

生きることは大変なことだ

「バーカ。途中で来るからそんなことになるんだぜ」

「まったく、女性につられてくるなんて浅はかだね」

「亮佑、先公の前でんなこと言うな。バミューダ海峡は……なんとなく、死んどけ」

「なんとなくつてなんだよッ！！そして既に原型を止めてないけど訂正すると僕の名前は大西洋だッ！！」

生きていれば楽しいことはあるけど、それ以上に辛いこともある。  
下手すれば9割は辛い。

残りの1割が楽しいこととは限らない。

「……………シン……………ノート」  
「ん？ ああ、ノート見せてくれんのか？」  
「居眠りしてた……………ノート……………見せて……………？」  
「ライ、今の今まで爆睡かよ」

けれど、その辛さに意味があつたなら  
その苦痛に意義を見つけられたなら  
その悲哀に意地を持たせられたなら  
その飢餓に意志を手にできたのなら

「ヘルウゥ、暇だから遊びに来たわよお」  
「ゴブツ！？ ツバカかテメエ！！ いきなり飛びつくなッ！！」  
「理事長ッ！？ 今は授業中ですよ！！」  
「もぉ〜、ヘルと咲耶ちゃんのイケずう」

少しは救われないだろうか  
自分が救われなくても、自分が関わった人たちの救いになるんじゃないのか  
救えなくても、悲しみを減らせるんじゃないのか

「姉さッ…理事長ッ！！ 仕事を放り出してどこへ行くのかと思ったら…」  
「…どうもすみません」

「もお〜麗花までえ。今日はヘルと遊びたいから仕事は明日やるって言ったでしょお」

例えそれができなくても、せめて誰にも迷惑を掛けない死に方を見つけない

誰も巻き込まず誰も傷つけず誰も汚さない死に方を

「ああもつッ！！ これじゃもう授業崩壊じゃないのよ」

「ごめんなさい。多分アタシが真慈連れてきたからこうなっちゃった」

「確かにその通りだぜ。でも、俺はこっちの方が楽しくていいぜ」

「………つたく」

それを見つけるために  
それを識るために

「……サイ……」

「うう、ヘルうみんながイジメるのお」

「いやあ、ここの美女ばかり揃うと壮観だなあ……一人ぐらい僕に振り向いてくれないですかね。ね、会長？」

「ん？ ああ、うん、ええっと……努力はきつと報われるぞ」

「なんか露骨に否定されたツ……」

「……テメエ等」

そんな曖昧すぎるものを見つけるために、俺はみっともなく生き続けるだろう

「ウツツツセええんだよツ……」

きつと、それが 俺の生きる意味となるから

生きなきゃダメ、死を軽く見ちゃいけない。

もっと生きたいッ！！ 死ぬのは怖いから。

生きてたって無駄……もう死んだほうがマシだ。

なんか生きてる実感が無い。でも、死にたくはない。

そんなこと言ってもなんも変わらない。

だって、生きてるんだから。

だって、死んでないから。

だから、私は生きる。

だから、私は死ぬ。

そして死ぬ寸前まで、私は私らしく生き続ける。

LAST・SUICIDE}死にたくても死ねない

生きたいから死ねない

『終わりよければすべてよし』という事柄は、多いよじで少ない

あー、えー、物語の後半グダグダに遅れてしまった夷です。  
特に、最終回となる今回は自分自身も読み返さないと続きが書けな

いような状況でした。  
それでも、最後まで続いたのは読者の皆様の存在があったおかげです。本当にありがとうございます。

最後の後書きですので、記念に下らない小話を一つ。

この小説のタイトル『死にたくても死ねない』は、私自身の心境から来ています。

鬱病予備軍の私は、代わり映えのない日常や、これからの長い未来を考えると逃げたくありません。

それが眠りに昇華したり、趣味へ身を投じて忘れるのが殆どですが、その思考の結論が社会一般で言う『自殺』に至ることも少なくありません。

しかし、実行に移す気はありません。

その理由は単純に死が怖いという、人間として一般的とされる心理が大半を占めるでしょう。

しかし、残りの何割かには『人に迷惑を掛けたくない』という理由を含んでいます。

例えば私が小さく価値のない人間でも、投身すれば現場にいる人には不快な思いをさせるし、運悪く巻き込まれる人も居るかもしれない。そしてなにより身内に掛ける迷惑は、自身が生きて掛ける迷惑より大きくて永いものです。

だから、私は死ねない。  
だから、私は死ねない。

私が自ら死ぬとしたら、身内に掛ける迷惑を還元し終えた時で、きっとその頃には寿命でこの世にはいないでしょう。

こんな思考を持った私は　時々、自身が白い羊の群れにぽつんといる黒い羊のように思えます。

しかし、誰が他の羊の毛色を白と決めましたか？

黒い羊が見た　おかしな思考を持ち合わせた自分の主観を、信用するんですか？  
白く厚い羊毛で隠された、黒い黒い地肌　他人の本心を見抜けない私達に、他人と自分が違うなどなぜ言えるのですか？

……ええ、まあ、うん、この後書きで何が言いたいかと、『作者は鬱』『作者はこの作品でその鬱を吹き飛ばしたかった』『作者は最近人間失格を読んだ』ってことです。

そんな、作者の行き当たりばったりなこの作品にお付きあい頂き、誠に感謝いたしております。

死死は終わりますが、ifストーリーが待っています。  
予定としては麻依子END、小夜END、彩華END、麗花END、BADENDの5つ。ストーリーの骨組みも徐々に決まってきました。

『作品は必ず完結させる』という確約を忘れず、一生懸命頑張らせて頂きますので、どうぞよろしくお願いいたします。  
今まで本当にありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5214c/>

---

死にたくても死ねない！？

2010年10月8日16時12分発行